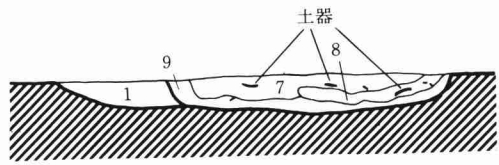
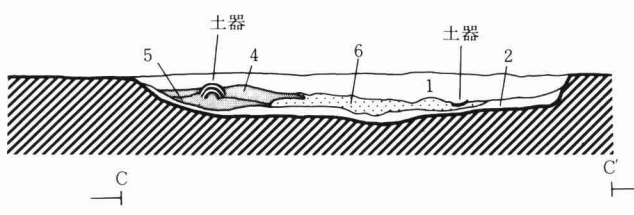
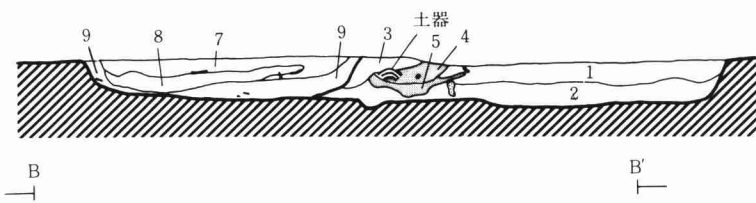
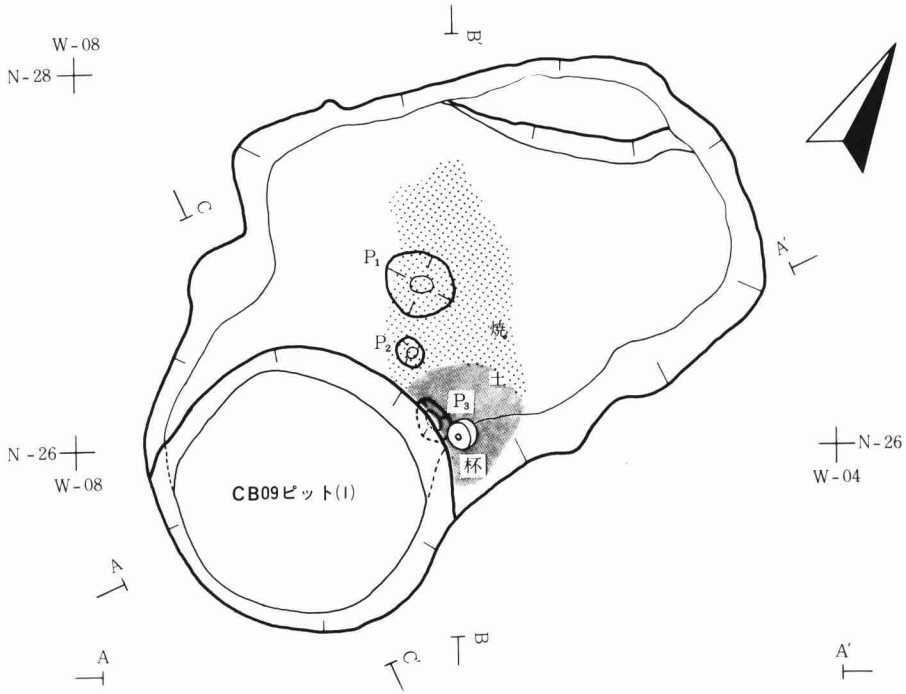


—落合 I 遺跡—

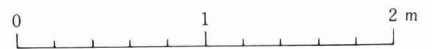


CB09住居跡埋土

1. 暗褐色土+炭化物少量
2. 褐色土+炭化物、焼土少量
3. 暗褐色土+炭化物少量
4. 暗赤褐色焼土
+赤褐色焼土
5. 鈍い赤褐色焼土
6. 鈍い赤褐色焼土
+炭化物多量

CB09ピット(1)埋土

7. 暗褐色土+炭化物多量
8. 黒褐色炭化物層+焼土
9. やや暗い暗褐色土
+炭化物少量



(第10図) CB09住居跡、CB09ピット(1)平断面実測図

置する直径0.15～0.18m、深さ0.12mの円筒状ピットである。P₃はかまど部の下に埋まる直径0.18～0.25m、深さ0.05mの楕円形摺鉢状ピットである。

これらの3つのピットの埋土について詳細は不明であるが、竪穴の下層埋土と同様の土で埋められていたものと思われる。

〔埋土状況〕 住居跡内の埋土は焼土層を除いて主として上下2層よりなる。そのうち1層の埋土はCA 06住居跡の第2層とほぼ同じ暗褐色のシルト質軽埴土層である。2層の埋土はCA 06住居跡の1層に相当する。これらの埋土中、2層からは遺物がほとんど出土しておらず住居跡のかまど跡もこの層の上に築かれている。以上の事柄から、この住居跡が2時期の床面を有する遺構であるとも考えられる。しかし調査時の観察では下層の埋土の性格を明らかにする資料は得られなかった。そこでここでは一応、この住居跡を単一時期の遺構と見なし、下層の埋土については床面調整のための貼土に想定しておく事にしたい。

〔出土遺物〕 (第12図、第6表、写真14-2、17-1～7) 竪穴内の遺物としては、かまど部と思われる焼土集積遺構内から3個の坏が出土している。その他、土器片が主として埋土1層中から分散した形で出土している。これらの土器片に伴って鉄器が5点出土している。

土器の種類としてはA、B、C、D、E、F、G各群の破片が見られるが、A群の破片以外いずれも、ごく少数しか出土していない。A群土器の内わけを見るとI-1、2・Ⅲ-1、2・V類の各器種が知られるが、その中ではI・Ⅲ類の破片数が特に多い。その他B群の中には1類の破片が見られ、D群の破片の中には明らかに高台付着部と思われる破片が1点見られる。同一個体の破片はこの住居跡と重複するCB 09ピット(1)の埋土中からも出土している。

・土器 第8図1～5はCB 09住居跡出土の遺物であるが、1は床の埋土中から出土した土師器のカメの口辺部資料である。このカメはBI 06住居跡のカメと同様、C群1類に分類される。このカメの特徴を見ると、まず口辺部は「く」の字形を呈しながら、小さく外反している。さらに口唇部内面には小さな段が見られるが、外側への折り返しは見られない。口辺部外面にはロクロ調整痕が残り、縦方向のヘラケズリ痕も見られる。2、3、4はかまど部中央から出土したA群I-1類に分類される坏であるが、これらの坏は器高がやや高く、器種の立ち上がりが比較的急で今回の調査で出土した同類の坏の中ではかなり異質な感じのする資料である。5はA群Ⅲ-1類の底部資料である。

・鉄器 第8図7～9、12は鉄器類であるが、床部埋土中から出土したものである。いずれも破片であり、その性格については今のところよく解らない。

・骨片 さらにかまど部付近の焼土中からは小さな骨片が長巾5mm以下の微小骨片が3点出土している。

—落合 I 遺跡—

CD 50 住居跡 (第11図、写真4-3)

〔位置〕 この住居跡は調整区の東寄りの部分BH09溝のやや南方部に位置している。そのすぐ東隣りにはCD50ピットがある。

〔重複関係〕 遺構はCC 03溝と切り合っているが土層観察の結果からは両者の新旧関係を確認することができなかった。その他、遺構の北側にも小さなピットが切り合っているが、その新旧関係も不明である。

〔形状、種類〕 この住居跡は南北に長い楕円形の竪穴住居跡である。その規模は南北径約2.4 m、東西径約 1.9 mで検出面からの深さ 0.3 mを測る。

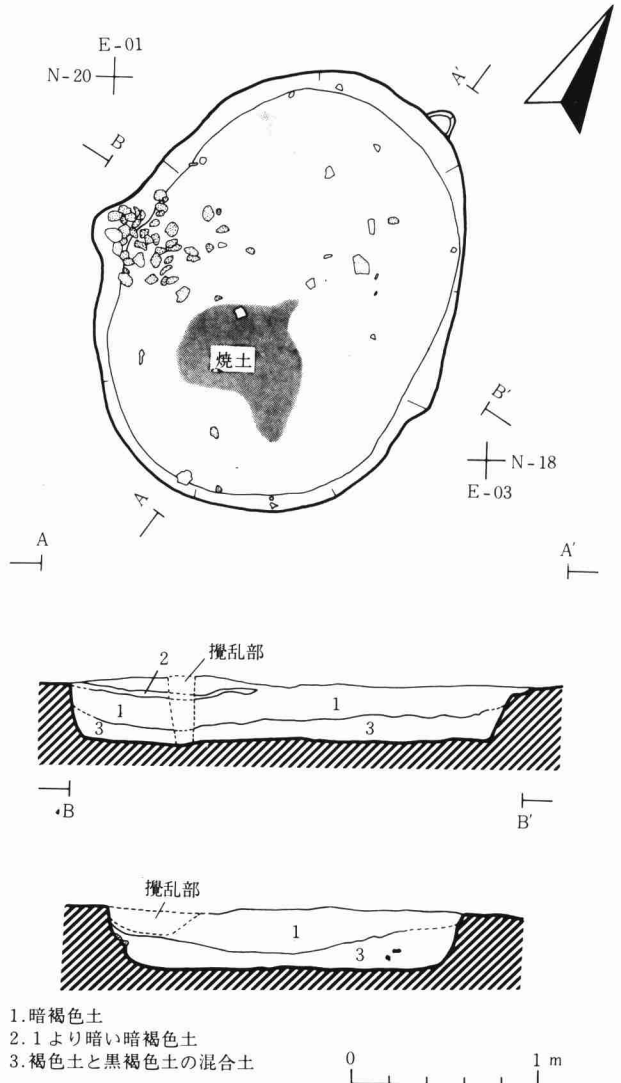
〔付属遺構〕 明らかにこの住居跡に伴うと考えられる遺構には、炉跡状の焼土集積遺構と円礫集積遺構の2つがある。

・焼土集積遺構 竪穴の床面中

中央部のやや南西寄りには東西約 0.7 m、南北 0.8 mの不整形の範囲内に焼土が集積し、その部分の床が焼けている。おそらく地床炉であろう。

・円礫集積遺構 竪穴の北西壁際には直径5～15cm、厚さ4～10cm大のやや不整な円礫が上から下になだれ込むような形で50個ほど集積している箇所が認められた。その性格については今のところよく解らない。

〔埋土状況〕 竪穴の床を覆う埋土は大きく上下2層に分かれる。そのうち上層土1は炭化物が少量含まれた暗褐色のシルト質軽埴土層である。この層の一部には炭化物が多量に含まれた暗色帯2がある。下層土3は黒褐色と褐色のシルト質軽埴土の混合層で、断面には両者



(第11図) CD50住居跡平断面実測図

の斑状混合が見られる。以上の様な下層土の状況は、この埋土が自然堆積というより人為的に持ち込まれた可能性の強い事を示唆している。そう考えた場合、この住居跡の床が2時期に渡る事も予想される。しかし調査時の観察ではその点についての十分な確認が出来なかった。

〔出土遺物〕 (第12図、第6表、写真14-2、17-8) 住居跡内の出土遺物はほとんど土器片であるが、他に鉄器2点が出土している。これらの遺物の出土状況については十分な観察ができなかったため、詳細は不明であるが、大部分の遺物は1、3の埋土中に分散した形で埋没していた。

土器片のうち大部分は修復不能な細片であるが、その中にA、B、C、D、F、G各群の器種が見られる。その中で特に多いのはA群の土器類であるが、I-1、2類で大半が占められ、V類がわずかに混じる。その他、分類基準表には示さなかったが、ここからは酸化炎

第6表 CA06住居跡・CB09住居跡・CD50住居跡・
CB09ピット出土遺物一覧表

<カメ>

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口 径	頸部径	胴張部径	底 径	高 さ	色 調
12-1	17-5	DB09住居跡	C-1	21.4 ^{cm}	— ^{cm}	— ^{cm}	— ^{cm}	— ^{cm}	橙

<坏類>

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口 径	底 径	高 さ	色 調	備 考
12-2	17-1	CB09住居跡	AI-1a	13.9 ^{cm}	5.7 ^{cm}	6.0 ^{cm}	にぶい黄橙	ゆがみ強
12-3	17-2	”	AI-1a	12.8	5.9	5.7~6.5	にぶい橙	”
12-4	17-3	”	AI-1a	15.1	6.0	7.3	橙	
12-5	17-4	CB09ピット	AIII-2	—	5.7	—	橙	
12-6	17-8	CD50住居跡	AI-2	14.4	4.6	4.4	にぶい黄橙	

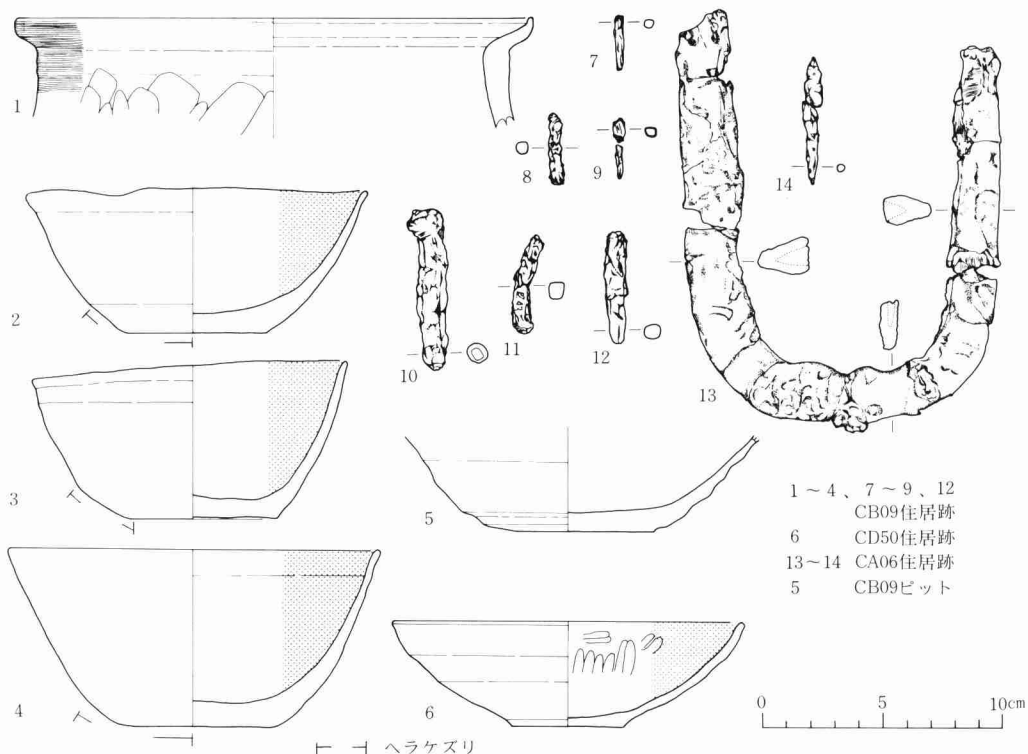
<鉄器>

図版番号	写真番号	出土遺構名	器 種	長 さ	最大厚	横断面形	備 考
12-7	14-2	CB09住居跡	不 明	2.2 ^{cm}	0.4×0.3 ^{cm}	方 形	破 片
12-8	14-2	”	”	2.9	0.5×0.5	”	”
12-9	14-2	”	”	2.5	0.45×0.4	”	”
12-10	14-2	CD50住II期	”	6.7	1.2×1.15	”	”
12-11	14-2	”	”	4.1	0.8×0.75	”	”
12-12	14-2	CB09住居跡	”	4.6	0.8×0.8	”	”
12-13	14-4	CA06住居跡	鋤先金具	17.3	13.5	矢 形	身部巾1.5~2.4 ^{cm} 身部厚0.7~1.5
12-14	14-1	”	鏃	5.2	0.5×0.45	方 形	

—落合 I 遺跡—

焼成された F 群ないし G 群の器形に入る須恵器破片が 1 点出土している。

・土器 この住居跡の出土土器片は出土数の多い割に実測可能個体が少ない。第 12 図 6 は A



(第 12 図) CA06 住居跡、CB09 住居跡、CD50 住居跡、CB09 ピット(1)出土遺物実測図

群 I - 2 類の坏である。この坏は器高が低く底が小さく、口の開きが大きく、器厚はかなり薄くなっている。

・鉄器 鉄器は第 12 図 10、11 に示す 2 点が出土している。いずれも破片で性格は不明である。

DB 09 竪穴遺構 (第 13 図、写真 5)

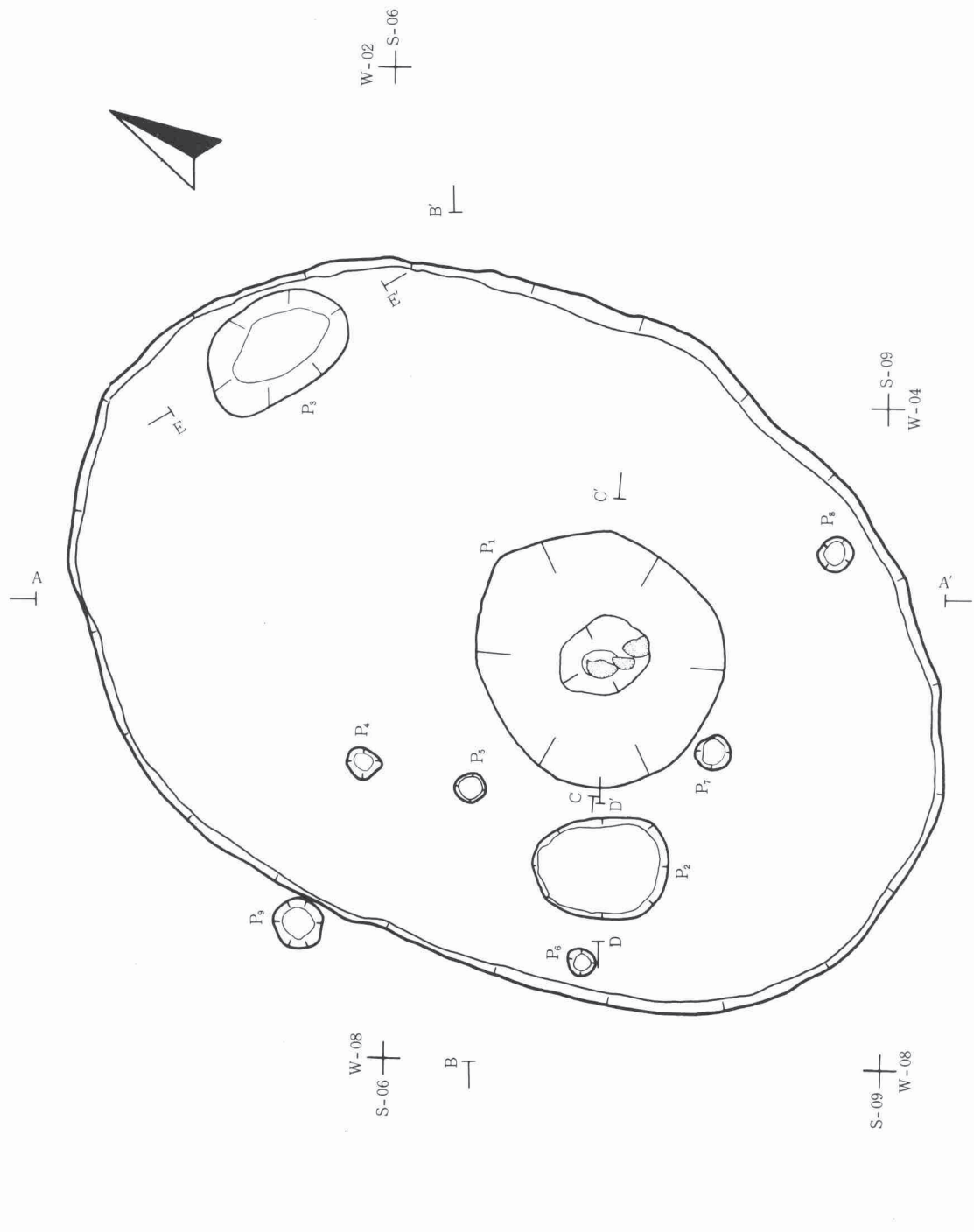
〔位置〕 この竪穴遺構は調査区の西側、遺構配置図上の最南端に位置する住居跡である。

〔重複遺構〕 重複遺構として確実なものは発見されなかった。

〔形状、規模〕 竪穴遺構は南北に長い楕円形プランを有し、その規模は長径 5.6 m、短径 3.98 m、検出面からの床面までの深さは 0.16 ~ 0.45 m を測る。

〔付属遺構〕 竪穴遺構に伴う付属遺構としてはピット 9 がある。

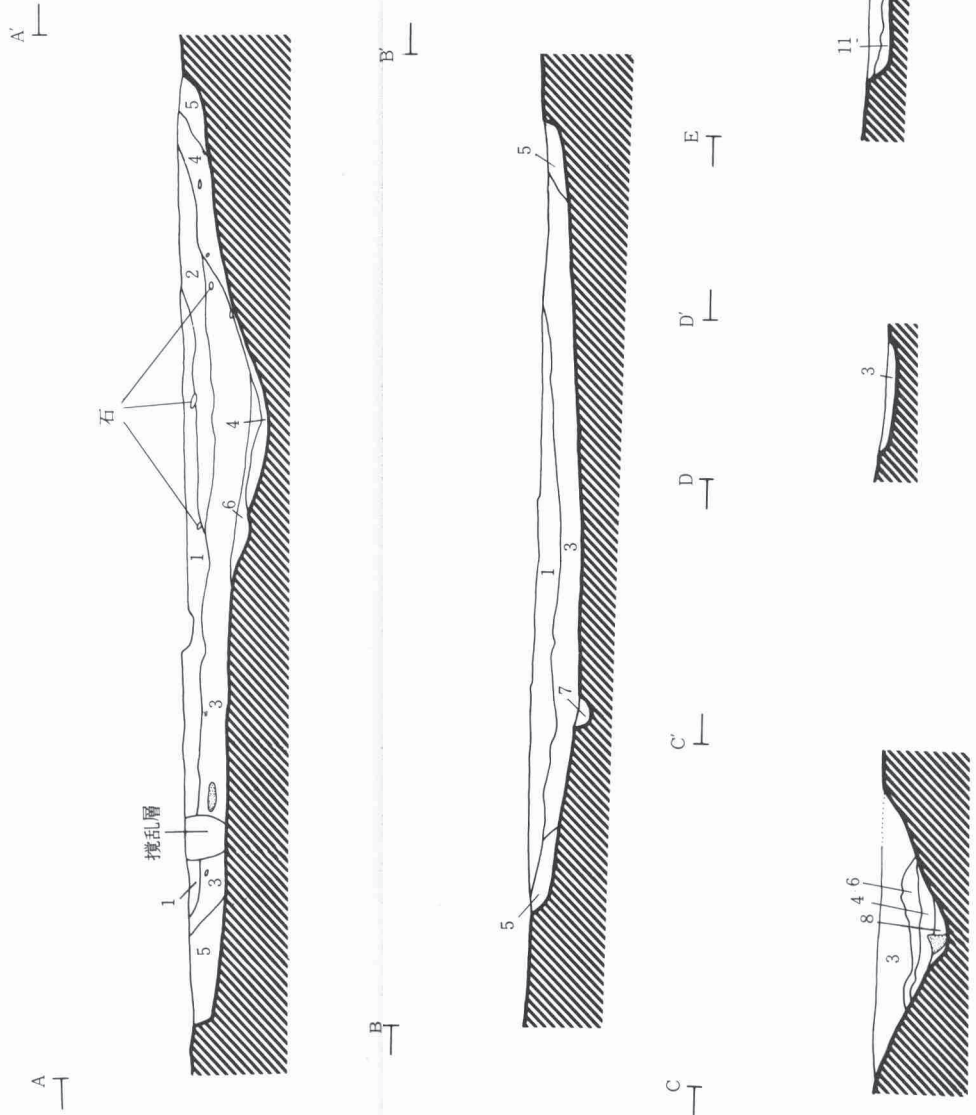
P₁ このピットは竪穴遺構の床の中央部のやや南寄りに位置する平面円形の摺鉢状ピットである。その規模は口径約 1.5 m、底径 0.16 ~ 0.23 m で、深さは床面より約 0.37 m を測る。ピットの底部付近には長さ 13 ~ 18 cm、巾 8 ~ 13 cm、厚さ 4 ~ 8 cm 大の川原石 3 個が置かれていた。



- 1. 暗褐色土+炭化物少量
- 2. 鈍い黄褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 鈍い黄褐色土
- 5. 褐色土+種生根
- 6. 暗褐色土+褐色土
- 7. 暗褐色土+炭化物少量
- 8. 褐色土
- 9. 褐色土+炭化物
- 10. 焼土+木炭少量
- 11. 焼土

遺物包含層

- 1、2、3、4、5、6



(第13図) DB09堅穴遺構断面実測図

ピット内の埋土は堅穴遺構の床面埋土に類似した褐色～暗褐色土 4 層からなるが、その堆積状況は自然堆積に近い様相を呈している。

P₂ このピットは堅穴遺構の P₁ の西に隣合う北西—南東方向に長い楕円形の皿状ピットである。その規模は長径 0.9 m 内外、短径 0.6 m 内外、床面よりの深さ 0.05 m を測る。ピットの埋土は褐色まじりの暗褐色シルト質軽埴土の単層である。

P₃ このピットは堅穴遺構の北東壁に接する西北西—東南東方向に長い楕円形の皿状ピットである。その規模は長径 0.9 m 内外、短径 0.6 m 内外、床面よりの深さ 0.1 m 内外を測る。このピットの中には焼土層が広がり、木炭が出土している。

P₄、P₅、P₆、P₇、P₈ これらのピットは上記のピット周辺の床部に点在する平面円形の柱穴状ピットである。これらのピットのうち、特に P₆、P₇、P₈ は堅穴遺構の南部に東西一列に並んでいる。以上のピットの規模を長径、短径、深さの順で記すと下記のようになる。

P ₄	21 × 19 × 7 cm	P ₅	19 × 19 × 6 cm	P ₆	18 × 16 × 6.5 cm
P ₇	21 × 21 × 20 cm	P ₈	23 × 21 × 11 cm		

P₉ このピットは堅穴遺構の西壁、外側に位置する平面円形の浅い柱穴状ピットである。堅穴遺構とこのピットとの関連性は余りよく解らないが、位置関係から、共伴遺構と考えてよからう。

以上 P₁～P₉ のピットについて述べてきたが、P₄～P₉ 埋土はほとんど暗褐色のシルト質軽埴土の単層からなるようである。

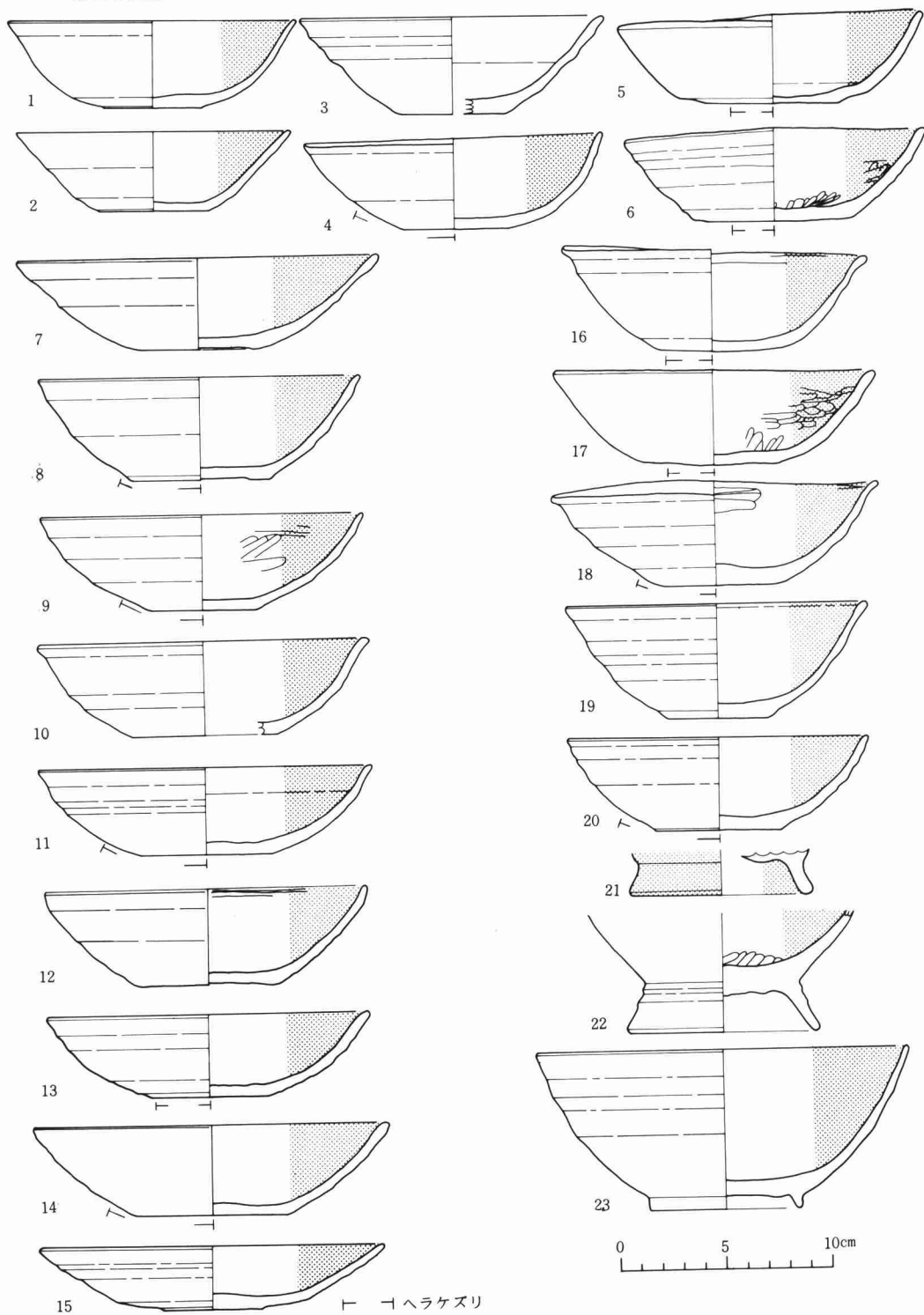
〔埋土状況〕 堅穴遺構の床面は褐色～暗褐色のシルト質の軽埴土 2～3 層で覆われている。その堆積状況を見ると、一部に攪乱の痕跡も認められるが、大むね自然堆積の様相を呈している。そのうち、主要な埋土層は 2 の暗褐色シルト質軽埴土層である。

〔出土遺物〕 (第 14、15 図、第 7 表、写真 14-7、18、19) 堅穴遺構内の遺物は、合計 1,837 点であるが、そのほとんどは土器片で占められている。土器片以外の遺物としては鈎滓の小片 2 点が出土している。

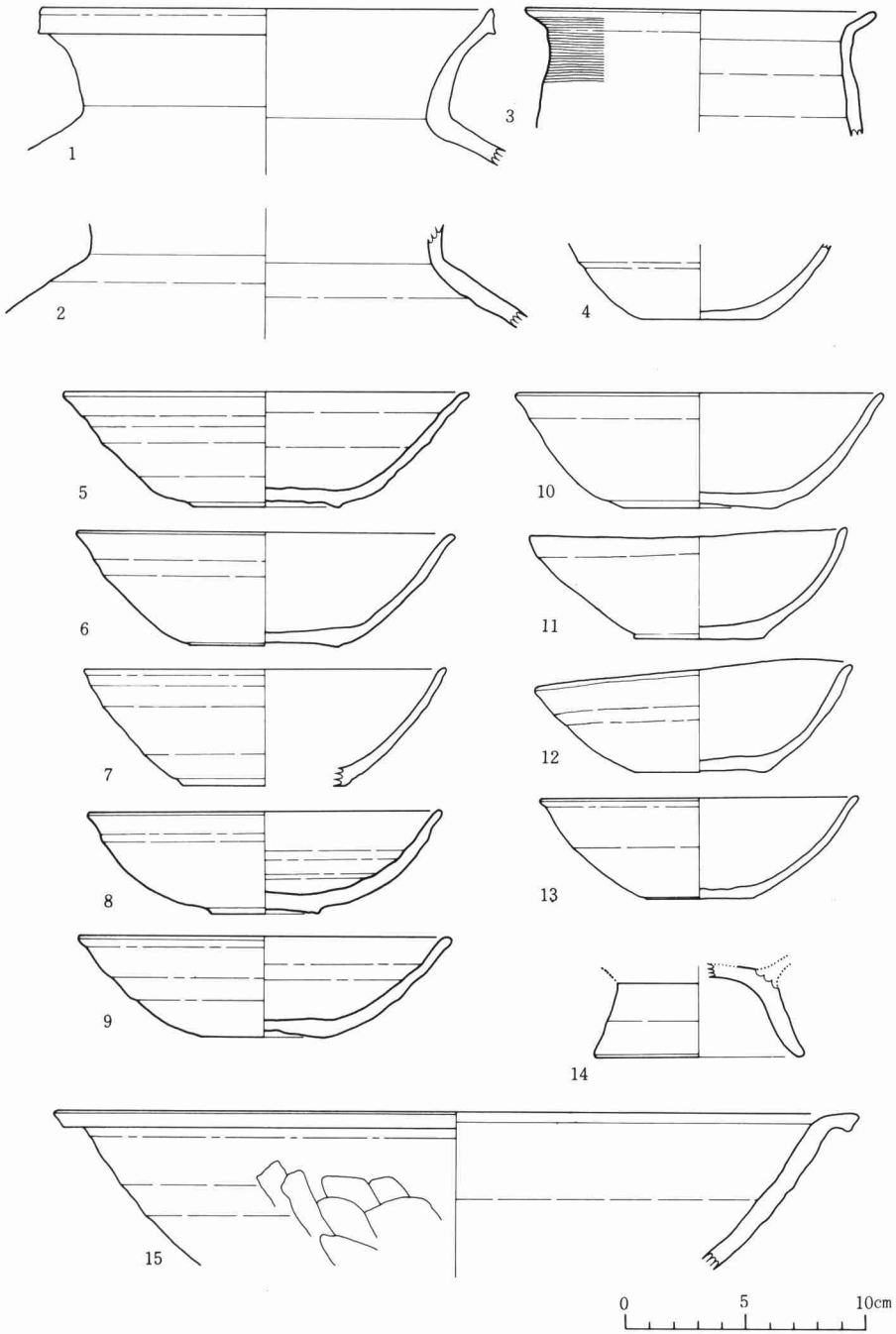
これらの遺物は P₁、P₂ の埋土や底面からわずかに出土しているほかは、ほとんど堅穴の床面直上ないしは埋土下層部から出土している。遺物出土状況を見ると、遺物は堅穴遺構全体に広く分布しているが、特に北東部の床の一部への集中が著しい。そして全体として見ると、これらの遺物が堅穴床面に廃棄された様相を呈している。

土器片の中には A、B、C、D、F、G 群の土器が見られるが、A 群の破片が圧倒的に多く、この堅穴遺構出土の破片数全体の 9 割 5 分を占める。その中には I・Ⅲ～V 類の器種が含まれているが、I 類の数が A 群全体の 6 割強を占め、Ⅲ類がそれに次いで 3 割強を占め、IV 類が 5 分強を占めるといった順で続き、V 類の破片数はほとんど痕跡程度に過ぎない。さらに

—落合I遺跡—



(第14図) DB09堅穴遺構出土遺物実測図(1)



(第15図) DB09堅穴遺構出土遺物実測図(2)

第 7 表 DB 09 住居跡出土遺物一覧表

< 坏 類 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口 径	底 径	高 さ	色 調	備 考
14-1	—	DB09 住居跡	A I	13.4 ^{cm}	4.5 ^{cm}	4.1 ^{cm}	にぶい黄橙	
14-2	18-1	" P ₁	A I	7.8	5.1	3.7	にぶい黄橙	
14-3	20-9	"	A III-1 a	14.2	5.0	4.1	にぶい橙	
14-4	18-2	"	A I-1 a	13.9	5	4.1~4.6	灰 白	
14-5	18-3	"	A I-1 a	14.2	6.3	3.7~4.2	浅黄橙	
14-6	—	" P ₁	A I-1 a	14.9	5.9	4.25	にぶい黄橙	ゆがみ強
14-7	18-4	"	A I-1 a	14.8	3.5	4.3	浅黄橙	
14-8	18-5	"	A I-1 a	15.2	6.4	4.8	浅黄橙	
14-9	19-5	"	A I-1 a	15.0	4.9	4.5	灰 白	
14-10	18-6	"	A I-2 a	⊕15.3	⊕6.7	4.5	浅黄橙	
14-11	18-7	"	A I-1 a	15.5	6.1	4.1	浅黄橙	
14-12	18-8	"	A I-2	15.9	7.3	4.5	灰 白	
14-13	18-9	"	A I-1 a	15.0	5.4	3.9	浅黄橙	
14-14	—	"	A I-1 a	16.8	6.7	3.5	浅黄橙	
14-15	—	"	A I-2	16.0	4.6	3.0	浅黄橙	
14-16	18-10	"	A I-1 a	14.1	6.0	4.3~4.9	浅黄橙	ゆがみ強
14-17	19-1	" P ₁	A I-1 a	14.9	5.9	4.5	浅黄橙	
14-18	19-2	"	A I-1 a	15.1	5.0	4.6~4.9	灰 白	ゆがみ強
14-19	19-3	" P ₂	A I-2 a	14.0	4.7	5.4	にぶい黄橙	
14-20	19-4	"	A I-1 a	14.0	5.8	4.4	にぶい橙	
14-21	—	" P ₁	A II-2	—	(高台)8.6	—	黒 色	高台付杯内外黒色処理
14-22	19-6	"	A I-3 a	—	(高台)8.8	—	浅黄橙	高台付杯内黒処理
14-23	19-7	"	A I-3 b	17.4	(高台)6.8	7.6	にぶい橙	" "
15-5	20-1	"	A III-1 a	16.8	6.0	4.8	にぶい橙	
15-6	20-2	"	A III-1 a	15.7	6.2	4.75	にぶい橙	
15-7	—	"	A III-1 a	15.0	—	4.9	浅黄橙	
15-8	20-4	"	A III-1 a	14.3	4.5	4.3	灰 白	
15-9	20-5	"	A III-1 a	15.4	5.0	4.2	にぶい黄橙	
15-10	20-6	"	A III-1 a	15.2	6.1	4.8	橙	
15-11	20-7	"	A III-1 a	13.1	5.4	4.3	橙	ゆがみ強
15-12	20-3	"	A III-1 a	13.2	5.3	4.2	浅黄橙	ゆがみ強
15-13	20-8	"	A III-1 a	13.1	4.4	4.2	浅黄橙	
15-14	—	"	A III-2 a	—	(高台)8.5	—	灰 白	高台付杯

< カメ・壺・埴類 >

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口 径	頸部径	胴張部径	底 径	高 さ	色 調
15-1	—	DB 09 住	F	18.8 ^{cm}	15.4 ^{cm}	— ^{cm}	— ^{cm}	— ^{cm}	灰
15-2	—	"	F	—	14.7	—	—	—	灰
15-3	—	"	B-1 a	14.4	—	—	—	—	橙
15-4	19-8	"	B-1 b	—	—	—	4.9	—	灰黄褐
15-15	20-9	"	D-1	33.6	—	—	—	—	灰白

I 類の中で見ると I-1、2、3、各種ともに見られるが、特に I-1 類の占める割合が多いようである。その事は I 類の底部資料のうち、I-1 類に入ると思われる破片数が全体の約 8 割 5 分を占めている事実からも察せられる。

A 群 III 類の底部資料でそのうちわけを見ると不明のものを除いて、III-1 類が A 群 III 類全体の約 6 割を占めている。

B、C 群に相当する破片は全破片数の約 2 分弱と極端に少ないが、その中には B 群 1、2 類、C 群 1 類の破片が認められる。D、F、G 群は点数から見るとほとんど痕跡程度の出土数を占めるが、D 群の資料の中には埴に分類できる大破片が 1 点含まれている。

・土器 第 14 図 1、2、4～23 はこの堅穴遺構内から出土した A 群 I 類の土器類である。そのうち 2、6 は P₂ より、19、21 は P₁ よりそれぞれ出土している。その他は全て床部より出土した資料である。これらの土器類のうち、A 群 I-1 類としては 4、5、6、7、8、9、11、13、16、17、20 が掲げられる。これらの土器はいずれも底部ないしはその周辺部にヘラケズリの痕跡が見られるものである。そのうち大部分は風化が著しく、ケズリの痕跡がほとんど消失しているが、技法上の判別可能な個体についてみると全て手持ちのヘラケズリが施されている。

A 群 I-2 類としては 1、10、12、14、15、18、19 がある。また A 群 I-3 類としては 21、22、23、がある。以上の図からも解るように A 群 I 類の各類の土器はその中でもさらにいくつかの形態上の細分が可能である。

第 14 図 3、第 15 図 5～14 は A 群 III 類土器であるが、14 以外は全て III-1 類の坏である。14 は III-2 類の底部破片である。

第 15 図 1、2 は F 群土器の口頸部破片である。今回の調査で発見された土器類のうち F 群の土器資料はほとんど胴体部の破片資料であるが、ここに掲げた資料は口頸部の形状を知り得る数少ない例である。

同じ図の 3、4 は B 群の土器である。そのうち 3 は B 群 1 類の口辺部破片で 4 は B 群 2 類の底部破片である。4 の底部には糸切り痕が見られる。

15 は D 群 1 類に分類される埴の上半部破片である。D 群の出土資料のうちに、全体形状の知られるものの少ない中で、本例は極めて珍しい存在である。

B 単独に散らばるやや大型のピット

(a) ピットの形態分類

やや大型のピット類のうち住居跡などの遺構に伴なわないピット類は既述のものを除いて合計 23 発見されている。これらのピット類の中にはさまざまな形状のものが見られるが大きく分けて、A、B、C 三群に類別される。さらにその特徴により幾つかのタイプに細分される。各

—落合 I 遺跡—

群毎の特徴は下記の通りである。

A 群 平面形が円形ないし楕円形または不整形の浅い皿状のピット群である。このピット群はさらに次のように細分される。

A₁類 この種のピットは埋土下層部に焼土や炭化物の層が見られ、時には底部に火を受けた痕跡が見られるピットである。

A₂類 この種のピットは底部に炭化物層も見られず、火を受けた痕跡も見られない最大径 1 m 以上のピットである。埋土中に焼土や炭化物が混入している場合もある。

A₃類 この種のピットは A₂ と同様、底部の焼けていないピットでその直径が 1 m 未満のものである。

B 群 A 群のピットよりも深く、形状もさまざまであるが、最大規模が 1 × 1 m 未満のピットである。その埋土中には焼土層がほとんど例外なく見られる。

B₁類 平面形が円形ないしそれに近い不整形の鉢状～円筒状のピットである。

B₂類 平面形が長楕円形をした、やや深めの舟底状ピットである。

B₃類 平面形が円形ないし楕円形の浅い皿～舟底状のピットに直径 0.3～0.4 m 大の円筒形ピットが付随するものである。

B₄類 平面形が長楕円形を呈する浅い舟底状ピットである。

C 群 以上の A、B 2 群に分類できないピット類を一応 C 群とした。C 群のピットはさらに細分する事も可能であるが、検出例も少ないので、ここでは一括して扱う事にした。

(b) A₁類のピット

A₁類に分類できるピットは全部で 2 ある。これらのピットの概略を述べると以下の通りである。

CB 03ピット(1) このピットは CA 06住居跡の南東に位置し、すぐ南側の CB 03ピット(2)によって切られたピットである。その規模は南北 1.16m 以上、東西 1.2m で、検出面から深さ 0.13 m 内外を測る。ピットの口辺部から底辺部にかけては火を受けた痕跡が見られるが、特に口辺部の赤変が著しい。

ピット内の埋土は上下 2 層よりなるが、上層は炭化物混りの暗褐色軽埴土層である。下層はほとんど炭化物からなる層で黒色を呈している。(第 17 図、写真 6-2)

CI 06ピット このピットは遺構配置図上の南西部に位置するピットで、そのすぐ北側には、CI 06 溝が北々東—南々西方向に走っている。ピットの規模は長径約 1.2 m、短径約 1 m で検出面からの深さ 0.15 m を測る。

ピット内の埋土は 3 層の軽埴土質の土層よりなるが、そのうち 1 層は暗褐色と黒色の混合した層で少量の炭化物を混えている。2 層は炭化物を主体とした層で、黒褐色を呈している。3

層は暗褐色で炭化物が少量混入している。さらにピットの底部には木炭が残り炭化物が付着している。(第19図、写真11-1)

(c) A₂類のピット

A₂類のピットは全部で4発見されている。

CB 09 ピット(1) このピットはCB 09住居跡の南側を切って作られたピットである。その規模は長径 1.5 m、短径 1.4 mで深さは検出面より0.19 mを測る。

ピット内の埋土は第10図7、8、9層に示されるように3層よりなる。そのうち7、9層はシルト分の強い軽埴土層であるが、炭化物の含有量は7層の方が幾分多く、下層土より若干暗色を帯びている。この両層に挟まれた8層は炭化物を多量に含み層全体が黒色を帯びその中に焼土や褐色土が混入している。(第10図、写真6-3)

CB 03 ピット(2) このピットはCB 03ピット(1)の南側に位置するピットで、遺構はCB 03ピット(1)を切っている。その規模は長径1.58 m、短径1.33 mで深さは検出面より最深部で0.29 mを測る。

ピットの埋土は上下2層よりなるが、両層とも炭化物が少量含まれた暗褐色のシルト質軽埴土よりなる。そのうち上層土は炭化物の混入がやや多く、焼土も若干含まれている。下層土には混入物が少なく、上層土より明るい色調を呈している。(第17図、写真6-2)

CG 06 ピット(1) このピットは遺構配置図の中央部のやや西寄りに位置している。その規模は直径 1.5 m前後で検出面より深さ0.13 m内外を測る。

ピットの埋土は上下2層の軽埴土よりなる。そのうち上層土はシルトの含有量が多く、しまりが密である。色調は鈍い褐色～暗褐色を呈している。下層土は木炭や焼土を多量に含み、全体として黒褐色～暗褐色を呈している。下層土とピット底部の境界部付近には厚さ1 cm未満の鈍い黄褐色のシルト層が広がっている。(第20図、写真10-2)

CJ 06 ピット このピットはCI 06ピットのやや南側に位置している。その規模は長径 0.7 m、短径0.75 mで検出面より深さ0.25 mを測る。ピット底部の壁際は西側の一部を除いて最深部より0.07～0.11 m高いテラスになっている。

ピットの埋土は上下2層よりなるが、いずれも少量の炭化物を含んだ暗褐色と黒褐色のシルト質軽埴土の混合層である。両層の組成はほとんど同じであるが、上層土は下層土より炭化物の含有量が多い。しかしその色調は下層土より明るくなっている。(第19図、写真11-3)

(d) A₃類のピット

A₃類のピットは遺構配置図の中央部南寄りに3発見されている。

CH 03 ピット(1)、(2)、(3) これらのピットはCI 06溝に切られる形で、北から(1)、(2)、(3)の順で切り合いながら一固まりになって発見されたピットである。その形状はいずれも不整形～

— 落合 I 遺跡 —

円形であるが、(1)は長径 0.75 m、短径 0.57 m、検出面よりの深さ 0.3 m を測る。また(2)は直径 0.65 m、深さ 0.18 m、(3)は最大径 0.7 m 前後、深さ 0.07 m をそれぞれ測る。

これらの埋土はいずれも地山層より幾分暗色を呈する褐色～暗褐色の軽埴土の単層よりなるが、ピット相互の重複関係は確認できなかった。

(e) B₁類のピット

B₁類のピットと思われる遺構は 7 発見されている。

CA 09 ピット このピットは BJ 09 住居跡の南方部に位置する平面不整形円形のピットである。その規模は長径 0.58 m、短径 0.6 m で、深さは検出面より 0.38 m を測る。

ピット内の埋土は上下 3 層の軽埴土層よりなる。そのうち最上部の 1 層は褐色を呈し、少量の炭化物を含んでいる。2 層も 1 層と同質であるが 1 層より砂が多く含まれている。3 層については観察記録が残されていないので不明である。そのため埋土状況によるピットそのものの類別はできないが、一応形態的な類似性から B₁ 群に含めておく。

(第 17 図、写真 6-1)

CC 09 ピット(1) このピットは CB 09 ピット(2)の東南東に CC 09 溝を挟んで位置するピットである。ピットの形は平面不整形円形の摺鉢形をなしているが、その規模は長径 0.88 m、短径 0.73 m で、深さは検出面より 0.33 m を測る。

ピット内の埋土は上下 2 層よりなるが、両者とも焼土や炭化物を含むシルト質の軽埴土層である。

そのうち上層土は焼土を特に多く含み橙色を呈している。下層土は焼土や炭化物が少量しか含まれず、全体として褐色を呈している。そしてところどころに焼けた粘土のかたまりが混在している。(第 18 図、写真 8-1)

CC 09 ピット(2) このピットは CC 09 溝を挟んで CB 09 ピット(2)のすぐ南東に位置する円筒形のピットである。その規模は長径約 0.7 m、短径約 0.64 m で、深さは検出面より 0.45 m を測る。このピットと CC 09 溝との間には深さ 0.05 m 前後の浅い掘り込みが認められるが、この遺構とピットとの重複関係について埋土の状況からは確認できなかった。

ピット内の埋土は上下 4 層の軽埴土質土層よりなるが、これらの土層中にはいずれも炭化物と焼土が混入している。そのうち、最上層の埋土には少量の焼土が含まれ暗褐色を呈している。2 層目は前述の層よりやや明るい暗褐色を呈しており、焼土ブロックを含む。第 3 層は褐色を呈しシルト分がやや多く含まれ、第 2 層と同様、焼土ブロックが含まれる。この層は下部に向かうにつれ幾分砂っぽくなる。第 4 層は第 3 層と同質であるが、焼土を多く含む層である。

(第 18 図、写真 8-2)

CC 06 ピット(1) このピットは CC 09 ピット(1)の東部に位置する平面不整形円形の摺鉢状ピット

トである。その規模は長径 0.75m、短径 0.7 m で検出面よりの深さ 0.41 m を測る。

ピットの埋土は 4 層よりなるが、いずれも軽埴土質土層である。そのうち 1 層は暗褐色を呈し、焼土や炭化物を多く含む。2 層は褐色を呈し、1 層ほどでないが焼土や炭化物を多く含んでいる。3 層は灰黄褐色で粘土分の強い層である。4 層はにぶい黄褐色のシルト分の多い層である。(第 18 図、写真 7-3)

CE 06 ピット(1) このピットは CD 06 ピットの東に位置する平面不整形の円筒状のピットである。その規模は長径 0.61m、南北 0.51 m で検出面よりの深さ 0.29 m を測る。

ピット内の埋土は 3 層の軽埴土質の土層よりなる。そのうち、1 層は焼土を多く含み、橙色を呈する。2 層は焼土の他に炭化物を含み、全体として暗褐色を呈する。3 層は地山層の色に近い褐色を呈するが、ところどころに焼土ブロックを混入している。なおピットの底部には一部に焼土と白色粘土の集積が見られた。

CE 06 ピット(2) このピットは CE 06 ピット (1) のやや南方に位置する平面不整形の円筒状ピットである。その規模は長径 0.55 m、短径 0.5 m で、深さは検出面より 0.33 ~ 0.37 m を測る。このピットは実測図からも解るように、北西部分の底部が口辺部より北西にずれ込んでおり、深さも北西部分が若干深くなっている。

埋土は上下 3 層の軽埴土質の土層よりなっているが、いずれの層とも焼土や炭化物が混入している。そのうち 1 層は褐色を呈し、焼土や炭化物を多く含み、固くしまっている。2 層は 1 層とほぼ同質であるが焼土や炭化物の含有量が少ない。3 層は暗褐色と褐色の混合土層で焼土と炭化物を多量に含んでいる。(第 16 図、写真 9-3)

CF 50 ピット このピットは CG 06 ピット(1)や CG 03 ピットの北東に位置する。平面不整形の摺鉢状ピットである。その規模は長径 0.7 m、短径 0.6 m で深さは検出面より 0.35 m 内外を測る。

ピットの埋土は 4 層の軽埴土質の土層よりなる。そのうち 1 層は鈍い黄褐色を呈し、焼土や炭化物を少量含む。また 2 層は焼土や炭化物を多量に含み、黒褐色を呈する。3 層は 1 層より焼土や炭化物の含有量が少なく黄褐色を呈する。4 層はほとんど混入物の見られない層で明黄褐色を呈している。(第 16 図、写真 9-2)

(f) B₂類のピット

B₂類のピットとしては CG 03 ピット 1 つが発見されている。

CG 03 ピット このピットは CG 06 ピット(1)の東方に位置し、すぐ南側には CI 06 溝が走っている。ピットの一部は調査時の不注意によって一部破壊されてしまったが、その規模は長径約 1.2 m 以上、短径 0.66 m で、検出面より深さ 0.33 m を測る。

ピットの埋土は 6 層の軽埴土質の土層よりなるが、そのうち、1 層はピットの上面を被う堆

—落合 I 遺跡—

積層でシルト質の軽埴土層である。2層は焼土や炭化物を多量に含み、極暗赤褐色を呈している。3層は2層と同質の土であるが、含有物が少なく、暗褐色を呈している。4層は褐色と暗褐色の混合した土層で焼土や炭化物などの混入は見られない。5層は褐色土でやはり混入物が見られない。6層はやや暗い暗褐色で焼土や炭化物や灰を少量含んでいる。(第20図、写真10-1)

(g) B₃類のピット

B₃類のピットとしては3つのピットが発見されている。

CB 09ピット(2) このピットはCB 09住居跡やCB 09ピット(1)の南方に位置するピットである。そのすぐ南東口はCC 09溝を挟んでCC 09ピット(2)がある。ピットの平面形は楕円形を呈し、その規模は皿状ピット部分で長径0.57m、短径0.5mで検出面より深さ0.08mを測る。柱穴状ピット部分では長径0.39m、短径0.35m、深さ0.55を測り、その底部は平らになっている。

ピット内の埋土は3層よりなる。そのうち最上層の埋土は極暗褐色～黒褐色の焼土層で炭化物や灰が混入している。中、下層土は柱穴状ピット部分のみに見られる埋土である。そのうち中層土は暗褐色の軽埴土質の土に上層の焼土がブロック状に混入した層である。下層土は地山層と同質の褐色土でしまりが粗である。(第17図、写真7-1)

CD 06ピット(1) このピットはCC 09ピット(1)やCC 09ピット(2)のやや南方に位置する平面隅丸三角形のピットである。その規模は皿状ピット部分で長さ1.4m、最大巾0.75mで深さは検出面より最大0.1mを測る。柱穴状ピット部分では長径0.4m、短径0.25mで深さ0.35mを測り底面は平らになっている。そして皿状ピット部分の底面には火を受けた痕跡が見られる。

ピット内の埋土は7枚の層に区分される。そのうち皿状ピット部分の埋土は4枚で、残りの3枚が柱穴状ピット部分の埋土である。これらの埋土層はいずれも軽埴土質の暗褐色～褐色の土よりなるが、7層以外はいずれの層とも焼土や炭化物を含む。

7つの層のうち皿状ピット埋土の1層は焼土を多量に含んだ褐色土である。2層も褐色土であるが、焼土がほとんど含まれていない。3層はほとんど純粋な焼土よりなり赤褐色を呈している。4層は褐色土層で焼土を混えているが、1層よりも焼土の含有量が少なく、全体として1層より明るい色調を呈している。5層以下は柱穴状ピットの埋土層である。5層は炭化物の含有量が多く暗褐色を呈している。6層は5層よりさらに多量の炭化物を含み、黒褐色を呈している。7層は地山層とはほぼ同質の褐色土層であるが、しまりは粗である。(第18図、写真8-3)

CI 50ピット このピットはCI 06ピットの北東部に位置する平面楕円形のピットである。ピットは比較的浅い舟底状ピット部分と柱穴状ピット部分よりなる。その規模は舟底状ピット部分で長径0.65m、短径0.5mで、深さは検出面より0.08～0.2mを測る。また柱穴状ピット部

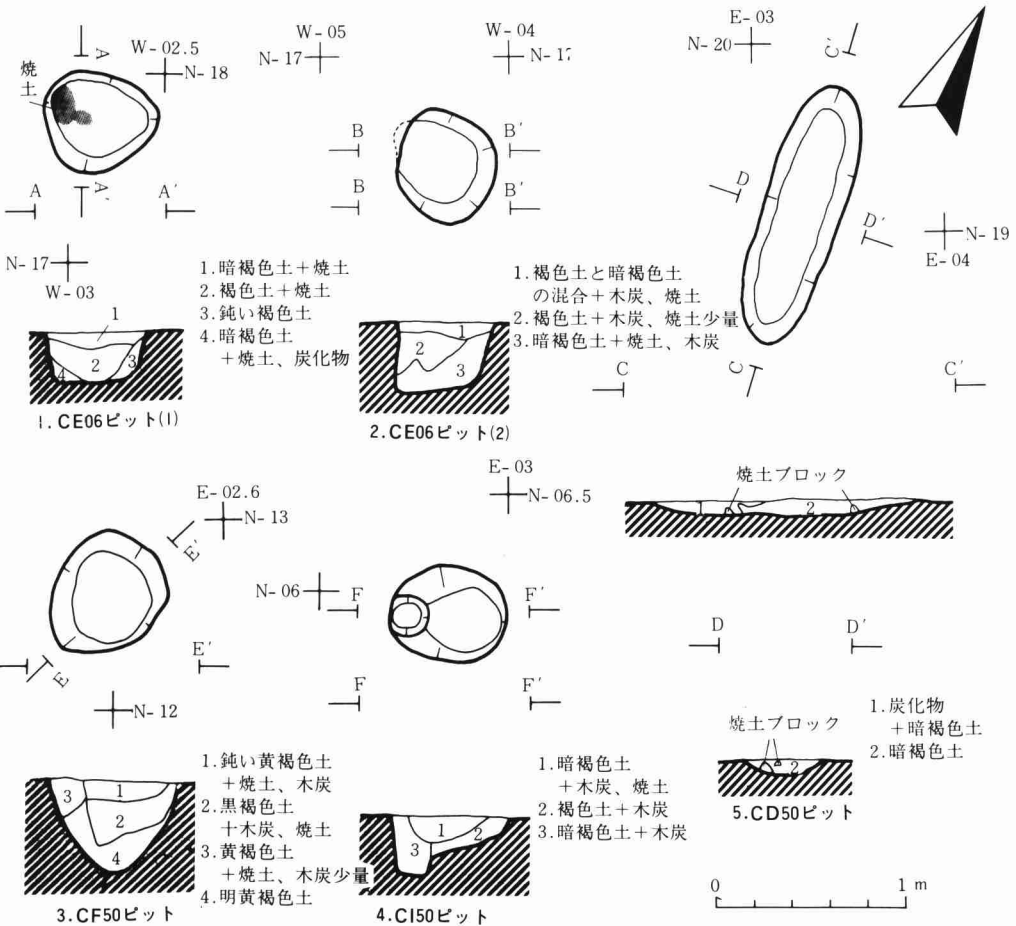
分で直径約 0.2 m、深さ0.31 mを測る。

ピット内の埋土は褐色～暗褐色の軽埴土質の土層 3 層よりなる。そのうち 1 層は多量に焼土と炭化物を含んだ暗褐色土層でピットの上部を蔽っている。2 層は舟底状ピット部分の下層埋土で炭化物を含み褐色を呈している。3 層は柱穴状ピット部分の埋土で 2 層と同様少量の炭化物を少量含んだ暗褐色土層である。(第 16 図、写真 11-2)

(h) B₄類のピット

B₄類のピットとしては CD 50 ピット(1) 1 つのみが確認されている。

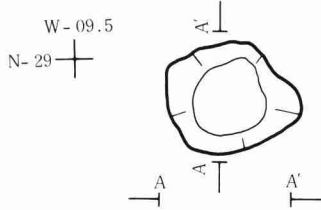
CD 50 ピット(1) このピットは CD 50 住居跡のすぐ北東部に位置する北々西—南々東方向に長い浅い皿状ピットである。その規模は長径 1.4 m、短径 0.4 m、深さは検出面より 0.07m 内外を測る。その底面は火を受けて、ところどころ赤変している。



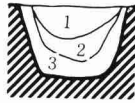
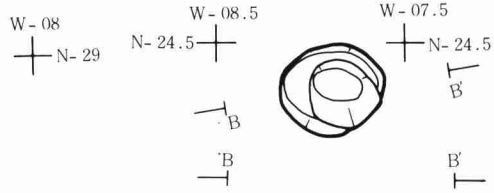
(第 16 図) CD50 ピット、CE 06 ピット(1)(2)、CF 50 ピット、CI 50 ピット平断面実測図

—落合 I 遺跡—

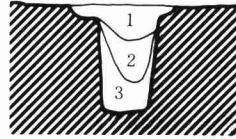
1. CA09ピット



2. CB09ピット(2)

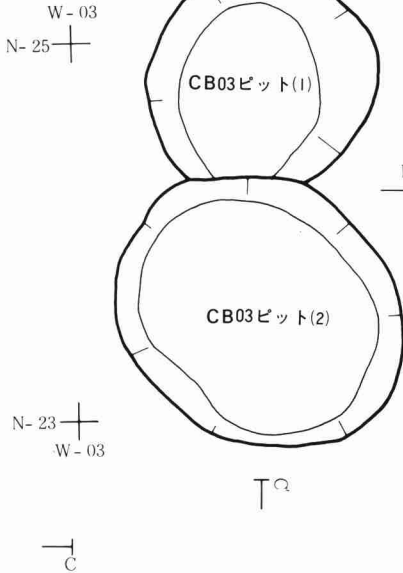


1. やや暗い褐色土 + 炭化物少量
2. 同上 炭化物微量
3. 不明

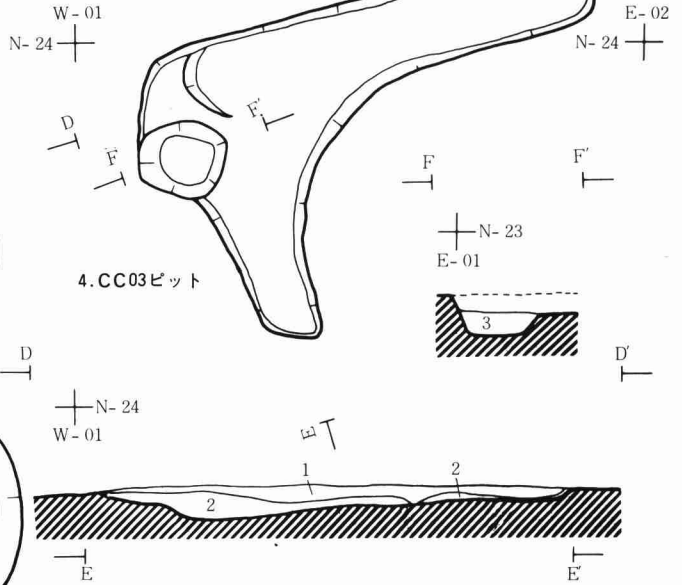


1. 黒褐色～極暗赤褐色焼土 + 炭火物
2. 暗褐色土
3. 褐色土

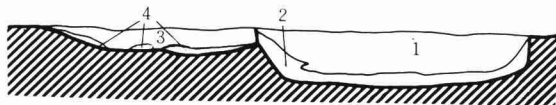
3. CB03ピット(1)(2)



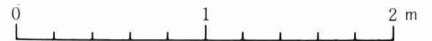
4. CC03ピット



1. 灰黄褐色土 + 炭化物少量
2. 黄褐色土とやや暗い褐色土の混合
3. 暗褐色土

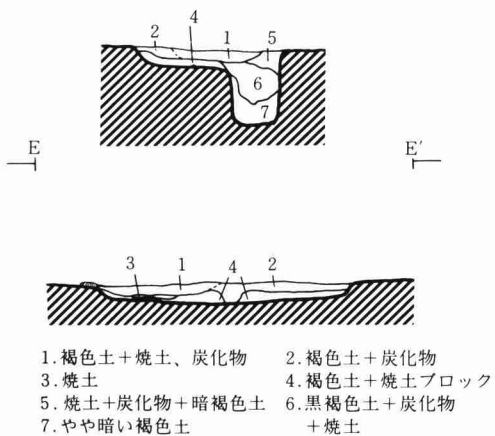
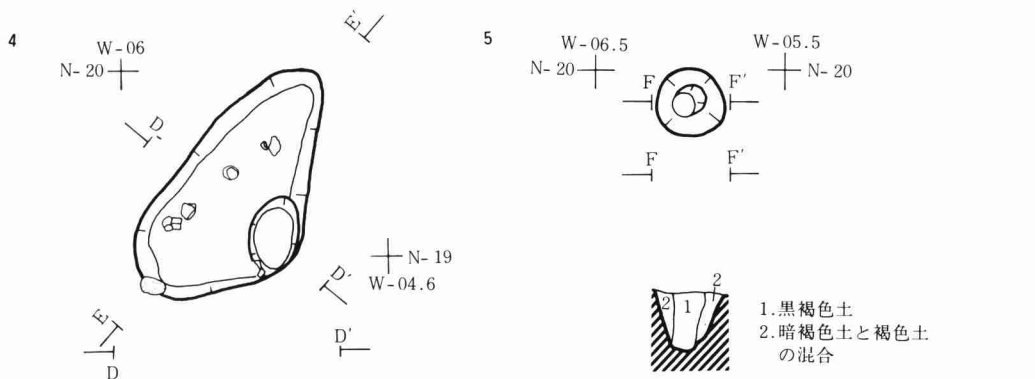
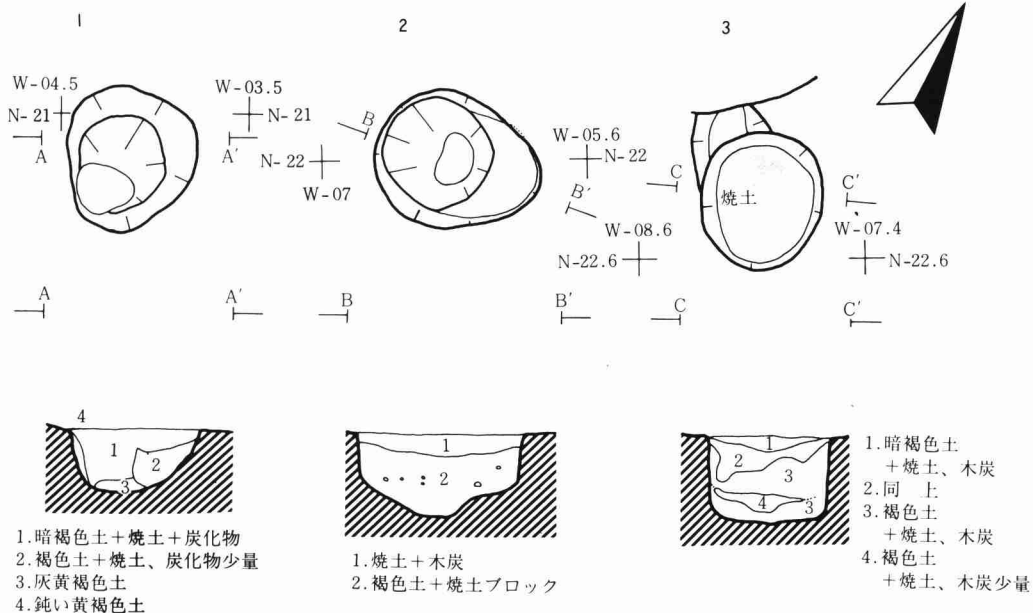


1. 暗褐色土 + 炭火物
2. やや明るい暗褐色土
3. やや明るい暗褐色土 + 炭化物
4. 炭化物層



(第17図) CA09ピット、CB09ピット(2)、CB03ピット(1)、(2)、CC03ピット平断面実測図

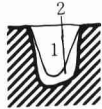
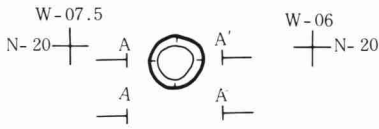
—落合 I 遺跡—



(第18図) CC06ピット(1)、CC09ピット(1)(2)、CD06ピット(1)、CD09ピット(3)平面実測図

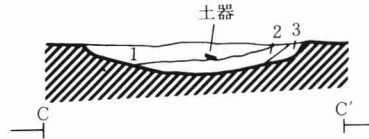
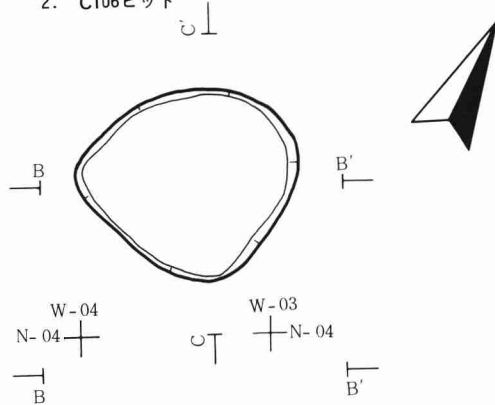
—落合 I 遺跡—

1. CI03ピット

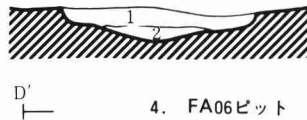
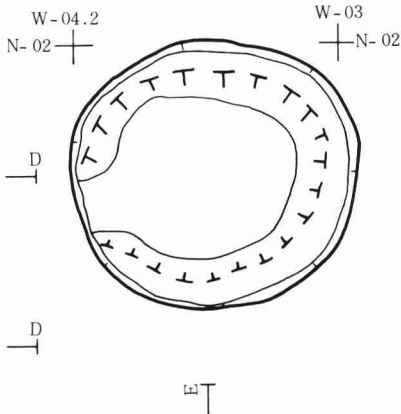


1. 黒褐色土+焼土、炭化物少量
2. 褐色土と暗褐色土の混合

2. CI06ピット

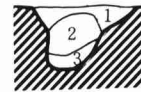
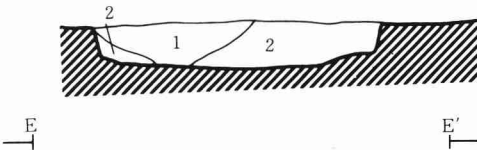
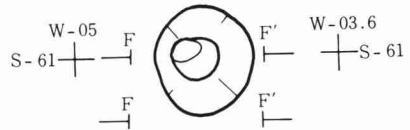


3. CJ06ピット

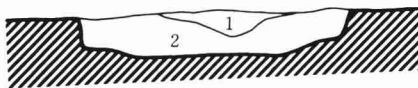


1. 暗褐色土と黒褐色土の混合+炭化物
2. 黒褐色土+焼土、炭化物
3. 暗褐色土+木炭

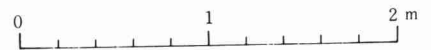
4. FA06ピット



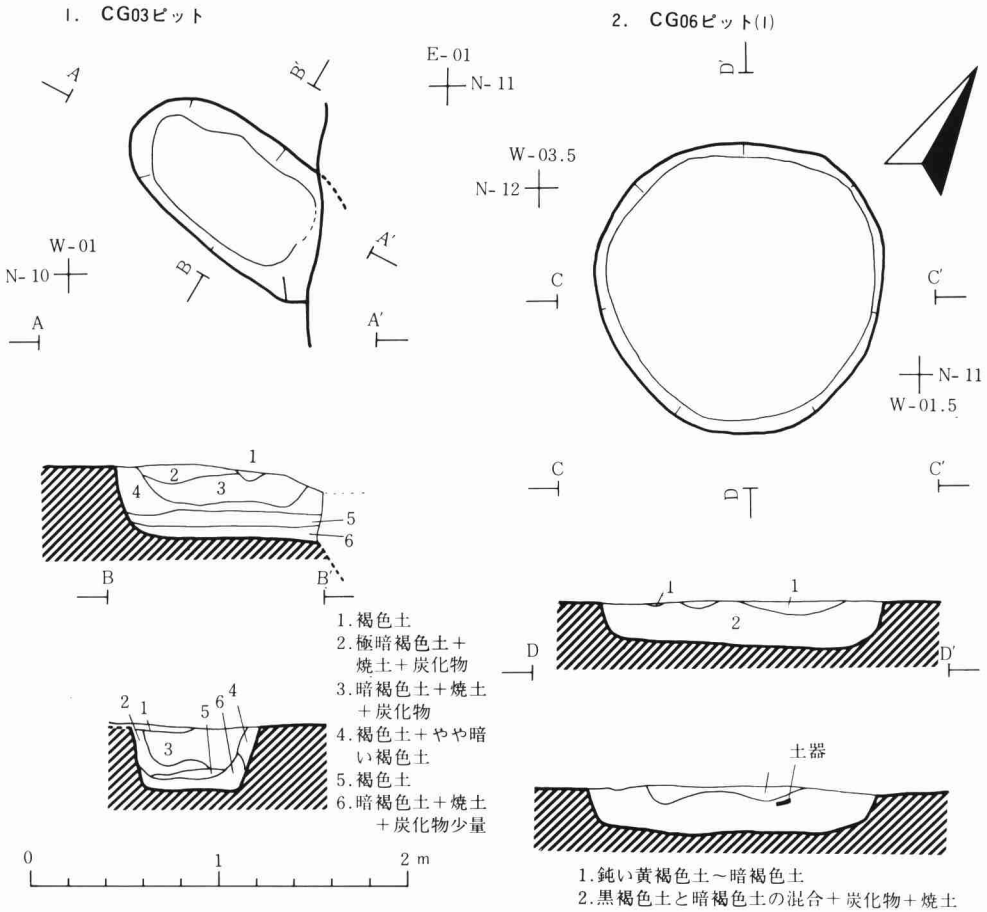
1. 褐色土
2. 明褐色土
3. 褐色土



1. 暗褐色土と黒褐色土の混合+炭化物、焼土
2. 1より暗い層



(第19図) CI 03ピット、CI 06ピット、CJ06ピット、FA06ピット平断面実測図



(第20図) CG03ピット、CG06ピット(1)平断面実測図

埋土は2層よりなるが、いずれも炭化物を含む層で黒色を呈し、中に焼土ブロックを含んでいる。(第16図、写真9-1)

(i) C類のピット

A、B群以外のピットは4発見されている。

BH 09ピット(1) このピットは遺構配置図上の左側上端部に位置するピットである。ピットの全形は確認されていないので不明であるが、深さは検出面より0.7 mで、口辺直径は0.7 m以上、底部直径は0.5 m以上であると予想される。

ピット内の埋土は、褐色～暗褐色の軽埴土質の土層6層よりなるが、いずれも自然堆積に近い様相を呈している。埋土のうち1層は褐色と暗褐色の混合土層であるが、褐色の成分が多いため層全体の色調はやや明るくなっている。2層は炭化物焼土を少量含んだ褐色土層である。3層は褐色に暗褐色が少量混入したシルト分の多い土で、炭化物が少量混入している。4層は、炭化物が少量含まれた灰色味を帯びた褐色土層である。5層は褐色と暗褐色の混合土層である。

—落合 I 遺跡—

が、暗褐色の成分が多いため層全体の色調は幾分暗色を呈している。6層は粘土分の多い暗褐色土層である。なおこのピットはBH 09溝に切られている。(第4、23図)

BH 09ピット(2) このピットはBI 09ピット(1)の東に位置する平面不定形のピットである。その規模は長径0.59m、短径0.2m、深さはBH 09溝の底面より最大0.08mを測る。このピットはBH 09溝の調査時に発見されたピットであるが、BH 09溝との新旧、共存関係は確認できなかった。(第4、23図)

CC 03ピット このピットは遺構配置図の上端、右寄りにあり、BH 09溝の南方に位置する平面がL字型を呈したピットである。その規模は北東—南西方向長2.5m、北西—南東方向長1.6m、検出面よりの深さ0.15m内外を測る。さらにこのピットの西側部分には0.45×0.4m、深さ約0.2mの隅丸方形の柱穴状ピットが伴っている。

ピット内の埋土はシルト分の多い軽埴土質の土層3層よりなっている。1層は灰黄褐色で炭化物を少量含んでいる。2層は灰黄褐色に褐色の混合した層でシルト質の成分がかなり多く含まれている。3層は柱穴状ピット部分の下層部埋土で暗褐色を呈し、粘性が強い。(第17図、写真7-2)

FA 06ピット このピットは調査区の南方部、F区で発見された平面円形の摺鉢状ピットである。その長径は0.58m、短径0.53m内外で、深さは検出面より0.32mを測る。

埋土は上下3層の軽埴土質の土層からなる。そのうち1層は周辺の地山層と同質の土であるが、色調はそれより幾分明い褐色を呈している。2層は、埴生根が入り込んで、しまりが粗くなった明褐色の土層である。3層は粘土分が多い褐色土層である。

なおこのピットの周辺からは、かつて土取りを行なった際、土器片が多数出土したと言われているが、今回の調査ではこのピット以外の遺構の存在を確認できなかった。(第19図、写真22-1)

(j) **ピット内の遺物** (第21図、第8表、写真14-5、21、22-2)

以上述べてきた各ピット内の遺物の出土状況は、第8表に示す通りである。この表からも解るように、大部分のピットからはその形態上の違いに関わりなく、土器類を中心とした遺物が出土している。出土した土器類は大部分、復元の困難な破片であるが、その中には各種の器形や器種が見られる。土器類の出土数量はピットによってかなり極端な差があり、遺物の出土していないピットも幾つかある。しかし、これらのピットの性格については、土器を伴うピット群と大差ないものと思われる。

ピット内の遺物出土状況を見ると、ほとんどの土器片は埋土中から分散した形で発見されている。その主な出土層を見ると、A群のピットでは暗褐色土層が、B群では焼土や炭化物を多く含む土層が、それぞれ遺物の集中出土層になっている。C群のピットは例が多くないので一

一般的な傾向を述べる事はできないが、BH 09ピット(1)では2、4、5、6の暗褐色土層が遺物包含層になっている。しかも混在する土器片はごく少数である。

出土した土器片の数や種類にはピット毎の違いが見られるが、巨視的に見た場合、各ピットの出土遺物の内容は先に述べた住居跡のものほとんど変わりがないと言える。ちなみに各ピットの出土土器片に占める各器種の割合を概観すると、大よそ次のような事が言える。まず坏

第 8 表 大型ピット内の遺物出土状況一覧表

図版番号	写真番号	分 類	ピット名	平安時代の 土器破片数	器 種	その他の遺物
17-1	6-1	B ₁	CA 09	1	B	
17-3	2	(1)A ₁ (2)A ₂	CB 03 (1) (2)	196	AI、III、IV、V、a、 B、C 、 E、F、II、H	CB 03-(2)より 鉄器 1、鋳滓 10
10	3	A ₂	CB 09 (1)	62	AI、III、 a 、B、C、D、F II、G	
17-2	7-1	B ₃	CB 09 (2)			
17-4	2	C	CC 03	15	AI、IV、B、C	
18-1	3	B ₁	CC 06 (1)	4	AI、III、IV	土錘 1
18-2	8-1	B ₁	CC 09 (1)			
18-3	2	B ₁	CC 09 (2)	6	AI、IV、 B、C	
18-4	3	B ₃	CD 06 (1)	33	AI、III、IV、B、C、F、G	
16-5	9-1	B ₄	CD 50	74	AI、III、IV、V、B、C	鋳滓 4
16-3	2	B ₁	CF 50	25	AI、III、IV、 b 、B、C、F	
16-1	—	B ₁	CE 06 (1)			
16-2	9-3	B ₁	CE 06 (2)	100	AI、II、III、IV、a、b、B、 C、D、F	
20-1	10-1	B ₂	CG 03	125	AI、III、IV、V、a、b、B、 C、F	
20-2	2	A ₂	CG 06 (1)	639	AI、II、III、IV、V、a、B、 C、F、	鋳滓 1
8	3	A ₃	CH 03 (1) (2) (3)	(1)~(3) 10	AI、III、a、F、H	
19-2	11-1	A ₁	CI 06			
16-4	2	B ₃	CI 50	379	AI、II、III、IV、a、b 、B、 C、D、G	鋳滓 1
19-3	3	A ₂	CJ 06	122	AI、III、IV、V、B、C、F II	
19-4	22-1	C	FA 06	41	Aa、 B、C	

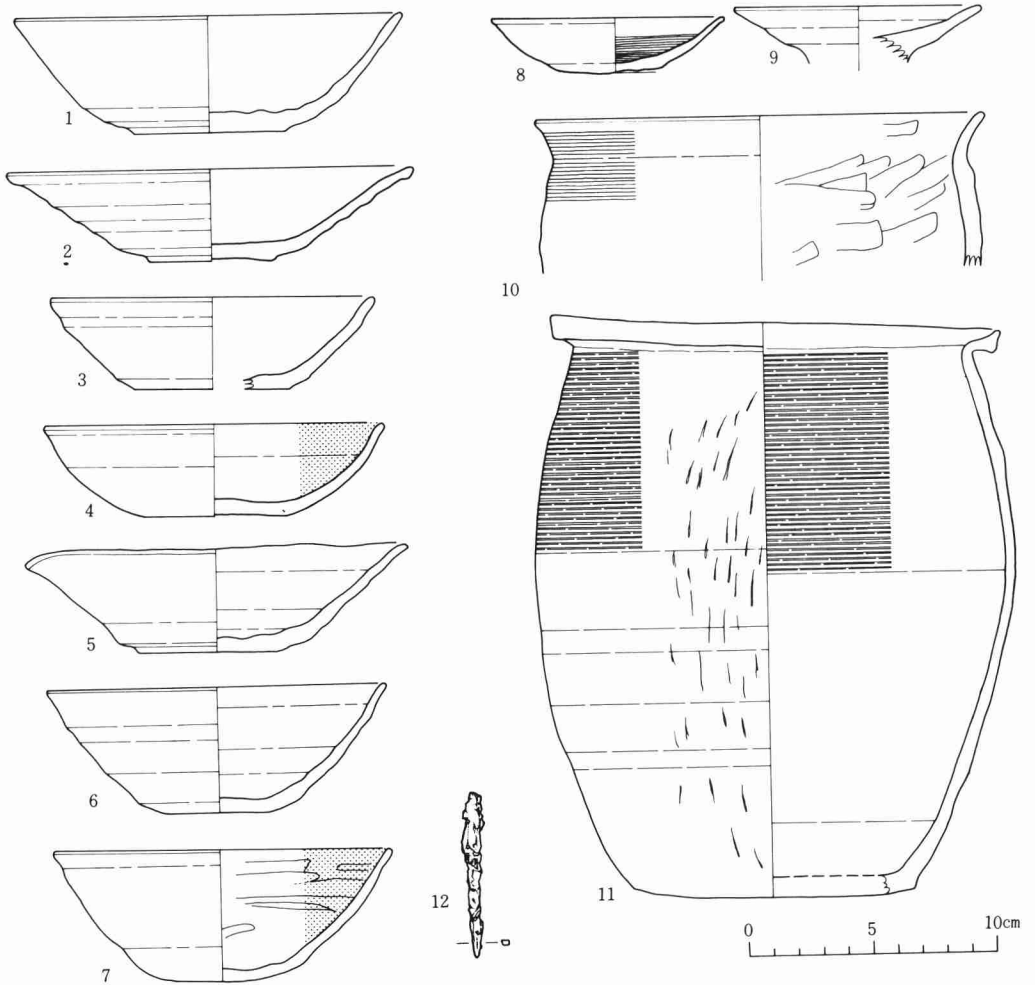
注 1) 太字は出土点数の多い器種

注 2) 集計数には等21図収録の資料の分は含まれていない。

—落合 I 遺跡—

類—A群としては、I—1～3類、Ⅲ—1、2類、Ⅳ類、Ⅴ類などがあり、カメ類としてはB、C群両器種の破片が見られる。他に少数ながらD、E、F、G群の破片も見られる。以上の各器種のうちでも破片数の多いのは住居跡の場合と同様A群I、Ⅲ～Ⅳ各類含まれる坏類であり、これらだけで全ピット内出土土器片数の約8割5分を占める。中でもI類の占める割合の大きいのも住居跡の場合と同様である。さらにⅤ類が少なくⅢ類が比較的多い事も同じ特徴として上げられよう。

以上の事柄の他に注目すべき事としてCI 50ピットをはじめ、いくつかのピットから二次的に火を受けて脱色ないし、焼きぶくれしたり、歪んだり、硬化したと思われるI～Ⅳ類相当の



(第21図) 各ピットおよびグリッド内の出土遺物実測図

土器片 A a、A b 類の出土が掲げられる。これらの破片は V 類と似た色調を呈する場合もあるが、それより胎土の焼きしまりが粗で、I 類などに見られるヘラミガキ痕やヘラケズリ痕の観察される事もある。さらに、焼きぶくれした破片の中にはその縁全体に発泡が認められ、土器が既に焼きぶくれする以前から破片になっていた事を示すものもある。

・土器類 第21図の1～6、8～11は各ピット出土の土器類の代表例である。そのうち、4は、A群I-1類の坏である。1～3、5、6、8は、A群III-1類の坏であるが、8以外は全て1aに、8は1bにそれぞれ細分される。9は、A群III-2類の坏であるが、その中でさらに2bに分類されるタイプの上部破片である。10はB群1類のカメである。11はC群1類のカメの全形に近い資料である。

以上の土器類のうち、5は二次的に火を受けて歪んでいる。9、10、11は器壁外面の風化が著しく、器面調整の痕跡がほとんど消失している。

・鉄器 第21図の12は、釘ないしは鎌状の鉄器である。断面は方形をなしている。

以上、ピット内の遺物について簡単に述べたが、その出土遺構名および法量等については

第9表 ピット内およびグリッド出土遺物一覧表

<坏 類>

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口径	底径	高さ	色調	備考
21-1	21-1	C B 03ピット(2)	A III-1 a	15.3 ^{cm}	6.0 ^{cm}	4.7 ^{cm}	にぶい橙	
21-2	21-2	C B 03ピット(2)	A b ?	16.2	4.9	3.6	橙 ~ 灰	
21-3	—	C G 03ピット(1)	A III-1 a	12.9	6.2	3.7	明 褐	
21-4	21-4	C G 03ピット(1)	A I-1 a	13.6	5.6	3.7	浅黄橙	
21-5	21-6	C I 50ピット	A III-1 a	15.2	5.7	4.2	橙	焼きぶくれ
21-6	21-9	C J 06ピット(1)	A III-1 a	13.5	4.1	5.1	浅黄橙	
21-7	21-10	F J 50グリッド	A I-2 a	13.4	5.0	5.3	橙	A I-1のaかbかは不明
21-8	21-3	C D 06ピット(1)	A III-1 b	9.2	3.9	2.2	にぶい黄橙	小皿
21-9	—	C B 09ピット(2)	A III-2 b	9.9	—	—	にぶい黄橙	高台付小皿

<カ メ>

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種分類	口径	頸部径	胴張部径	底径	高さ	備考
21-10	21-5	C G 03ピット(1)	B-1	18.0 ^{cm}	16.6 ^{cm}	— ^{cm}	— ^{cm}	— ^{cm}	小型カメ
21-11	22-2	F A 06ピット	C-1	18.1	16.0	19.3	11.3	23.1	長胴カメ

<鉄 器>

図版番号	写真番号	出土遺構名	器形	長さ	最大厚	断面形	備考
21-12	14-2	C B 03ピット(2)	鎌 ?	6.6 ^{cm}	0.9×0.7 ^{cm}	長方形	一部破損

— 落合 I 遺跡 —

第 9 表を参照されたい。なお、その他、ピット内の遺物としては第 8 表にも示した様に鉞滓の破片が CB 03ピット(2)、CD 50ピット、CG 06ピット(1)、CI 50ピットから出土している。また土錘の破片が CC 06ピット(1)から出土している。

第10表 単独に散らばる小ピット一覧表

遺 構 名	長径	短径	深さ	出 土 土 器	数 量	切 り 合 い 関 係
C A 03 pit (1)	0.36 ^m	0.3 ^m	0.35 ^m	} A I、AIV、B、C、E	} 8	B I 09溝と切り合う。
" (2)	0.3	0.4	0.26			"
" (3)	0.38	0.3	0.28			"
C A 50 pit	0.3	0.22	0.02	A I、AIII、AV、E	11	
C B 03 pit (3)	0.28	0.22	0.04			B I 09溝を切っている。
C B 50 pit (1)	0.24	0.24	0.08	} AIII、AIV、Aa、Ab、B、C、F	} 27	B I 09溝を切っている。
" (2)	0.34	0.32	0.09			B I 09溝を切っている。
C C 06 pit (2)	0.26	0.22	0.11			C C 06 pit (3)と切り合う。
" (3)	0.27	0.22	0.09			C C 06 pit (2)と切り合う。
" (4)	0.18	0.14	0.12			
" (5)	0.14	0.12	0.08			
" (6)	0.36	0.28	0.17			
C D 03 pit (1)	0.2	0.14	0.08			
C D 06 pit (2)	0.2	0.17	0.08	} A I、AIII、AIV、B、C、F、G	} 33	
" (3)	0.31	0.31	0.08			
C D 09 pit (1)	0.26	0.26	0.07			
" (2)	0.28	0.22	0.13	B、C、	12	C D 09 pit (3)と切り合う。
" (3)	0.36	0.35	0.30	A I、AIII	6	C D 09 pit (2)と切り合う。
" (4)	0.16	0.16	0.21			
" (5)	0.38	0.33	0.04			
C G 06 pit (2)	0.3	0.28	0.05			
" (3)	0.37	0.34	0.03	A II、AIII	2	
C H 50 pit	0.19	0.19	0.16			
" 53 pit	0.3	0.28	0.44			
C I 03 pit	0.28	0.27	0.33	A I、A II、AIII、AIV、B、C、	38	
C J 03 pit (1)	0.18	0.18	0.31	A I、AIII	3	
" (2)	0.16	0.14	0.16			

C 単独に散らばる柱穴状ピットやその他のピット (第4、17、23図、第10表)

これらのピットはBで述べたピット群よりも小さな円形、あるいは不整形円形のピットである。その規模は最大径 0.4m未満で、深さはピット毎に一定していない。ピット全体の形も皿状、摺鉢状、円筒状など各種あり一定しない。

ピット内の埋土としては第18図のCD06ピット(2)の断面図に見られる様に黒褐色～暗褐色の柱痕埋土とそれを取りまく炭化物、焼土まじりの褐色土の2層からなる例も見られるが、大部分のピットは前者の土層に類似した黒褐色～暗褐色土の単層で埋められている。埋土中からはほとんど遺物が出土していないが、ピットによっては若干の土器片が出土する場合もある。

この種のピットは合計28確認されたが、そのほとんどが他の遺構との位置的な関係付けが難しい、性格不明のピットである。しかし、遺物や埋土などの全体的状況からすると、これらのピットは大部分、住居跡やその他のピット類と同じ期間内に含まれるものと推定される。

D 溝 類

溝類は大小合わせて8条発見されているが、ほとんど調査区外に延びる溝である。その規模や形状には幾つかの差異が見られ、細分も可能である。しかし、遺構数も少なく、その性格も明らかではない。

さらに溝類の埋土中からは遺物が出土しているが、その大部分は摩滅の著しい土器類の細片で、知られる限り、全て平安時代のものである。そして、それ以前の遺物としては弥生時代の土器片が痕跡程度混入するだけで、平安時代より後の時代の遺物も全く見られない。以上のような理由から、一応これらの溝類を平安時代の遺構として一括して扱う。

BH09 溝 (第23図、写真12-3)

〔位置〕 この溝は遺構配置図の上端に位置し、調査区内を北西—南東方向に走る溝である。

〔形状、規模〕 溝は上巾 1.6 m、下巾0.26～0.58mの逆台形状の断面を有し、検出面より深さ0.23～0.44mを測る。調査区内でその全長は約18mである。

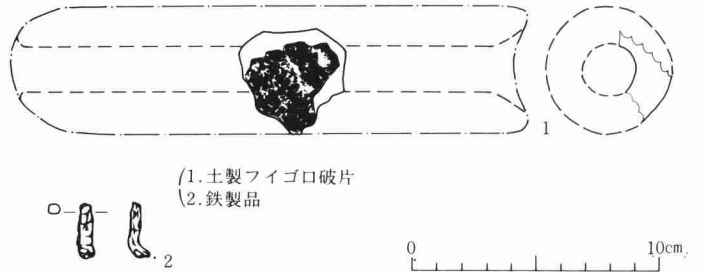
〔重複関係〕 重複する遺構としてはBH09ピット(1)、(2)、BI06住居跡、BJ09住居跡、CA03ピット(1)、(2)、(3) CB50ピット(2)、BJ06溝、BJ03溝、CA06溝がある。そのうちBH09ピット(1)、CA06住居跡は溝より古く、CB50ピット(1)は溝より新しい。他の遺構については新旧関係を確認できなかった。

〔埋土〕 溝の埋土は炭化物や焼土を少量含んだ上下2層のシルト質軽埴土よりなる。そのうち上層土は黒褐色～暗褐色の混合土層であるが、その混合状況は場所によって幾分差異が見られ一定しない。特にBI06住居跡やBJ09住居跡、あるいはBJ03溝やCA06溝との切り合い部分付近では、それらの遺構の埋土との差異の肉眼的判別は非常に困難である。下層部の埋土も上層土と同質の土であるが、幾分暗色を呈している。

—落合 I 遺跡—

〔出土遺物〕 上下の埋土の境界部付近には最大径 5～15cm、厚さ 5 cm 未満の円形ないし不整形円形の平面な礫が 20 個内外散在していた。遺物はこれらの川原石と混在する形で、溝全体の上下埋土層中より出土している。その中には A 群 I～V 類、B、C、E、F、G 各群の器種が見られるが、いずれも細片である。そして、その中ではやはり A 群 I、Ⅲ 類の破片が圧倒的多数を占めている。そ

の他に溝中からは鉄製品や土製ファイゴロの破片各 1 が出土している。(写真 14-2、3)



・土製ファイゴロ 第 22 図
1 は BH 09 溝の北西部、BJ 09 住居跡との接触部付近から出土した土製の

(第 22 図) BI 09 溝出土遺物実測図

<土器>

第 11 表 BI 09 溝出土遺物一覧表

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種	残存表	残存巾	器厚	推定外径	推定内径
22-1	14-3-1.2	BI 09 溝	土製ファイゴロ	4.3 ^{cm}	3.7 ^{cm}	1.4 ^{cm}	5.1 ^{cm}	2.1 ^{cm}

<鉄器>

図版番号	写真番号	出土遺構名	器種	長さ	最大厚	横断面形	備考
22-2	14-2	BJ 09 溝	不明	2.2 ^{cm}	0.5～0.4 ^{cm}	方形	破片

ファイゴロの破片である。この資料は形のほとんど不明な破片であるが、器壁の外側が二次的に火を受けて、焼きぶくれし、灰黄橙色の地色が灰色に変色している。(第 11 表)

・鉄器 第 22 図 2 は一見釣針を思わせる鉄器の破片であるが、用途は不明である。(第 11 表)

BJ 12 溝 (第 23 図)

〔位置〕 この溝は BJ 09 住居跡の西側に位置し、南西—北東方向に走る溝である。

〔形状、規模〕 この溝は BJ 09 住居跡との境界部が明確でないので、正確な規模は不明であるが、判別可能な部分に限って見ると、溝は上巾 0.7～0.84 m、下巾 0.22～0.32 m を測る浅い溝で、深さは検出面より 0.04～0.09 m を測り、長さは確実な部分で 1 m 内外を有する。

〔重複関係〕 重複する遺構としては BJ 09 住居跡、BI 09 溝が上げられるが、埋土の状況からはいずれも新旧関係を明確にする事はできなかった。

〔出土遺物〕 出土遺物は見られなかった。

BJ 06 溝 (第 7 図、第 23 図)

〔位置〕 この溝は BI 06 住居跡の西側を北々東—南々西方向に走る溝である。

〔形状、規模〕 溝は上巾約0.68m、下巾約0.44m、検出面よりの深さ約0.16mを測り、逆台形の断面を有し、長さは調査区内で約1.70mを測る。

〔重複関係〕 重複する遺構としては、BI 06 住居跡とBH 09 溝がある。そのうちBH 09 溝については新旧関係が不明であるが、BI 06 住居跡はこの溝より古い。

〔出土遺物〕 BJ 06 溝の出土遺物としてはA群 I～IV類B、C、G群などの破片が若干見られる。ここでもA群 I類の破片が多い。

BJ 03 溝 (第23図、写真12-2)

〔位置〕 この溝は、BH 09 溝の北側に平行して北西—南東方向に走り、一部でBH 09 溝と交錯している。

〔形状、規模〕 溝は上巾0.3～0.55m、下巾0.18～0.25m、検出面よりの深さ0.2m内外を測り、その長さは調査区内で判別できる範囲内で4.88mを測る。

〔重複関係〕 重複する遺構としてはBI 06 住居跡、BH 09 溝、CA 03 溝がある。そのうちBI 06 住居跡はこの溝より古い。BH 09 溝、CA 03 溝との新旧関係は埋土状況からは確認する事ができなかった。

〔埋土状況〕 溝の埋土は焼土や炭化物を少量含んだ暗褐色のシルト質軽埴土の単層である。

〔出土遺物〕 出土遺物として確実なものは、A群 I類の土器片4点がある。

CA 06 溝 (第23図)

〔位置〕 この溝はBH 09 溝、BJ 03 溝の北側を平行する形で走り、途中、これらの溝と一部交錯している。

〔形状、規模〕 溝は上巾0.58～0.9m、下巾0.45～0.43m、深さは検出面より0.09～0.23mを測り、長さは調査区内で8.26mを測る。

〔重複関係〕 重複する遺構としてはBH 09 溝、BJ 03 溝、CB 50 ピット(2)などがある。そのうちBH 09 溝、BJ 03 溝との新旧関係については不明である。CB 50 ピット(1)はこの溝よりも新しい。

〔埋土状況〕 溝の埋土は褐色と暗褐色の混合したシルト質軽埴土の単層であるが、肉眼的にはBH 09 溝、BJ 03 溝とほとんど差異が認められない。

〔出土遺物〕 この溝に伴う確実な遺物としては、A群 I、III類の破片が14点ある。

CC 09 溝 (第23図)

〔位置〕 この溝はCB 09 住居跡の南側を北東—南西方向に走る溝である。

〔形状、規模〕 溝は上巾0.28～0.38m、下巾0.12～0.32m、深さは検出面より0.09～0.23m、長さは調査区内で約8.26mを測る。

〔重複関係〕 重複する遺構としてはBH 09 溝、BI 06 住居跡、CA 06 住居跡、CC 09 ピッ

—落合 I 遺跡—

ト(2)がある。そのうちで、BH09溝以外の遺構は埋土などの状況や切り合い関係から、いずれもこの溝より新しいと考えられる。BH09溝との新旧関係は明らかにする事ができなかった。

〔埋土状況〕 溝の埋土は二層からなる。いずれもシルト質の軽埴土であるが、上層の埋土は褐色で、やや固くしまり、焼土や炭化物を少量含んでいる。下層の埋土は褐色を呈し、ところどころに暗褐色土が混じるが、焼土などの混入物は見られない。

〔遺物〕 溝中の遺物としては、主として上層部埋土中からA群Ⅰ～Ⅲ類、B、C群の細片49点が出土しているが、特にA群Ⅰ類の破片数が多い。他に鉦滓1点が出土している。

CC 03溝 (第23図)

〔位置〕 この溝は、CD50住居跡の中央部を南北に貫く形で走る溝である。

〔形状、規模〕 溝は上巾0.3～0.46m、下巾0.15～0.4m、深さは検出面より0.02～0.07m、長さは7.42mをそれぞれ測る。

〔重複関係〕 重複する遺構としてはCD50住居跡があるが、調査時の不注意により、その切合関係は確認されなかった。したがって、溝と住居跡の新旧関係は不明である。

〔埋土状況〕 埋土は暗褐色のシルト質軽埴土の単層からなっている。

〔遺物〕 この溝からは合計50点の土器片が出土している。その中にはA群Ⅰ、Ⅲ、Ⅴ類、B、C、F群の器種が見られるが、そのうちでもやはりA群Ⅰ類の破片が多い。その他鉦滓1点が出土している。

CI 06溝 (第23図、写真12-1)

〔位置〕 この溝は、遺構配置図の中央部を北々東—南々西方向に走る溝である。

〔形状、規模〕 溝は上巾0.40～0.64m、下巾0.24～0.36m、深さは検出面より0.1～0.22m、調査区内で長さ14.04mをそれぞれ測る。

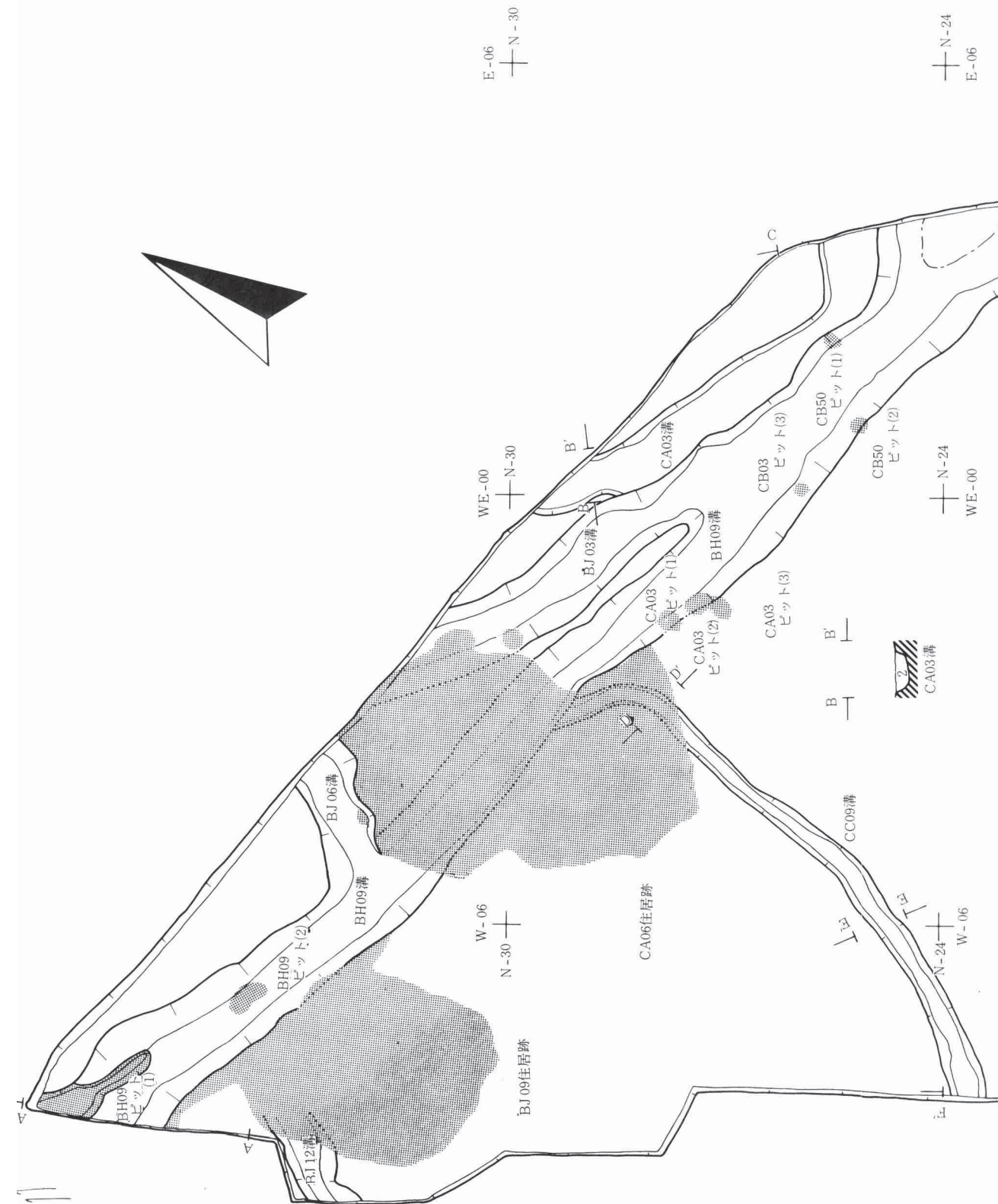
〔重複関係〕 重複する遺構としてはCH03ピット(1)、(2)、(3)があるが、溝はこれらの3つのピットを切っている。また、調査時の不注意により、遺構の一部が深掘りを行なった際に破壊された。

〔埋土状況〕 溝の埋土は暗褐色と黒褐色の混合したシルト質軽埴土層3層よりなる。そのうち上層土は最も黒味が強く柔かい。中層土は上層土と同質であるが、やや固くしまっている。下層土は中層土と同様の成分よりなるが、やや明るい色を呈している。

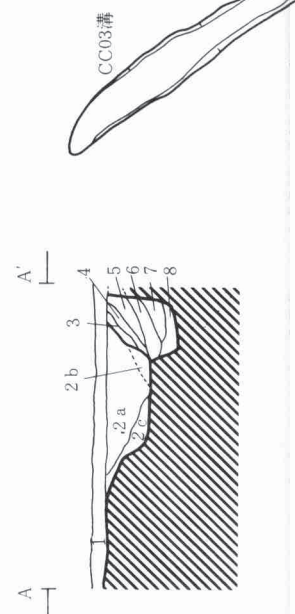
〔遺物〕 この溝からはA群Ⅰ～Ⅴ類、B、C、E、F、G各群の土器細片が出土している。そのうちでも特に、A群Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ類の破片が多く見られる。

E グリッド内の遺物 (第21図、第10表、写真21-10)

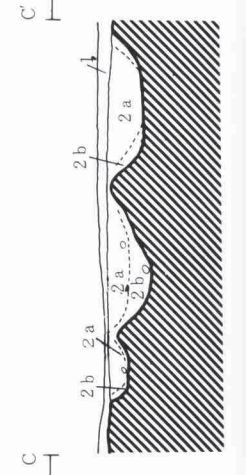
粗掘りの際、各グリッド内から平安時代の土器片が若干採集されているが、ほとんど接合不



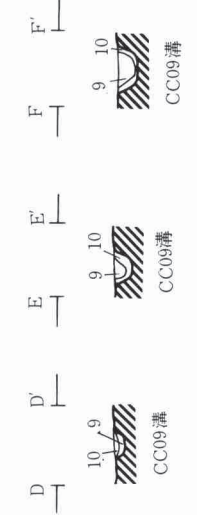
BH09埋土
 1. 褐色土 (表土)
 2 a 暗褐色土+褐色土
 + 焼土炭化物少量
 2 b 暗褐色+焼土炭化物
 少量
 2 c 褐色土+暗褐色土



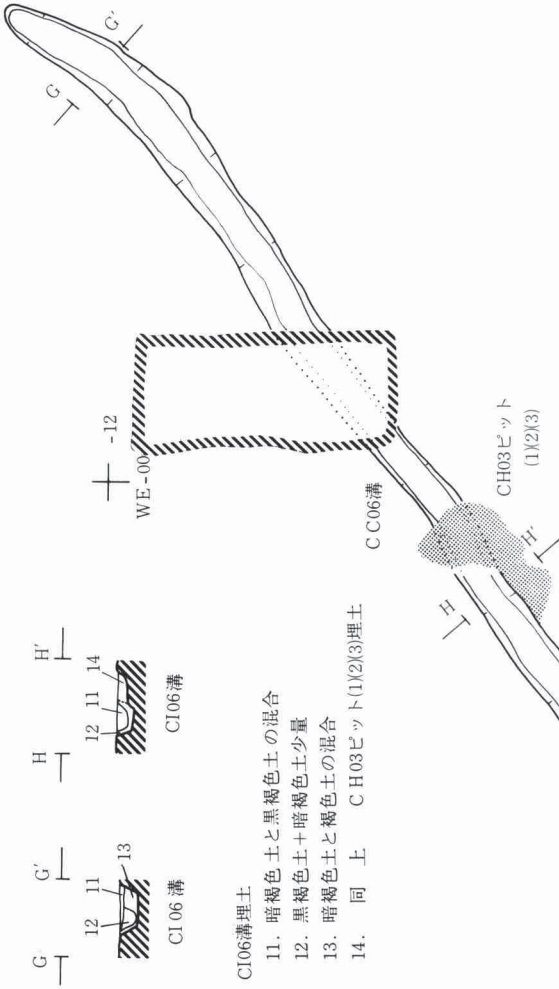
BH09ピット(1)埋土
 3~8



CC09埋土
 9. 暗褐色土+焼土炭化物少量
 10. 褐色土+暗褐色土少量



CI06埋土
 11. 暗褐色土と黒褐色土の混合
 12. 黒褐色土+暗褐色土少量
 13. 暗褐色土と褐色土の混合
 14. 同上 CH03ピット(1)(2)(3)埋土



- 溝と切り合う遺構
- 深掘区域
- 推定遺構外郭線
- 掘りすぎ部分

—落合 I 遺跡—

(第23図) 溝類平面断面図

能な細片である。その出土点数は第13表中に示した通りである。第21図7はFJ50グリッド内から単独出土したほぼ完形のA群I-2類の坏である。この坏は地下約30cm付近から倒立した形で出土した。全体に摩滅が著しい。

IV まとめと考察

今回の調査によって発見された遺構と遺物については以上に述べてきた通りである。次にその成果をもとに2~3のまとめをしてみたい。

1 遺構について

〔1〕 住居跡および類似遺構の特徴

発見された住居跡やその類似遺構は全部で5つあるが、全て竪穴式の床を持っている。床の平面プランとしてはCA06住居跡のような隅丸方形やCD50住居跡のような楕円形のものが見られ、その他、CB09住居跡のような不整形のものもあり、一定していない。

かまど状の遺構はBJ09住居跡やCB09住居跡などで確認されているが、それに付随する煙道などの施設は発見できなかった。CD50住居跡やDB09竪穴遺構には、かまど状遺構が伴っていない。そのかわり、この2つの遺構では床の一部に地床炉ないし、それに類似した焼土ピットが見られた。

さらに遺構によっては、BI06住居跡やDB09竪穴遺構などのように、床部に柱穴状ピットやその他の小ピット、溝状遺構を伴う事もある。しかし、上屋の支柱穴、壁際の土止め施設、貯蔵穴に確定できる付属施設はどの遺構からも発見されていない。

竪穴の床面はBI06住居跡、BJ09住居跡では2時期の重複が認められる。同様の状況は、CB09住居跡やCD50住居跡でも予想されたが、調査時の土層および遺物出土状況の観察からは十分な確証が得られなかった。

遺構の廃棄後の状況を見ると、どの住居跡でも、埋土中から土器片が出土しているが、土器片の多くは流入ないし投棄された形で埋没している。特にDB09竪穴遺構内では、その傾向が著しく、埋土下層部から床面にかけて、多くの土器片が散らばっている。このような状況は、DB09竪穴遺構以外ではほとんど見られない特有の現象である。この事はDB09竪穴遺構が廃絶後間もない時期に土器類の捨て場として転用された事を示唆するものであろう。

また、各遺構内の出土遺物はほとんどが土器片で占められているが、その中でもA群I、III、IV類の坏片が圧倒的に多い。土器以外の遺物としては鉄器や鋳滓が少数出土している。

〔2〕 住居跡および類似遺構の時期差

以上のような形態を有する住居跡や竪穴遺構が同一時期であるかどうか即断はできない。しかし、遺構の重複関係から見る限り、BI 06住居跡のⅠ期床面はⅡ期床面よりも確実に古い。同様の新旧関係はBJ 09住居跡のⅠ、Ⅱ期床面についても認められる。Ⅰ、Ⅱ両時期床面の時期差は伴出遺物で見ると、両住居跡ともそう大きいものではない。それぞれ、土器群の様式にして、せいぜい様式の中に含まれる期間内の所産であると考えられる。

では、BI 06住居跡とBJ 09住居跡の時期差はどうであろうか。両住居跡のA群土器つまり坏類の種別を見ると前者では後者に比べてⅠ、Ⅴ類の占める割合がやや多くなっており、幾分古い様相を呈している。

また、土器類からは比較できないが、切り合い関係からCA 06住居跡はBI 06住居跡より古い時期に位置づけられる。

CB 09住居跡のかまど部からは坏が3個体出土している。これらの坏はほぼこの住居跡が営まれていた期間内かそれ以前の遺物と見なされる。3個の坏はいずれもA群Ⅰ類に分類される坏であるが、いずれもやや器高が高く、器壁の立ち上がりの急な形状をなしている。以上の様な形状の坏は同一技法で作られた坏類の中では幾分、古い段階のものに多く見られる。したがって上記の坏類をもとに各遺構間の時期差を見ると、CA 06住居跡とBI 06住居跡以外の遺構は全てCB 09住居跡よりも新しい様相を呈している。CB 09住居跡とBI 06住居跡、CA 06住居跡との時期差は遺物からも切り合い関係からもあまりよく解らない。

ただCB 09住居跡とBI 06住居跡の関係を伴出した坏で見ると、両遺構ともA群Ⅰ-1類の坏が出土しており、時期的にはかなり近接した遺構と推定される。さらにやや不正確になるが、A群Ⅰ類の中に於けるⅠ-1類の割合を調整痕の残る底部資料で見ると、BI 06住居跡の場合には20点中8点を、CB 09住居跡の場合には14点中6点をそれぞれⅠ-1類が占める。以上の割合からすると両遺構の時期差はほとんど考えられない。しかし伴出するA群Ⅴ類つまり須恵器の坏の数量を見た場合、BI 06住居跡の方が多く、CB 09住居跡より幾分古い様相を呈しているようにも思われる。

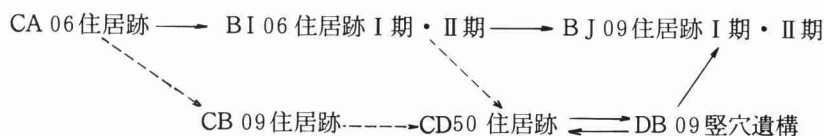
CD 50住居跡では埋土中の遺物の層位的な関係が十分に確認されていないので、詳細な時期決定は難しい。しかし、出土した土器類全体の観察から大まかに次の様な事が知られる。まず出土した土器類の構成であるが、ここでも他の住居跡と同様A群のⅠ、Ⅲ類の破片が大半を占めている。Ⅴ類の破片はほとんど見られない。調整痕の残るⅠ類の底部資料29点中13点には、ヘラケズリ調整痕が見られる。この割り合いはBI 06住居跡、CB 09住居跡の場合と非常によく似ている。しかもⅤ類の土器片がほとんど見られない点はBI 06住居跡よりはCB 09住居跡に似ている。さらにⅠ-1類の坏全般に見られる形態上の特徴は先に述べたCB 09住居跡の3

個の坏類よりも、むしろ DB 09 堅穴遺構出土の坏類に近いようである。以上の事から CD 50 住居跡の時期が CB 09 住居跡の時期かそれ以降、むしろ DB 09 堅穴遺構に近い時期に入るものと推定される。

ところで、記述が若干前後するが、DB 09 堅穴遺構からは多数の土器片が出土している。その大部分が A 群の土器、つまり坏類の破片である。その中でも I 類の破片数が圧倒的に多く、次いで III 類、IV 類の順になっている。II 類、V 類の破片は痕跡程度に見られるに過ぎない。

さらにこの遺構の特徴を I 類の坏で見ると、調整痕の残る底部資料 87 点のうち 53 点が I-1 類の破片で、残り 34 点が I-2 類の破片で占められている。この割り合いは先に見てきた BI 06 住居跡や CB 09 住居跡、CD 50 住居跡の場合とちょうど逆の関係になっている。つまり、前記の 3 住居跡の場合には I-1 類の坏が I 類全体の 4 割前後を占めているのに対し、この遺構では 6 割強を占めている。このような違いが時期差に基づくものなのか、遺構の性格に基づくものなのか、即断はできない。ただ坏類の技法から見た場合、BI 06 住居跡以下の 4 遺構が、I-1 類の使用された期間内に含まれる事はほぼ確実であろう。さらに CB 09 住居跡出土の I-1 類の坏と DB 09 堅穴遺構出土の同種の坏を比べると、後者の坏は一般に器高が低く、器壁の立ち上がりが緩やかである。このような低高口広の坏は I-1 類の中では新しい時期に多くなるように見える。この点については資料的な検討をさらに要するが、仮に、この予想を正しいとした場合、DB 09 堅穴遺構の営まれた時期は大体 CD 50 住居跡とほぼ同じかやや前後する期間内に考えられよう。

以上、坏類、特に A 群 I 類の坏を中心にして、住居跡および、その類似遺構の新旧関係について考えてきたわけであるが、それを簡単にまとめると下記のような編年案が示されよう。



ただし、この編年案の組立には資料操作上、不十分な点が見られる。その点の検討は対照資料の増加を待って、順次行なってゆきたい。

〔3〕 住居跡、および類似遺構の実年代

仮に上記の編年案がなり立つと考えた場合、その実年代はいつ頃に考えられるであろうか。この件に関しても多面的な検討が必要であるが、一応、既に調査された遺跡の遺物との比較から、その年代を考えて見たい。

この遺跡に比較的近い、同じ北上川中流域の北上市の相去遺跡³⁾では、8 棟の住居跡が坏類を主とした土器類の観察から、I、II の最低 2 時期に編年されている。それによると、I 期の 4

—落合 I 遺跡—

棟の住居跡群では、A₁類—この遺跡の分類でいうA群I—1、2類、II類に相当する坏類が大半を占め、B₁類—この遺跡の分類でいうA群III、IV類が少数で、B₂類この遺跡の分類で言うV類は全く見られない。II期の住居跡ではB₂類が大半を占め、A₂類—この遺跡の分類で言うA群I—2類が少数見られ、B₁類は全く見られない。そしてB₁類とB₂類は共存する事が無い。さらにI期の回転糸切底を持つ小形カメは胴下部外面にヘラケズリ痕が見られ、盤—D群（ここで言う埴）の出土数がII期の場合より多い。以上の様に、相去遺跡では本格的な須恵器の坏が地元で生産される以前に、酸化炎焼成された坏類の盛行する時期が知られている。報告者は、この様な現象を在地の須恵器生産開始前の様相として捉え、その時期を9世紀後半代に想定している。

では、落合 I 遺跡の場合、坏類の共伴関係はどの様になっているだろうか。概して言える事は、この遺跡の場合、住居跡などの遺構内から出土する坏類の中にA群I類やIII～IV類の破片が多く見られ、それにII、V類の坏類がごく少数混じるという事である。この事は、相去遺跡群の場合と若干違ふところであるが、時期的に新しい様相を示す特徴であろうか。その点に関しては、今後、資料の増加をまって再検討しなければならないが、一応、現段階では、落合 I 遺跡の前半期の住居跡遺構出土の坏類の年代上限を相去遺跡群のI期と併行、ないし若干遅れる時期に位置付けたい。

さらに、住居跡のうちでも比較的新しい時期のものと考えられる、BJ 09 住居跡出土のA群III—2 a類の坏の焼成形状は、同じく江刺市内の瀬谷子遺跡の昭和46年度の調査時に、3号工⁴⁾房などから出土した台付の皿形坏に非常によく似ている。おそらく、ほぼ同一時期の所産と考えていいのではあるまいか。以上の様に考えた場合、BJ 09 住居跡は先に述べた理由により、今回調査された住居跡の中では最新期の遺構と推定されているので、他の住居跡やピット類の大半はそれとほぼ同時期か、それ以前の期間内に入るものと予想される。したがって、上記の遺物をもとに、これらの遺構の所属時期を推定すると、落合 I 遺跡群の営まれた時期を相去遺跡 I 期の住居跡の存続期から瀬谷子遺跡の平窯存続期に致る、9世紀末から11世紀代の期間と考える事ができよう。⁵⁾その詳細な位置付けについては今のところ資料不足のためよく解らない。

〔4〕 住居跡の形態について

次に住居跡の形態と土器類の問題について、若干触れてみたい。まず、住居跡の形態の問題であるが、本報告で扱ったCD 50住居跡、およびDB 09 竪穴遺構はいずれも楕円形プランを有する竪穴遺構で、その床部には地床炉、ないし、それに類似した焼土ピットを伴っている。以上の様な理由により、本報告では、この両遺構を居住性遺構として説明を加えた。

しかしながら、本県の北上川流域では、先の2遺構と同様のプランを有する平安時代の居住性遺構の発見例をほとんど聞かない。この地方の平安時代の住居跡は、むしろ隅丸方形が一

般的である。この事からすれば、本遺跡の出土例が居住性遺構と考えられるべきものか、疑問の生じるところである。ただ、現在のところ、本報告で述べてきた考えを否定する積極的な材料も見当たらない。したがって、上記 2 遺構の、明確な性格づけについては今後の研究に期待したい。

〔5〕 やや大型のピット群の性格と時期について

各所に単独に散らばる、やや大型のピット類は、その形状や規模の違いから幾つかの性格が考えられる。例えば、A₁、B₂類のピットは埼玉県水深遺跡⁶⁾や秋田県野形遺跡⁷⁾の土器窯との類似から、ほぼ同様の施設と推定される。また、A₂、B₁、B₃、B₄類についてはA₁、B₁との類似も考えられるが、埋土状況から考えると、むしろ焼土や土器類の廃棄穴の様に思われる。A₃類やC類のピットの性格については、今のところ、あまりよく解らない。

A₂、B₁類のピットの土器片や焼土は、主として周辺部のA₁、B₃類などのピットから持たられたものと推定される。さらに、これらのピットの中には、CI 50ピットの様⁸⁾に二次的に強い火熱を受けて脱色したり、焼きぶくれしたA群I～III類の坏片を出土し、鉾滓が伴出する遺構も見られる。この様な遺物の存在はBI 09溝出土のフイゴ口破片の存在とも兼ね合わせて、付近に鍛冶場遺構の存在する可能性を示唆している。

ピット類の所属時期については、伴出する人工遺物の見られないピットもあるので即断はできないが、遺物を伴うピットについて見ると、そう大差の無い期間内に入ると考えられよう。例えば、その事をA₁、A₂、B₁、B₂、B₃、B₄類のピットなどで見ると、遺物の見られる遺構の出土遺物はほとんどが住居跡の場合と同様、A群I-1、2類、III、IV類の坏類で占められ、それ以外の土器類の破片数は極端に少ない。もちろんその中には、CB 03ピット(2)やCD 50ピット、CI 50ピット、CJ 50ピットなどの様にI類の坏片の多く見られる場合と、逆にCG 03ピットやCG 06ピット(1)のようにIII、IV類の坏片が過半数を占める場合が、それぞれ見られる。しかし、この様に遺物の出土点数や種別の組成比に違いが見られるものの、これらのピットは遺構内の埋土や遺物の出土状況などの類推から、大部分が近接した期間内の所産と考えられる。

その時期が、具体的にいつ頃かという事については確証に乏しいが、A₁類に入るCB 09ピット(1)がCB 09住居跡の埋土を明らかに切っている、という事実がある。しかもCB 09ピット(1)の底部に張りついた土器片の中にCB 09住居跡出土の土器片と接合するものが見られる。それに加えて、CB 09住居跡出土のA群の土器片とCB 09ピット(1)出土の土器片の間には技法的に大差が見られない。以上の事実から考えると、CB 09ピット(1)やそれと同様の土器類を出すピットの所属時期は、大体CB 09住居跡の埋没前後に位置付けられるであろう。また、遺物の出土が見られないピットについても形態の類似などから、ほぼ同様の事が考えられる。以上の事柄を総合すると、これらのピットの大部分の所属年代が広く、住居跡などの存続期間と併行す

る時期に想定される。そのなかでも特に、CB 09 住居跡や DB 09 竪穴遺構の存続期間内にその中心が置かれるように思われる。

〔6〕 溝類の時期と性格について

今回発見された溝類は住居跡などの遺構を切っており、発見された遺構群全体の中では最も時代の下がると思われる遺構である。しかし、遺構内の遺物はほとんど埋土中から出土した平安時代の土器細片で、遺構の時期を直接に示すものなのか不明である。したがって、遺構の所属年代も不明であるが、出土した土器片の中に 11 世紀代より新期の土器片が見られない事、および埋土中のしまりが比較的密である事などから、一応、これらの遺構の年代を広く 10 世紀～11 世紀代の時期に位置づけて置きたい。

さて、これらの溝類の性格であるが、今回の調査では一部分しか調査できなかったため、いずれも性格不明である。その中には BH09 溝や CA03 溝のように埋土中に川原石が散在し、排水施設を思わせるものもある。また、他の溝類にしても規模は小さいが、類似した施設である可能性が強い。

2 土器類について

次に土器類の問題について触れる事にしたい。一般に土器類は、遺跡や遺構の年代や人々の暮らしの状態を知るための有力な素材である。しかし、それにもかかわらず、いくつかの土器類に於いては分類上の位置づけや編年上の位置づけが充分確定していない。そのため、土器類をもとにして遺跡や遺構について考える場合、多少の混乱が生じているように見える。例えば、本報告で A 群の III、IV 群として分類された平安時代の坏類もそういった土器類の一つであろう。

A 群 III、IV 類の坏は、両者とも酸化炎焼成されている。さらに III、IV 両類とも土器の胎土には、肌目が細かく、混入物の少ないものと、肌目が粗く、砂などの混入物の多いものの 2 種類が見られる。また、両者の間には成形技法上の違いはほとんど認められず、形態上の差異も明確でない。特に破片資料では、両者の識別はほとんど困難である。ただ両者は、硬さによって III、IV 類に区分されているに過ぎない。そのうち、III 類は硬さの上からは土師器に近く、IV 類は須恵器に近いと云える。

以上の特徴を有する III、IV 類の坏類は従来、須恵系⁹⁾（赤焼）土器、赤褐色土器¹⁰⁾、土師質土器¹¹⁾¹²⁾などと呼ばれている非内黒土器の坏類と同種、ないしは近似した坏類であるが、その器種分類上の位置付けは必ずしも明確ではない。その最大の原因は、これらの土器類の焼成過程、云い換えれば土器類と焼成施設との関係がよく把握されていないためである。つまり、これらの土器類が土師器にも、須恵器にも位置付けられないで、極めて曖昧な内容を持った第 3 の土器群として扱われ続けている大きな理由がここにある。さらに言うと、どういう素材を、どう成形

し、どういう施設で、どう焼けば土師器とか須恵器ないし、それ以外の第3の土器類になるのか、という一見初歩的な問題が未だ解決されていないのである。しかも、仮に第3の土器群が一つの独立した存在として認められるにしても、その中に坏以外のどういう器形が存在するかという問題も充分解明されていない¹³⁾。

いずれ、これらの問題の解決のためには土器判別の難しさも伴うが、この事が解決されていないと、窯業史に於ける各種技術、技法の伝播、発展消長の経過の解明も充分に為し得ない様に思われる。さらに、この問題は土器類の在地生産の在り方とも関連して、広く民衆生活の在り方を考える上でも重要な問題である。それだけに今後の窯跡、その他の生産遺跡の調査、あるいは土器類の胎土の物理科学的研究の進展に期待される面が大きい。

また特に触れなかったが、落合 I 遺跡の A 群 I - 1 類の坏はほとんど手持ちヘラケズリされたグループ b で占められている。その形を見ると、全体的に器高が小さく、口がやや内彎気味にゆるく広がる個体が多い。

この様な技法と器形との関係が地域的な要素によるものなのか、年代的な特徴によるものなのか、ここでは充分な検討を加える事ができなかった。しかし、この点については、他の土器群、例えば A 群 III、IV 類土器との組成率の変化などの問題をも加味しつつ、今後、さらに研究してゆく必要がある。

3 ま と め

以上、今回の調査の結果をもとに、各遺構の年代と性格および土器類の問題について考えて来たが、最後に、落合 I 遺跡の全体的な性格について触れてみたい。

落合 I 遺跡付近の微高地上に、人間生活の痕跡が最初に認められるのは弥生時代の谷起島式土器の使われた時期である。この時期、遺構付近には弥生時代人の集落が営まれたらしく、近接する落合 II¹⁴⁾、力石、兔¹⁵⁾などの遺跡からもほぼ同時期の土器片が出土している。

その後、後続する時期の遺物は 9 世紀後半代に致るまで見られないが、近接する力石、宮地¹⁶⁾などの遺跡では、8～9 世紀代前半の遺構が発見されている。この事から、この遺跡でも今後、同時期の遺構が発見される可能性が強い。ともあれ、今回の調査で発見された遺構は、先にも見て来た様にほとんど 9 世紀後半～11 世紀代に入るものである。

この時期は 9 世紀初頭に律令体制下に組み込まれたこの地方の未墾地が、特に胆沢城の周辺部を中心に移住開拓民らの手によって急速に農地化されて行く時期にあたる。さらにこの時期は、急速に拡大する生産力を背景に、周辺部に向かってさらに人々の再移住が行なわれ、各地に新期集落が形成されていった時期と考えられる。その様子を確実に示す文献史料は、「倭名抄」に江刺地方の四郷の名抄が記されている事など以外、余り多くないように思われる。しかし、

—落合 I 遺跡—

「陸奥話記」にも見える様に11世紀代になると、奥六郡の長安倍氏がこの地方を背景にして台頭して来ている。このような豪族台頭の¹⁷⁾前段階として、やはり9世紀後半～10世紀代に、この地方でそれを可能とする地域社会全体の富の蓄積、生産基盤の拡大整備が進行していったものと考えていいのではあるまいか。

以上の様に考えた場合、落合 I 遺跡やそれとほぼ時期を同じくするか、やや前後する、落合 II、III、力石、兔、¹⁸⁾朴木などの近隣遺跡の性格などはどの様に考えたらいいのであろうか。現段階では、他の遺跡の資料が公開されていないので細かな検討はできないが、これらの遺跡を一応その立地形から、微高地上に立地し、まわりの後背湿地を利用して水田を営む農業集落と考えたい。

もちろん微高地上での畑作も考えられる。そのような証拠は微弱であるが、各遺跡から鉄製鋤先金具やその他の農具付属品の出土した事によって示されている。

そして、落合 I 遺跡を農業集落と考えた場合、その立地の性格上、単純農業集落とは考え難い。やはり付近の河川、沼沢での漁撈や、原野、叢林での狩猟という事も考えられる。その様な事実を裏付ける資料は痕跡的であるが、CE 06ピットから出土した土錘の破片やCB 09住居跡のかまど周辺に見られた骨片状の遺物、あるいはCA 06住居跡の鋸状鉄製品などに見られる。

さらに、この集落では土師器の坏類が自給生産されたと思われ、その痕跡が各種のピットやDB 09堅穴遺構などの遺物廃棄状況の中に見出される。また鉄製品の製作が集落内で行なわれた証拠も土製のフイゴロや焼きぶくれ土器片の存在によって示唆される。以上の結果から、落合 I 遺跡を農業を主な基盤とし、自給自足を旨とする一典型的古代集落と考える。仮にそう考えた場合、それが、他の集落やこの地方全体を蔽う社会構造にどう関連していくのか、その辺の問題に関しては、落合 I、III、力石、宮地、胆沢城、その他の周辺遺跡の資料の集積を待って、再検討してゆく必要がある。

注 記

- 1) 伊藤鉄夫 1973 「沼ノ上遺跡調査報告書」 江刺市教育委員会
山口了紀 1978 「江刺市沼の上遺跡」 岩手県埋蔵文化財センター
- 2) 林謙作、小田野哲憲 1977 「谷起島遺跡第一次発掘調査報告書」 一関市教育委員会
- 3) 岩手県教育委員会 北上市教育委員会 1973 「相去遺跡現地説明会資料」
高橋信雄 1977 「岩手県のロクロ使用土師器について」 『考古風土記』2号
- 4) 草間俊一ほか 1978 「瀬谷子遺跡第3次緊急調査報告」 江刺市教育委員会
- 5) 落合 I 遺跡の年代的な位置付けに当っては下記の資料を援用した。
伊藤博幸 1976 「岩手県における古代土器生産について—須恵器とロクロ土師器の素描—」

『岩手史学研究』第61号

沼山源喜治 1978 「東北地方の歴史時代の土器」東日本に於ける古代土器シンポジウム
発表資料

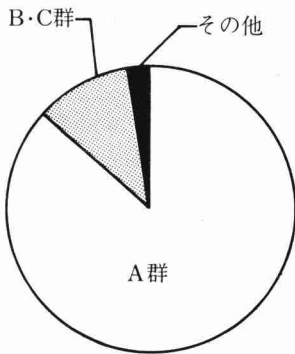
- 6) 埼玉県遺跡調査会 1972 「水深」
- 7) 秋田考古学会 1977 「野形遺跡」
- 8) 土器類を焼いた施設と思われる焼土ピットの発見例は県内でも江刺市瀬谷子、北上市相去などの各遺跡で報告されている。
- 9) 例えば多賀城跡昭和45年度調査概報などでは「須恵系の土器」という用語が見られる。この中に含まれる坏は落合Ⅰ遺跡の分類でA群Ⅳ類に含まれる種のものである。なお、それ以外、第14次調査の出土遺物の中には「土師系の土器」として分類されているカメや三足土器が見られる。
また須恵系赤焼土器という用語は昭和47年度秋田城跡発掘調査概報に見られる。器種としてはやはり落合Ⅰ遺跡のA群Ⅳ類に近い内容を持つものである。
これらの土器類の所属時期は多賀城の場合、10～12世紀内に考えられている。秋田城の場合、11世紀いっぱいと考えられている様である。
- 10) 赤褐色土器という用語は昭和50年度秋田城跡発掘調査概報などに見える。内容的には9)で述べた器種と同様である。
- 11) 土師質土器という用語は昭和49年度以降の胆沢城跡発掘調査概報に見られる。内容的には落合Ⅰ遺跡のA群Ⅲ類に比定される。
- 12) なお当該坏類は弘田柵跡調査事務所年報では1976年度版以降土師器の坏類として扱われているようである。
- 13) 最近、秋田県の野形遺跡で赤褐色土器を焼成したと思われる窯跡の調査が行なわれている。その詳細については7)の文献を参照されたい。そのほか、これらの問題に関しては下記の文献が参考になるであろう。

桑原滋郎 1976 「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会

小笠原好彦 1976 「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」 同上書

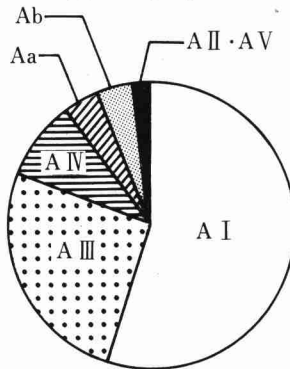
- 14) 岩手県教育委員会ほか 1975 「昭和49年度東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
- 15) 岩手県埋蔵文化財センター 1978 「力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡現地説明会資料」
- 16) 岩手県教育委員会ほか 1976 「昭和50年度東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報Ⅰ」
- 17) 岩手県 1961 「岩手県史」 第一巻 上古篇・上代篇
北上市 1970 「北上市史」 第二巻 北上市史刊行会
- 18) 岩手県埋蔵文化財センター 1978 「落合Ⅲ遺跡・朴木遺跡現地説明会資料」

1. 全土器片に占める各器種の割合。



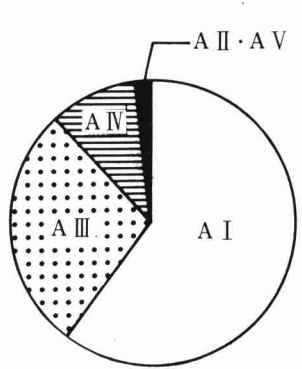
破片数 5857

2. A群の各器種の割合。(含 Aa, Ab)



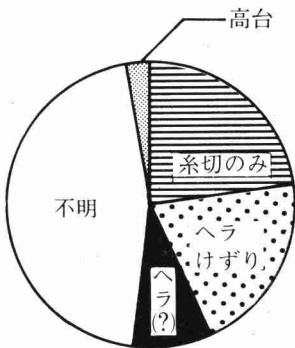
破片数 5056

3. A群の各器種の割合。(除 Aa, Ab)



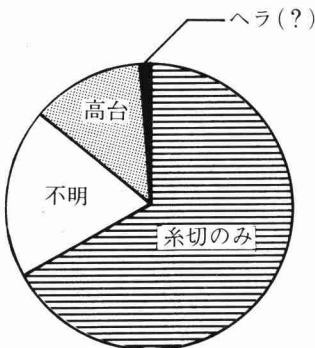
破片数 4612

4. A I類の底部の種別割合。



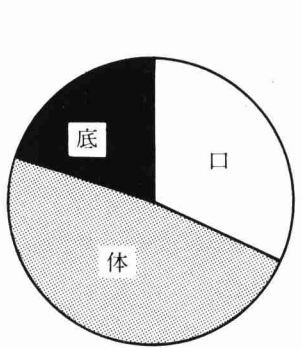
破片数 508

5. A III, A IV類の底部の種別割合。



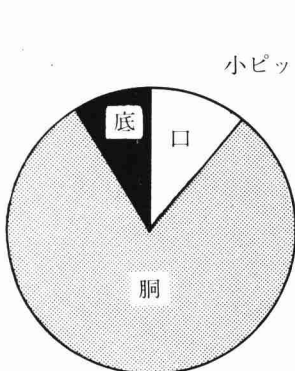
破片数 122

6. 全A群土器片に占める各残存部の割合。



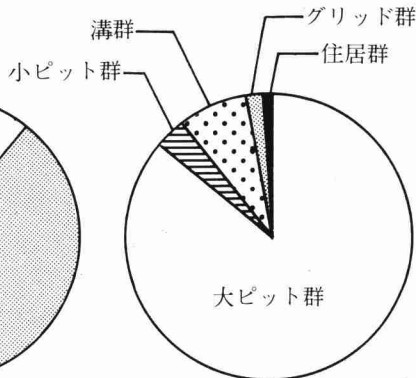
破片数 5056

7. B・C群の各残存部の割合。



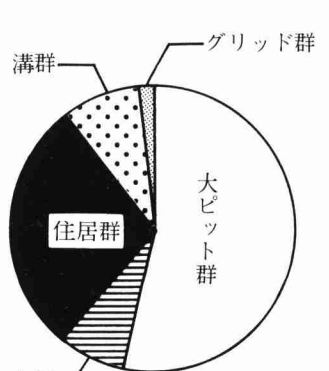
破片数 590

8. Aa類の遺構群別の出土数の割合。



破片数 223

9. Ab類の遺構群別の出土数の割合。



破片数 231

(第12表) 第13表をもとにした統計グラフ

つる
鶴 羽 衣 遺 跡

遺 跡 記 号 : TH

所 在 地 : 江 刺 市 稻 瀬 字 鶴 羽 衣 286 他

調 査 期 間 : 昭 和 49 年 4 月 9 日 ~ 5 月 14 日

調 査 対 象 面 積 : 1280m²

平 面 測 量 基 準 点

東 京 基 点 : 437.620km (DA50)

基 準 高 : 海 拔 46.30m

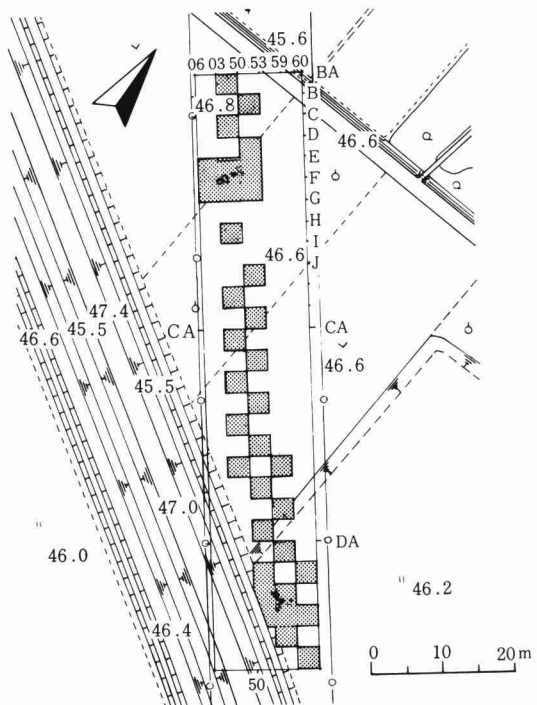
1. 遺跡の位置と環境 (第V図P.51 第VI図P.53)

鶴羽衣遺跡は、江刺市稲瀬字鶴羽衣に所在し、県道北上、江刺線の南に沿って鶴羽衣台遺跡があり、鶴羽衣台遺跡から直線距離で南方約250mに位置している。遺跡の北側を巾2mの農道が斜めに走り、西側は高寺農業用水路が南北にはぼ遺跡と平行して南流している。遺跡の標高は46.6mで東側微高地との比高は、約1mである。本遺跡は北側が果樹園(りんご)として利用され、南側は水田となっている。したがって、南側は水田化のため地山近くまで削平及び攪乱を受けている。また東側の微高地は、宅地及び畑地として利用されている。

2. 調査の方法と経過

本遺跡は東北新幹線建設事業の施行に伴って昭和47年に実施した遺跡の分布調査の結果発見された遺跡である。

調査は新幹線路線敷内の範囲で遺跡全体を対象とした。調査は東京起点437.580kmと437.620kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に設定、437.620kmを本遺跡の基準点とし、DA50と呼称した。このDA50を基準に1辺3mのグリッドを組み、市松状に表土を除去して遺構の検出に努めた。なお遺構の発見にともない随時拡張していった。また本遺跡の基準高は海拔(46.300m)にすべて統一し、遺跡の中心軸の方向角は $N-37^{\circ}07'17''-W$ である。発掘調査は一部鶴羽衣台遺跡と併行して実施し4月9日に調査を開始し、5月14日に終了した。



(第1図) グリッド配置図

3. 調査結果

〔1〕 遺跡の基本層位

本遺跡の基本層位は第2図に示した。Ⅰ層は表土（耕作土）で2層に細分される。Ⅱ層は、黄褐色土で粘性が少なく指圧もできないほどに固くしまっている。Ⅲ層は黒褐色土でシルト質埴壤土、この層に点々と炭化物の混入がみられ、遺物包含層である。Ⅳ層は黄褐色土で砂質埴壤土、粘性はやゝ弱い。Ⅴ層は暗褐色土で砂質埴壤土、粘性はやゝ弱い感じである。Ⅵ層は、褐色の砂土となる。Ⅶ層は砂と礫の混合層になっている。

遺跡南半部は開田の際Ⅰa、Ⅰb層を削平または攪乱によって基本層とは大分異っている。特にⅠb層に対比される層は耕作土が酸化沈澱しグライ化層となっている。本遺跡の表層地質は、新生代第四期沖積世の沖積低地からなる。「現河道は巨礫が河原を作っているが泥質な部分もある。これは地形分類図で旧河道とされている部分と低地の一般面の一部にあたる部分が砂泥質で河原と自然堤防及びその他の微高地にあたる部分が砂礫質となっている^{注1)}。以上から調査対称範囲の表層地質は砂泥質であり、東側微高地は砂礫質となる。

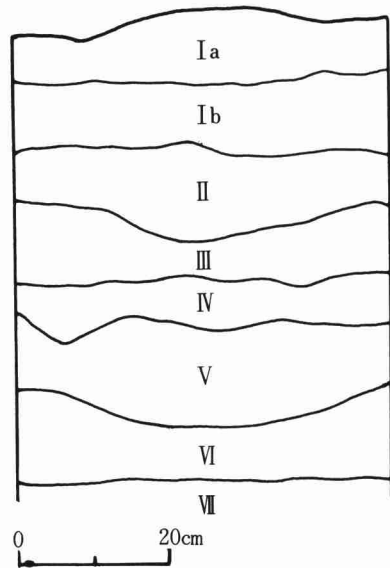
〔2〕 発見された遺構と遺物

（1） 堅穴住居跡とその出土遺物

B C 03住居跡（第3図）

〔遺構の確認〕

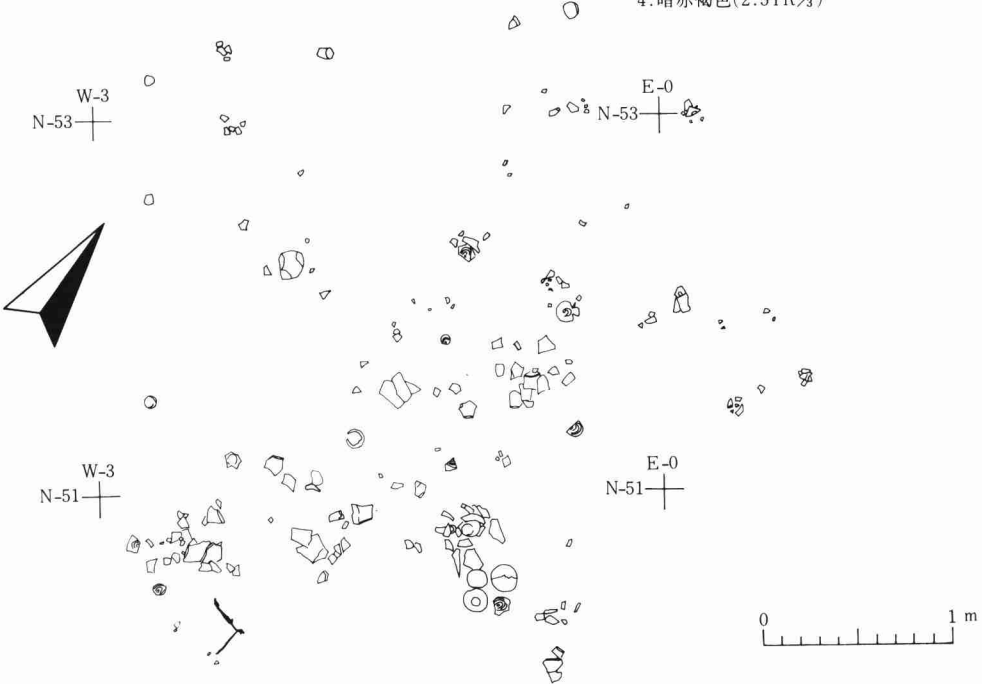
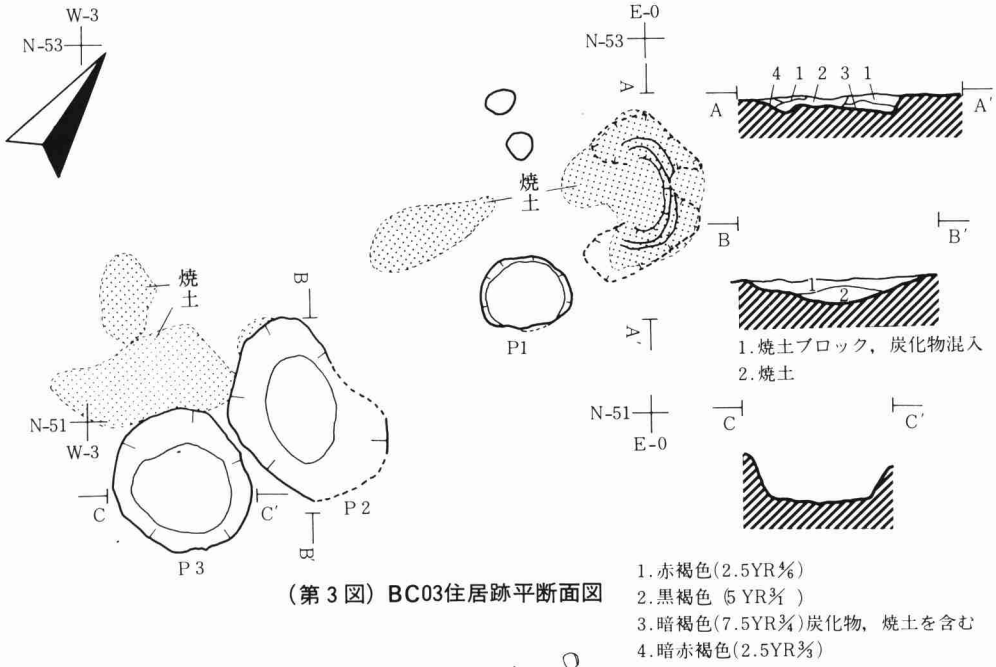
本住居跡はB C 03グリッドからB D 03、B C 50グリッドにかけて検出された住居跡遺構である。遺構検出面は土層柱状図の第Ⅱ層である。本住居跡付近の土地利用の現況は果樹園となっており、表土は耕作のため攪乱を受けている。したがってわずかに残存する焼土の広がりとして



（第2図）基本層位図

注記

	層位	土色	備考
CH 50 グ リ ッ ド 深 掘 り	Ⅰ a層	灰黄褐色(10Y R 4/2)	耕作土
	Ⅰ b層	暗褐色(10Y R 3/4)	耕作土
	Ⅱ層	黄褐色(10Y R 5/6)	
	Ⅲ層	黒褐色(10Y R 2/3)	炭化物、遺物包含層
	Ⅳ層	黄褐色(10Y R 5/8)	細砂を含む
	Ⅴ層	暗褐色(10Y R 3/4)	細砂の混入比率高い
	Ⅵ層	褐色(7.5Y R 4/3)	砂層
	Ⅶ層		礫層



— 鶴羽衣遺跡 —

筒の土壌から住居跡と確認するに至った。

以上の状況から平面プラン、主軸方向、壁、床面の構築方法等は一切不明である。

〔かまど〕

焼土及び炭化物の広がりを手がかりに東辺部を精査した。その結果BC50ライン上にかまど焚口部と想定される遺構を発見した。焼土は長径約90cm、短径約75cmの範囲でハート形に散布し、さらに焼土、木炭粒の下にかまどの焚口部と考えられる袖の基底部を検出した。残存部は第3図のかまど断面図にみるごとく程んど削平により火床部の基底を残すのみである。このかまどの位置から、煙道、煙出しの施設は東方向に伸びていたものと思われる。

〔土坑〕

5筒の土壌を検出。ピット1は長径約50cm、短径約36cmで平面形は楕円形を呈し、断面は浅くレンズ状で深さは約25cmである。ピット2は、長径約95cm、短径約85cmでピット1に類似、深さ約13cmと極端に浅い。ピット3は径約75cmで、ほぼ円形、断面形は舟底型を呈し深さは約25cmである。その他に小形のピット4と5がかまどの北西部に検出されたが、浅く、性格不明のピットである。遺物のかかわりでは、ピット1～3の上面で集中的に出土した。(第4図)

〔出土遺物〕

土器類

本住居跡の出土遺物は、土師器、須恵器、その他の土器等である。

土師器

坏(第5図1) 本住居跡出土の土師器坏で実測可能のものである。口径18.6cm、底径6cm、器高5.9cmを計るや、大形の坏である。成形にロクロを用い、底部は回転糸切り、無調整である。内外面の調整は底部内面に放射状のヘラミガキ痕を施し、体部中央から口縁部にわたり横方向のヘラミガキ及び黒色処理がなされている。器形は、底部から体部へゆるく内彎気味に立ちあがり、体部中央辺ではほぼ直線的に外傾する。焼成はや、軟質で磨滅が著しく保存状況は良好とは云えない。なお底部に「×」印の篋書が認められる。

甕(第5図2～10) 甕類は口縁部、または胴部上半のみが残存する破片である。ここでは主に口縁部の器形、成形、調整等について類別基準を試みた。

第Ⅰ類(第5図2、3、5、7、10) 口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端がほぼ垂直に立ちあがるもの。

第Ⅱ類(第5図4、9) 口縁部が「く」の字状に外反するが、口縁端に丸味をもたせたもの。

第Ⅲ類(第5図8) 口縁部が「く」の字状に外反せず体部の延長としてほぼ直立し口縁端がわずかに外反するもの。

第1類では3のみ外面調整がみられず、他は全てヘラケズリ調整がなされている。特に5は口縁部までヘラケズリによる入念な再調整が施されている。またこの類ではいずれも内面調整は行なわれていない。

第2類は外形上は1類に似るが、口縁部が丸味をもって終熄している。図9は体部外面に斜方向のヘラミガキ痕が施こされている。

第3類は、器壁が内彎しながらほぼ直立気味に立ちあがり、口縁部と体部の区画が明瞭でなく、体部の延長としてやゝ外反する。また口縁断面は半円状を呈す。調整は胴部外面にたて方向のヘラケズリが施こされている。

須恵器 (第12図拓影図1、4、5)

須恵器は全て破片のみである。図1は甕の胴部破片と思われる。外面調整は平行叩き目が交錯し、図4は平行叩き目に直交する叩き目が施こされ内面にヘラナデの調整痕がみられる。図5は規則性のある平行叩き目である。

その他の土器 (第6図11～33) 本土器群はロクロ成形により底部切り離し技法は回転糸切り手法で調整は内外とも施されない。内面のヘラミガキ、黒色処理も行なわない、いわゆる土師器の範囲に含まれないものである。

杯 器形、成形、焼成、色調等をもとに次のように類別した。

I類 (第6図11、12、13、16、17) 小形杯で口径約11cm～12cm内外、器高約3cmの浅型のものである。

器壁は内彎気味に外傾し口縁部がわずかに外反するもの。成形にロクロを用い胎土は白色に近く微砂をわずかに混入するが焼成は良好で硬質である。色調は外面は灰白色、内面は浅黄橙色を呈している。底部内面に渦巻状のロクロ痕を残している。図12は胎土、焼成等は前者に類似する。色調は内外面とも浅黄橙色を呈し底部内面は渦状文を残している。図13は、胎土中に石英砂、砂粒等を多量に混入し、焼成はやゝ良好である。色調はにぶい褐色を呈し、器形に歪みがみられる。また底部内面は凹凸が顕著で、内外面にわたり一様にカーボンの付着が認められる。図16も前者に類似するもので器形の歪みが著しい。

II類 (第6図14) 器形は口径12cmで小形である。器壁は外彎しながら外傾し、口縁部に至り更に外反する特異な形状を呈している。成形はロクロによるが胎土に石英、雲母の細砂を含む。

焼成は良好で底部中央が極端に薄手の作りとなっている。

III類 (第6図15) 小形杯で器壁は内彎しながら外傾し体部中央で直線的に外傾するが口縁部は外反しない。胎土中に石英等の細砂を多量に含み焼成は良好で硬い。色調はにぶい黄褐色を

呈し内外面にカーボンの付着痕が認められる。

IV類（第6図18） 器壁はほぼ直線的に外傾し、体部中央で一端屈折し同様に外傾するが口縁部でわずかに外反する。全体にやゝ丸味をもった器形である。底部は他の坏に比べ7.3cmと大きい。胎土中に砂粒を含むが焼成はよく色調は浅黄橙色を呈している。

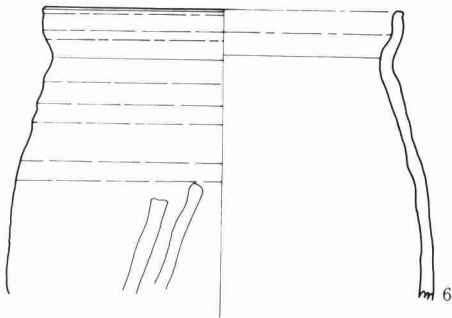
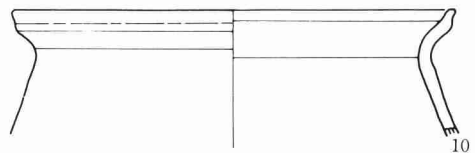
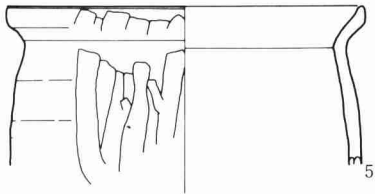
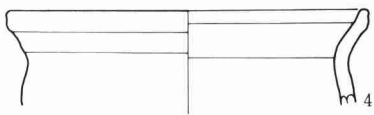
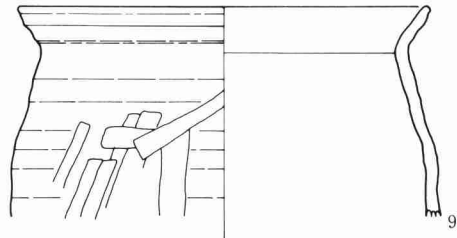
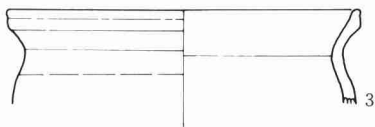
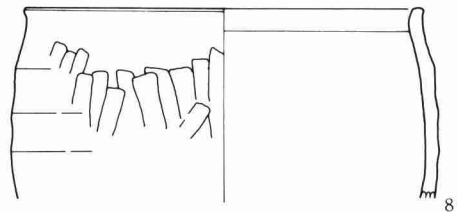
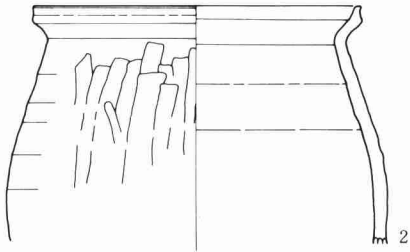
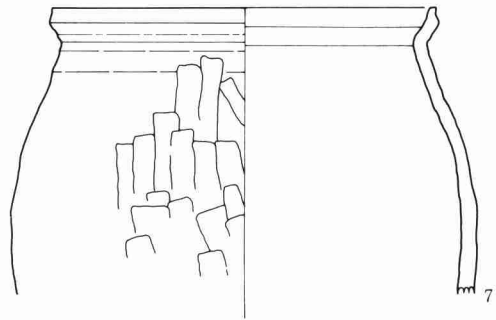
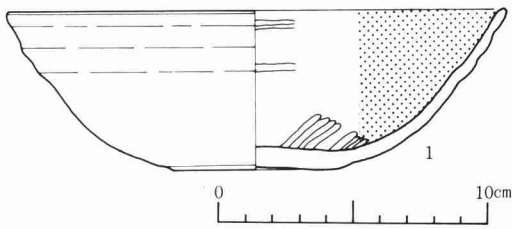
V類（第6図19～25） ロクロ成形で中形から大形の坏類である。器壁は内彎しながら外傾し口縁部で外反する特色を有するものである。器厚は全般に薄く底部はやゝ厚手となっている。19図は完形品で、器形のゆがみの少ない坏である。胎土中に石英及び砂粒の混入がみられるが焼成は良好で硬質である。色調は内外とも浅黄橙色をおびている。底部内面には渦状文を残している。図20は19図に類似するが胎土中に雲母の混入がみられる。器面は内外ともに磨滅が著しい。図21は、全器形の1割を欠損、胎土中に石英、雲母の微粒子を含み焼成はやゝ硬質である。色調は内外面とも灰白色を呈し底部内面に渦巻状の隆起文を残す。図22は3割を欠損するが器形は20図に類似する。胎土は精良で異物の混入はあまりみられず焼成も良好で且つ硬質である。色調は内外面にわたり灰黄褐色を呈している。器高はやゝ低い。23図は4割を欠損し、胎土中に石英砂を多量に混入、色調は橙色を呈しやゝ硬質である。一般に呼称される赤焼土器に類似するものである。図24は3割を欠損し器形は口縁部でやゝ強く外反する傾向にある。底部の器厚が厚い。胎土中に石英、雲母等の細砂を包含する。色調は灰白色で底部内面に渦巻状文を残している。図25は本遺構の中で最大の坏である。口縁部径は約16.6cmを計る。成形はロクロで底部切り離しは回転糸切りである。胎土中に川砂を多量に含み色調は灰白色を呈し、底部内面に渦状文の隆起痕がみられる。

高台付杯（第6図26～33） 本住居跡出土の高台付坏は実測可能のものが1点だけで他はいずれも脚部のみで坏部を欠損している。成形にロクロを使用し胎土は一般に粗く、石英、雲母等の細砂を多量に混入しやゝもろさを感じられる。調整痕は全く認められず坏類と同様である。

図26は坏部がゆるやかに内湾しながら外傾し口縁部が外反するものである。脚部はやゝ低めで断面形は「八」の字状に外方に開脚する。なお坏部と脚部の剥離面の観察からこれらは夫々別個に成形され、後に接合された痕跡をとどめている。色調は灰褐色で外面にわずかにカーボンの付着がみられた。図27～31はやゝ低めの高台で、図30、31は先端部の断面形が先細りとなっている。図32、33は高めの高台で、特に33図は「八」の字状に開脚したものが先端部で屈曲し外方に伸びている。

D C 50住居跡（第7図）

〔遺構の確認〕 本住居跡はD C 50グリッドからD C 56、D D 53グリッドにまたがる遺構であり、遺跡の南端部に位置し、調査時点での現況は水田として利用されていた。これは旧地目の畑地を削平し開田したもので攪乱が著しく、また住居跡の南西部分を南北に用水路がはしって

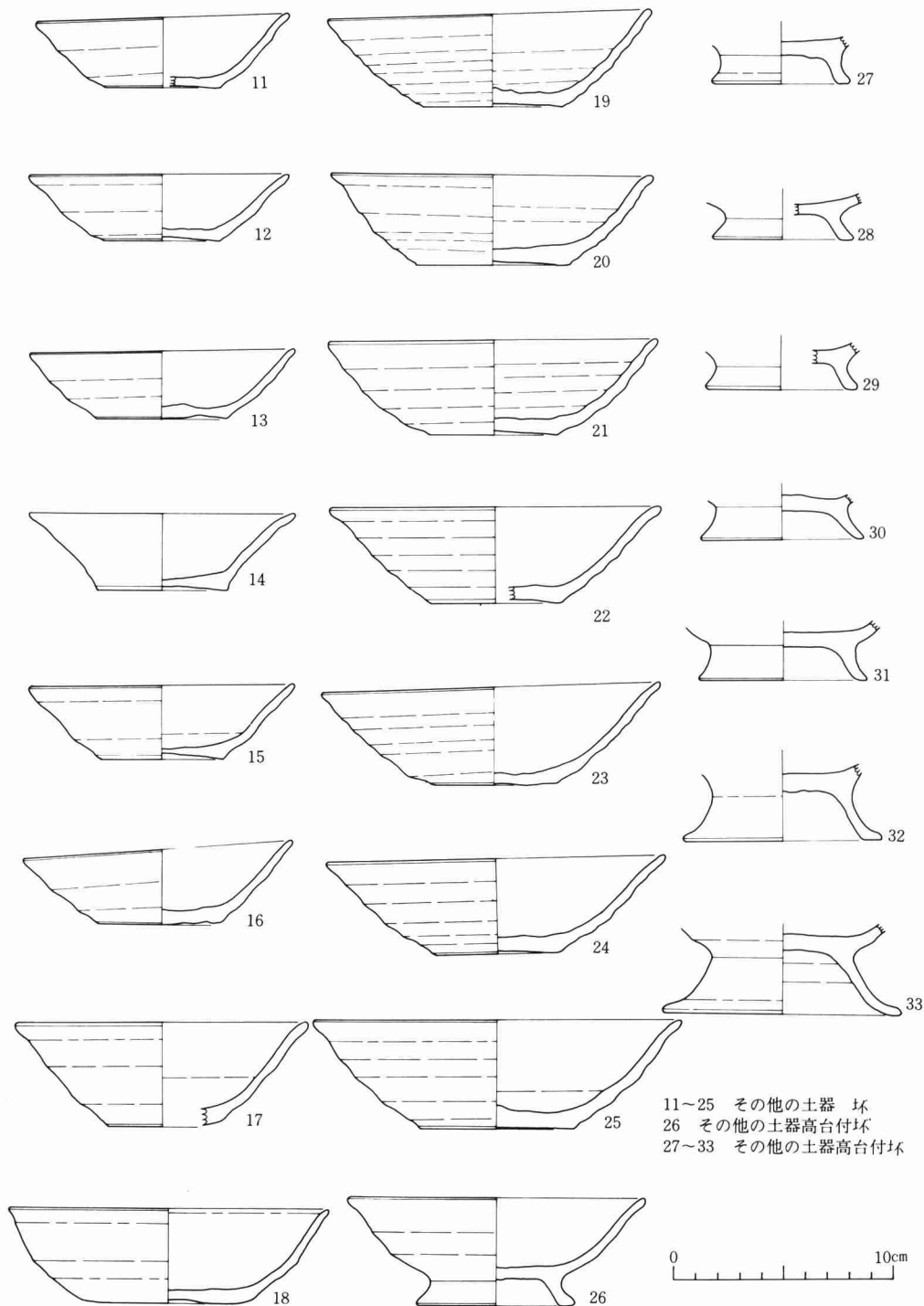


1. 土師器 杯
2 ~ 10 土師器 甕

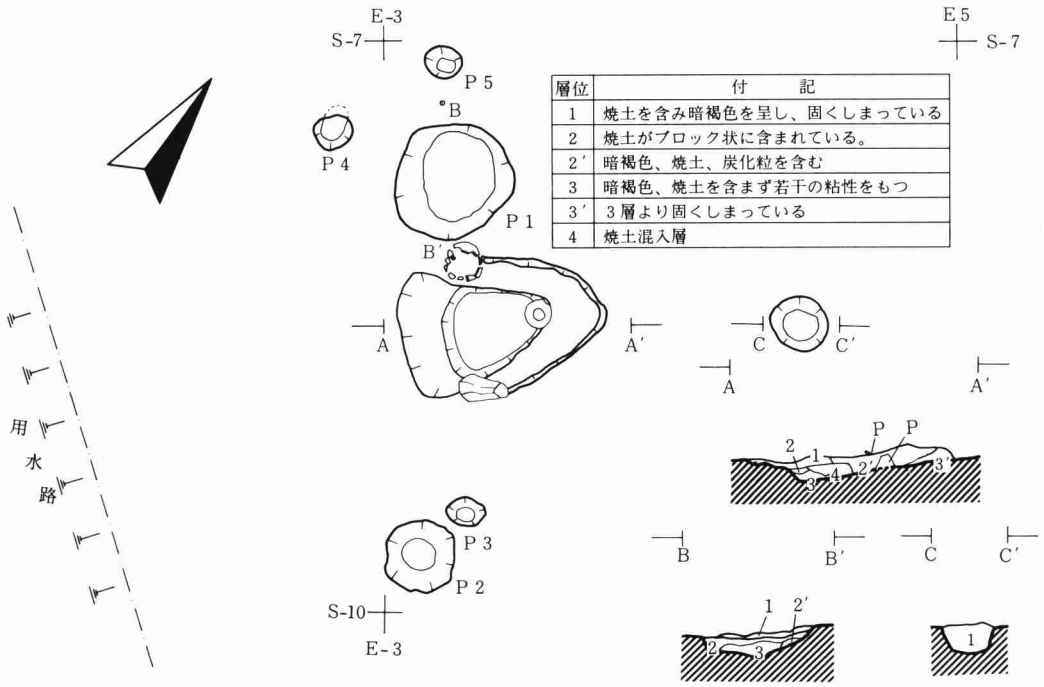
0 10cm

(第 5 図) BC03 住居跡出土土器

— 鶴羽衣遺跡 —

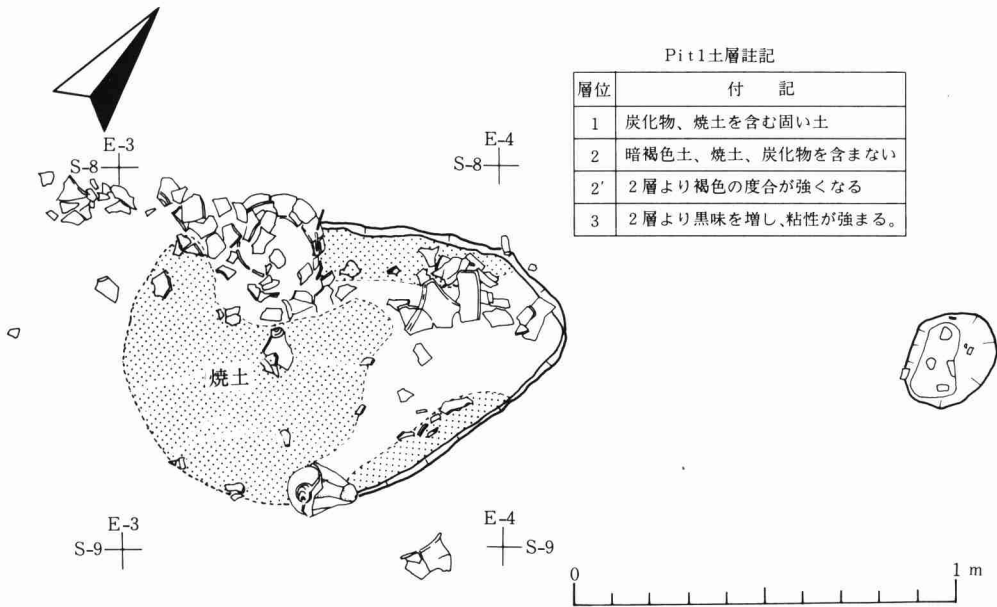


(第6図) BC03住居跡出土土器



(第7図) DC50住居跡平断面図

0 1 m



(第8図) DC50住居跡かまど部土器出土状況図

—鶴羽衣遺跡—

いた。本住居跡は、耕作土下部の第Ⅱ層黄褐色土の下で炭化物及び土器片の出土をみた。かまど跡、煙出し部の検出、及び焼土の散布状況から住居跡と確認するに至った。

〔平面形〕 本住居跡は削平、攪乱を受け壁の確認ができなかった。

〔床〕 削平は床面まで及び床構築方法等についても不明である。

〔土拡〕 ピット1からピット5までを検出したが、柱穴に想定されるものはなかった。ピット1の第1層中には焼土、炭化物等が包含されていたが第2層以下には遺物は検出されなかった。ピット2の埋土中より少量の土器片の出土をみている。

〔かまど〕 焼土、木炭等の散布状態からかまど跡と確認、精査を行った。かまどの袖部分に補強材として左袖に埋甕を、右袖に石を用いていた。火床部は周囲より一段下降し奥に伏せ甕を用い支脚としていた。煙道は全く痕跡をとどめず、かまどの延長線上に煙出し部を検出した。煙出し部も上面は削平され底部付近のみ残存し断面は逆台形を呈している。なお若干の土器片を埋土中に包含していた。かまど燃焼部は土器片の出土が著しく特に左側部分に偏在する傾向をみせている。いずれにせよ、本住居跡は削平、攪乱が著しく原形が損なわれていた。

〔出土遺物〕

土師器

甕 本住居跡出土の甕類は残存部の形態から長胴甕が主体となる一方小形の完形若くはそれに近い甕も数点出土している。したがって、ここでは口縁部の形態を基に次のように分類を試みた。

I類 口縁部が「く」の字状に外反するものであるがその細部の形状の差異からa、b、cの三群に細分した。I a類は口縁端が上方に挽き出され断面形が三角形状を呈するもので外反度がやゝ鈍角となるもの。I b類は口縁端が前者と類似するが外反度が強く直角に近い形ではほぼ水平方向に伸びるものを指す。I c類はI a類のように強く外反せずゆるやかであるが口縁端の形状が上下に挽き出され下方への挽き出しは逆三角形状を呈するものである。

II類 ロクロ成形により口縁部が「く」の字状に外反し、体部と口縁部が屈曲する形態をもつ。

I a類（第9図1、2） いずれも口縁部のみで他を欠損している。成形にロクロを用い、外面の調整はみられない。図1は内面にヘラナデの調整痕がほぼ横方向に施されている。胎土に砂粒を多く含むが焼成は良好である。口縁部から体部上半にかけて煮汁状のカーボンの付着痕がみられる。図2は巻き上げ法によるが成形はロクロを使用し底部は回転糸切り技法を採用している。器面は磨滅が著しく特に外面に剥落の部分がみられる。また胴下半部から外底部にかけてカーボンの付着が認められる。

I b類（第9図3、4） 口縁部が「く」の字状に外反する形態はI a類に似るが、本類は外反度が強く、特に図4ではほぼ水平に近い。図3は胎土中に雲母、石英等を含みやゝ軟質の傾

向を示す。調整痕はほとんどみられず、わずかに外面にロクロ回転による調整がみられる。図4はロクロ成形で胎土に砂粒を認めるが小礫もまた含んでいる。焼成は良好で外面は浅黄橙色、内面は灰白色及び淡橙色を帯びる。調整は内外面にわたり、外面はロクロ使用のヘラナデが口縁部から体部まで施こされているがさらに胴部中央から下方に向けてヘラケズリの再調整がみられる。内面はロクロ回転のヘラナデを主とし胴部上半に限られている。

I c 類（第9図5、6、7） この類は口縁部の外反度がゆるやかで特に口縁端に著しい特色を有するものである。端部は上下方向に強く挽き出され、断面は上下とも三角形状を呈するものである。図5は成形にロクロを用い、焼成は良好、色調は外面が橙色、内面はにぶい褐色である。

調整は内面のみでロクロ回転によるヘラナデが胴部上半に施されている。図6は口縁部径が約27cmと大型の長胴甕の残存部と思われる。調整は外面胴部に縦方向のヘラケズリが施されている。内面はロクロ回転によるヘラナデがみられる。また肩部にロクロ回転による沈線が数条にわたり一周している。図7、成形はロクロ使用で調整は内面にのみとどまり、ロクロ回転によるヘラナデが施されている。器形の大きさに比べ器壁が薄い。特に口縁部付近が極端に薄くなっている。（第10図13）もこの群に包含されるが前者と異なり小形甕である。ロクロ成形により底部は回転糸切りで無調整である。口縁部の径が器高を上まわり最大径を口縁部にもつ胎土に砂粒が多く器内外面ともざらざらしている。焼成は良好で色調は外面は灰白色、内面はにぶい黄橙である。

II 類（第10図17） 成形技法は巻き上げ後ロクロ成形、器高38cmの長胴甕である。体部と口縁部が屈曲し「く」の字状に強く外反するものである。口縁端は上方に挽き出した形となり口縁に一条の凸線が周る。体部に比べ口縁部が短い。調整は外面肩部付近はロクロ回転によるヘラナデ、体部から底部にかけヘラケズリが全面に施される。また肩部に6条の短い叩き目が斜めに走っている。内面はヘラナデがほぼ横方向に並ぶが下半から底部付近は斜方向のヘラナデに変る。器形は底部に歪みをもち、器壁は薄手の作りである。色調は外面はにぶい褐色、内面は灰黄褐色を呈し硬質である。

須恵器

坏（第11図18～21） 図18は全体の5割を欠損している。ロクロ成形で底部切り離しは回転糸切りで無調整、器形は底部からゆるやかに内彎気味に外傾するが体部下半からはほぼ直線的に外傾し口縁部がわずかに外反する。また器高が口径を上回っている。図20も前者に類似する。図19は底部から口縁部まで強く内彎しながら外傾するが口縁部が「く」の字状に外反し前者と器形を異にする。図21は器高が低く浅形である。底部の大半を欠損しているが回転糸切りで無調整である。色調は内外とも灰褐色である。

甕（第11図22、23） 図22は口縁部破片、図23は底部破片である。前者は口縁部が「く」の字状に外反し口縁が上方に挽き出され断面は三角形状を呈している。全体に薄手の作りで特に体部と口縁部の屈折部が極端に薄い。色調は灰白色で胎土は砂っぽく内外面ともざらざらしている。図23は、ロクロ成形で底部は回転糸切りの無調整、内面に横方向のヘラナデ痕を認める。胎土、焼成とも良好で色調は灰黄、灰白色を呈する。器厚はやゝ厚手となっている。（第12図、拓影図2～3）は外面は平行叩き目の調整痕が施され、内面はあて板を直交させ器壁の調整を行っている。

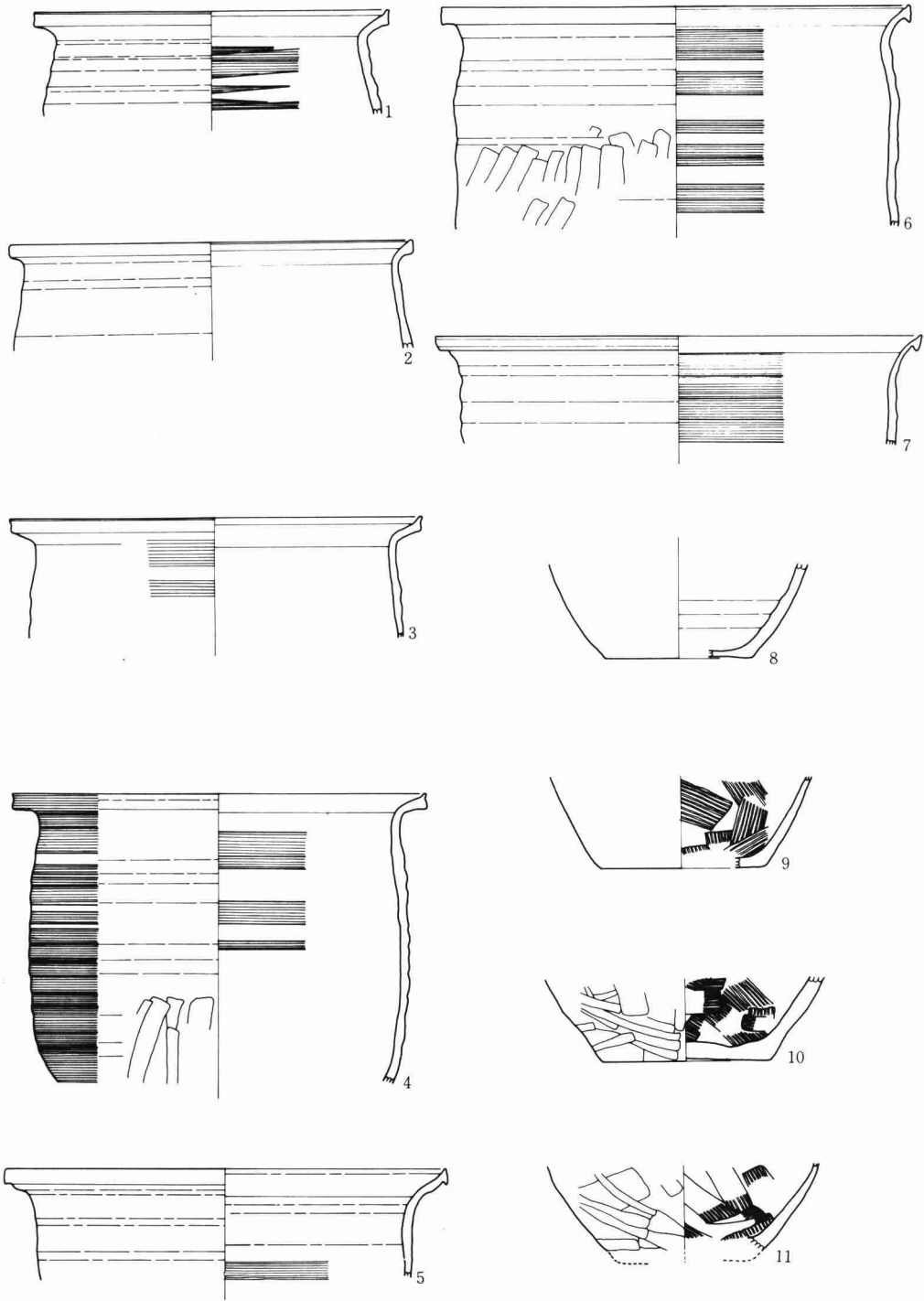
その他の土器

坏（第11図、1、2） 器形は浅く器壁は底部からほぼ直線状に外傾する。成形にロクロを用い、底部は回転糸切りで再調整はみられない。図2もほぼ前者に類似するが口縁部を欠損しているため器形は不明である。なお両者に共通することは器形にゆがみがみられることである。

高台付坏（第11図3） ロクロ成形によるもので坏部を欠損している。脚部は「八」の字状に外方に開脚する。脚部先端は丸味をもって終熄する。脚部高は約2.3 cmとやゝ高い。また脚部内面にわずかにカーボンの付着痕が認められる。

土製品

土鈴（第11図4） 器高4.5 cm、底部径5.3 cm、突起部全長約3 cmで、共伴の土製玉は直径約2 cmである。胎土はその他の土器に酷似する。また成形は手づくねにより色調は白橙色を呈している。

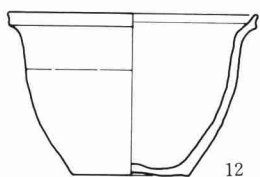


1~11 土師器甕

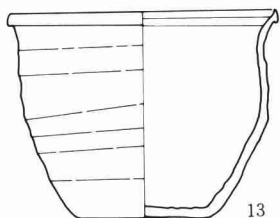
0 10cm

(第9圖) DC50住居跡出土土器

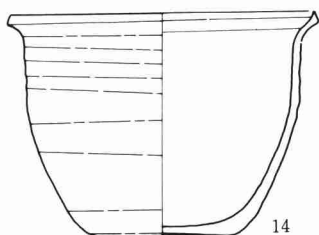
—鶴羽衣遺跡—



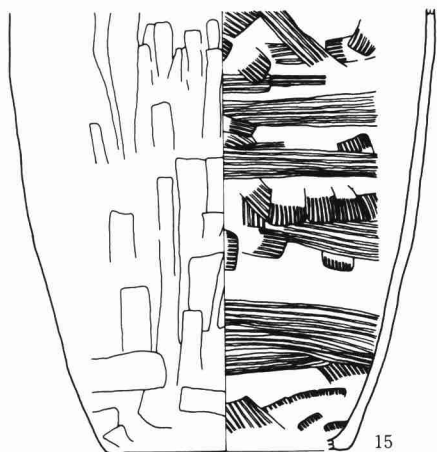
12



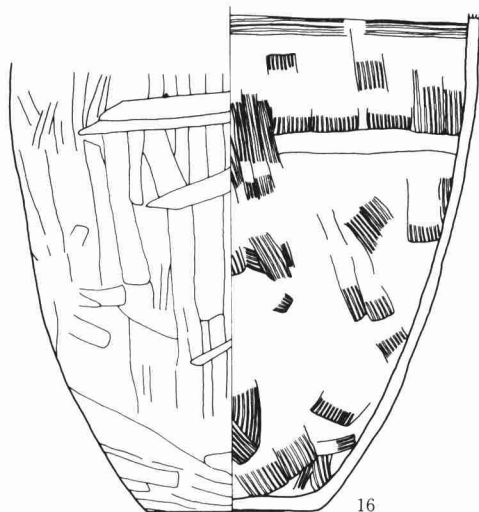
13



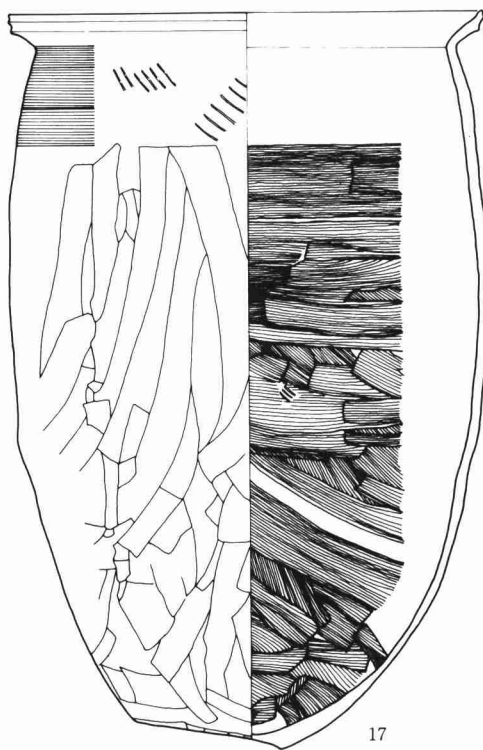
14



15



16

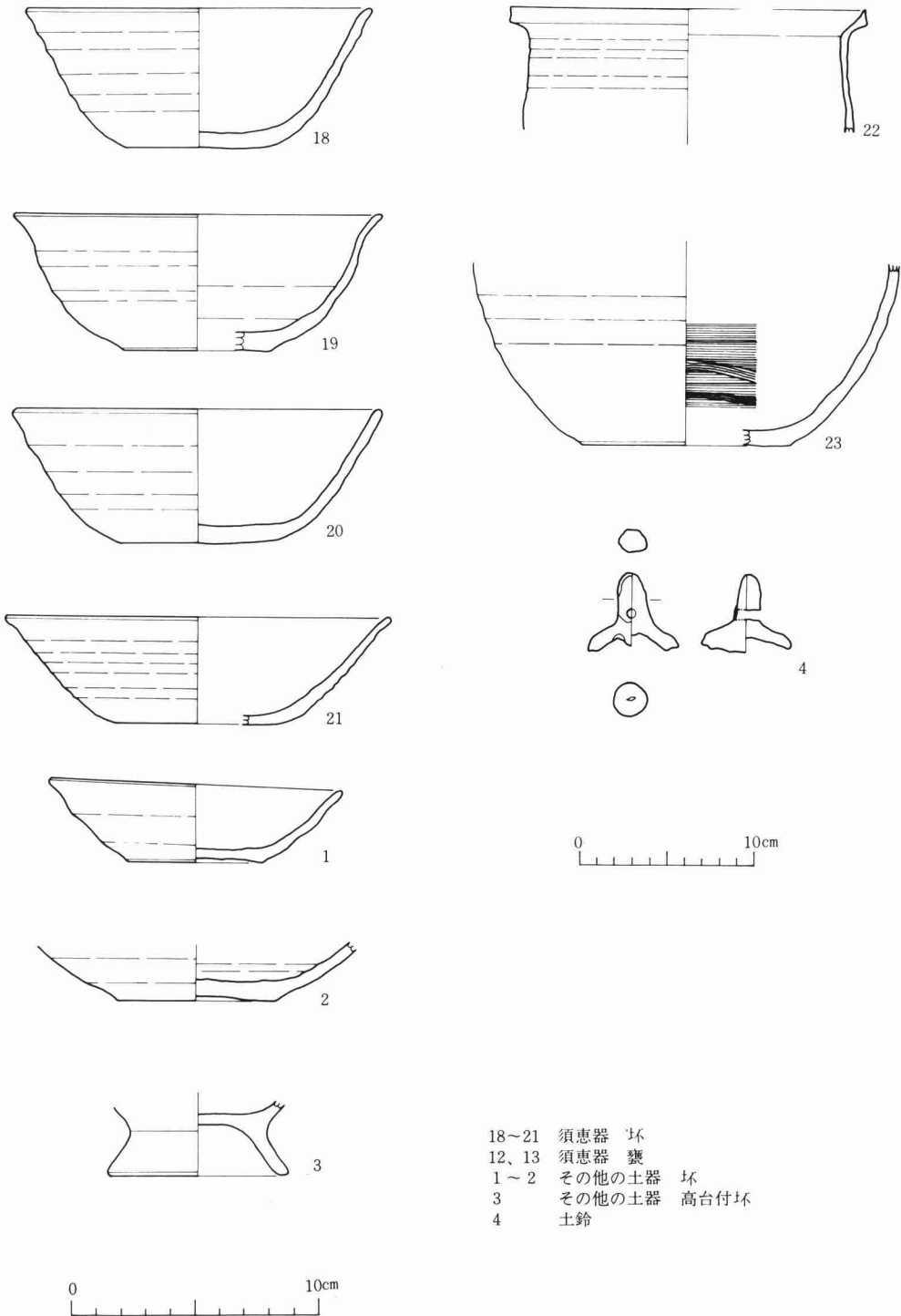


17

12~14土師器小形甕
15~17土師器長胴甕

0 10cm

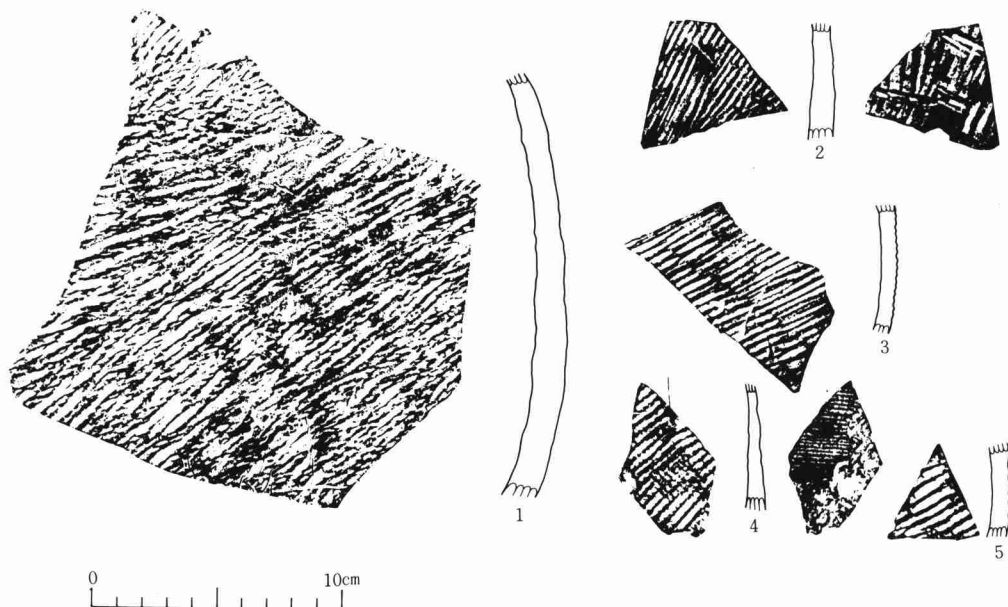
(第10図) DC50住居跡出土土器



- 18~21 須恵器 坏
 12、13 須恵器 甕
 1~2 その他の土器 坏
 3 その他の土器 高台付坏
 4 土鈴

(第II図) DC50住居跡、遺構外出土土器、土製品

—鶴羽衣遺跡—



(第12図) 須恵器破片拓影図

第 1 表 土 器 実 測 一 覧 表

B C 03 住 居 跡					D C 50 住 居 跡				
器 種	No	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	器 種	No	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)
土 師 器 (坏) (甕)	1	18.6	5.9	6.0	土 師 器 (甕)	1	20.6		
	2	17.2				2	23.4		
	3	18.5				3	23.9		
	4	18.6				4	24.0		
	5	18.8				5	25.6		
	6	18.8				6	27.0		
	7	20.0				7	28.0		
	8	20.8				8			8.4
	9	21.6				9			9.4
	10	23.6				10			9.6
その他の土器 (坏)	11	11.4	3.2	5.2	11				
	12	11.7	3.0	5.2	12	13.0		6.0	
	13	12.0	3.1	5.8	13	13.9		6.6	
	14	12.0	3.5	5.8	14	15.9	12.8	7.0	
	15	12.0	3.4	5.4	(長胴甕)	15			12.4
	16	12.2	3.4	5.6	(甕)	16			8.8
	17	13.2	4.7	5.2	17	25.0	38.0	7.8	
	18	14.4	4.3	7.3	須 恵 器 (坏)	18	14.0	6.0	5.5
	19	14.6	4.2	6.4	19	15.0	5.5	6.5	
	20	14.7	4.1	7.0	20	15.0	5.5	6.0	
21	14.9	4.3	5.8	21	15.7	4.3	6.5		
22	15.0	4.4	5.8	(甕)	22	20.2			
23	15.3	4.5	5.5	23			11.8		
24	15.4	4.4	5.6						
25	16.6	5.0	7.0						
(高台付坏)	26	13.4			その他の土器 (器)	1			6.5
27					"	2	11.9	3.2	5.5
28					(高台付)	3			7.4

第 2 表 出土土器破片数一覧表

B C 03 住 居 跡			D C 50 住 居 跡		
土師器	坏	8片	土師器	坏	7片
	甕	165		甕	158
	高台付坏	0		高台付坏	0
須恵器	坏	0	須恵器	坏	6
	甕	3		甕	13
	長頸瓶	0		長頸瓶	0
その他	坏	107	その他	坏	27
	高台付坏	5		高台付坏	0

4. 考察

(1) 遺構

本遺跡の調査にあたり、堅穴住居跡 2 棟を検出した。B C 50 住居跡、D C 50 住居跡の両住居跡ともかまど及び袖の基底部と大小数個のピットを夫々検出した。いずれも削平、攪乱が著しく、住居跡の全体構造を把握することはできなかった。

(2) 出土遺物

遺物の出土状況は、両住居跡とも埋土中及びかまど周辺部にかなりの量で出土した。遺物の種類は土器、土製品で、土器は土師器、須恵器、その他の土器に区分される。土師器は坏、甕を、須恵器は坏、甕、その他の土器では坏、高台付坏等となっている。

土器、(第 1 表土器計測一覧表、第 2 表土器破片出土点数一覧表)

上記第 1 表及び第 2 表をもとに本遺跡の住居跡別傾向をみると、B C 03 住居跡は土師器では甕が圧倒的であり、坏の出土点数が極端に少ない。また本住居跡を特色づけるものは、その他の土器が断然数的に優っていることである。一方 D C 50 住居跡は、土師器の甕が多く、小型甕、長胴型甕等にわたっている。坏は破片で若干出土しているのみである。その他の土器はここでは 3 個体のみで前者と相異なる。

・土師器

坏 両住居跡とも坏の出土点数が破片を含めても微少であり、実測可能のものとして B C 03 住居跡の 1 点のみである。(第 5 図 1) 器高 5.9 cm で深形である。

甕 両住居跡とも出土点数の圧倒的に多いものである。全体的な形態は B C 03 住居跡のものは口縁部が短かく外反度が小さい。やゝ直立気味の傾向を示している。D C 50 住居跡のものは外反度が強く、口縁端が上方または上下方向に挽き出された形のもので占められている。これら

— 鶴羽衣遺跡 —

に酷似するものは、相去 Y D I 630 住居跡出土の小形甕と長胴甕、瀬谷子遺跡^{注2)}3号工房出土の甕等である。

・その他の土器

坏 BC03住居跡出土のものが遺構に伴ったものとしての全てである。器形から類別すると小形坏と中形坏になる。小形坏は口径に比し器高が低く一般に浅形である。中形坏は前者にやゝ類似するが器高が4.1 cm～4.95 cm未満の範囲内にとどまり、やや浅形を呈すると云える。いずれも成形にロクロを用い、胎土は夾雑物を含み器面は粗くざらざらした感じである。器形に歪みをもつものが一般的で底部に瘤状の粘土塊を付けたものもまみられる。また再調整も全く施されず、色調は赤褐色ないしは白橙色を呈するものである。岩手県で本遺跡の土器に類似する遺物を出土する遺跡として、水沢市胆沢城跡^{注3)}、金ヶ崎町西根遺跡第23号住居跡、江刺市瀬谷子遺跡、北上市稲瀬町上台遺跡、江釣子村下谷地遺跡、平泉町無量光院跡、平泉館跡、花巻市矢沢胡四王山遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡^{注4)}、江刺市葛ノ木遺跡^{注5)}、江刺市落合I遺跡^{注6)}等がある。高台付坏はBC03住居跡から出土している。脚部高の高低により二類別されるが形態的には、瀬谷子出土のものに類似している。

特殊遺物、土鈴、玉と共伴し、セットで出土したものであるが土鈴の底部は欠損している。これと同類の遺物は瀬谷子遺跡、谷地遺跡にみられる。

以上から本遺跡の時期を勘案するに凡そ11世紀～12世紀頃に比定されるものと考えられる。

注1) 岩手県「北上山系開発地域土地分類基本調査」1973

注2) 江刺市教育委員会「瀬谷子遺跡、第3次緊急調査報告書」1971

岩手県教育委員会「谷地遺跡」東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報 1974

注3) 水沢市教育委員会「胆沢城跡一発掘調査概報」1974、1975

注4) 岩手県教育委員会「鬼柳西裏遺跡(第2次)東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報 1976

注5) 江刺市教育委員会「四井謙吉氏の調査による」1974

注6) 岩手県教育委員会「落合I遺跡」東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報 1974

参考文献

1 岩手県史(第1巻) 1961

2 水沢市史(第1巻)原始、古代編 1974

3 北上市史(第1巻) 1968

4 考古風土記(第2号) P.28「岩手県のロクロ使用土師器について」高橋信雄 1977

5 岩手史学研究(第61号) P.29「岩手県の古代土器生産について」伊藤博幸 1976

6 宮城県教育委員会「東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書」1974

つる は ぎ だい
鶴 羽 衣 台 遺 跡

遺 跡 記 号 : THD

所 在 地 : 江 刺 市 稻 瀬 字 鶴 羽 衣 台 90-1 他

調 査 期 間 : 昭 和 49 年 4 月 19 日 ~ 5 月 10 日

調 査 対 象 面 積 : 960m²

平 面 測 量 基 準 点

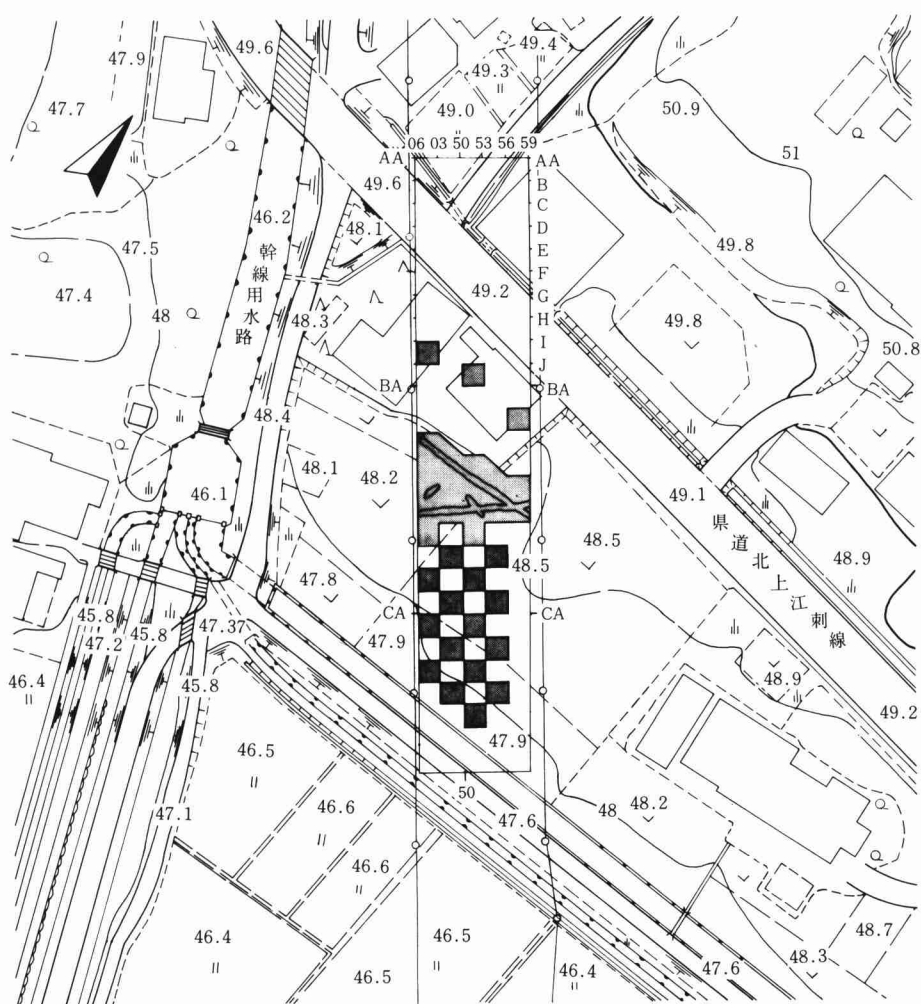
東 京 基 点 : 437.900km (BA50)

基 準 高 : 海 拔 48.40m

1. 遺跡の位置と環境 (第V図P. 51 第VI図P. 53)

鶴羽衣台遺跡は江刺市字鶴羽衣台地内に所在し、市の中心街より直線にして北西約5 kmに位置する。遺跡は江刺市より北上市に町じる県道北上線沿いにあり、遺跡の南側は農業用の江刺幹線用水路により切断され、北側は県道によりそれぞれ破壊されている。

遺跡の地目は宅地と畑となっており、標高は約42 mで、南側水田面との比高は1.8~2 m程である。



(第I図) 鶴羽衣台遺跡グリッド配置図



2. 調査の方法と経過（第1図）

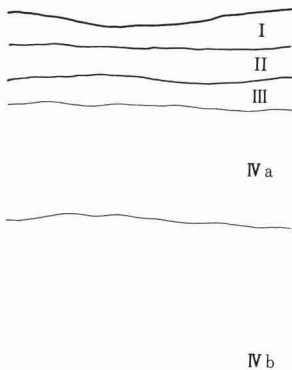
本遺跡は東北新幹線建設事業の施行にともなって昭和47年に実施した遺跡の分布調査の結果発見された遺跡で、若干のフレーク、土師器破片等が散布していた。

調査は路線敷内の遺跡全体を対象に、新幹線の中心杭東京起点437,900 kmと940 mの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に設定し、437,900 kmの地点を本遺跡の基準点(BA50)とした。このBA50を基点に1辺3 mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去して遺構の検出につとめた。発掘作業は遺跡の南側はすでに高架の橋脚も立ち、工事がかなり進行している中を鶴羽衣遺跡の調査と平行して実施した。

3. 調査の結果

(1) 遺跡の基本層位（第2図）

BG 06 グリッド深掘りの東壁面のセクションにより、遺跡の標準的層位を観察すると次のようになる。



第Ⅰ層は耕作土。第Ⅱ層（黒褐色土）しまりの良い粘土質シルト。第Ⅲ層（褐色土）シルトで地山。第Ⅳ層（黄褐色土）シルト質粘土で、b層はやや粘性に富む。第Ⅴ層（明黄褐色土）細砂を含み水分がにじむ。第Ⅵ層は砂礫層となり、表土下約3 mを測る。

遺構の検出はこの第Ⅲ層の地山上面である。

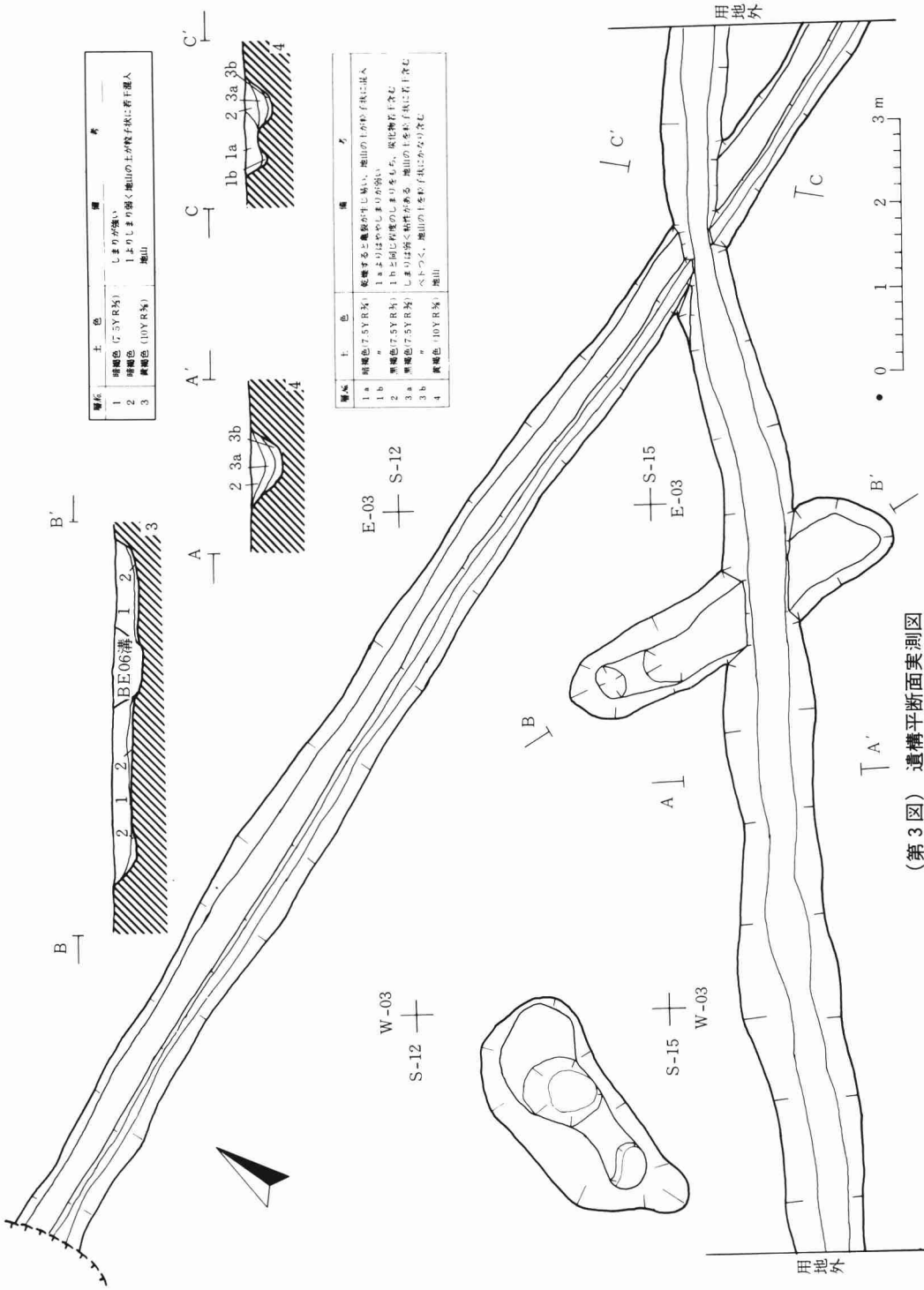
(2) 発見遺構と出土遺物

調査の結果、発見された遺構は互に交叉する溝2本と土壇2基である。

BE 06 溝（第3図） BF56グリッドよりBF06にかけてほぼ東西に走り、途中BF06溝により切断され、BC50土壇を切って用地外まで延びる溝である。

検出された溝の全長は15 m程で、上幅0.8～1 m、下幅30～50 cmで検出面からの深さは30～40 cmである。

(第2図) 土層図(BG06東壁)



(第3図) 遺構断面実測図

— 鶴羽衣台遺跡 —

溝の壁は緩やかな傾斜をもち、底面は多少の凹凸がみられるものの全体としての傾斜は殆ど認められない。

〔出土遺物〕（第4図、第1表） 若干の遺物が全体的に散在したかたちで出土した。すべて埋土1層であり、BC06溝との重複部分には1片の出土もみない。

縄文時代の遺物としては土器片が10数点、石器1、コア、フレイク等10数点出土した。土器はすべて細片で磨滅しているが晩期と考えられる。7は打製石器である。片面に僅かな自然面を残し、荒い剥離によって形状を整えている。着柄部は特に意図して作り出されておらず、刃部は二次加工により分厚く調整されているが、使用による摩耗の痕はみられない。

平安時代の遺物としては、土師器片が11点、須恵器片が4点出土しており、いずれも細片である。土師器の坏はロクロ使用、黒色処理を行っている。カメは小片のため観測不可能である。須恵器は壺の破片が1点、その他は坏の細片である。

BC06溝（第3図） BC06グリッドよりBF56にかけ、ほぼ北西方向に走り、途中BF06溝を切って用地外まで延びている。BC06グリッドの北西部分は電柱埋設時の穴により一部破壊を受けている。

検出された溝の全長は約18m、上幅70～80cm、検出面からの深さは約30cmを測る。BF06溝と比べて若干幅が狭く、深さも浅い。溝の南壁はかなりきつい傾斜をもち、北側には途中約15cm幅の段をもつ。この段までの深さは15cm、溝の下幅は5～8cmと非常に狭い。溝の底面の傾斜は殆どなく、壁の凹凸も認められず全体として直線的である。

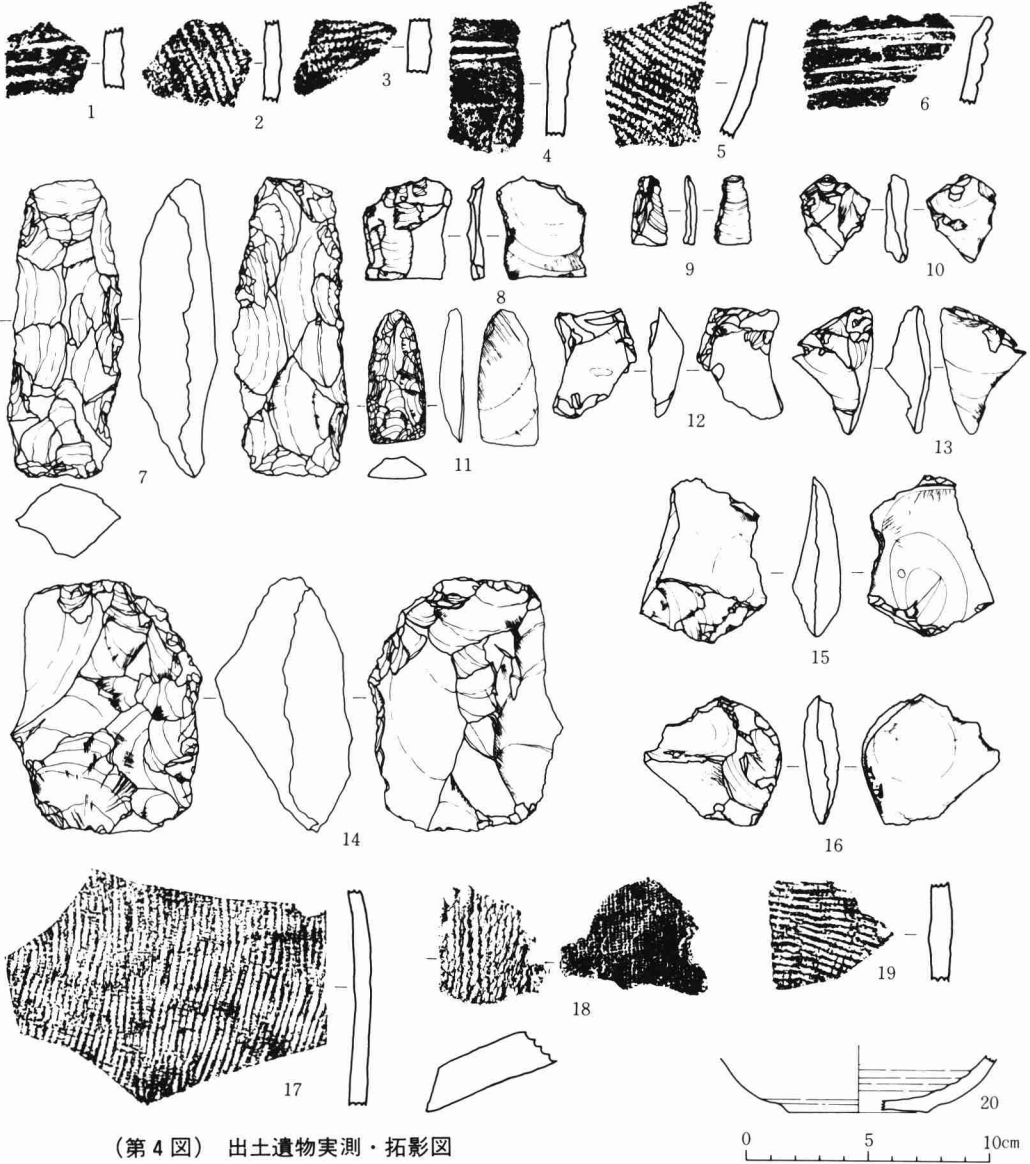
〔出土遺物〕（第4図、第1表） 瓦1点、古銭1枚いずれも埋土1層上部より出土している。18は平瓦の細片。凸面に縄目叩き、凹面には布目痕がみられる。古銭は宣徳通宝（明銭）でかなり腐食がすすみ殆ど原型をとどめない。

BE50土壌（第3図） 長軸約4.3m、短軸約0.9m、検出面よりの深さは20～30cmを測る不整形楕円形である。長軸方向N-67°7'-W。壁はゆるやかな傾斜をもって掘りこまれ、底面はほぼ平坦であるが、北西の隅に若干の落ちこみをもつ。なお、本土壌はBF06溝によって切られている。

〔出土遺物〕（第4図、第1表） 縄文土器片が6点出土したが、かなり磨滅している。6は深鉢型の口縁部で、口縁は小波状をなし、口頸部に沈線が横走する。晩期大洞C₂期の破片と考えられる。

BE06土壌（第3図） 長軸約3.1m、短軸約1.3m、検出面よりの深さはおよそ30～40cmで南側にやや張り出しをもつ不整形の楕円を呈する。長軸方向N-13°-E、壁は南側と西側はややゆるい傾斜で掘りこまれるが、北と東はややきつい。底面はやや凹凸があり、中央部と南側が落ちこんでいる。

—鶴羽衣遺跡—



(第4図) 出土遺物実測・拓影図

第1表 石器・石片計測表

図版番号	出土地	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材
7	BE06溝	埋土	124	45	33	158.9	石質凝灰岩
8	BE06土壌	"	42	34	5	7.2	珪質頁岩
9	BD06グリッド	表土	29	15	4	1.7	"
10	BE06溝	"	34	28	9	7.0	硬質頁岩
11	BE06土壌	"	55	25	10	13.6	"
12	BE06溝	"	43	29	14	14.7	"
13	BE06溝	"	49	33	19	15.0	石質凝灰岩
14	BE06溝	"	104	78	54	130.5	"
15	BF56グリッド	"	68	49	20	48.9	"
16	BE06土壌	埋土	52	56	19	30.4	"

〔出土遺物〕（第4図、第1表） 縄文土器片2、弥生土器片1、石器1、剥片3点がそれぞれ出土した。土器片はいずれも細片で磨滅している。11はヘラ状の形を呈した石器で、裏面に主要剥離面を残し、表面のみに加工を施している。刃部は直状で比較的厚く作られており、搔器の可能性が考えられる。8は縦長の剥片に若干の加工が施されたものだが欠損品であり、石器として使用されたか否かは不明である。

（3） グリッド出土遺物（第4図、第1表）

表土から若干の土器片、石器、それにフレーク等が出土した。

土器 すべて小破片である。平安時代の須恵器の壺（17、19）、坏（20）、土師器甕、坏の破片が出土。17、19は外面に平行叩きがなされた壺の体部片、20は須恵器の坏底部で底部回転糸切り無調整である。

石器 9は小型のヘラ状石器と考えられる。上部に小さなツマミを作り出そうとする意図の加工が行なわれている。未完製品である。その他フレーク12点出土した。

4. ま と め

今回の発掘調査では溝2本、土壌2基の検出をみた。遺構の新旧についてはその重複関係より明確であるが、その性格、時期等については資料が乏しく不明である。

BE 50 土壌はBE 06 溝に切断され、BE 06 溝はBC 06 溝によって切られている。このことからBE 50 土壌が最も古く、BE 06 溝、BC 06 溝の順になる。BE 06 土壌の重複関係はないが、埋土や遺物の出土状況よりBE 50 土壌と同時期と考えたい。BE 06 溝と二つの土壌は掘り込み状態、埋土堆積状況、それに遺物の出土状況から古い時期の可能性は強い。しかしBC 06 溝は直線的な走り方、単層に近い埋土状況、瓦片と古銭（明銭）の二点の遺物が検出面に近い上部から出土し、それ以外の遺物が皆無である事を考えるとかなり新しい時期と考えられる。いずれこれ等の遺物は流れ込みであり、遺構の性格、時期決定の資料とはなり得ない。

瀬谷子遺跡

遺跡記号：SYG

所在地：江刺市稲瀬字瀬谷子21-1他

調査期間：昭和49年5月8日～6月19日

調査対象面積：2400㎡

平面測量基準点

東京基点：438.080km (E A 50)

基準高：海拔49.40m

1. 遺跡の位置と環境（第V図P.51 第VI図P.53）

瀬谷子遺跡は江刺市稲瀬字瀬谷子地内に所在し、市の中心街より直線にして北西約5.2 kmに位置する。遺跡は江刺市より北上市に通じる県道北上線沿いにあり、瀬谷子古窯群^{注1)}へ通じる道路の登口にあたる。遺跡と隣接して西側を江刺幹線用水路と県道がほぼ南北に並行して走っている。

遺跡の地目は北側が若干畑であるが、殆どは宅地と屋敷林である。遺跡の北西は県道ををさんで五十瀬神社前遺跡へと続いている。遺跡の標高は48.7～49 m程とほぼ平坦である。県道の西側は水田となっており、遺跡との比高はおよそ2 mである。

2. 調査の方法と経過（第1図）

本遺跡は東北新幹線建設事業の施行にともなって昭和47年に実施した路線敷内の遺跡分布調査の結果発見されたものである。

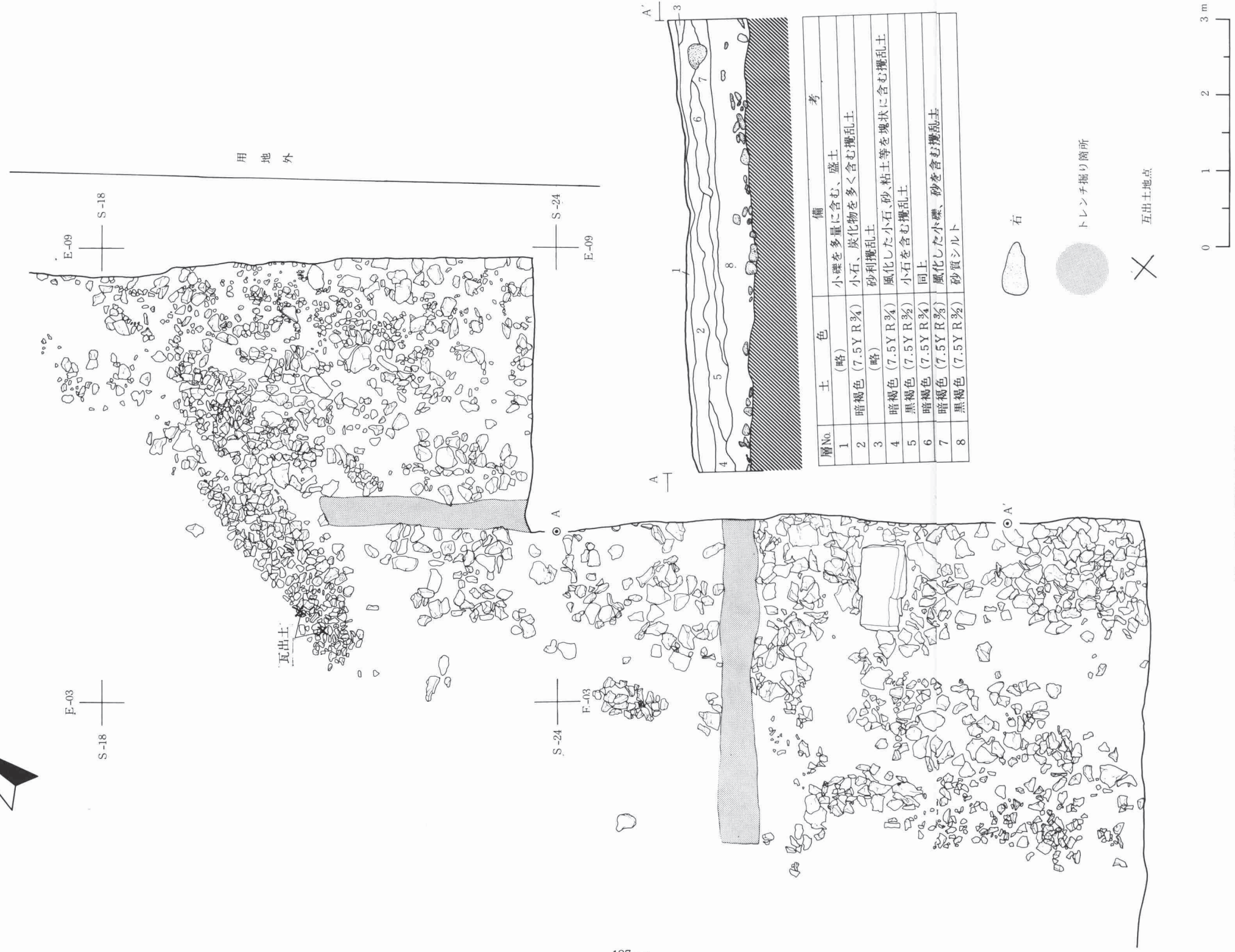
調査は路線敷内の遺跡全体を対象にして、屋敷林の伐採等の雑物除去及びグリッド設定より着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭東京起点438.60 kmと80 mの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、438.80 kmの地点を本遺跡の基準点（EA50）とした。このEA50を基点にして1辺3 mのグリッドをくみ市松状に表土を除去して遺構の検出につとめた。

発掘作業は比較的条件のよい北側のA、Bブロック（畑地の部分）より実施した。調査区の南側のD、Eブロックは宅地跡とその付帯物等で攪乱や礫をとまなう盛土で現状破壊が著しく特にEブロックは馬小屋跡のため汚水の浸透や悪臭で困難をきわめた。

3. 調査の結果

（1）遺跡の基本層位

調査区の大半が攪乱を受けているので比較的移動の少ない地点に2箇所の深掘りを設定した。そのうちDD03の深掘りの東壁のセクションにより層位をみると、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層（黒褐色土）小礫を若干含んだ粘土質シルト、第Ⅲ層（黄褐色土）シルトで地山、第Ⅳ層（黄褐色土）



(第2図) 集石遺構実測図

シルト質粘土となっている。

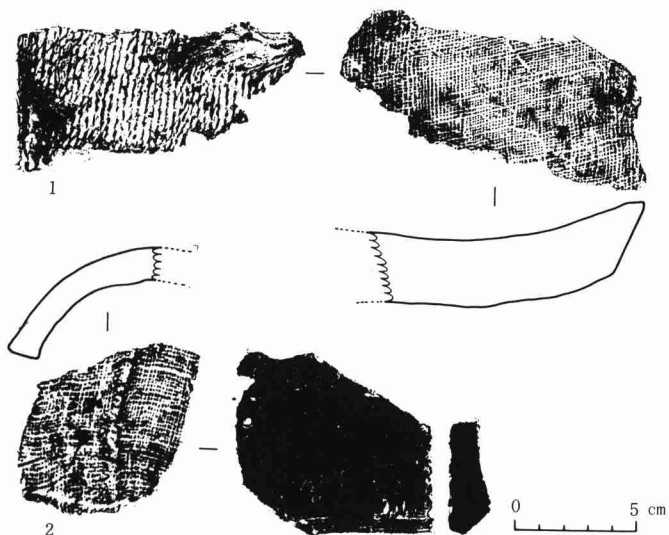
(2) 遺構と出土遺物

集石遺構 (第2図)

調査区の南端Eブロックに検出された。集石の検出された場所は一部馬小屋跡であり、盛土や攪乱の最も激しい部分である。第2図のセクションで示すように現地表面より30~40cm程までは礫を含んだ盛土及び攪乱土で、集石は第II層の黒褐色土と黄褐色土(地山)の接する部分に検出された。この集石はEF56よりFA50グリッドにかけて検出されたが、南側は瀬谷子古窯群への市道により調査不能、又東側は路線敷外更には馬小屋からの汚水の浸透により調査を断念した。

集石を構成する石は長さ30cm前後のものから10cm内外までの大きさまで、殆どが角ばった山石であり、川原石はまれであった。石の重なり状態については第2図のセクションにみられる如く、2個程度迄で石を除去すると黄褐色土の地山が露出する。なお、100×50×20cm程の直方体の石がこの集石に乗ったかたちで検出された。

〔出土遺物〕(第3図) 2片の瓦片がE I 53グリッドの集石の間より出土した。1は平瓦片で凸面は縄目叩き、凹面には布目痕がみられた。2は玉縁付丸瓦の丸瓦部破片、凸面は縄目叩きのあとロクロ調整しており、凹面には布目痕がある。



(第3図) 集石遺構出土瓦拓影図

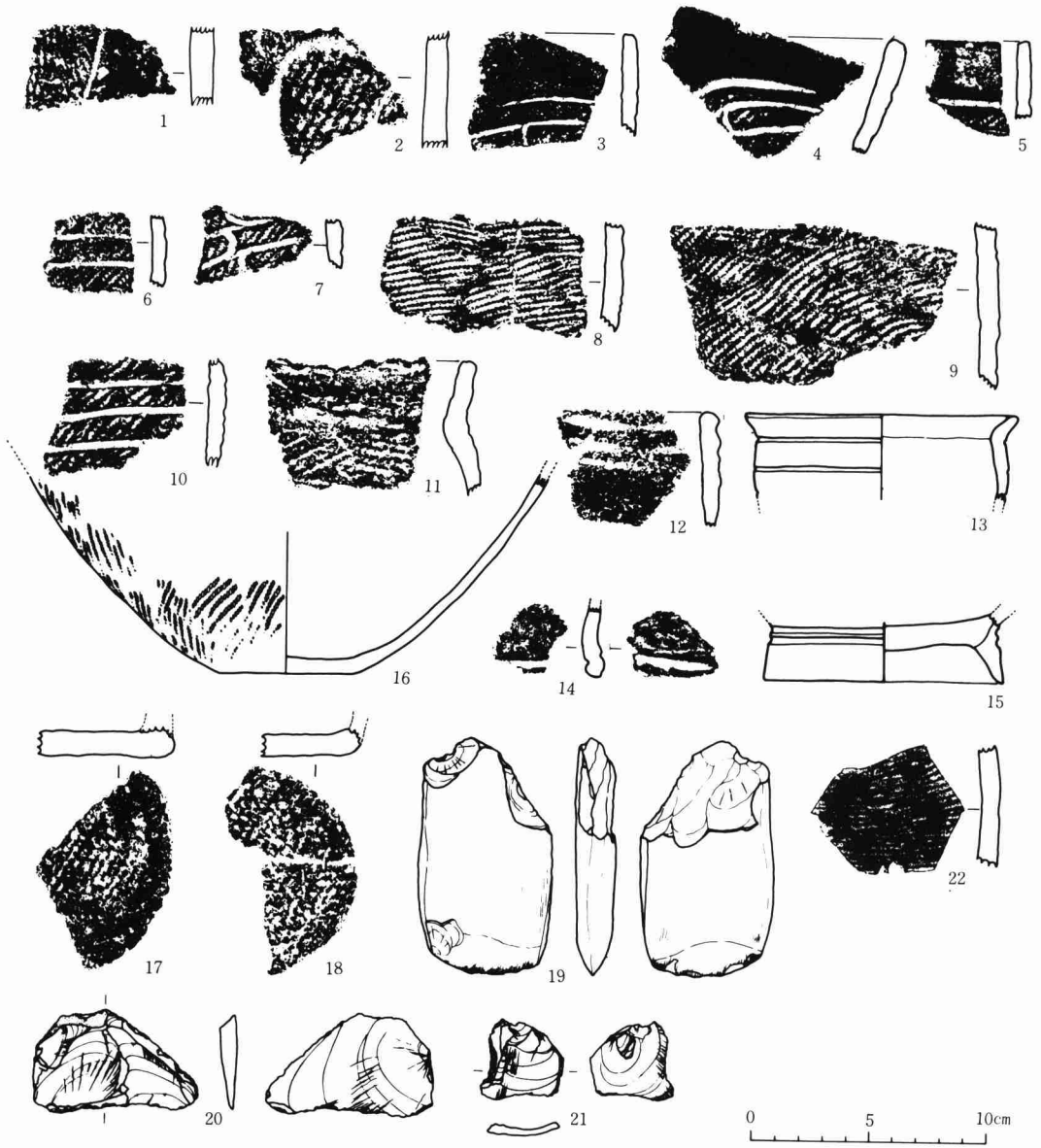
(3) グリッド出土遺物

(第4図)

Bブロックの畑地より300点程の土器片と数点の石器の出土をみている。すべて第I層の表土である。土器の殆どは縄文土器の破片で、土師器は約80片、須恵器は4片を数える。以下第4図に従ってその概略を述べる。

1、2は深鉢体部片で、浅い沈線による文様が見られる。縄文時代中期末葉(大木10式)の土器片と思われる。

—瀬谷子遺跡—



(第4図) グリッド出土遺物実測・拓影図

第1表 石器、石片計測表

図版番号	出土地	層位	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	石材	備考
19	BF 56	表土	—	—	141.2	粘板岩	摩製石斧基部欠損
20	BH 06	表土	44	70	23.5	硬質頁岩	
21	BG 03	II 層	34	33	5.5	〃	

3～9は後期中葉の土器片である。3～5は口縁部で、3、4は波状、5は平縁の口縁をなす。6、7は体部片である。これ等の土器は口縁部の無文帯の下方に横走する数条の沈線があり、この沈線間を縦の孤状沈線が連結するグループで後期中葉の加曾利B I式に併行する土器群である。8、9はそれに伴う粗製土器の体部片と思われる。

10～18は晩期の土器である。10は頸部片で $R < \frac{1}{L}$ の縄文帯に横走する沈線が見られる。11は口唇を指頭で刻みこみ小波状の口縁を作り出している。口縁部は無文帯となり頸部で「く」の字状に屈曲し、体部はやや丸く脹らむ形態の深鉢形土器と思われる。16は壺形土器の体部下半で $L < \frac{R}{R}$ の密な縄文が施されている。10、11、16は晩期大洞C₂式に属すると思われる。12、13は深鉢形土器の口縁部で共に無文の器面に沈線が横走する。13の器形は胴部がやや丸く脹らみ頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾している。頸部から胴部にかけて沈線がみられる。14、15は台付土器の台部で、14は内外両面に一条の沈線が、15は台取付部の外面に二条の沈線が施されている。17、18は晩期の土器の底部と考えられた。ともに網代底である。

19は磨製石斧の刃部である。上下に走る調整擦痕が観察され、刃には刃こぼれの痕跡がある。20は剥片の二辺に僅かに2次加工を施し、薄い刃部を作り出した石器でスクレーパー（削器）と考えられる。21はフレイクであるが一辺に2次加工が見られるところからあるいはスクレーパー的用途で用いたとも考えられる。

22は須恵器の壺の破片である。外面に平行叩き痕が見られる。

（4） 遺跡周辺の採集遺物（第5図）

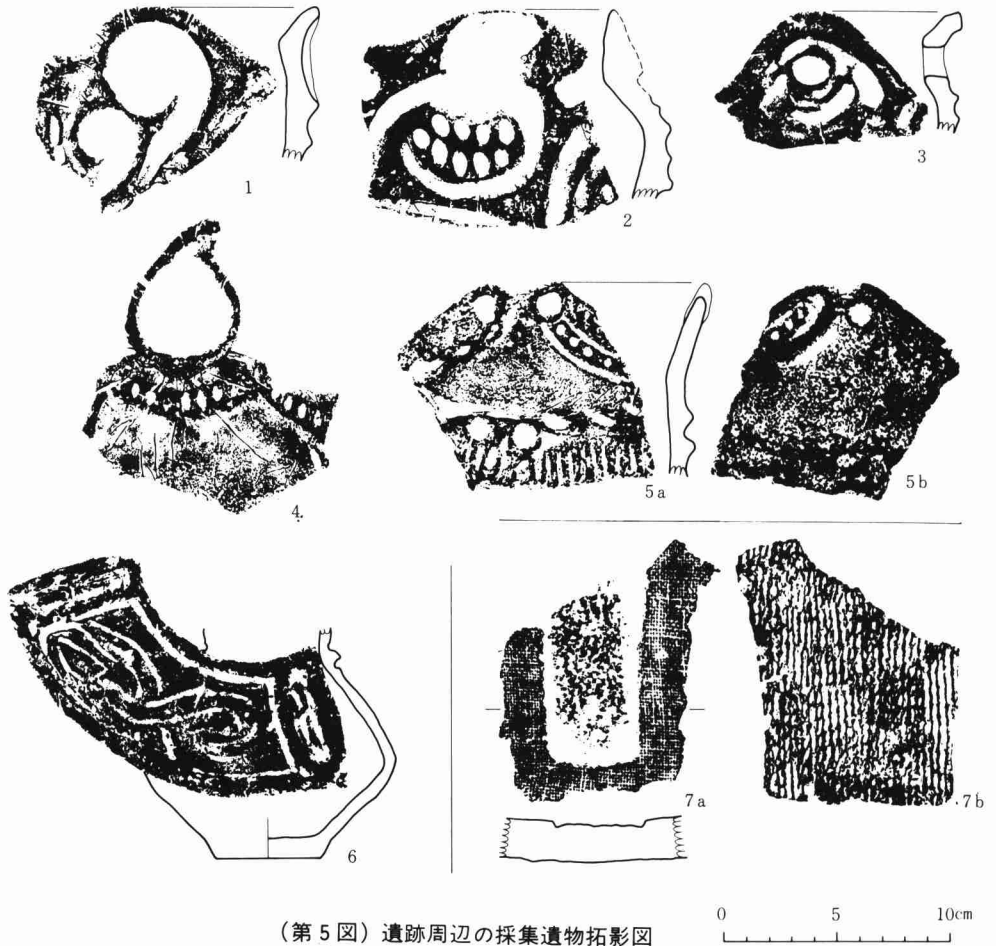
本遺跡周辺の丘陵地や微高地には遺跡も多く、広く遺物の散布をみるが、本項では周辺で採集された遺物を2、3紹介する。

縄文式土器（第5図1～6）

瀬谷子遺跡のすぐ背後には丘陵地の先端がせまっており、この丘陵地上には広く縄文式土器や多数の石器が散布している。1は中期大木9式土器、2は大木10式土器、3～6は後期初頭に位置づけられる土器群と思われ、中期～後期の集落の散在が予想される。低地の微高地上では中期末葉に形成された五十瀬神社前遺跡が調査されており、縄文時代生活基盤を考える上では興味深い資料である。^{注2)}

瓦（第5図7）

さらに旧丘陵地には平安時代の古窯跡群が存在する。古窯群には多くの須恵器窯に混って法印山11～13号、鶴羽衣台1～3号の瓦窯跡が発見されており^{注3)}、胆沢城やその関連遺跡への瓦供給地として知られている。同丘陵地や周辺の低地では広く須恵器や瓦の細片などが散布しているが、7は附近（蔦ノ木公民館）で採集された瓦片で、瀬谷子窯産と思われるものである。



(第5図) 遺跡周辺の採集遺物拓影図

凸面には縄目の叩き痕が、凹面には布目痕が見られる。凹面の一部は短辺4 cm、長辺は残存部で8 cmの隅丸長方形に浅く掘り窪められている。窪みの素面には細かい凹凸がみられ、ノミ状の工具で打ちかいた痕跡と思われる。墨痕は見られないが瓦の破片を硯に転用した例と考えられる。瓦転用の硯は瀬谷子瓦窯跡—胆沢城ではこれまで発見例がない。

4. まとめ

今回の調査で検出された集石遺構は東側の路線敷外に延びており、その全容を明らかにできなかった。

集石は若干の川原石を除いてはすべて稲瀬安山岩が使われていた。これらの集石は地山直上或は黒褐色土の下層にあり、石を除去すると地山が露出し、集石の状態も大きい石の間に小さ

い石が入っていると云う事から人為的なものと考えたい。特に瓦片が出土したE I 53 グリッドの集石は石の大きさも揃っており整然としている。しかしその性格については不明である。年代についても布目瓦2片だけでは判別資料とはなり得ない。

一方Bブロックの畑地より縄文土器片を中心に300点程の土器片が発見されたが、遺構は検出されなかった。しかし本調査区より県道をはさんで北西200mの五十瀬神社前遺跡からは住居跡等が検出されており、又東側の丘陵上からは土器片の散布も見られる事から路線敷外の東側緩斜面や丘陵上にはこれ等に関連する遺構の存在が考えられる。

注1) 北上川東岸の丘陵地帯に分布する窯跡群、窯は平安時代～中期にかけて胆沢城官営工房として築営され、瓦、須恵器、すずり等がつくられた。発掘調査は1955年以来数次にわたって実施され一部概報も出版されている。

注2) 伊藤藤男氏所有。丘陵地の先端にある五十瀬神社の周辺より採集されたものである。

注3) 大川清 「江刺市稲瀬藁ノ木遺跡第1次調査概報(抄)」北上市史第1巻 北上市、昭48

” 窯業史研究所「瀬谷子窯跡群緊急調査概報」(昭44)

いそせじんじやまえ
五十瀬神社前遺跡

遺跡記号：IS

所在地：江刺市稲瀬字中島122他

調査期間：昭和49年6月4日～7月30日

調査対象面積：1600㎡

平面測量基準点

東京基点：438.300km (CA50)

基準高：海拔48.00m

1. 遺跡の位置と立地（第V図P.51、第VI図P.53）

五十瀬神社前遺跡は江刺市稲瀬字中島地内に所在し、市の中心街より直線にして北西5.5km、また北上市より南7.5kmに位置し、県道北上線沿いにある。

北上市で和賀川を合流した北上川は、当遺跡の北西0.2kmの地点で東より流れ出る田屋川を合流して更に南流する。遺跡付近では丘陵や台地が西に張り出し、北上川にせまっている。これ等の丘陵や台地は江刺丘陵、稲瀬台地と呼ばれている。土地分類図によれば、この稲瀬台地は明瞭な境界は認められないが、地形的には低、中、高の三面の段丘に分区されている。

このうち低位の段丘の西辺に五十瀬神社があり、ここから西側は急斜面となり北上川低地に接続する。そしてこの低地との接続部には微高地が形成され、遺跡はこの微高地上に立地する。

この微高地は河川堆積物と崖錐性堆積物によって形成されており、基底には稲瀬台地の基盤を構成する稲瀬安山岩が拡がり、遺跡付近の崖では一部その露出をみることができる。

遺跡の地目はそのほとんどが畑地であるが、一部は宅地と水田となっている。東側は県道及び江刺幹線用水路により破壊され、また北側の一部は水田化の際にかなりの削平を受けている。

遺跡付近の地形は僅かに西に傾斜をもつものの標高およそ48mとほぼ平坦である。遺跡の西側は水田となっており、北上川へと続く。水田面との比高は約2mである。

2. 調査の方法と基本層位（第1図、第2図）

本遺跡は東北新幹線建設事業の施行にともない、昭和47年に実施された路線敷内の遺跡分布調査の結果発見されたものであり、若干の土師器、須恵器、それに縄文土器の小破片の採集をみている。

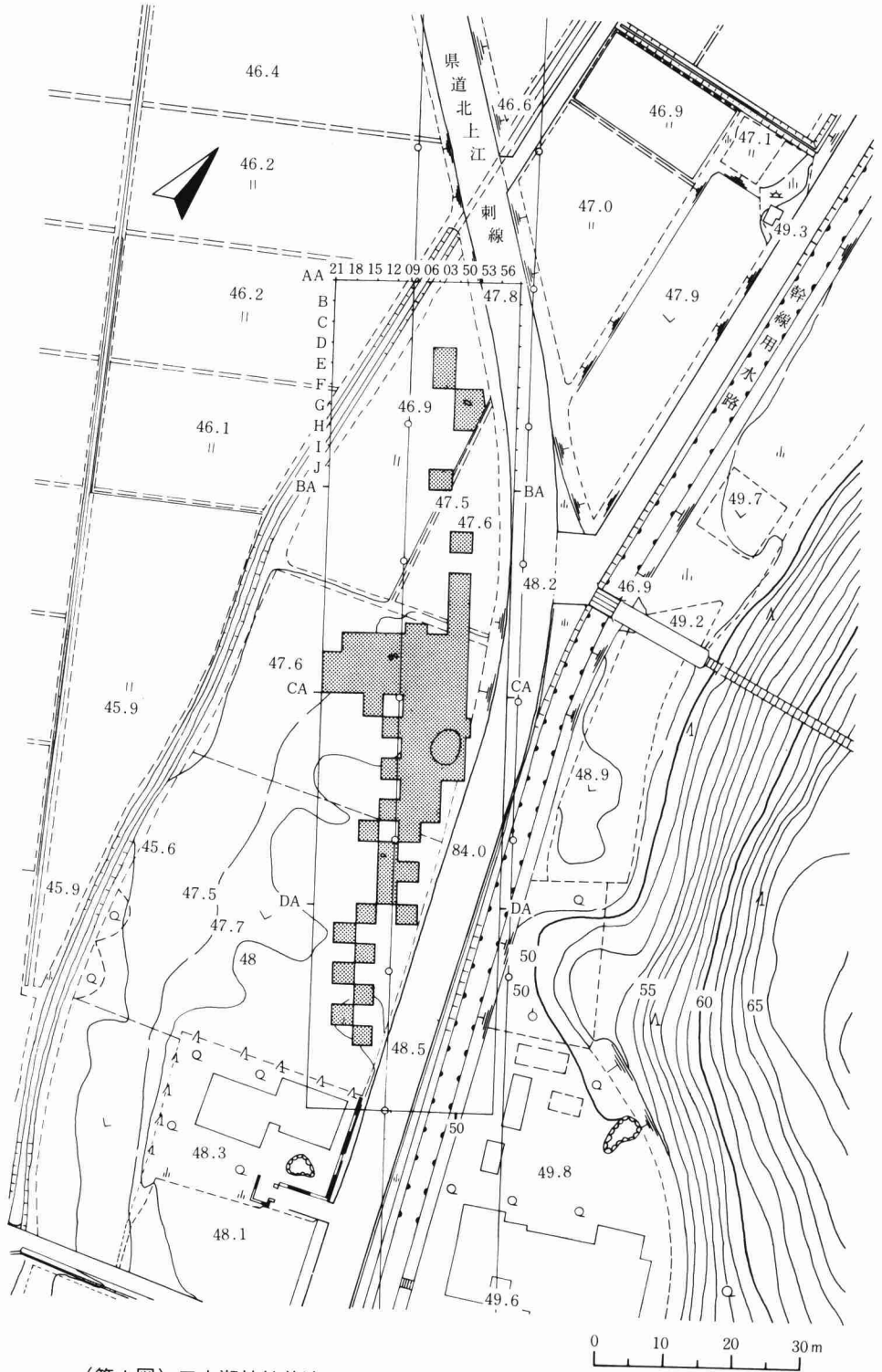
調査は路線敷内の遺跡全体を対象に新幹線の中心杭東京起点438.280kmと300mの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に設定し、438.300kmの地点を基準（CA50）にして、1辺3mのグリッドをくみ、市松状に表土を除去して遺構の検出につとめた。

なお新幹線建設にともない県道が西側に付替になるため、路線敷以外の西側も調査対象とした。

当遺跡の基本層位については、CA50の西壁のセクションによって記述する。

第I層（黒褐色土） 厚さ20cm内外を測る耕作土。ホップ栽培やそれにとまう付帯施設等で60～70cmと深く攪乱を受けている部分もある。

—五十瀬神社前遺跡—



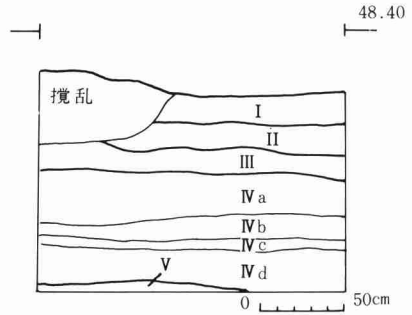
(第1図) 五十瀬神社前遺跡グリッド配置図

第Ⅱ層（暗褐色土） 粘土質シルト。当遺跡における遺物包含層であり、小粒の炭化物、焼土も含む。

第Ⅲ層（明褐色土） シルト（地山）。

第Ⅳ層（黄褐色土） a、bの2層に大別される。a層は粒子の荒い砂を含み、b層に含まれる砂は細砂で量も少ない。

第Ⅴ層は砂層であり、地表下約1.2 mを測る。

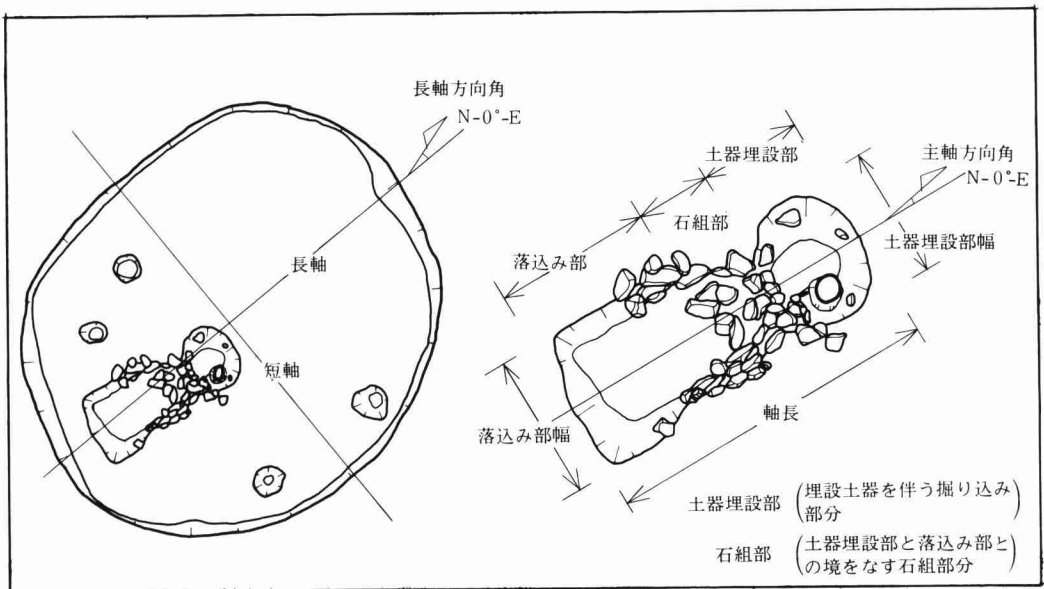


（第2図）土層図

3. 発見された遺構と出土遺物

調査の結果、住居跡1棟、炉跡3基、ピット1個が発見された。このうち炉跡としたものは周囲が後世の開田事業や水害のため床面まで削平された箇所が多く、住居跡プランが確認できなかったものである。

発見遺構とその出土遺物を本項で取り扱い、次項で遺物についてのまとめを行なう。遺構の名称と計測方法は下図の様に行った。



（第3図）遺構の計測基準と各部名称

A F 50 炉跡 (図版 2 - 2、第 4 図)

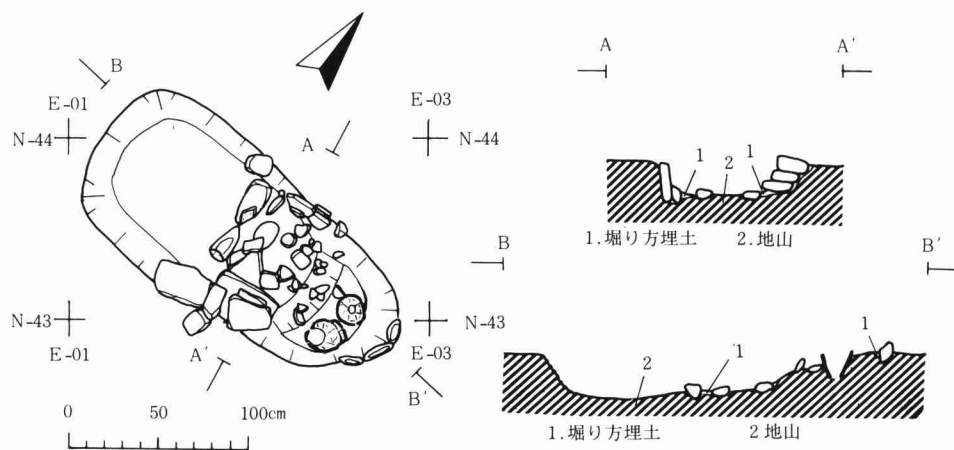
調査区の北部は開田工事に伴う削平が行なわれ、周囲より一段低くなった水田が広がっていた。水田の耕土排除後、Ⅲ層上面で 2×1.5 m の範囲の焼土、炭化物、土器等を混入した暗褐色土の部分を発見。これを掘り下げた結果炉の施設が確認されたものだが、住居に伴う他の施設は確認できなかった。

〔規模〕 軸長 2 m、土器埋設部幅 0.75 m、落ち込み部幅 0.9 m。

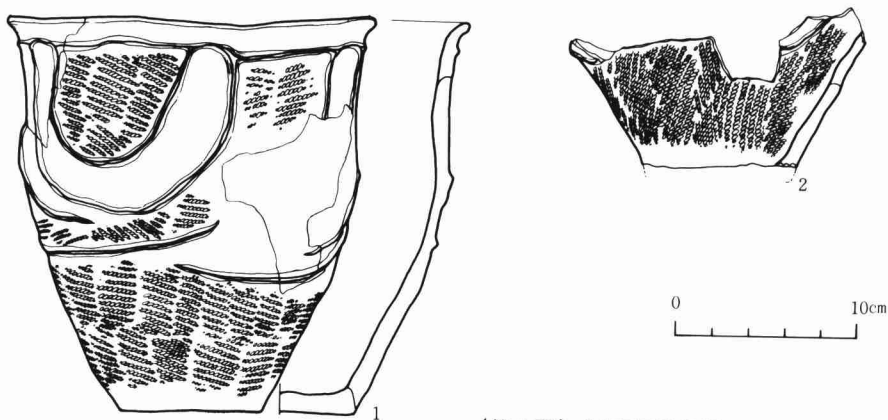
〔主軸方向〕 N-90°-E

〔構造〕 土器埋設部、石組部、落ち込み部からなる。

土器埋設部 検出面より 10cm 程浅く掘りくぼめた底面に 2 個の直立土器 (第 5 図) を並列して埋設し、その周囲及び東側辺には数個の石を埋置してある。土器はかなりの加熱を受けてお



(第 4 図) AF50 炉跡平断面図



(第 5 図) AF50 炉跡埋設土器実測図

り、掘り込み底面にも厚さ約1 cmの焼土が堆積していた。この焼土の周囲から石組み部にかけて炭化物の堆積が著しい。

石組み部 土器埋設部からさらに深さ10 cm程緩やかな傾斜を持って一段下がった地点に石組みを検出した。石組みは底面に大小の石をまばらに敷き、さらに側壁にも石を積んだものである。石組付近からは炭化物、焼土が検出されているが、石自体は強い加熱を受けていない。

落ち込み部 石組み部から西方向へ延長した形の落ち込み部がある。検出面からの深さ約30 cm。底面は平坦で焼土は堆積していない。

〔出土遺物〕

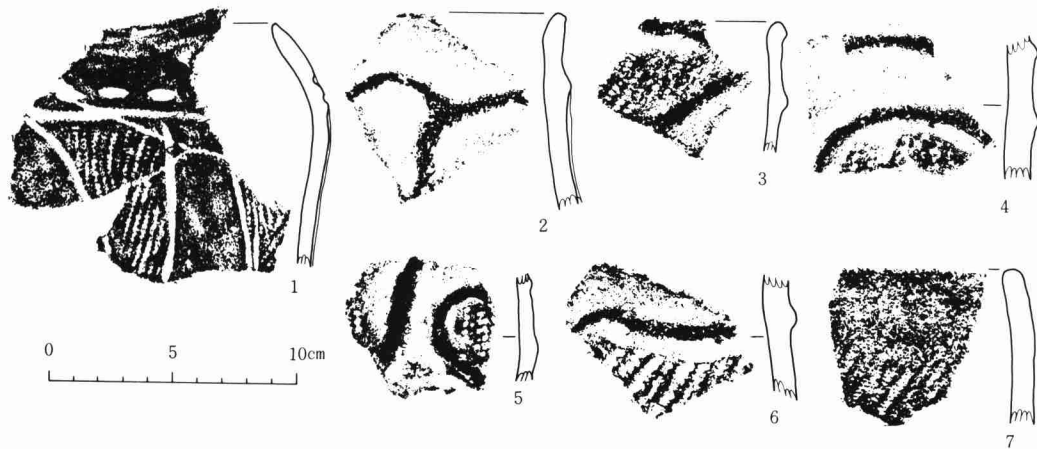
A：土器（図版6—3・4、第5・6図）

5図1は2個体の埋設土器のうち南側に埋設された深鉢で、口縁部から体部にかけて約半分が欠損し、残存部は加熱を受けて脆弱化していた。口縁部は無文帯となり短かく外反する。頸部から胴部にかけて調整隆線により無文部と縄文部に区画された文様帯が展開する。体部下半から底部周辺は地文の縄文が施されている。地文はLR単節縄文横回転。（4. 遺物の項第II群I a類）2は北側の埋設土器で、底部を欠いた深鉢の体部下半である。残存上部に調整隆線による文様が見られ、地文はRL単節縄文縦回転。

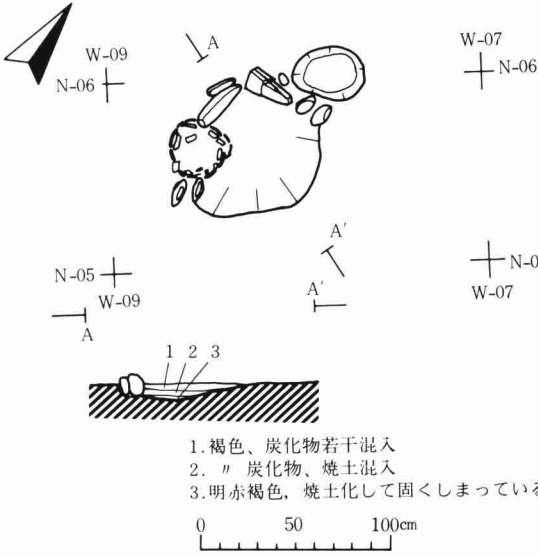
6図1は深鉢の口縁部から体部にかけての破片である。頸部から口縁にかけて丸味を持って内彎し口縁は山形突起を有す。頸部は横方向の沈線と横形刺突文がめぐり、体部には沈線による文様区画がなされている。2、3は深鉢口縁、4～6は体部片で、いずれも調整隆線により区画文様が施されるグループ。7は粗製深鉢の口縁部で地文はRL単節縄文である。

B：石器

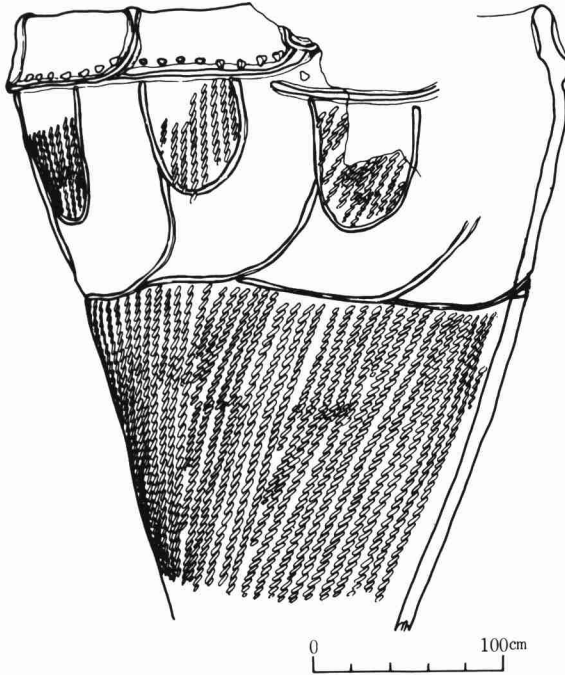
炉付近より石鏃が1点出土した。（第27図7）



（第6図）AF50炉跡出土土器拓影



(第7図) BH09炉跡平断面図



(第8図) BH09炉跡埋設土器実測図

〔出土遺物〕

A：土器（図版6—5、第8・9図）

8図はBH09炉の埋設土器である。底部と口縁部の約50%が欠損している。深鉢形土器で、体部はほぼ直線的に外傾して立ちあがり、頸部で逆「く」の字状に内屈し口縁に至る。文様帯

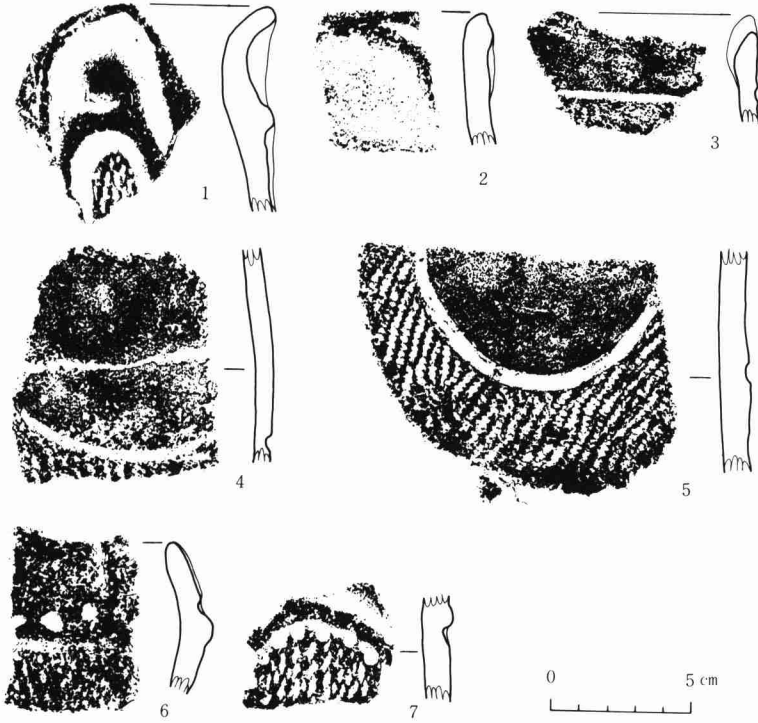
BH09炉跡（図版2—3、第7図）

遺構の確認面はⅢ層上面。BH09グリッド中に土器が集中出土する箇所があり、これを取りあげ精査を行ったところ、住居跡のプランは確認されなかったが炉の施設のみが発見されたものである。また炉に使用されたと思われる河原石が上層に動いていたことなどから炉の部分にも攪乱された形跡は認められる。

〔規模・構造〕 発見された炉の施設は、土器を埋設した浅い掘り込み部分とそれに隣接するピットからなり、AF50炉跡で見られた落ち込み部分は確認できなかった。土器を埋設した掘り込み部分は直径約70cm、深さ10cm弱と極めて浅い円形播鉢状で、その西南部側縁に土器が斜位に埋設されていた。土器は底部を欠いた深鉢（8図、図版6—5）で、加熱を受けて一部赤色化し脆くなっている。土器の両端及び北部側縁には数個の石を連ねて埋めこんであり、石組み部分の内側埋土には多量の木炭が混入していた。

石組み部分の北側には直径約35cm、深さ20cmのピットが発見された。埋土は砂質混入の茶褐色土で、土器片・焼土・木炭を包含していた。ピット内は調査時にも湧水しベトベトした状態であった。このピットの性格は明らかではないが埋設土器を引き抜いた跡という可能性も想定できよう。

発見されたBH09炉は、炉の構造施設が辛うじて残存していたにすぎず、全容は不明であった。



(第9図) BH09炉跡出土土器拓影

は口縁部・体部文様帯に分かれる。口縁部には隆線と横位に連ねた刺突文を施し、体部は沈線によって地文部と無文部とに区画されている。体部の施文手順は沈線区画→地文回転である。地文はLの撚糸縦回転。(第Ⅱ群2類)

9図1～3は深鉢口縁部。1は口縁が大きな山形突起となり、調整隆線と沈線の組み合わせによる施文がなされている。大木9式に比定される。

(第Ⅰ群) 2は平縁口縁をなし、弧状隆起文が縦に取り付く。3は口縁に山形突起が作り出され、口縁部の無文帯と体部の地文帯(R撚糸)との間に一条の沈線がめぐる。4、5は体部の破片で、沈線文が施され地文はそれぞれ撚糸、LR単節縄文である。6は口縁部破片、7は体部破片で隆線と刺突文によって施文されている。

B: 石器

炉付近からスクレーパー類5点(28図17・18・20・25・29、29図35)その他の打製石器1点(30図45)石皿1点(31図50)フレーク3点が出土している。

C B 03住居跡(図版4、第10図)

〔遺構の確認〕Ⅱ層暗褐色土の掘り下げ中に、C B 03～53、C C 03～53グリッドを中心に直径約4mの範囲に渡って土器・焼土が密集出土する部分があり(第14図)、遺構の存在が予想されたが、精査の結果はⅡ層中ではプランが明確にならず、Ⅲ層上面で確認されたものである。

〔平面形〕 不整楕円形

〔規模〕 5.9 m × 5 m

〔長軸方向〕 N-15°-W

〔埋土〕

1層(暗褐色土): 住居跡確認面の最上層を覆う土器包含層から連続する土層で、下端は住居

—五十瀬神社前遺跡—

跡内へ深くレンズ状に入りこむ。この土器包含層の性格づけや遺物の出土状況については「C B03土器廃棄層」として独立させ後述する。

2層（1層より明るい暗褐色土）：壁際、床面上を覆う住居跡の最初の堆積層である。壁の崩れ土を含む。上記層に比べ、炉付近を除いては遺物・焼土ともに非常に少ない。2層出土遺物のみを住居跡埋土遺物として取り扱った。

〔壁・床面〕 壁は約30°の傾斜を持ち、検出面からの深さ約20cmで床面に至る。床面は平坦で周溝は存在しない。

〔柱穴〕 床面から6個のピットを検出したが、ピットの深度・埋土状況からピット1～5が柱穴にあたると考えられた。

〔炉〕 炉の施設は住居の南西部に発見された。（図版4、第11図）

（規模） 軸長 2.25 m 土器埋設部幅 0.9 m 落ち込み部最大幅 1.0 m

（主軸方向） N-24°-W

（形状・構造） 円形の土器埋設部と不整形の落ち込み部とに分かれ、両者の境界をなす傾斜部分に石組みがなされている。

土器埋設部 土器埋設部の掘り込み底面は住居跡床面より深さ約20cmレンズ状に掘り込まれその内部からは炭化物・焼土ブロックを検出した。側壁には数個の石が散在しており、南壁は直立した石を並べて埋めこみ石組み部との境をなしていた。土器は東側壁に横倒しの状態で口縁部周辺を露出させて埋設されていた。土器の埋設方法を知るためにこの部分を立ち割った所、横位の土器は2個体を直立に並べたものとわかった。埋設手順は次の通りとなる。側壁を掘り込む→2個体の土器を横置→両側を石で固定→前方の土器の口縁部周辺を残して上部を土で覆う。

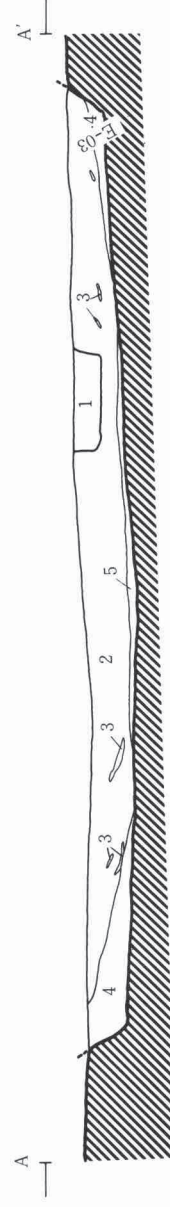
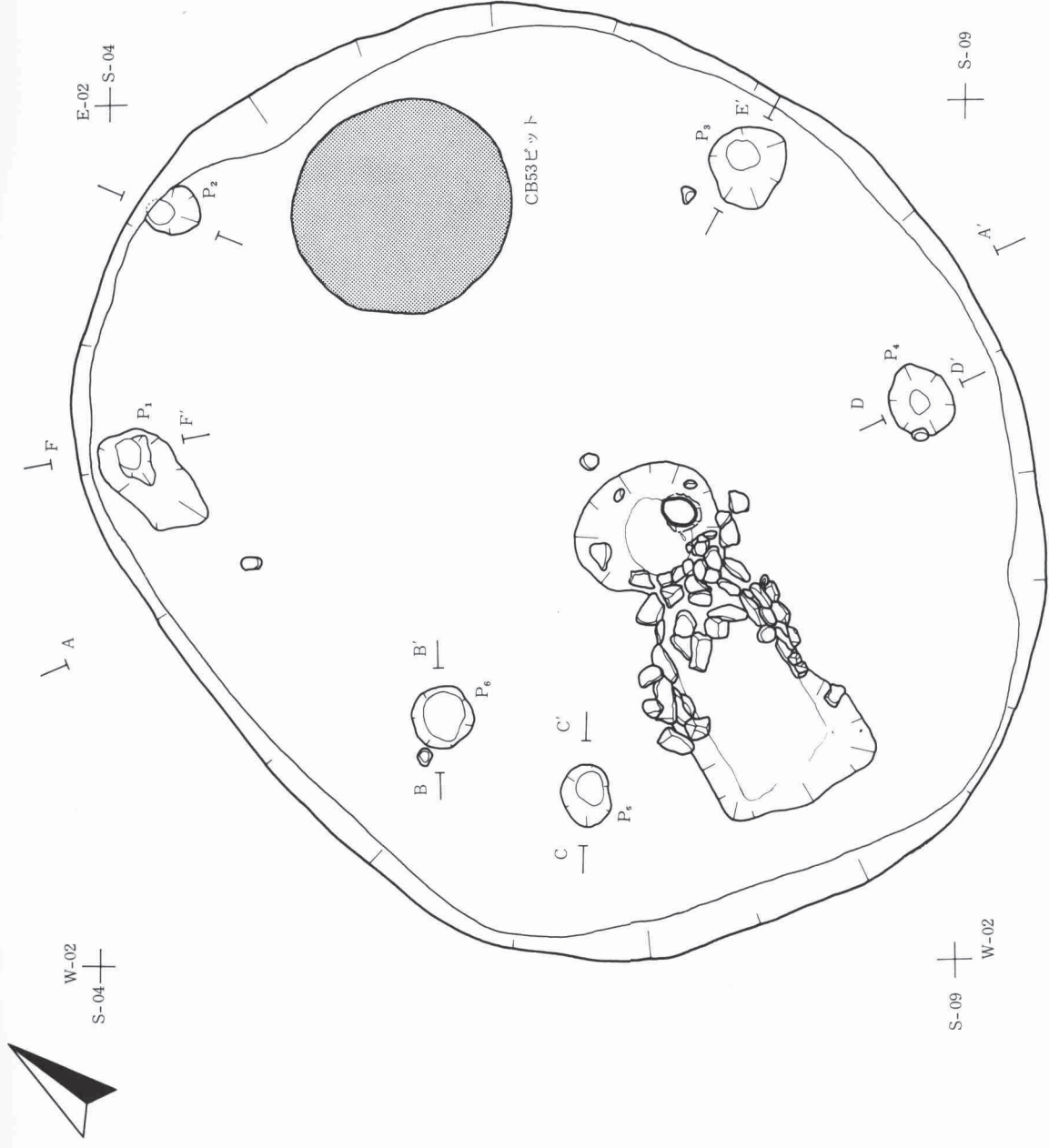
石組み部・落ち込み部 土器埋設部の立石の後方は約15cm緩やかに傾斜し、方形の落ち込み部に至る。傾斜部底面と落ち込み部前方底面は不整に石敷をし、側壁は乱積みが行なわれていた。炉に使用された石には河原石とともに稲瀬台地の基盤をなす稲瀬安山岩の礫が見られる。

〔重複関係〕 住居跡はC B53ピット上に構築されており、C B53ピット（旧）→C B03住居跡（新）の関係がある。

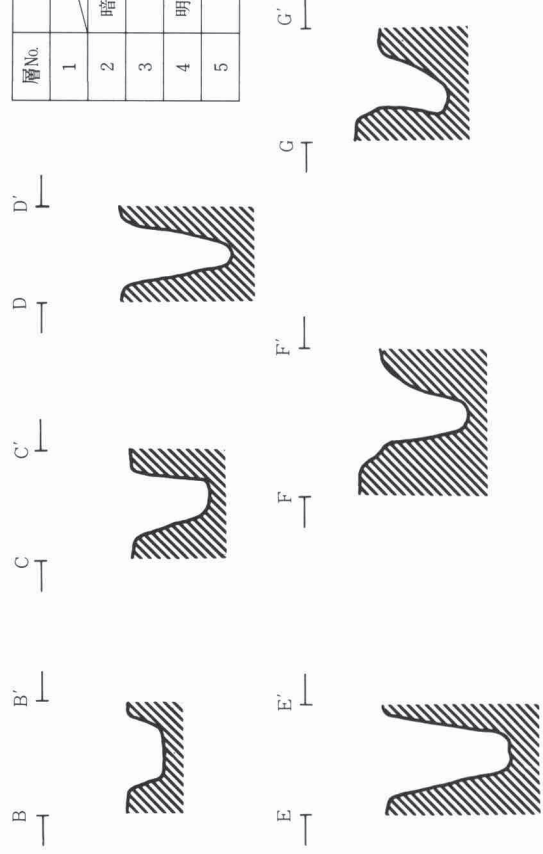
〔出土遺物〕

A：土器（図版6-1・2、第12・13図）

12図1は埋設土器のうち前方に埋められた深鉢である。口縁部約50%欠損、口縁形態は平縁。頸部から体部にかけて文様帯が展開し、体部下半の地文帯とは波状の沈線によって区画されている。文様は沈線によって描かれ内部に縄文を残し外部はこれを擦り消し無文部としている。

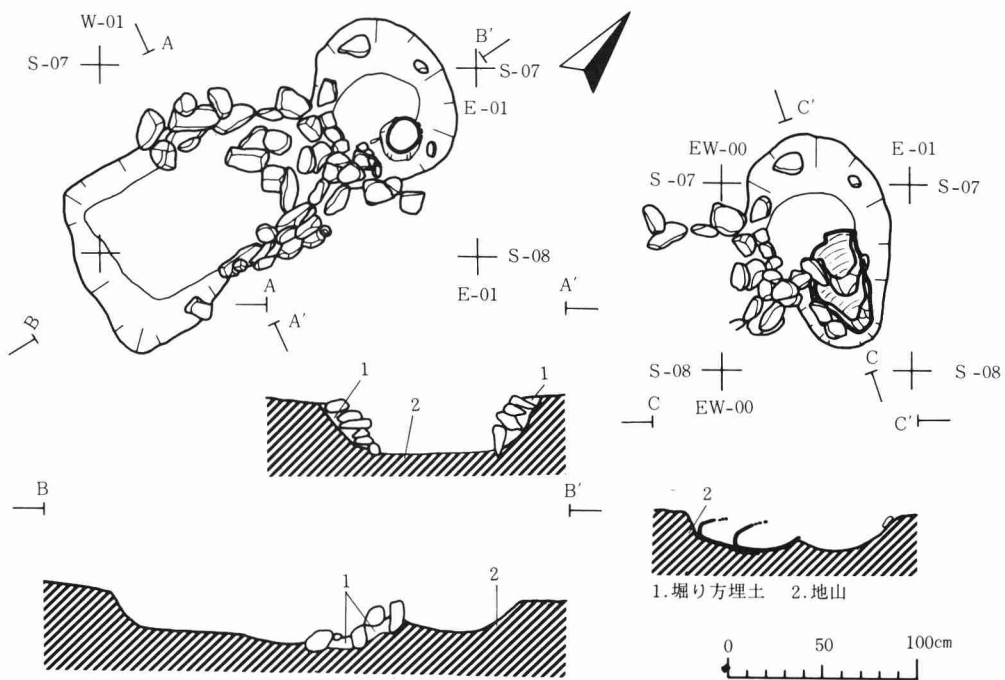


層No.	土色	備考
1	暗褐色	ホップ栽培による攪乱土
2	"	炭化物、焼土を塊状に多く含む、遺物も多い
3	"	炭化物の層
4	明るい暗褐色	炭化物、焼土遺物はNo.2より少ない。細砂混入
5	"	炭化物、焼土、遺物はNo.2より少ないがNo.4よりは多い

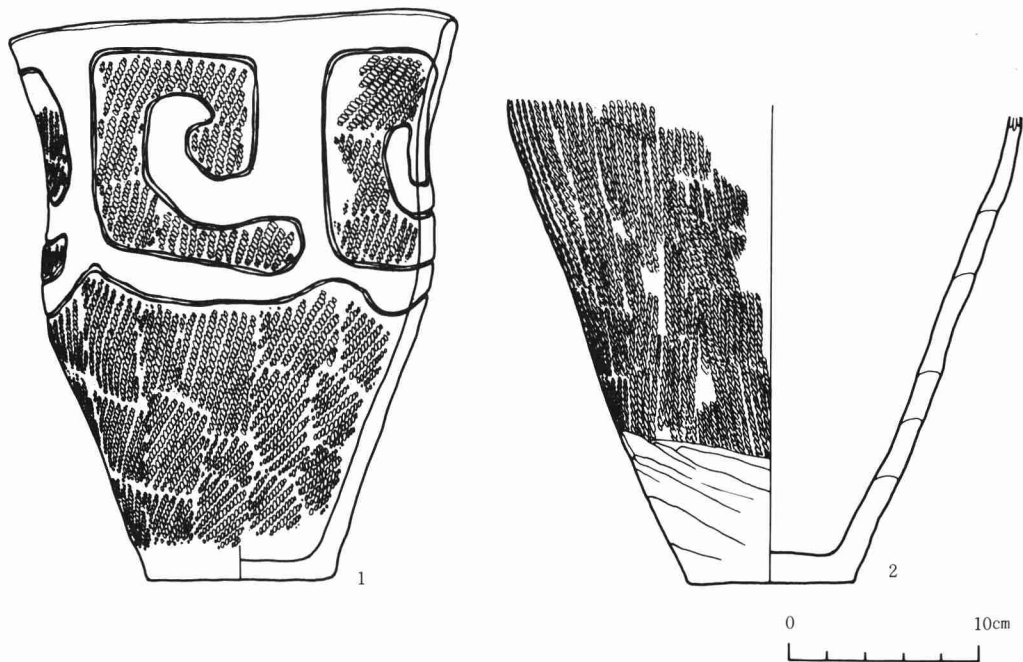


(第10図) CB03住居跡平面図

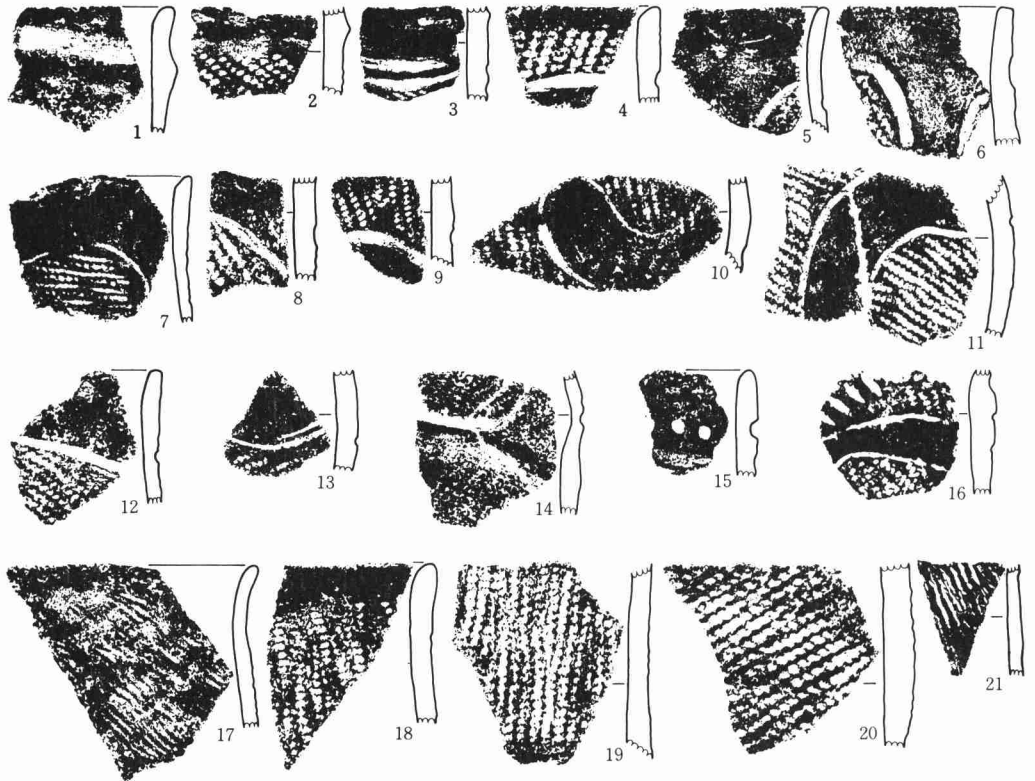




(第11图) CB03住居炉跡平断面图



(第12图) CB03住居炉跡埋設土器実測图



出土地点
 1、3～5、7、9～11、13、18～19、21 炉埋土
 2、6、16、14、19、20 埋土
 8、15 柱穴内

0 5 10cm

(第13図) CB03住居跡 出土土器拓影

地文はL R単節縄文(第II群1類)。2は後方に埋められた埋設土器であるが、底部と体部下半の一部が残存していたにすぎない。体部にはRの撚糸を縦回転し、その後下部を荒くケズリ調整している。

13図は炉埋土、住居跡埋土、柱穴内埋土出土の土器片拓影である。1～3は調整隆線による文様施文がなされたグループで、1は口縁部、2・3は体部片である。4～13は沈線により地文部と無文部とを区画したグループで、5・6・12は平縁の口縁部、7は波状をなす口縁部、8～13は体部片である。いずれも地文には単節の縄文が施されている。14は沈線の延長に弧状隆線を施したもの。15は口縁部文様帯に円形刺突文を横位に連ねており、16は体部文様を沈線で区画し、区画内には刺突文が見られる。17～21は地文のみの土器、いわゆる粗製土器で、17・18は口縁部片で地文にR L単節縄文を施したもの。19～21は体部片。19・20はR L R複節縄文を、21はRの撚糸を施したものである。数量的には1～13に見られる第II群1類土器が多数を占めた。

B：石器

住居跡床面から石鏃 3 点（27図 2・6・8）搔器 1 点（29図38）凹み石 1 点（31図53）埋土中から凹み石 1 点（31図56）が出土した。

C B 03 土器廃棄層（図版 3、第 14 図）

C B 03 住居跡を覆う暗褐色土層中には、多量の土器や石器、焼土が包含されていた。これらの土器、焼土はその出土状況から住居が埋没する途上において、そこに廃棄されたものと判断されたため、この遺物、焼土を包含した暗褐色土層をここでは「土器廃棄層」と仮称した。

土器廃棄層の発掘過程を略述すると、

①第Ⅱ層中 C B 03～C C 53 グリッドを中心に土器、焼土が出土、これは一定の広がりを持った一枚の面として検出されたが、住居跡のプランは確認できなかった（14図）。土器は大形破片が多く、ほぼ完形の土器が押しつぶされた形で出土した。この面から出土した遺物は廃棄層上層の遺物として取り扱った。

②第Ⅱ層を掘り下げた結果、住居跡のプランが明確となる。さらに住居跡内の埋まり土を掘り下げる。

③土器、焼土はその後多量出土。出土状況は面とはならず、ブロック状に混入していた。遺物は廃棄層下層遺物として整理した。

④住居跡の最初の堆積層に至る。壁の崩れ土などを含む。土器、焼土は極端に少なくなる。この結果、土器の廃棄は住居が埋没し始めて後、埋まりきるまで連続して行なわれており、第Ⅱ層中で検出された土器、焼土の出土面を最終廃棄面と考えることができよう。

土器廃棄層から出土した遺物は第 1 表の通り多岐に及ぶが出土遺物の特長としては次のことがあげられる。

○出土点数の割合には完形品（復元可能品）が少なく、欠損品が非常に多い。

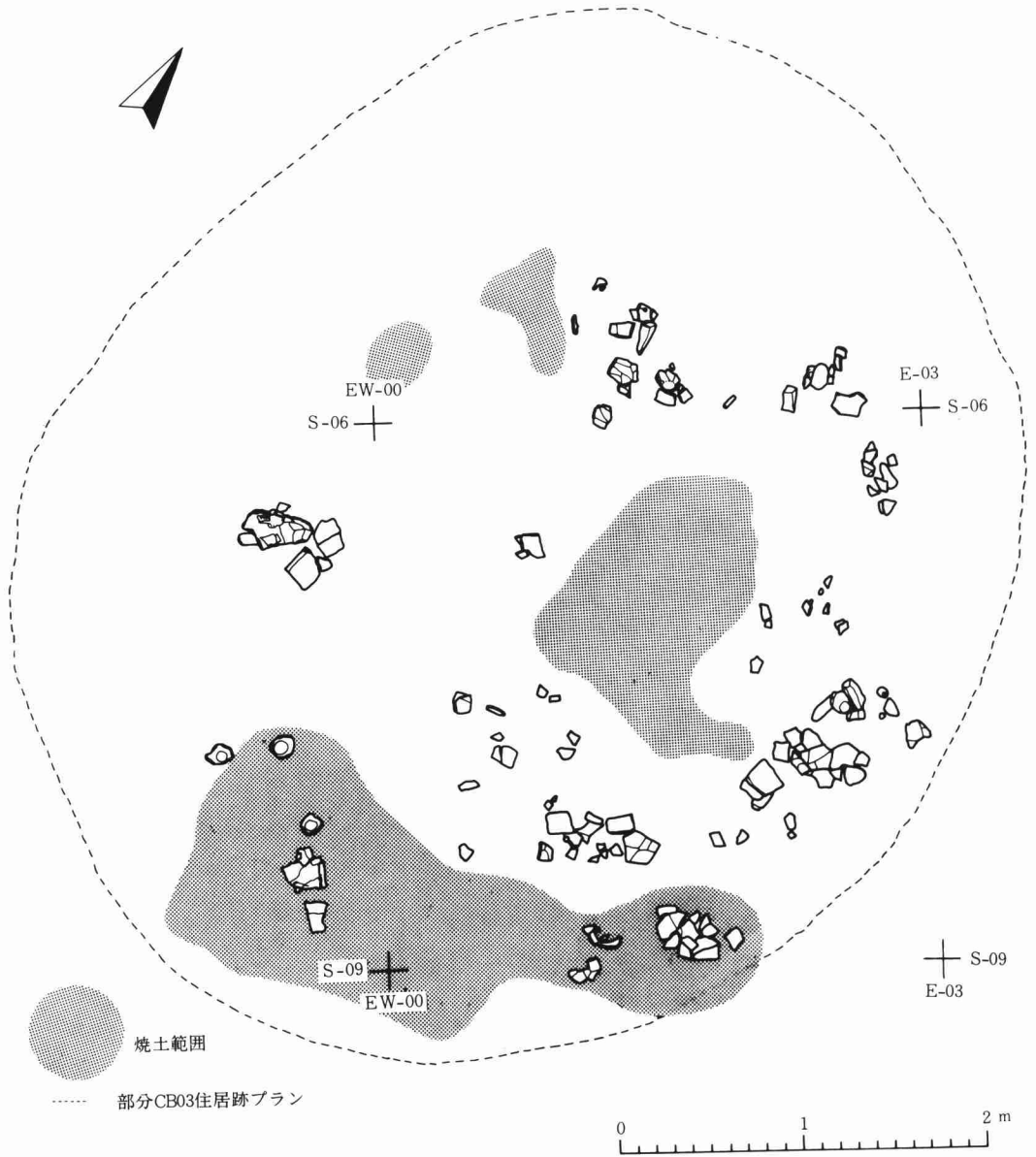
○土器は大形破片が多く、また同一個体の破片が一括出土した。

○土器は二次加熱を受けていたり、炭化物が付着したものが多く、十分に使いこまれていることを物語っていた。

○土器、石器に混って土偶、土製品も出土。やはり破損品が多い。

		廃棄層上層	下層	埋土	床 面	合 計
土 器（復元）		5	4	0	2（埋設土器）	11
破 片	口縁部	205	218	12	12	447
	体 部	1,418	1,144	110	129	2,801
	底 部	100	64	6	4	174
	計	1,723	1,426	128	145	3,422
石	器	13	11	3	5	32
フ	レーク・コア	6	47	0	1	54
土	偶	1	0	0	0	1
土	製 品	0	2	0	1	3
円	盤 状 土 製 品	3	3	0	1	7

第 1 表 CB03 住居跡・土器廃棄層遺物出土数

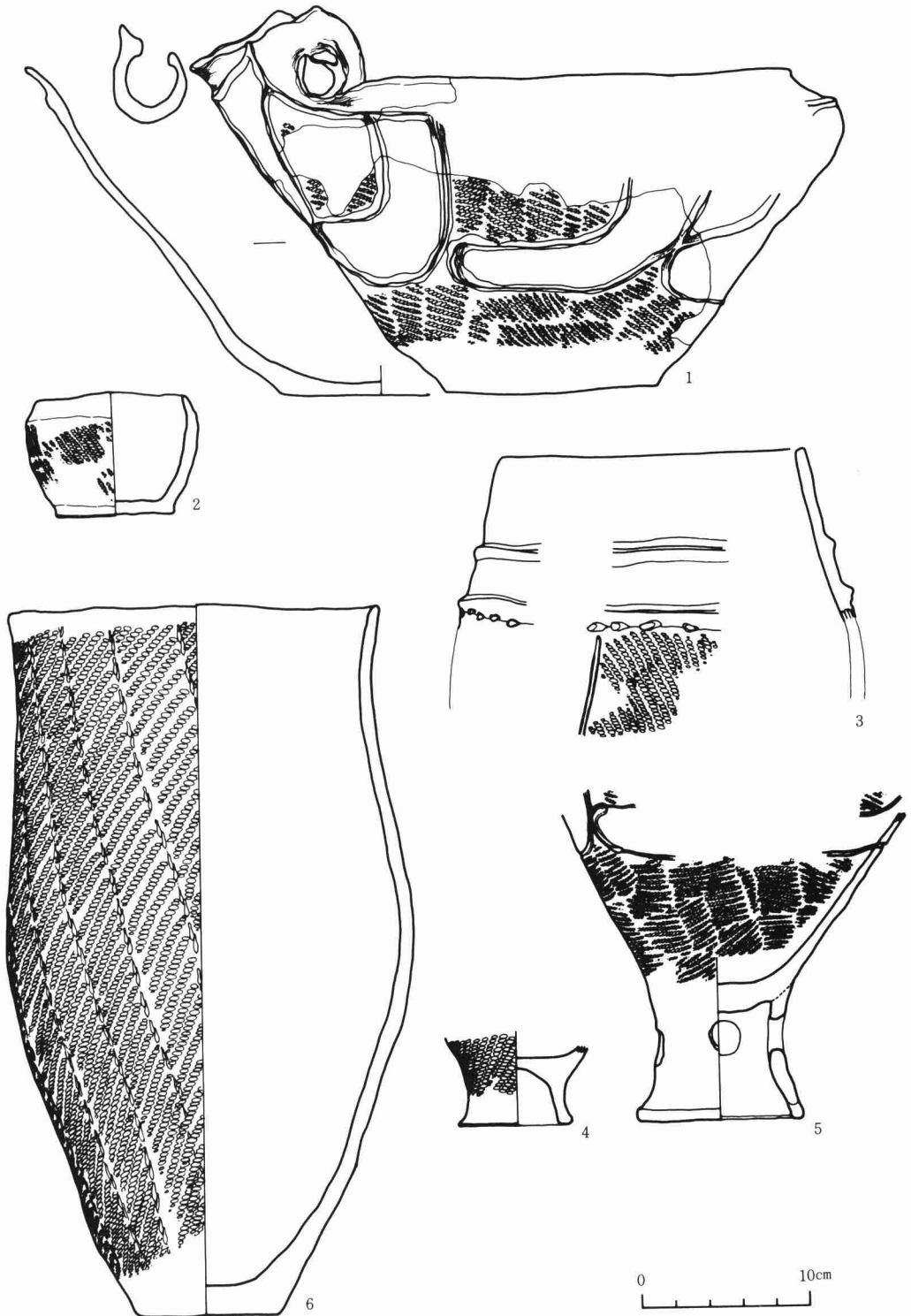


(第14図) CB03土器廃棄層上面焼土、遺物出土状況図

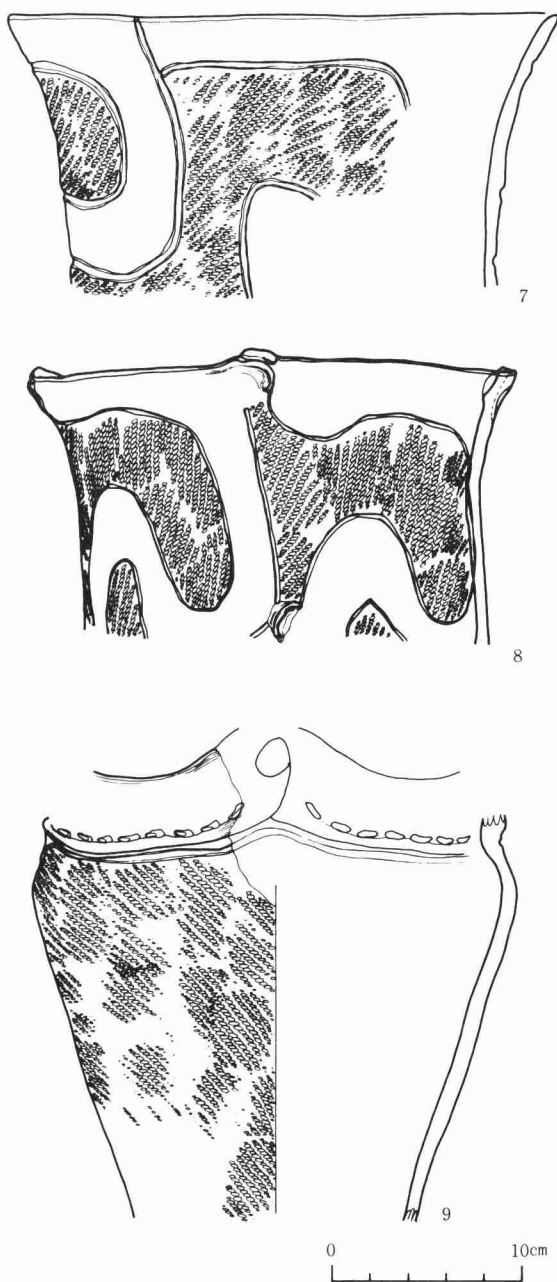
出土遺物

A: 土器 (図版7、第15・16図)

1 は注口土器である。口縁部に取り付いた注口部分と体部から底部にかけて約3割程度が残存。器形は底部から頸部にかけて大きく開き、頸部にめぐる隆線部分から逆「く」の字状に内屈し口縁に至る。体部には調整隆線により施文がなされている。一部に炭化物の付着が見られ



(15图) CB03土器廃棄層出土土器実測图



(第16図) CB03土器廃棄層出土土器実測図

は有孔の山形突起を有すると思われる。

その他ミニチュア土器片約30点なども出土した。(図版8-1・2)

土器廃棄層から出土した土器は3・9に見られる連続刺突文、5・8に見られる弧状隆起文が施される土器が圧倒的に多数を占めた(第Ⅱ群2類)。

た。2は粗製の浅鉢形土器で、口縁部は「ナデ」調整され無文、体部にはLRの単節縄文が見られる。3は口縁部が直立し、頸部に把手を有した(把手部欠損)胴張りの甕形の土器である。把手の取り付く頸部には2本の隆線がめぐり、その下方に横形の刺突文が施されている。4・5は台付土器である。5は台部に4個の円形孔が作られ、体部は直線的に開く器形で、口縁部欠損。体部には沈線により区画文が施され、沈線の一部は弧状隆起文に変化している。地文はLR単節縄文横回転。4は体部下半にRL単節縄文の縦回転が見られる。6は器高が高く、胴張りした器形の粗製土器である。地文は原体の端部付近を結びつけたRLの単節縄文で、縦回転させている。

16図7~9は深鉢の体部、体部上半である。焼成は不良で脆弱。8は沈線で施文され、口縁部と体部で沈線の交わる地点に縦形の弧状隆起文が施されている。地文はRL単節縄文縦回転。7・8は体部中半からほぼ直線的に上がり、口縁部が外反する器形をとる。9は底部から外傾して立ち、体部上半で逆「く」の字状に内屈、さらに頸部で「く」の字状に屈曲し外反する。頸部には隆線がめぐりその上方に横形刺突文が配される。口縁部

B : 石器

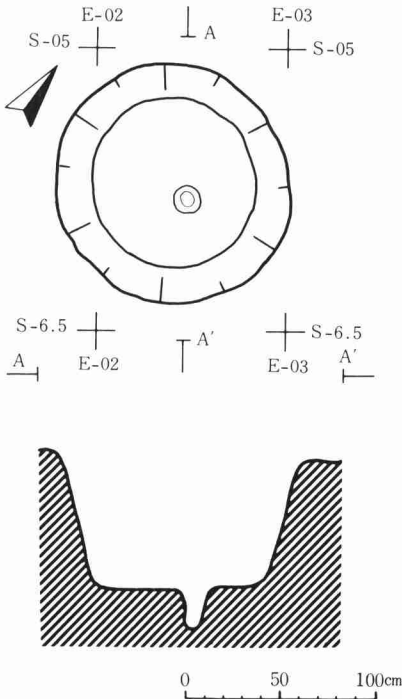
石鏃など尖頭器類が6点(27図1・3～5・9・10) 石錐3点(13～15) スクレーパー類3点(28図22・27・31) その他の打製石器1点(30図43) 磨製石斧2点(48・49) 凹み石1点(31図54) が出土した。

C : 土製品

土偶1点、土製品3点、円盤状土製品7点が出土(第33図)。土偶、土製品はほとんどが破損品であった。

CB53ピット(図版5-3、第17図)

CB03住居跡床面精査の結果発見されたピットで、ピット内が埋没した後にCB03住居跡が構築されたものである。



(第17図) CB53ピット平断面図

口径1.25 m、底径0.9 m、深さ0.7 m。壁は約16°の傾斜をもって直線的に床面に至る。床面は平坦で中央付近に小ピットを有す。小ピットは直径約15cm、深さ22cmを測る。

埋土は黒色土中に砂まじりの黄褐色シルトが混入。遺物の出土は極めて微量で、観察不可能であった。

CH09炉跡(第18図)

第Ⅲ層を直径約1 m、深さ20cm程の円形播鉢状に掘り下げ、中央部に土器を埋設し、周囲に土を埋めもどして固定した炉である。埋設土器の周囲は赤褐色に焼けており、炭化物も混入していた。土器は口縁部欠除の深鉢で加熱を受けて著しく脆弱化している。

その他の施設は発見されなかった。

〔出土遺物〕

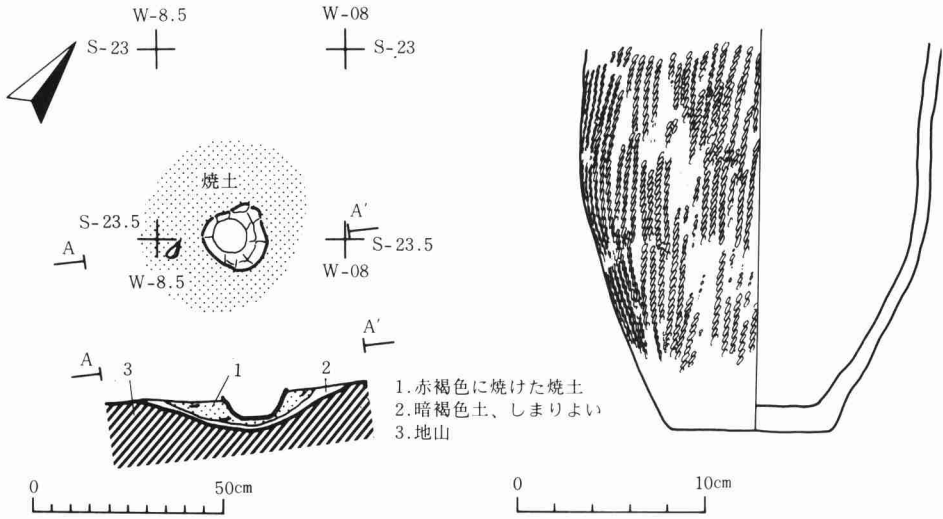
A : 土器(第19図)

埋設土器で、口縁部は欠損、体部にはL

の燃糸が施されている。

B : 石器

凹み石が1点出土。(第32図55)



(第18図) CH09炉跡平断面図

(19図) CH09炉跡埋設土器実測図

4. 遺物

本遺跡は縄文時代中期末葉に形成された集落で、遺物はC B03土器廃棄層を中心に出土、総数は復元された土器12、破片数9,300、土偶1、土製品3、円盤状土製品7、石器61、フレーク・コア約80点である。

縄文時代中期以外の遺物としては表土から若干の土師器、須恵器、瓦等の破片が出土しただけで、大略的には単一の土器様相を呈している。しかしこれらの遺物がすべて同時期に製作、使用されたものとは限らず、ある程度時間的広がりを持って存在した可能性は考えられる。例えばC B03住居埋設土器と住居廃絶後埋土に廃棄された土器とでは、少なくとも放置あるいは廃棄時期の新旧関係は想定できよう。本遺跡では住居跡等遺構に伴う遺物量が圧倒的に少なく、それに比して後世に攪乱された遺構、遺物が多かったことにより、各遺物について新旧の相対関係を決定することは根拠が薄弱であった。この点を鑑みて遺物整理の方向は五十瀬神社前遺跡における中期末葉の遺物様相を巨視的に捉えることに務め、本項で対象とした遺物には遺構に伴った遺物を中心に攪乱土層からの出土遺物も含めた。

(1) 土器

第I群土器 (第21図1～4)

出土点数7点と僅少出土のため詳細は不明である。調整隆線+沈線の施文によって楕円文を区画した土器群で、大木9式土器に含まれる。

1はキャリパー形の深鉢口縁部で波状の口縁形をなす。調整された隆線によって縦長の楕円文が描かれ、区画内には縦形の刺突が施されている。

第Ⅱ群土器

中期末葉にあたりと考えられた土器群を第Ⅱ群土器に包括した。土器の様相は比較的バリエーションに富み画一には捉えられない向きがあるため、いくつかの観点から検討を行った。

〔器種〕 本遺跡から出土した土器は次の器種に分類される。

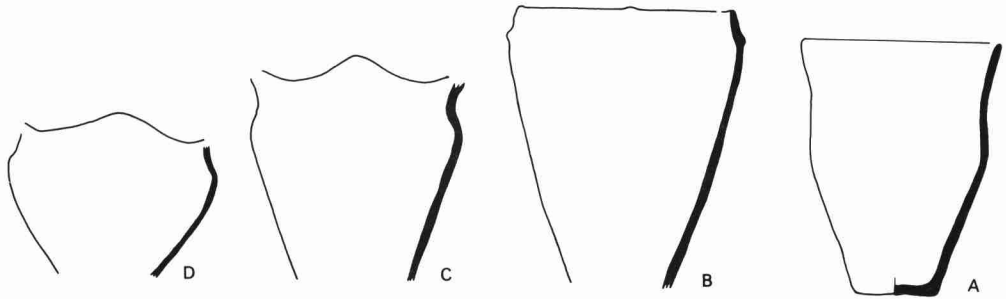
注口土器 1個の注口部が取り付けいた浅鉢形の土器である。15図1、23図52の他に注口部のみの破片は5点出土した。

台付土器 3点出土（15図4・5、22図47）。台部の形態は3点ともに異なる。

把手付土器（15図3、21図22）。把手部分の破片のみの出土が多かったため詳細は不明だが、口縁部は無文で垂直に立ち、胴部が脹らむといった甕形の器形をとる。把手は頸部にめぐる横位の隆線に取り付いている。

浅鉢 器形を知り得る出土品は1点のみ出土した。

深鉢 深鉢形土器は出土品中最も多く見られる器形で、浅鉢に近い形などもあり詳細は多様である。器形の知れる破片についてA～Dのパターンを抽出した。いわゆる粗製土器は除く。



（第20図）深鉢器形模式図

Dはほとんど浅鉢に近い深鉢（口径≒器高）と考えられるが、全体形を復元できる資料はなかった。実際には浅鉢（口径>器高）片も含まれた可能性があるだろう。

〔文様帯〕 地文以外の文様を持つものについて文様帯の構成を観察したが大きく次の種類に区分できた。

- Ⓐ 口縁部は無文帯となり体部にのみ文様帯があるもの。主としてAの器形をとる。
- Ⓑ 口縁部から体部まで連続した文様帯をとるもの、Aの器形をとるものが多い。
- Ⓒ 口縁部、体部の文様区分があるが、間に明瞭な区画線が入らないもの。器形は多様。
- Ⓓ 口縁部、体部の文様帯が区画線により分離する。B～Dの器形をとるものが多い。
- Ⓔ 文様は口縁部のみに集中。体部が無文又は地文帯となるもの。

〔施文技法〕 土器に文様を施す要素として次の種類が抽出された。

①隆線 粘土紐貼り付けの後「ナデ」によって入念に調整し断面が三角形状または台形状になっているものを調整隆線と呼称した。

②沈線 同様に沈線の内部に「ナデ」を行ったものを調整沈線と呼称した。

③刺突文 細い棒状の工具で刺突を行った文様であるが刺突する方向によって土器に現われる形が異っている。便宜上次の呼称を使用した。

円形刺突文 正面から刺突を行ったもの。

横形刺突文 左右いずれかの方向から斜めに刺突したもの。

縦形刺突文 上下いずれかの方向から斜めに刺突したもの。

B～D—①の形態に圧倒的に多く見られる。

④弧状隆起文 粘土を半円状に貼り付け調整したもの。沈線、隆線の一部がこれに転化していることが多い。**A—②**、**B～D—①**の形態に多く見られる。

⑤①～④の組み合わせ。

〔地文〕 地文には次の種類が見られる。

◦縄文 単節R L・L R、複節R L R・L R L等がある。単節縄文が圧倒的に多く、特にR L右撚りの縄文が多い。この他僅少例では結節、綾絡の縄文が見られた。回転方向には縦、横があるが縦方向が多い。

◦撚糸 回転方向は縦方向が主。縦横の方向の撚糸を重複させたものが少数出土。撚糸を使用する例は**B～D—①**に多い。他に網目状撚糸使用の破片が2点見られた。

以上本遺跡出土土器の大略にふれてみた。これらの観察の結果第Ⅱ群土器は大概3つの土器グループに区分できた。1類は施文技法として調整隆線や沈線が主体となるグループ、2類はそれに加えて弧状隆起文、刺突文が施文されるグループである。3類には1・2類に伴ういわゆる粗製土器をまとめた。しかし完形品が少なく破片が主体であったため、分類にはなお不明な点も残った。

1類

調整隆線や沈線による文様区画が主たる施文法となる土器群である。地文を回転させた後、区画文様を描き、区画内を無文部、地文部としたものである。この施文手順は土器によっては多少異なる場合がある。無文部は非常によく磨かれているものが多い。

a 隆線によって区画された文様を持つもの（第5図、第21図5～9）

a₁ 体部下半（底部周辺）にまで文様帯がのびており、下半の地文帯が形成されていないもの。文様は前型式の名残りが強く反映している。21図5・9は波状口縁をとり、器形は底



(第21図) 第I群、第II群I類土器拓影

部から口縁まで内彎しながら大きく開き、浅鉢に近い形となる。

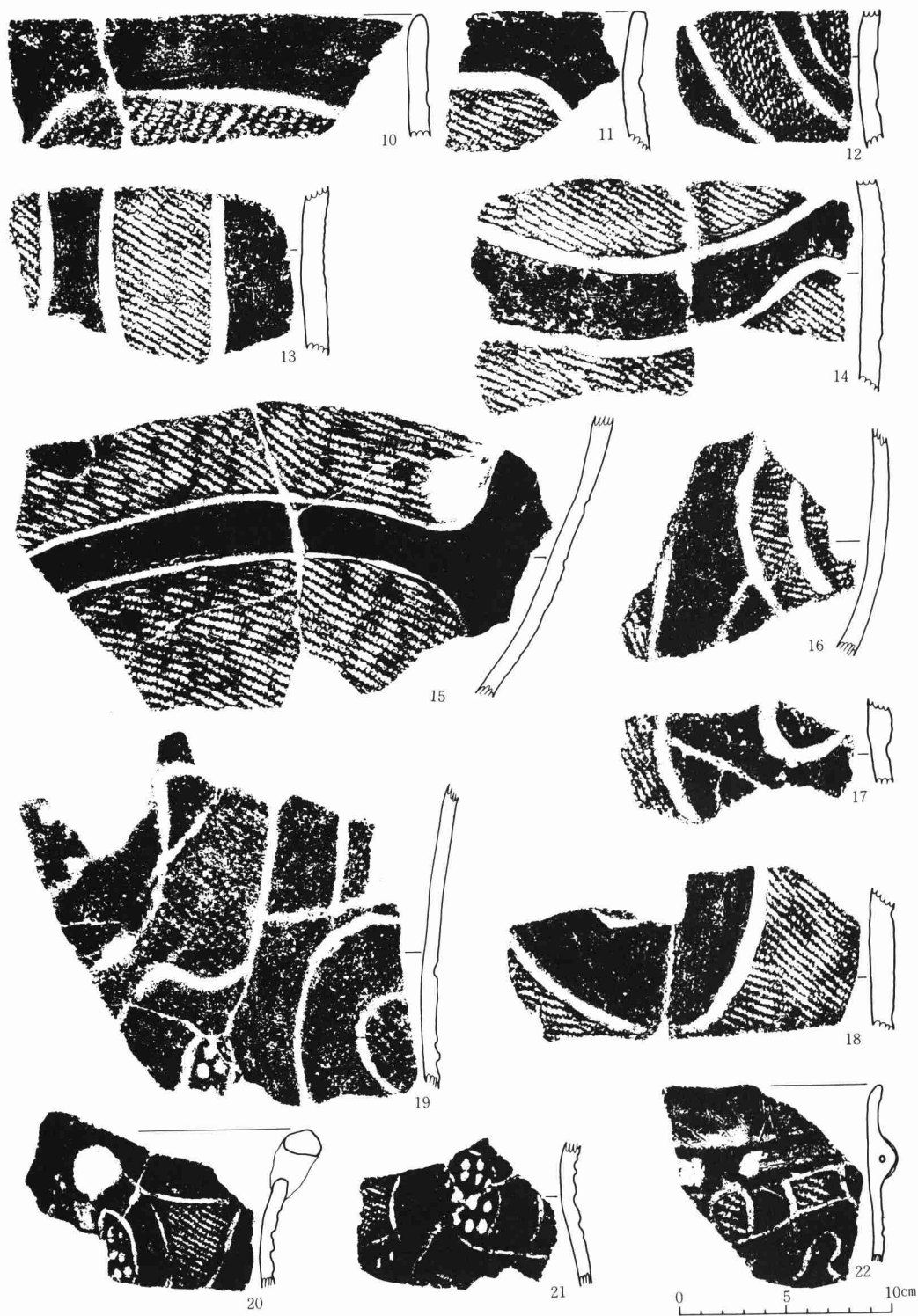
a₂ 文様帯が体部中半で終結し、下方に地文帯が形成される。

b 沈線によって無文部と地文部との文様区画を行ったもの。無文部は入念に磨かれている土器が多い(第12図1、第21図)。

b₁ 文様帯構成①をとるもの(12図1)。

b₂ 文様帯構成②をとるもの(16図7)。

1類土器は本遺跡では出土頻度の少ない土器群で、A F 50炉、C B 03炉の埋設土器、第II層中からの出土土器に見られる。器形の知れる土器はほとんど深鉢形をとり、深鉢の中ではAに類似する形態が多い。文様帯は①が多いが、稀には口縁部に刺突文を配した例もある。口縁部形態には平縁、大波状口縁が見られた。



(第22図) 第II群 I類土器拓影

貝鳥貝塚第3次E類（ b_2 はF類）、崎山弁天第Ⅲ群6・7類に相当する。

2類

沈線隆線に加えて刺突文、弧状隆起文による施文が行なわれる。1類で見られた調整沈線、調整隆線による大胆な加飾は衰え、沈線は無調整の細い沈線に変化し、隆線は主として口頸部に集中、また弧状隆起文へと姿を変えている。これらの刺突文、弧状隆起文は他の施文要素と関連しあって施文されることが多く、単独で施されることはむしろ少ない。2類土器をさらに、主として施文要素の面からグルーピングして詳述する。しかし破片主体の観察であるため、全体的には重複する部分や逆にあいまいな部分が残った。なお、a、b、cのグルーピングには時間的経過は意図していない。

2類土器に使用された地文は単節縄文が主流を占めるが、1～2割程度の割合で撚糸も使用されている。撚糸使用の土器群は第26図に一括した。回転方向は縦方向が主であるが、73は縦横に重複して回転させている。

- a 23～25、27は文様帯㉔の例で、口縁部と体部との間の区画線が存在せず、口縁部文様に刺突文が施されている。23～25は平縁口縁で器形Aに類似した器形。刺突文は縦形である。27は山形口縁をなし、器形はDに近く口縁部が外反している。横形刺突文。
- b 沈線及び隆線と連続刺突文との組み合わせが施文の主体となっているグループ。器形は頸部に屈曲点があり、口縁部が内彎、又は内屈して再び外反するといったB～Dの器形が多い。口縁部形態は平縁が少なく有孔大突起や山形の小突起を有するものが多い。
- b_1 沈線又は隆線によって体部と一線を画した口縁部文様帯がある㉔に含められ、口縁部文様帯内に2～3列の刺突文が施されるもの（28～31、34、39、40）。横位の沈線又は隆線は28、30の様に口縁に上昇して終結する部分を持つ。体部文様は沈線主体。45、49は沈線とともに弧状隆起文が見られる。器形はDをとり口縁は内彎気味で有孔の大突起を有するものが多い。全体形は浅鉢に近い。
- b_2 頸部に一条の隆線がめぐり、これに接して連続刺突文が施されているグループ。（8図、16図9、23図32～35・37・38、41～46）横位の隆線は一部口縁まで上昇し弧状隆起文へと姿を変えている。器形はB・C・Dが多く見られ、頸部の隆線部分に屈曲点がある。口縁形態は有孔の大突起や山形小突起など突起を有する形態が多い。文様帯区分は㉔が多く、㉔の例は16図9で見られる。㉔の場合体部文様まで観察できる破片は少ないが沈線によって文様区画が行なわれている様である。刺突文は圧倒的に横形が多く、他に円形が見られた。
- b_3 沈線・隆線との組み合わせで体部に刺突文が施されたグループ（50、74、76、77）。50の場合はむしろ独立した文様として刺突がなされた例で、74、76は沈線との組み合わせ、77は隆線との組み合わせで施文されている。

—五十瀬神社前遺跡—

a、bの様な刺突文の施され方の他に、突起部に集中して施されているもの（44～46）、台付土器の台接合部に施されているもの（47）、体部の区画文様内に施されているもの（19～21、26）等がある。

c 沈線及び隆線と弧状隆起文とにより施文された土器群である。

◦弧状隆起文が口縁部に施される場合

口縁部に施される場合には弧状隆起文が口縁上にはみ出て小突起を形成することが多く、また外面のみ（55、56等）、内面のみ（57）、内外両面に施文される例等が見られる。

c₁ 体部に沈線による区画文様が展開し、沈線の一端が口縁部の弧状隆起に結びついたもの。

体部文様内にも沈線の結集点に弧状隆起文が見られる（16図8、24図4、7、68）。器形はAに類似し文様帯構成が**㉑**となる。この文様意匠は16図9の土器に見られる口縁部に上昇する沈線の変化と考えられる。

c₂ 文様帯構成**㉒**。頸部に隆線がめぐり、隆線の一端が弧状隆起文として口縁部に上昇するもの（52、55）。隆線に接して刺突文が施されるb₂の例が多い。器形はB・Cが多い。

c₃ 口縁部に弧状隆起文が単独で施された例（57、59、60）。57は内面に、58は外面に施文されている。

c₄ 口縁部に弧状隆起文が単独で施された例（57、59、60）。57は内面に、58は外面に施文されている。

◦体部に施される場合

沈線で描かれた文様の一部が弧状隆起文に変化したもので、大きく2つのモチーフが見られる。

c₄ 円形の地文部を取り巻く形で無文帯が走り、縦横の無文帯が連結する地点の沈線が横形の弧状隆起文に転化しているもの（48～52、62）。

c₅ 横走る無文帯が次の無文帯と接触して上昇するモチーフをとり、無文帯と無文帯の接触部分の沈線が縦形の弧状隆起文に転化したもの（15図、25図64～67）。25図63は無文帯の中に右向き左向きの弧状隆起文が見られる。

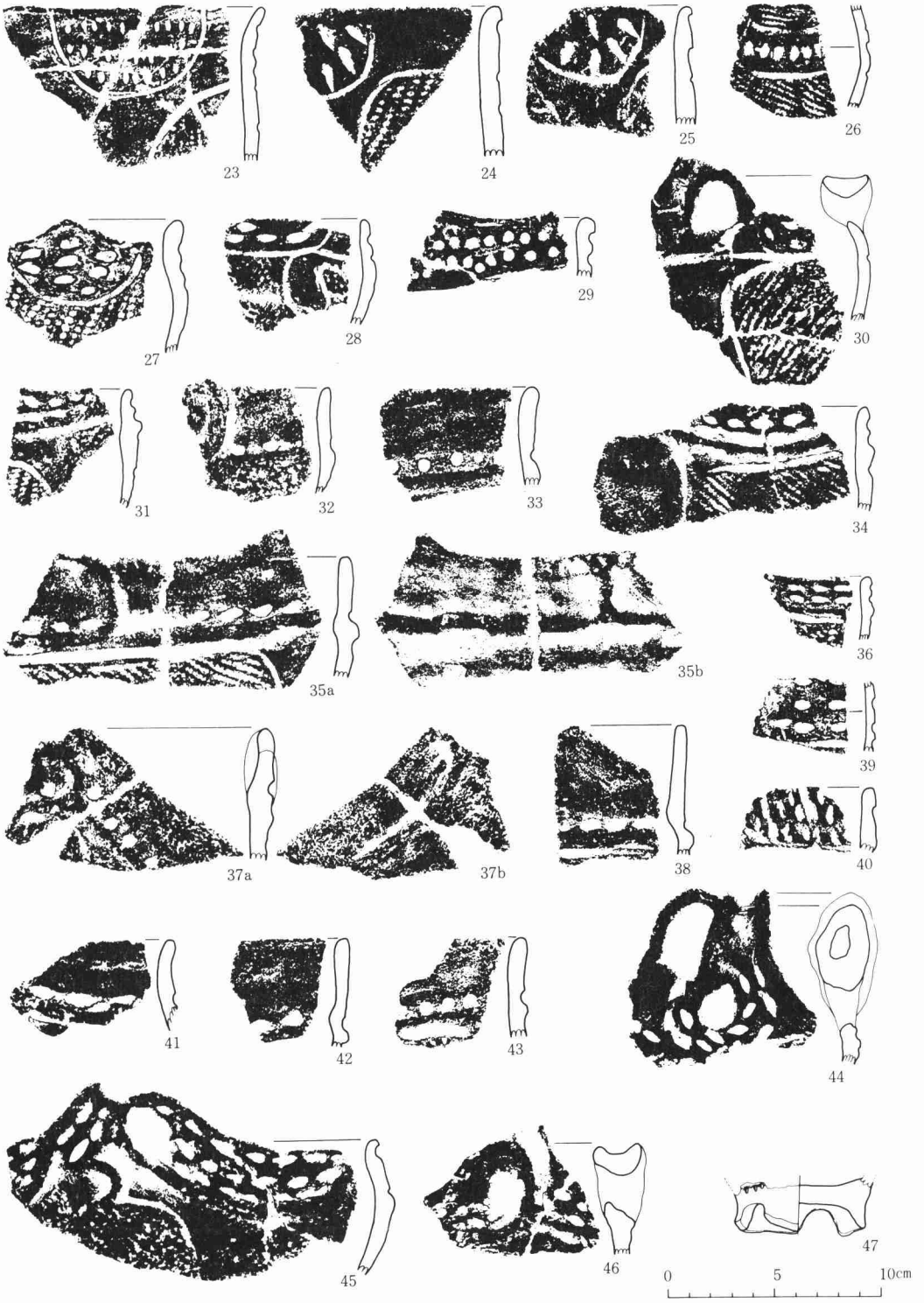
弧状隆起文の施され方は多様でこの範疇に含まれない土器も多い。またa～cの各施文要素を混在した土器もあり、相互の関連性が強い。切り離しては考えられない1つの土器グループといえそうである。

2類土器は堂の前貝塚第3類、樺山第二類、門前第1群2類土器に相当する。また宮城県の場合には梨木田1群土器、西の浜4層出土土器などに共通性を見出すことができる。

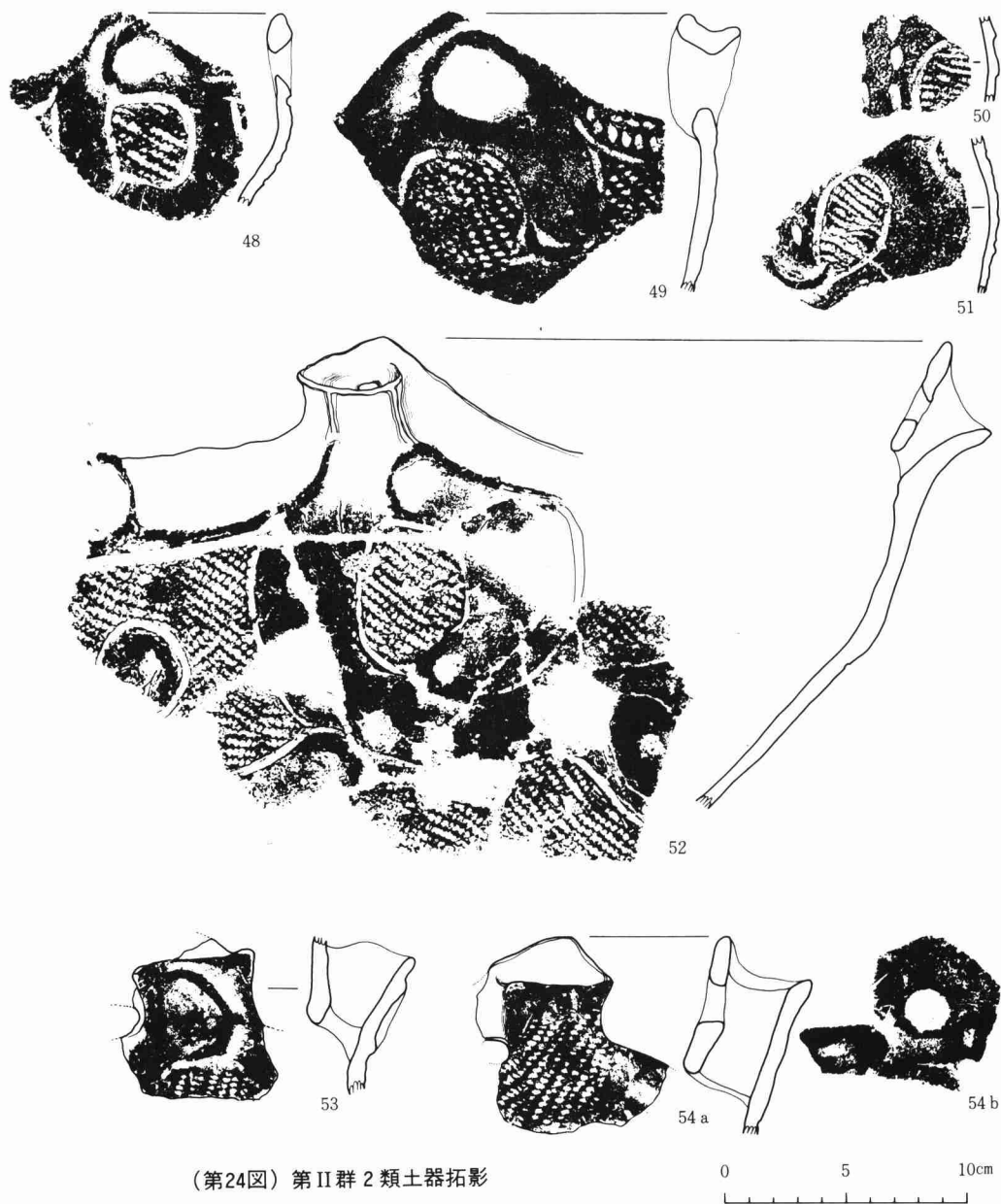
3類（第27図）

1～2類に伴う、いわゆる粗製土器を3類とした。施文の方法には、次の種類が見られる。

a 口縁部の無文帯と地文帯との境界線を持たないもの。稀には無文帯が存在せず、口縁直下から地文を回転している例がある。



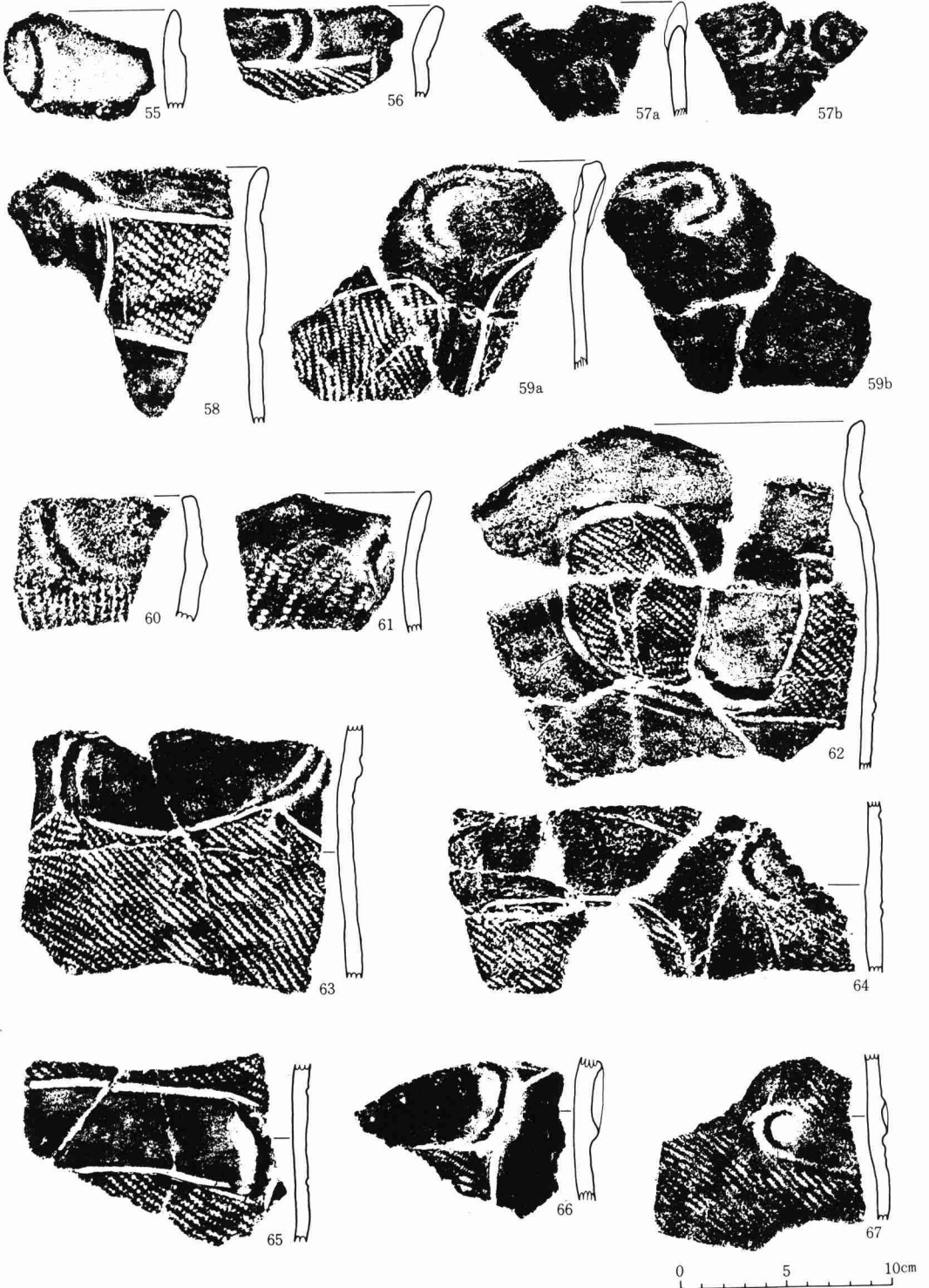
(第23図) 第II群2類土器拓影



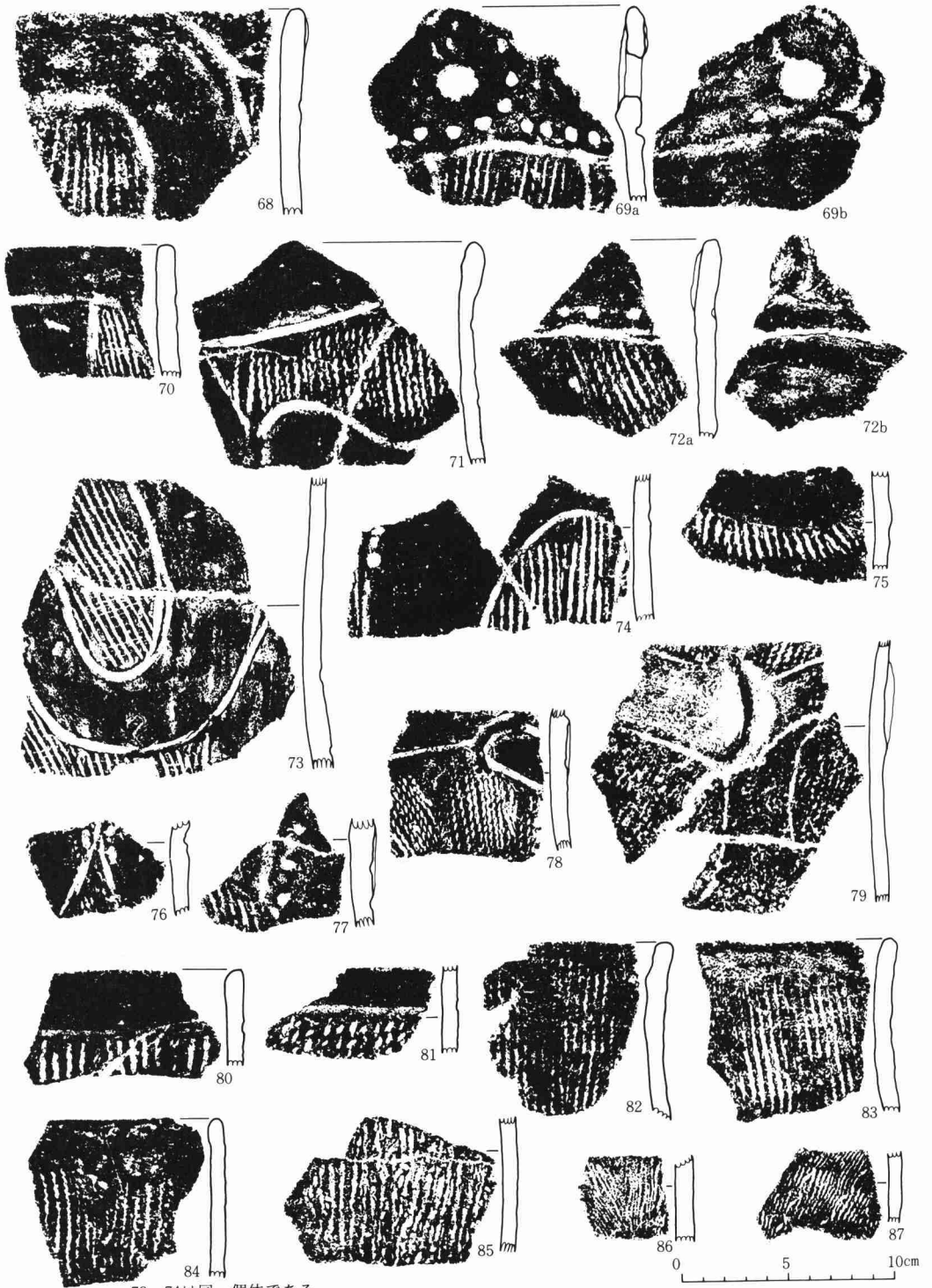
(第24図) 第II群2類土器拓影

- b 無文帯と地文帯との間に一本の沈線がめぐるもの (93、95、97~99)。
 c 無文帯と地文帯との間に連続した指頭圧痕、又は刺突文が施されるもの (100~102)。cの施文法は2類土器に見られる刺突文との関連性が考えられた。

器形は器高の高い深鉢形の土器が多いようである。破片のため全体形は不明の点が多いが、口縁部はほぼ直立するものと、外反するものがある。

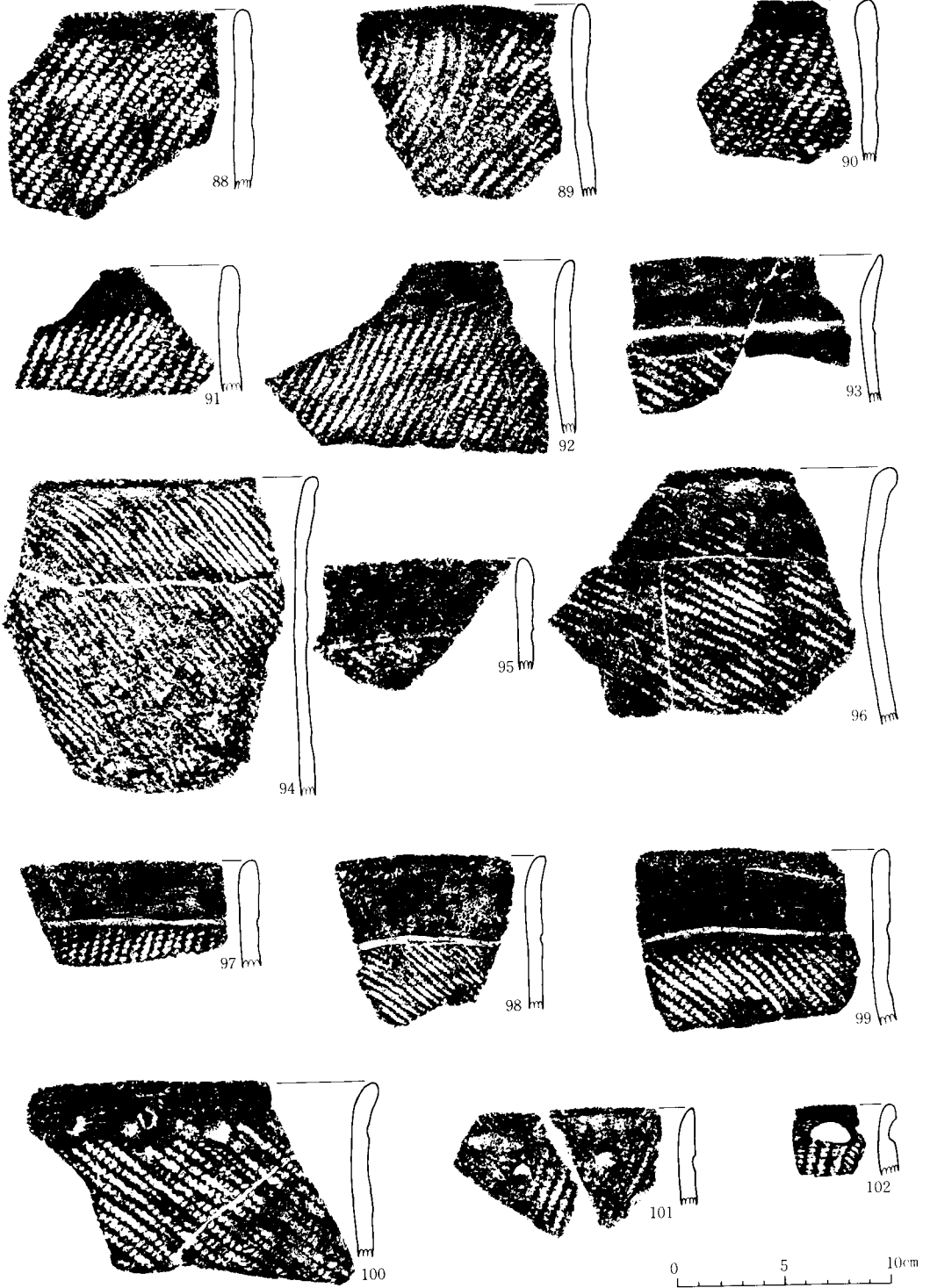


(第25図) 第II群 2類土器拓影



73、74は同一個体である。

(第26図) 第II群2類、3類土器拓影



(第27图) 第II群3類土器拓影

(2) 石器

本遺跡から出土した石器、フレーク・コアは総計144点。このうち形態や加工状態等からみて、石器と判断されたものは67点であった。出土状態が前述の様に原位置を保っているものが少なく、一括して分類を行なうことには問題が残るが、土器同様に中期末葉に製作された石器群として取り扱った。分類方法は各石器の機能する面の在り方に視点を置いたが、不明瞭なものについてはあえて断定は行なわなかった。名称についても同様である。

石鏃(第28図1～7)

すべて無茎で小形、薄手であるが、形態から次のグループに区分される。

- 小形で三角形状のもの(1)。
- 側辺がほぼ直線的で、二等辺三角形状のもの(2～4、6)。2・3は両面ともに最も入念に加工されている。
- 側辺に丸味があり、尖頭部角はやや鈍角のもの(5、7)。基部の抉入は浅い。5は黒燧石を使用している。

その他の尖頭器(第28図9～12)

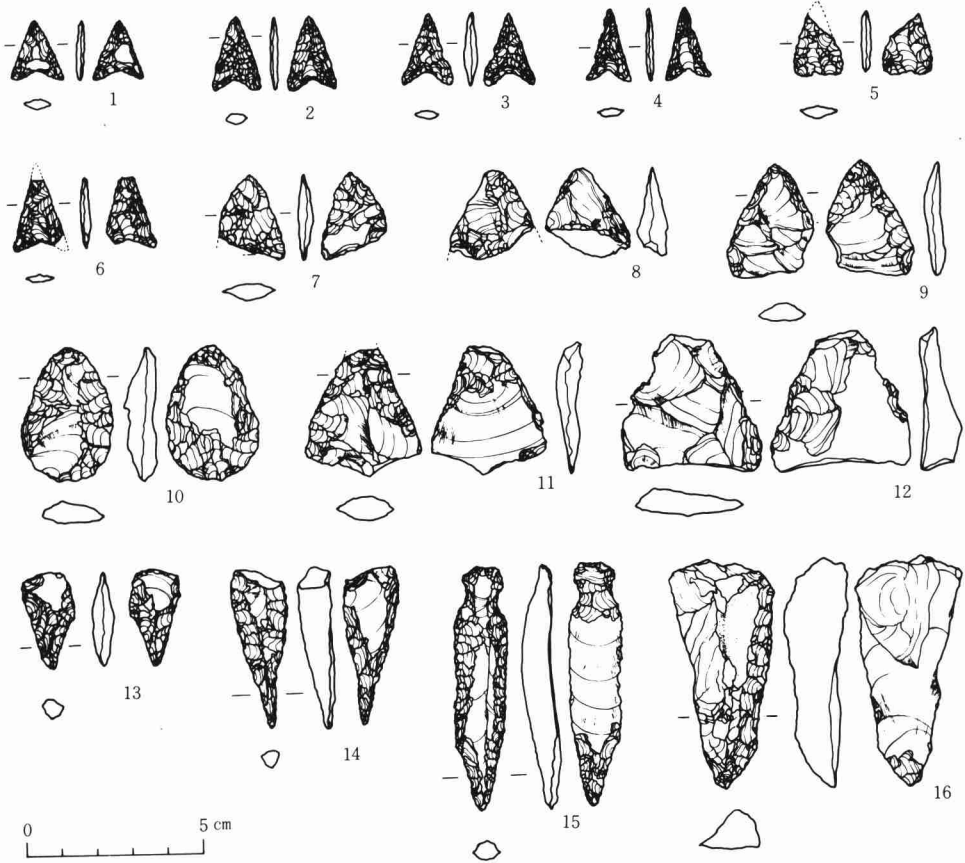
上記の尖頭器(石鏃)に比して大形で不整形、尖頭部がやや鈍角のものであるが、やはり尖頭部に機能を持つと判断したものをまとめた。石槍、大形の石鏃等考えられるが断定しなかったものである。

9は大形で三角形状のもの、二次加工は尖頭部と側縁にのみ集中している。基部には調整剝離は行なわれておらず、直線的である。10は尖頭部が丸味を帯び鈍角になっているものである。この様な例は尖頭器の他に、基部に機能を持たせた場合には搔器という可能性が考えられるが、二次加工の状態から尖頭器に含めた。基部は表面にネガティブバルブが、裏面にはポジティブバルブがあり、これをカットする様に調整剝離されている。11は尖頭部が欠損。加工は片面に集中している。12は未製品である。

石錐(13～16)

石錐は穿孔を主たる目的として製作された石器であると考え、錐状の先端部作り出しをもって本類に分類した。3点出土。16は未製品である。

13は小形で、短い錐部を持ち、断面は菱形に近い形態をとる。14は両面からの入念な加工によって細く長い錐部を作り出し、錐部断面は三角形状となっている。素材は縦長、肉厚の剝片を使用したもので、上面にはプラットホームが残る。15はツマミを有する形態のもので、断面三角形の縦長剝片を素材とし、長い身部と錐状に作り出された錐部をもつ。錐部は両面加工により断面凸レンズ形に作り出されている。ツマミ部分は両面から加工され、身部は片面のみ入念な加工をしている。



(第28図) 石器実測図

図版番号	出土地	層位	長さ(㎜)	幅(㎜)	重さ(㍑)	石 材	備 考
1	CB03住	廃棄層上層	17	14	0.4	珪質頁岩	尖頭部角60°
2	"	床 面	21	13	0.7	黒よう岩	" 74°
3	"	廃棄層上層	20	15	0.4	松脂岩 (Pitch Stone)	" 42°
4	"	"	21	13	0.3	珪質頁岩	" 36°
5	"	"		14	0.4	黒よう岩	尖頭部欠損
6	"	床 面			0.6	玉ずい	"
7	AF50炉	埋 土	24		1.7	珪質頁岩	基部欠損
8	CB03住	床 面	24	24	2.6	玉ずい	"
9	"	廃棄層下層	32		3.7	硬質頁岩	一部欠損、尖頭部角77°
10	"	上 層	38	26	6.9	"	
11	AF50	表 土	36	32	5.6	珪質頁岩	尖頭部欠損
12	BH09	"	36	39	12.8	"	未製品?
13	CB03住	廃棄層下層	27	14	1.9	"	
14	"	上 層	43	16	5.2	泥質石質凝灰岩	
15	"	"	69	15	8.9	珪質頁岩	未製品
16	CC50	表 土	64	29	22.1	"	

第2表 石器観察表(1)

スクレーパー（第29、30図）

切削、剥搔などが主たる使用目的であろうと考えられる石器をこの類に包括した。出土石器中最も多数を占めるが、形態、刃部の在り方、加工状態にはばらつきがある。また図示した石器の他に二次加工の施されていないフレークの中で、歯こぼれ状の痕跡を持つものも多数見られた。刃部の在り方から切削器、搔器とに分けて記述を行う。

切削器

a 29図はフレーク、またはフレークに簡単な二次剥離を加えて形を整えたものを素材として、一辺に刃部を作り出した石器類である。形態は横長で左右対称、長辺を刃部とし、刃部を作る二次加工が片面にのみ行なわれていること、刃角は比較的薄いなど、（例外もあるが）共通点が多い。刃部の形態からいくつかのグループに区分できる。石材には頁岩が多く使用されている。

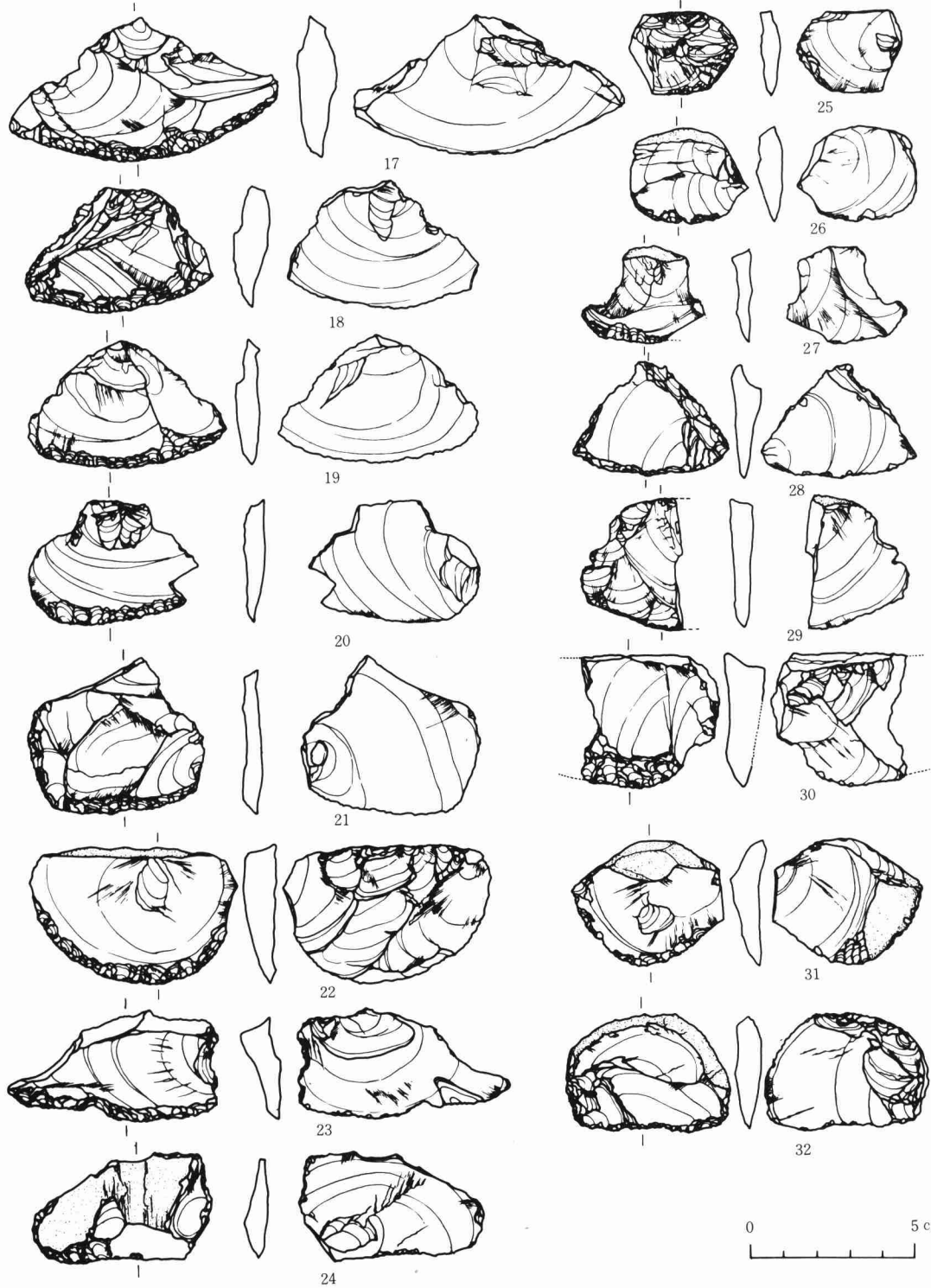
◦刃部が半円状にカーブしているグループ（22、31）。22は片面にバルバースカーの見られる一次剥離面を残し、片面に荒い二次剥離を行っているが、刃部の加工は一次剥離面に行なわれている。刃部は入念に加工され薄手である。上面には自然面のプラットホームが残る。自然面を大きく残したフレークを素材とし、僅かな細部加工によって薄い刃を作っている。

◦刃部が緩い弧状のカーブとなっているグループ（17～20、29、30）。17は左右対称の扇形の形態をとり、横長の剥片を利用し、片面に一次剥離面を残す。刃部形態は弧状に大きく開き、カーブしている。入念な二次加工により刃部が作られているが、刃角は他に比較して厚めである。18、19は17に類似しているが、刃部幅は小さくなる。20は両面がバルバースカーの見られる一次剥離面となっており、刃部は非常に薄手である。刃部形態は直線に近いものとなっている。21は長辺に薄手の刃部が作られ、また一方の側縁にやや厚手の刃部が加工されている。側辺の刃部は、エンドスクレーパー（搔器）として使用されたものと考えられる。同様のことは28でも可能性がある。三角形の長辺が緩くカーブし、細かい二次加工によって薄手の刃部が作られ、一方の側辺にも細かい二次加工が施されている。13、14は欠損品。

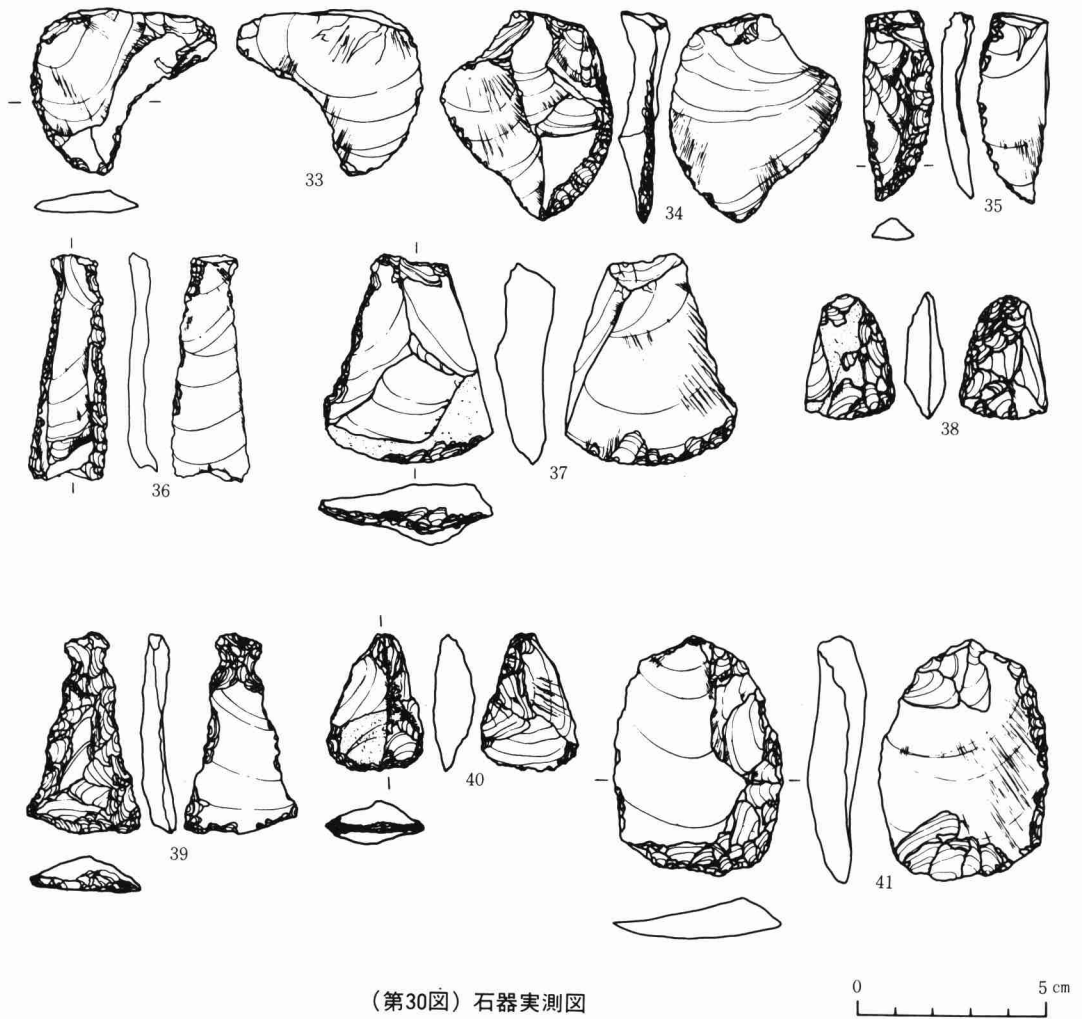
◦不定形フレークを使用、刃部が直線的なもの。23、24は横長のフレークの一辺に刃部が作られている。32は側辺に自然面を残した半円状のフレークで、一辺に押圧剥離が行なわれている。この程度の加工のあるフレークは、他に5点出土している。

b 上面に自然面またはプラットホームを残し、片面加工で側辺にカーブした刃部を持つものを一括した（第30図33～35）。

33は左側辺に薄い刃部があり、右側辺は内にカーブした細かい剥離痕が見られる。34は右側辺に薄い刃部があるもので、左に丸く突き出た形となり、やはり細かい剥離痕が見られる。35はやはり右側辺に刃部があるが、33、35に比べて刃角はやや厚めである。左側辺の



(第29图) 石器実測图



(第30図) 石器実測図

先端付近は内側にカーブしている。ナイフとしての可能性も考えられよう。

c 30図36は縦長で両側辺に細かい二次加工を施している。上面にプラットホームを残し、両面から加工してツマミを作り出している。身部表面は3面にカットされ、両端2面を刃部としたもので、刃部形態は直線的である。裏面は一次剝離面が残る片面加工。下端は加工が行なわれていない。

搔器 (第30図37～41)

主として縦長で、端部に厚めの刃部がある石器類を搔器として本類に一括した。出土点数5点。形態、刃部の加工状態にはかなりのばらつきがある。刃部加工から次の様に区分できる。

a 刃部の加工が片面加工のもの

39は、上部に両面からの二次加工によりツマミが作り出されて、形状は撥形を呈している。

図版 番号	出土地	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	重さ (g)	石 材	備 考
17	BH09 炉付近		44	84	28.2	泥質石質凝灰岩	
18	”		39	58	19.3	”	
19	BH06	Ⅱ層	39	51	16.3	硬質頁岩	
20	BH09 炉付近		38		11.4	”	一部欠損
21	CD50	Ⅱ層	47	55	18.0	”	
22	CB03 住	廃棄層下層	42	65	24.5	泥質石質凝灰岩	
23	BI09	Ⅱ層	34	65	19.6	硬質頁岩	
24	”	”	33	56	12.8	”	
25	BH09 炉付近		25	34	5.3	”	
26	出土地不明	表土	29	36	8.1	”	
27	CB03 住	廃棄層上層	30	38	4.4	珪質頁岩	一部欠損
28	CB50	Ⅱ層	35	47	11.7	硬質頁岩	
29	BH09 炉付近		25	34	5.3	”	一部欠損
30	CD50	表土	41	41	23.2	泥質石質凝灰岩	”
31	CB03 住	廃棄層下層	39	46	14.8	珪質頁岩	
32	”	埋土	35	50	19.2	淡緑色石質凝灰岩	
33	”	”	43	47(24)	12	硬質頁岩	
34	CI09	Ⅱ層	53	44	16	珪質頁岩	
35	BH09 炉内		50	20	7.3	”	
36	出土地点不明	表土	60	21	6.5	”	
37	CA12	Ⅱ層	57	45	—	硬質頁岩	
38	CB03 住	床面	33	23	7.2	珪質石質凝灰岩	
39	BH06	表土	53	30	9.2	”	
40	出土地点不明	”	36	25	—	松脂岩	
41	CD50	”	63	45	32.7	硬質頁岩	

第3表 石器観察表2)

表面は側辺、刃部とも入念に加工されている。40は片面に短かく厚い刃部が作られている。

b 刃部の加工が両面加工のもの

37は端部に両面から剝離を行い刃部としたもの。また左側辺にも片面からの二次加工が行なわれている。38は小形で両面に二次剝離を行い、撥形の形状を作り、端部がやや厚めの刃部となっている。片側の側辺にも入念な二次加工が施されている。41は大形の剝片を使用し、端部は両面から、両側辺は片面から加工を行っている。切削器との重複機能が考えられた。

その他の打製石器 (31図42～46)

大形フレークまたはコアを素材とし、荒い二次剝離を加えて石器とした種類を集めた。フレークの長辺、短辺のいずれかにぶ厚い刃部が作られたものである。切断を目的とした刃器であろうと考えられた。

a 横形 (42、43)

破損品を含めて3点出土。長辺の一边を刃部として加工してあるもの。42、43とも大形の剝片を利用し、整形のための剝離はほとんど行なわれていない。42は両面に、43は片面にのみ刃部加工が行なわれている。

b 縦形 (44～46)

短辺の一边、または二辺に刃部が作られているものである。44は両面から入念に剝離を施し、整形したもので、上下両端に刃部がある。上下とも刃部は厚く鈍角であるが、細かい細部加工痕がつぶれてしまう程に使いきまされ、摩耗している。全体に肉厚で、着柄部は形成されていない。手に持って使用したものであろう。45は44より小形で、一边にのみ刃部がある。刃角は厚く、両面から刃部の加工が行なわれている。46は45と同類の破損品と考えられた。

磨製石斧 (31図47～48)

破損品が2点出土した。47は横方向に、48は縦、横の方向に折損している。調整の擦痕は側縁周辺は垂直に、内部は斜方向に走っている。

石皿 (32図50～52)

3点出土。3点ともに下面に足を持つ形態である。

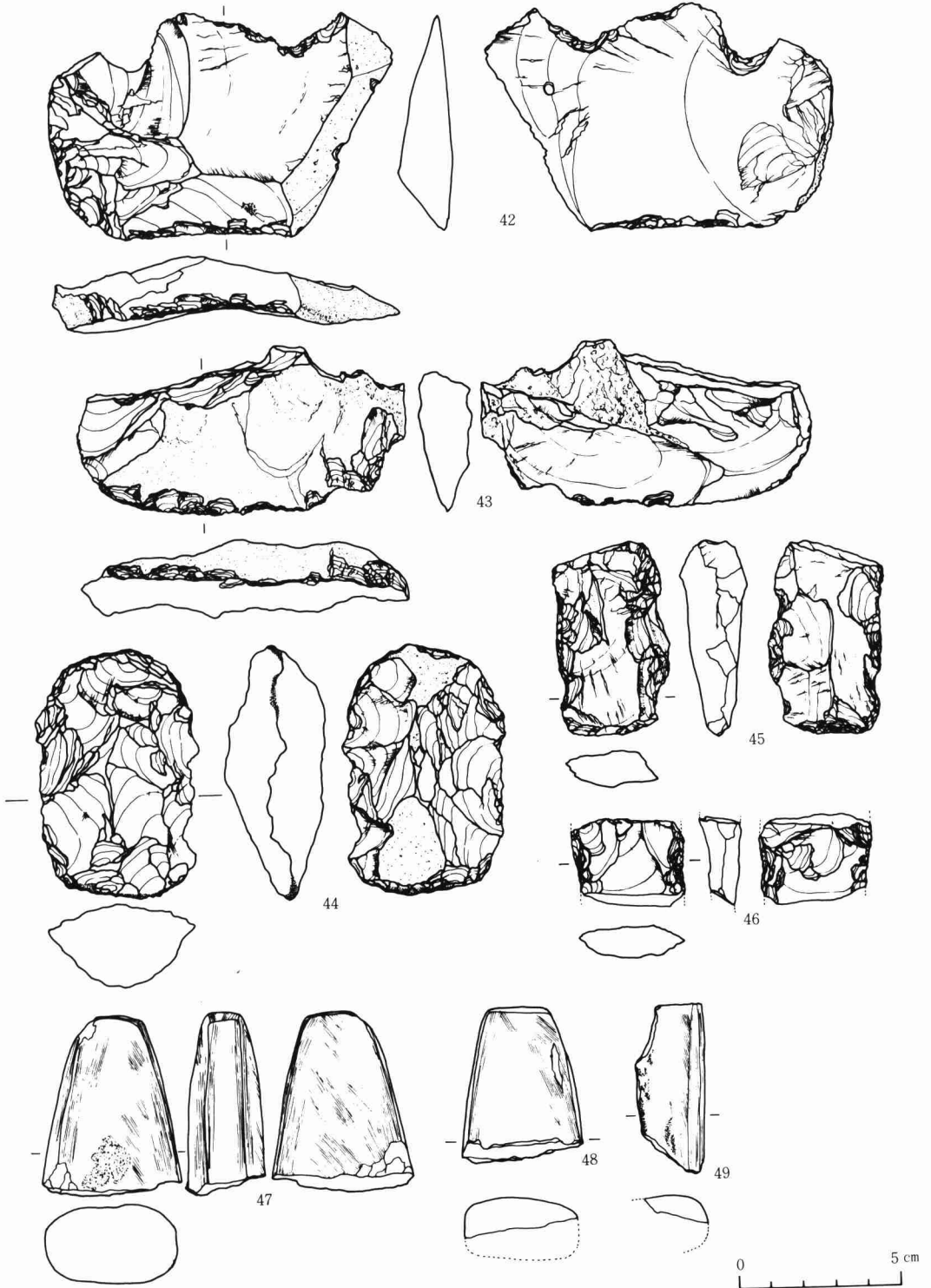
50は上面が幾分皿状に窪み、深い小さな凹みがある。下面には方形の足を持ち、やはり浅めの凹みがある。石皿としての他に凹み石として使用されたのであろう。全面に小さな凹凸が見られ、ノミ状の工具で打ちながら石皿を形作ったものと考えられる。51は上面の皿部分が風化し、ほとんど原形をとどめていない。下面には2個の足が残存、中心線の付近が浅く窪んでいる。

凹み石 (32図53～56)

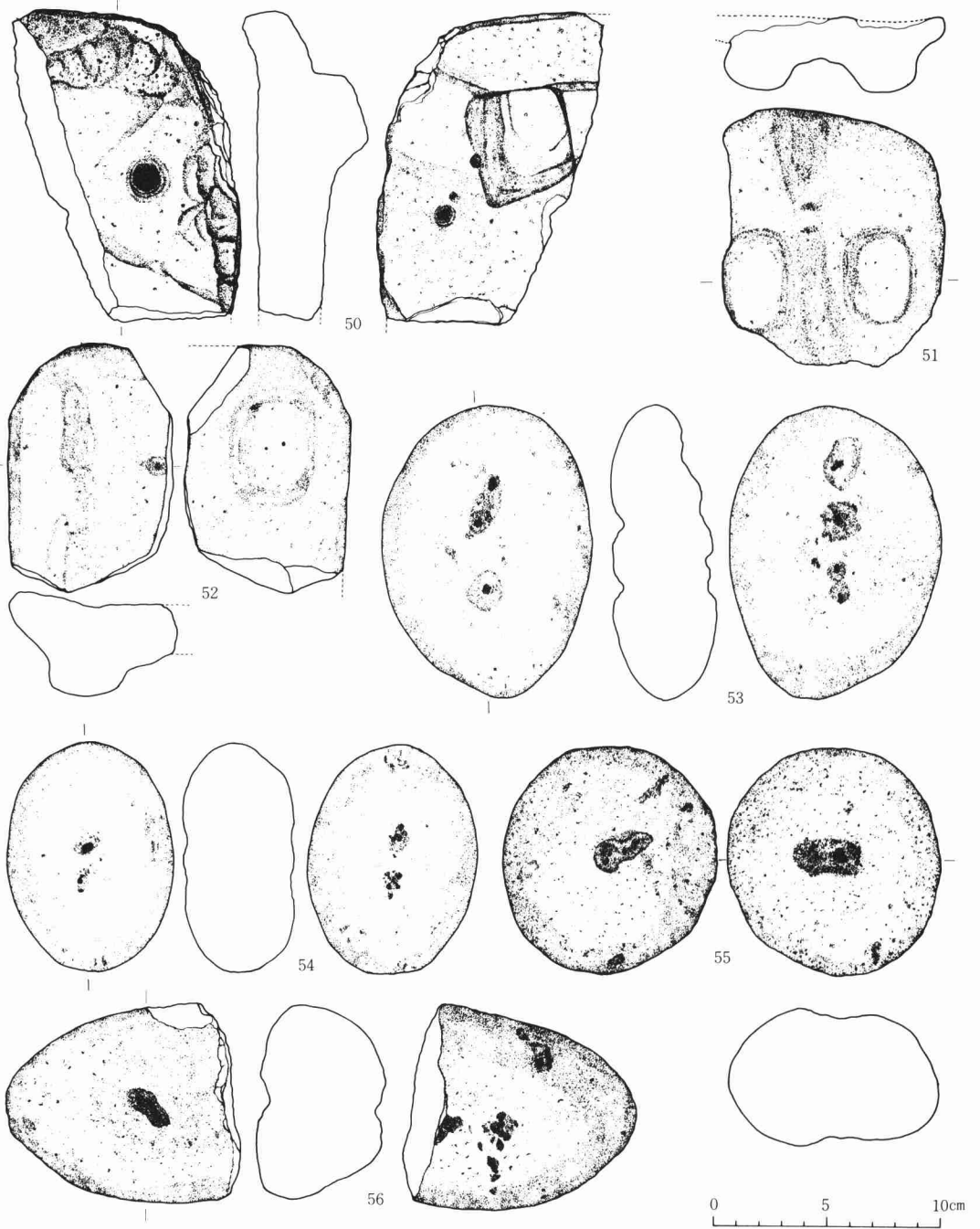
凹み石は自然の礫に人為作用により凹みが作られたものを集めた。本遺跡では図示したもの他に2点程出土しているが、いずれも両面に凹みが作られている。53は明瞭な深い凹みが同じ面に数個連続して作られており、他の凹み石でも1～2個連続している。凹みの深さはばらつきがある。

(3) 石製品

31図49は石剣または石棒の片鱗であろう。黒雲母片岩を使用。表面に細かな調整擦痕が見られる。



(第31图) 石器実測図



(第32図) 石器実測図

図版番号	出土地	層位	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	石 材	備 考
42	BI 06	II層	69	97	131.7	硬質頁岩	
43	CB 03 住	廃棄層下層	50	110	103	チャート	
44	CF 09	表土	89	50	117.5	珪質頁岩	
45	BH 09 炉		49	35	42.9	チャート	
46	CC 50	表土	26	35	12.8	硬質頁岩	欠損品
47	BI 06	〃	56	44	—	珪質緑色岩	〃
48	CB 03 住	廃棄層下層	48	38	—	黒雲母片岩	〃
49	〃	〃	63	—	—	〃	〃
50	BH 09 炉付近		138	99	488.5	石英安山岩質凝灰岩	
51	BI 06	表土	113	98	222.2	〃	
52	CB 50	〃	109	72	248	〃	
53	CB 03 住	床面	127	92	720.0	輝質安山岩	
54	〃	廃棄層下層	100	74	480.0	〃	
55	CH 09 炉付近		101	94	344.7	安山岩溶岩塊	
56	CB 03 住	埋土	88	—	479.7	〃	

第4表 石器観察表(3)

(4) 土製品 (第33図)

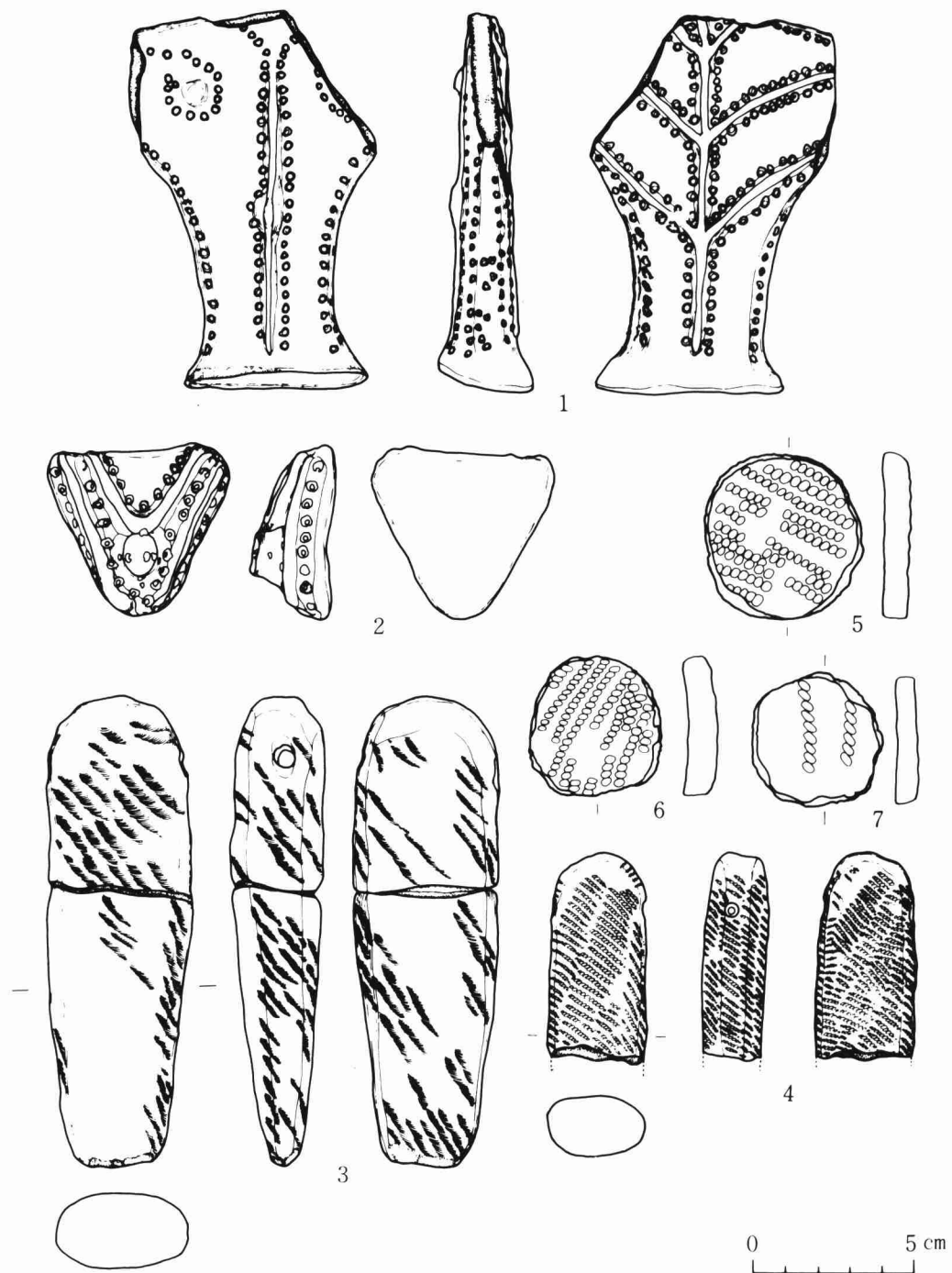
C B 03住居跡炉付近と土器廃棄層から土偶1、土製品3、円盤状土製品10点が出土した。

土偶 (第33図1)

土器廃棄層上面出土。頭部と左右両肩部が欠損。平板な体部に小さく隆起した乳房を持ち、胸部中央から胴下部にかけて垂直に隆起線を走らせ、腹部付近をやはり丸く隆起させている。背面には、隆線による文様が描かれている。胸部の下端は外に広がった形で終結し、脚の形は作り出されていない。さらに正面、背面の隆起部分の周囲と胴側面には刺突文が施されている。

土製品 (2~4)

2はC B 03住居跡の炉付近から出土。三角形の土製品である。正面中央には丸く突出した部分があり、この上方に「V」字状の調整隆線が、また両側縁にも調整隆線がめぐっている。隆線の周囲は、竹管状の工具による刺突が施されている。背面は無文で平坦。3、4は同種の土製品で共に横に折損し、4は下半を欠いた約 $\frac{1}{2}$ が残存していた。3はやや先細りの細長い形態で、上部は丸味を帯びている。上部は左右両端から貫通孔が穿たれ、孔の周囲は幾分摩耗している。尖端部は薄手につくられ、末端が摩耗している。表面にはLの無節縄文が施されている。白褐色を呈し、焼成は不良で全体に脆い。4は3よりやや小形で赤褐色を呈し、比較的堅く焼きしまっている。上部はやはり丸味を帯びており左右両側から穿孔されている。表面にはL Rの単節縄文を回転。



(第33図) 土製品実測図

円盤状土製品（5～7）

土器片を利用し、周囲を丸く打ち欠いて形作っている。表面には縄文が見られる。円盤状土製品は他に7点出土した。

5. 考察

五十瀬神社前遺跡は江刺平野の北部に位置し、江刺丘陵崖下の微高地上に立地した遺跡である。遺跡の西側は水田化された低地が広がり北上川に至る。本文中では触れなかったが、調査区の東部B F 03付近を深掘りした所、江刺丘陵の基盤を形成する稲瀬安山岩が検出されている（図版5-4）。それは西に向かって下降し、傾斜面には水の作用によって作られる甌穴が見られた。このことからかつては北上川の旧河道が遺跡付近を流れていたことが窺える。河道は水流の変化とともに西へと移動、旧河道上には土砂が堆積し、いつのころからか人間が居を構える様になった。本遺跡はこの様な立地のもとに縄文時代中期末葉に形成された小集落である。遺跡のすぐ西側は北上川流域に広がる低地帯となっており、この時期の集落としてはかなりの低地に立地している。本遺跡の背後に広がる台地上には中期中葉から後期にかけての土器や多数の石器が散布している。当時の人々の行動基盤を考える上では、台地上の遺跡との関連も見逃せない問題である。またここに居住した人々の主たる生業として、狩猟、採集とともに北上川を利用した漁撈をも考慮する必要性があろう。

遺構 発見遺構は炉施設のみの遺構を含めて考えると住居跡4棟となる。調査時にC B 03住居跡の東側、県道に接した部分に焼土、土器片が確認されたが、道路敷の砂利に阻まれて調査はできなかった。このことから県道下にも遺構が存在したことが予想でき、遺跡の一部は調査区の東方向、丘陵の崖下にまで伸びている可能性が濃い。しかしこの部分は県道とそれに隣接する用水路とがあるため遺構が残存している可能性は薄いと思われる。さらに北側が開田工事によりほとんど削平されていたことを考えあわせると、今回発見された遺構が本遺跡の中でかろうじて残存していた部分ということになる。また前述の様な自然的制約からも遺跡の規模はやはり限定されざるを得ない。

発見された4つの炉のうち、原形をとどめていたのはA F 50炉、C B 03住居跡の2つにすぎない。これらの炉は石組みと埋設土器を伴う形態の炉であった。この様な炉の形態は中期末葉に於いて東北全域に広く見られる形態である。土器の埋設方法にはそれぞれ若干の差がある。A F 50炉では掘り込み内の底面に直立して埋設され、C B 03炉では側壁に横位に埋設されていた。この差は埋設土器の機能にも関わる問題であろう。例えば、前者の場合埋設土器が炉本体の機

能を果し、後者の場合、炉に伴う副次的な機能を想定することもできる。中期末に見られるいわゆる「複式炉」と呼ばれる炉については現在、機能と形態を混同して捉えている場合もあり、これについては今後検討を加えていく必要がある。

C B03住居跡は廃棄され崩壊した後、土中へ埋没が始まり、埋土中に多量の遺物を包含しながら完全に埋没するという過程をたどった。埋土中の遺物が出土量も多く、一括した出土状況を示している点などから、この遺物包含層は流れ込みなどの自然的要因によるものではなく、人為的な廃棄という行為を伴って形成されたものと判断した。廃棄層中からの出土土器の多くは第Ⅱ群2類土器に包括できる。本遺跡の中で2類土器を床面に伴う遺構にはB H09炉があげられるが、遺跡の全貌が明らかでない状況で関連づけることには無理があろう。この廃棄層中には土器や石器のみならず破損した土偶、土製品等も廃棄されていた。

土器 本遺跡出土の土器は縄文時代中期末葉に属すると思われる土器が大半を占めた。詳細は「4. 遺物」の項に回し、ここでは第Ⅱ群土器について若干の附言を行う。

第Ⅱ群Ⅰ類は、本遺跡では少数例の土器群であったが、山内清男の型式編年設定以来大木10式土器として一応の定着した認識を得ている土器群である。その文様は調整された隆線と沈線との加飾により展開する曲線文に象徴される。加飾の方法には隆線による加飾、沈線による加飾、またその組み合わせがあり、これらの加飾によって区画された文様区内は、縄文部と無文部とに分かれ、無文部はていねいに磨かれているのが通例である。器形はAに代表される深鉢形が多く、注口土器なども伴う。本遺跡では資料が少なく実態を把握するまでには至らなかった。県内でⅠ類土器の好資料を出土している遺跡には貝島貝塚、崎山弁天遺跡などがあり、最近では複式炉を付設した住居跡を発見している繫第Ⅲ遺跡、広瀬遺跡、新幹線関係では高畑遺跡がある。

Ⅱ類の土器様相の大略は、器形は深鉢ではA～Dの各器形が見られ、それに注口土器、台付土器、浅鉢などの器種を伴っているが、Ⅰ類土器との主たる相異点として頸部に器形の屈曲点形成されるということである。それにつれて体部主体の文様帯から、口縁部体部の文様帯区分が発達してくる。(文様帯の区分線には隆線と並行する連続刺突文が多用される。) また深鉢に混ってDに見られる様な器高の低い土器も多くなっていく。これらの種々の特徴は明白に次の後期初頭土器(いわゆる門前式土器など)に伝達される点である。また区画文の施文の要素としては弧状隆起文、連続刺突文が多様される。前者は従来の隆線や沈線による文様の一部がこれに転化したものと考えられ、後者は後期初頭土器に見られる隆線上の刺突文(連鎖状隆線)へ続く施文要素と考えることができよう。しかしながら本遺跡の出土土器を見た場合、2類土器を連続刺突文の有無によって一線を画することは不可能であると考えた。それは一つに各土器の中にそれぞれの施文要素が混在していること、そしてそれらによって描かれるモチーフに

共通性が見られることなどによる。このためⅡ群2類土器はa、b、c共に並列させて記述を行った。今回の報告では意匠文（モチーフ）を十分に検討することができなかった。それは資料の多くが小破片であることによる。今後の資料増加を待って再考したい点である。

Ⅱ類土器の資料を出土した県内の遺跡としては、門前貝塚、堂の前貝塚、樺山遺跡などが知られており、前述の貝鳥貝塚、崎山弁天遺跡ではこれを欠いている。最近の調査ではこの時期を中心とした大集落跡の湯沢遺跡がある。

Ⅱ群2類土器の編年的位置づけの問題はなお熟考されなければならない。土器に見られる脈脈とした形質の流れをどこで区切るかは、その土器に表われる形質を見極めなければならないと思われる。2類土器を1類土器に後続させ、いわゆる門前式土器などの後期土器に先行させる位置づけは土器に見られる形質の流れから見て問題はないと考える。その場合、独立した一つの型式としてとらえるか、あるいは従来の型式に挿入するののかの問題がある。これについては以前よりこの種の土器群を大木10の新式として提唱する報告書が多い。本遺跡でも1類土器の形質を受けながら施文要素に新手法を加えた土器群としてこれを捉え、中期最末葉に位置づけた。主に体部文様のモチーフの共通性とそのモチーフが横方向へ展開していく点を1類土器との共通点としたものである。

石器 石器類の詳細な分析は、当時の人々の生産活動を知る上で重要な操作の一つである。今回の調査で得られた石器67点のうち確実に遺構に伴うものが半数にも満たないという出土状況からは、本遺跡に於ける石器類の組成を把握することには難点があろう。この様な条件下であるが、出土した石器類の組成を検討すると、狩猟用具である石鏃については小形のものが目立つ。また大形、長身のいわゆる石槍と明確に判断できる石器は出土しなかった。対象動物が小動物であった可能性がある。これらの尖頭器類に比べて、切削や剝搔機能を持つと考えられるスクレーパー類の出土頻度が目立つ。スクレーパー類が主として植物採取などに用いられたものか、採取された植物や獣・魚類の加工に用いられたのかは即断できないが、それらの需要が多かった点は推察される。この類は形態、刃部加工法などに個体差があるが、素材であるフレークの手頃な形態を利用して、若干の剝離によって形を整えたものに刃部の加工を施すだけで石器として使用できるという手軽さは一致している。ある程度の使い捨ての補充に使用されたものだろうか。この石器類の出土傾向については、①本遺跡の低地性による、②中期末という時期的傾向、③加工の手軽さ、などの要因が考えられる。

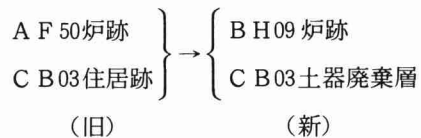
土製品 第33図3、4の土製品は最近宮城県上深沢遺跡で類似例が発見され、斧状土製品として紹介されている。名称は別にしても、この土製品が実用品であるのか装身具などの非実用品であるのかについて、本遺跡の出土品を観察した結果は次の点があげられる。上部に貫通孔が穿たれている点は明らかに紐を通すという所作を意図していると考えられる。装飾品としては

一五十瀬神社前遺跡一

かなりの粗製であること、比較的重いことなどの点が、実用品としては軟質であることの点があげられる。5の三角形土製品は秋田県坂の上遺跡に類似品が出土している。装飾品であろうか？これらの土製品も土器同様にC B 03廃棄層中に埋没していた。意図的な破損、意図的な廃棄とする根拠はなく、やはり破損品として廃棄したものであろうと判断した。

まとめ 以上調査で得た遺構、遺物について考察を試みたが、最後に発見遺構と遺物の関係について若干のまとめを行いたい。

前述の様に第Ⅱ群の土器群の中では1類→2類の新旧関係を想定したが、この差はC B 03住居跡埋設土器→C B 03土器廃棄層中出土土器の差とも合致するものである。さらにA F 50炉跡、B H 09炉跡の埋設土器を再考するならば五十瀬神社前遺跡で発見された各遺構について大まかには次の関係が得られよう。



しかし、2類土器の在り方、石器の組成などについてはまだ不明瞭な点も多い。加えて立地性の問題も遺構、遺物からは関連性を見出すことができなかった。この点の反省のもとに、今後は北上川流域における中期の集落の在り方、また台地上の遺跡との関連などの問題を解明することが課題となるであろう。

引用・参考文献

- 草間俊一他 (昭46) 「貝島貝塚」花泉町教育委員会
- 草間俊一他 (昭49) 「崎山弁天遺跡」大槌町教育委員会
- 及川 洵、小野寺信吾、遠藤勝博 (昭47) 「堂の前貝塚」陸前高田市教育委員会
- 吉田義昭 (昭35) 「門前貝塚」(郷土資料館報告)盛岡市公民館
- 及川 洵他 (昭49) 「門前貝塚発掘調査概要」陸前高田市教育委員会
- 鈴木孝志他 (昭43) 「北上市稲瀬樺山遺跡緊急調査報告」北上市教育委員会
- 草間俊一 (昭43) 「大瀬川田屋遺跡」石鳥谷町教育委員会
- 草間俊一他 (昭47) 「長谷堂貝塚」岩手県教育委員会
- 芳賀良光 (昭43) 「宮城県宮戸島貝塚梨木田遺跡の研究」宮城県教育大学歴史研究会
- 加藤 孝、後藤勝彦他 (昭42) 「西の浜貝塚緊急発掘調査概報」(宮城県文化財調査報告書第13集)
- 丹羽 茂 (昭46) 「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」(福島考古12) 福島県考古学会
- 越田和夫 (昭47) 「縄文中期における住居跡(炉址)について」福島大学考古学研究会紀要第2冊

- 丹羽 茂 (昭47) 「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」
福島大学考古学研究会紀要第1冊
- 後藤勝彦、遊佐五郎他 (昭47) 「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発見の竪穴住居と複式炉について」
(仙台湾) 仙台湾刊行会
- 秋田市教育委員会 (昭51) 「小阿地、下提遺跡、坂ノ上遺跡発掘調査報告書」
- 多摩ニュータウン遺跡調査会 (昭44) 「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ」
- 末木 健 (昭49) 「移動としての吹上パターン」(山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書) 山梨県教育委員会
- 林 謙作 (昭40) 「縄文時代・東北」(日本の考古学Ⅱ) 河出書房
- 財)岩手県埋蔵文化財センター (昭52) 「繫第Ⅲ遺跡現地説明会資料」
- 財)岩手県埋蔵文化財センター (昭52) 「湯沢遺跡現地説明会資料」
- 財)岩手県埋蔵文化財センター (昭52) 「広瀬Ⅱ遺跡現地説明会資料」
- 岩手県教育委員会 (昭50) 「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」(昭和49年度石鳥谷地区)
- 宮城県教育委員会 (昭53) 「上深沢遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」(宮城県文化財調査報告書第52集)

谷^や地^ち遺跡

遺跡記号：YC

所在地：江刺市稲瀬字谷地116他

調査期間：昭和49年7月25日～9月3日

調査対象面積：2720m²

平面測量基準点

東京基点：438.692km (BA50)

基準高：海拔48.40m

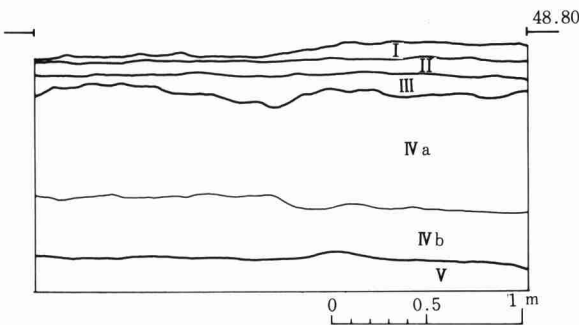
1. 遺跡の位置と環境 (第V図P.51 第VI図P.53)

谷地遺跡は江刺市稲瀬字谷地に所在し、江刺の中心部（岩谷堂）より直線にして北西約6km、また国鉄六原駅より東2.5kmに位置し、県道江刺北上線より50m程東側に寄っている。

南流を続ける北上川は国鉄六原駅付近で大きく東へ曲流し、更に当遺跡の南約100mで東よりの田屋川を合流して南へと向かう。遺跡はこの北上川と田屋川の合流点に形成された自然堤防上の微高地に立地する。地目はほとんどが水田（畑地を水田化したもの）と宅地で、一部僅かに畑となっている。水田は圃場整備事業の完成に伴い整然と区画されており、遺跡の東側は一段低くなっている。遺跡と東側水田面の比高は1～1.5mを測る。なお、遺跡の標高は48.2～48.5m程である。

2. 調査の方法と経過 (第2図)

本遺跡も東北新幹線建設事業にともなって昭和47年に実施した路線敷内の遺跡分布調査の結果発見されたものである。調査は路線敷内の遺跡全体を対象にして、グリッド設定にかかわる測量より着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭東京起点438.680kmと700mの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、438.692kmの地点を本遺跡の基準点（BA50）とした。このBA50を基点にして1辺3mのグリッドをくみ市松状に表土を除去して遺構の探索につとめ遺構の発見にともない拡張していった。その結果B区からC区にかけて遺構が集中して検出されたため、この部分は全面発掘となった。なお、調査対象区のA区は宅地、それに庭木の移動等でかなり深くまで攪乱され、遺構が集中して検出されたB区も耕作土の削平が一部遺構にまで及んでいた。



(第1図) 土層図

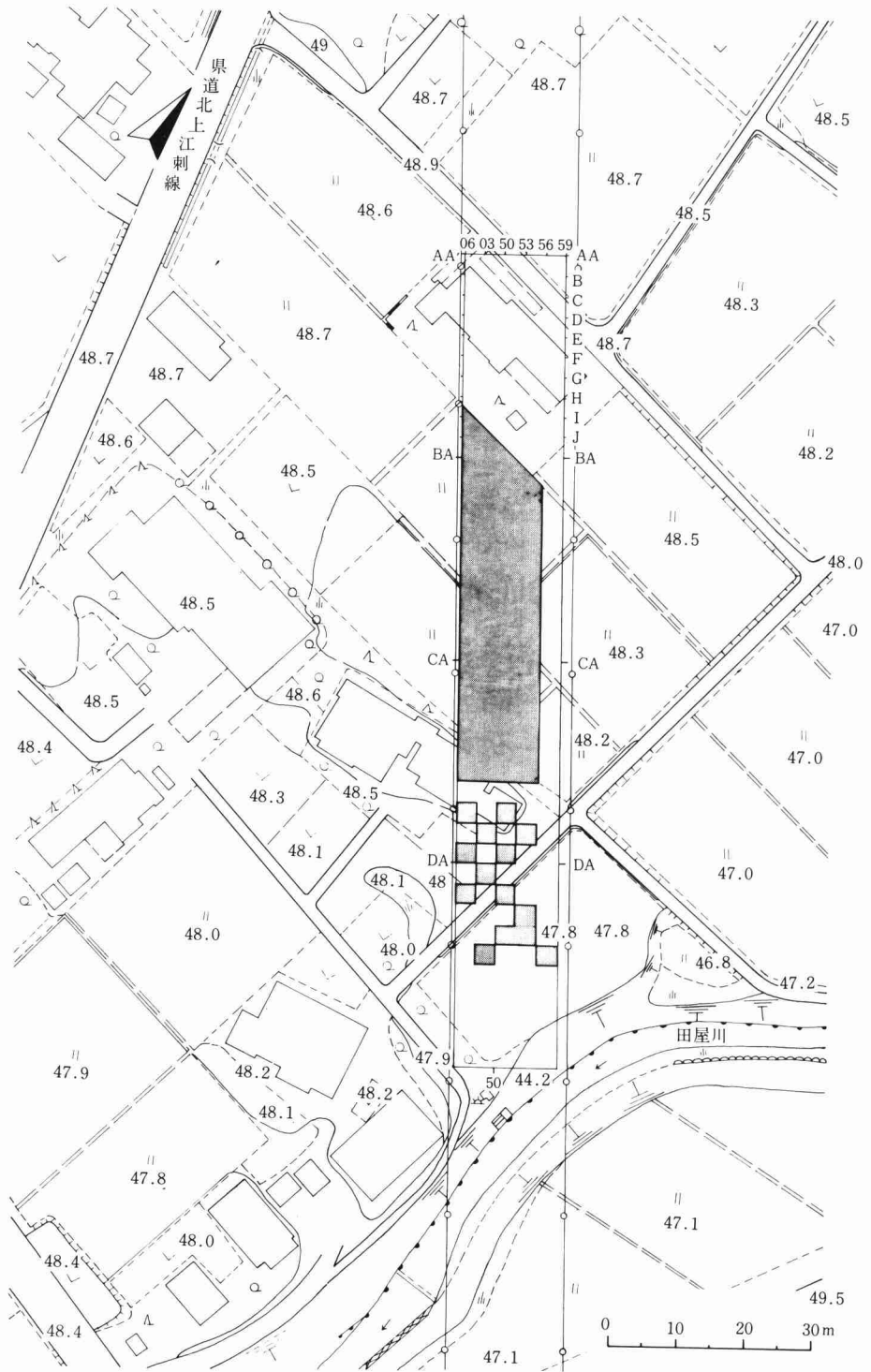
3. 調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層位 (第1図)

BC03グリッド深掘りの東壁セクションにより層位をみると次のようになる。

第I層は表土で耕作土。第II層暗褐

—谷地遺跡—



(第2図) 谷地遺跡グリット配置図

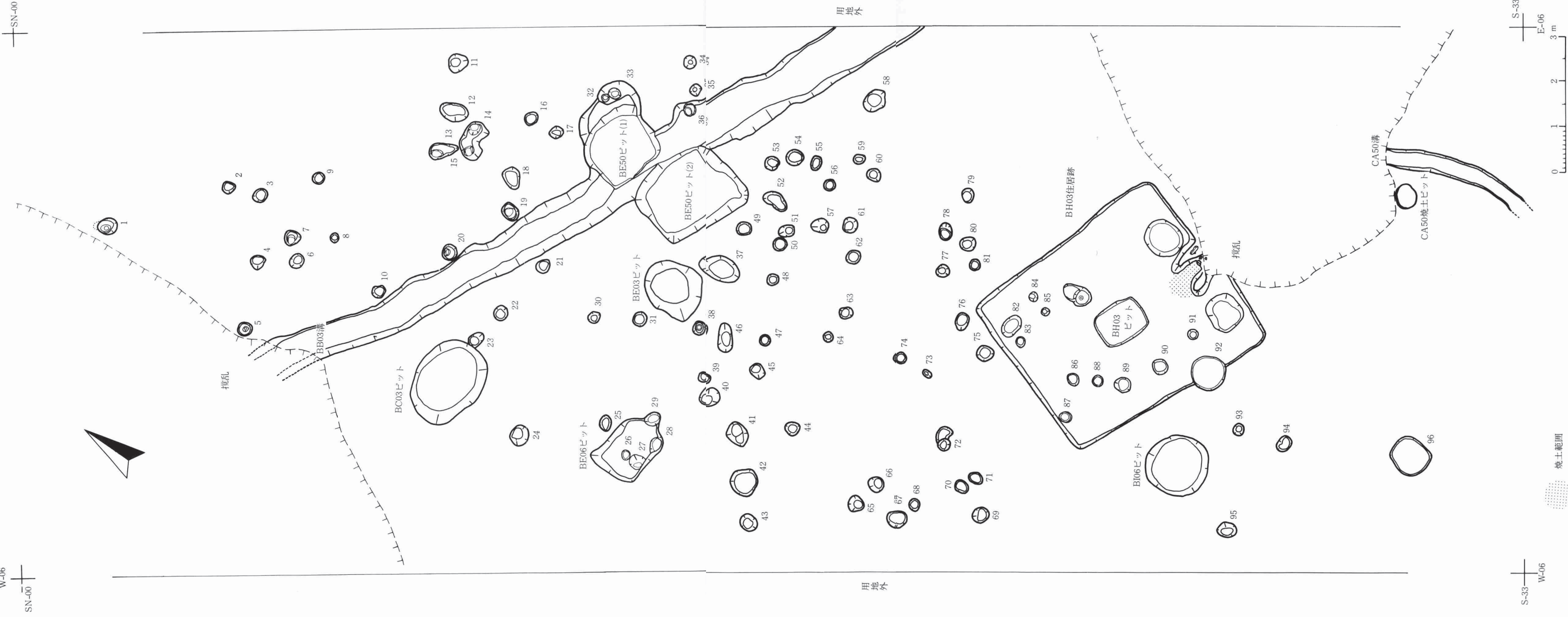
E-06
SN-00

W-06
SN-00

S-33
E-06

S-33
W-06

—谷地遺跡—



(第3図) 谷地遺跡遺構配置図

色土10 YR $\frac{3}{4}$) 粘土質シルト、第Ⅲ層黄褐色土 (10 YR $\frac{5}{8}$) シルトで地山、第Ⅳ層明黄褐色土 (10 YR $\frac{6}{8}$) 砂質シルトで下層 (b層) に移るにつれて微砂を多く含む。第Ⅴ層は砂層となる。

〔2〕 発見された遺構と遺物 (第3図)

調査の結果遺構は調査区の北側・B区に集中して検出された。発見された遺構は竪穴住居跡1棟、焼土ピット1基、溝2本それに大小のピット103個である。以下順を追って各遺構と出土遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

BH 03 住居跡 (第4図)

〔遺構の確認〕 調査前表土の一部がブルドーザにより削平され、その部分に焼土、炭化物それに土器片の散布により住居跡の存在が推察された。遺構の検出確認面は第Ⅱ層の地山面である。

〔重複〕 15個のピットがみられるが、P₁～P₃以外は住居跡と重複関係にある。P₁₄との新旧関係は不明であるが、その他のピットは住居跡より新しい。

〔平面形、方向〕 長軸4.9m、短軸4.2mで多少歪んではいるが、ほぼ長方形に近い。長軸方向は東西であり、床面積は18.4㎡程と思われる。

〔壁、床〕 ブルドーザの削平により東側の残存部は少ないが、壁高は10～15cm程でほぼ垂直に立ち上がる。黄褐色の地山面を直接床面としており、貼床、周溝は認められない。

〔柱穴〕 住居跡にともなうピットは3個であるが、柱穴ではない。精査を加えたが柱穴は検出されなかった。

〔カマド〕 東壁中央部に設置されているが、ブルドーザによる削平のため煙道部は欠損し、僅かに袖の一部と火床面が残存していた。軸方向はN-10°-Eである。

〔その他の施設〕 貯蔵穴2個とロクロ施設にともなうピットが検出された。

貯蔵穴：カマドの西側にP₁とP₂が検出された。いずれもほぼ円形である。P₁はカマドの北側に検出されたピットで径76～86cm、深さ約25cmを測る。埋土は褐色～暗褐色で埋土からは土器片が10片程発見された。P₂は南側に検出されたもので径約82×74cm、深さ30cm程である。埋土は焼土・炭化物を含んだ褐色土でかなりの遺物も出土した。特に下部 (No.2層) からは完型の土器師、須恵器の坏、それに土製品等が出土している。

ロクロピット：住居跡の中央ほぼ北寄りにロクロ施設にともなうピットが検出された。径84cm、深さ約35cmを測り、底部中央に径10cm、深さ10cm程の小穴を有し、北側には径60×50cm、深さ

—谷地遺跡—

約28cmの張り出し施設をもっている。ピットの底部に白色の粘土が小ブロック状に検出され、土師器の破片も20片程出土している。

〔出土遺物〕（第6、7図） 遺物はカマド周辺から多数出土、特にカマド隣接のP₂から集中出土した。

土師器

坏 小破片が多く全体を復元できる資料は僅かであった。すべてロクロ使用、内面には黒色処理が施されている。

a ロクロから切り離した後、底部と体部下半とを回転ヘラケズリ調整したもので、1点のみ出土した（6図14）。14は大形の坏で口縁下方に沈線状に強く入ったロクロ痕がある。内面はヘラミガキが施されているが、保存が悪くミガキの痕跡は不明瞭である。

b 回転糸切りによってロクロから切り離した後、調整は行なわれないもので、上記の一点を除いてすべてbに含められる（6図12、13）。12は体部に丸味を持って外傾する器形で、内面にはヘラミガキがなされている。13は体部にわずかな脹らみを持って開く。内面のミガキ痕は保存が悪く不明瞭である。

高台付坏 破片が1点出土したが、復元実測は不可能であった。坏内面には黒色処理が施されている。

小形甕 口径10cm内外の小形の甕である。ロクロ成形の後、外面の体部下半のみを縦方向にヘラケズリしている。形態は頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部でさらに逆「く」の字状に屈曲、上方につまみだされる（6図15、7図7）

甕 甕は胴部に幾分脹らみのある長胴の甕がすべてである。2種類に大別できる。

a 口径20cm内外、薄手の甕である。口縁部から体部上半にかけての破片が多く、下半から底部の資料は僅かのため不明な所が多い。体部上半には内外ともに調整は行なわれておらず、シャープなロクロ痕が見られる。頸部より「く」の字状に大きく外傾し、口縁部でさらに逆「く」の字状に上方につまみ出される（6図16、7図8、9）。下半はケズリを受けている破片が2点出土している。

b 甕類の中では最も多いタイプで、外面の体部上半にカキメ（刷毛状工具によるロクロナデを称した）が見られ、下半にケズリを施すものである（6図17、7図10～12）。内面はやはりカキメの見られるものと、フラットなロクロ痕が残るものがある。希に外面上半に平行叩き痕が見られるものがあつた。叩きの後、カキノ調整を行なったものである。器形はやや胴張りのした長胴の甕で、頸部から外傾して開き口縁は上方、下方につまみだされるもの（7図10、11）、断面三角形状を呈するものがあるが、前者が多い。

須恵器

坏 坏は圧倒的に須恵器の坏が多い。色調は灰褐色～青灰色を呈し、口縁部近くに重ね焼痕の見える硬質の須恵器坏が多い。しかし少数例で硬質で赤褐色の生焼け須恵器も見られる。

(6図1～10、7図1～6)。

a ロクロからの切り離しが回転糸切りで、その後底部を手持ちのヘラケズリ調整したものである。2点のみの出土。7図5は体部から口縁にかけて直線的に広がり、口縁は先細る。底面は部分的に糸切り痕を残してヘラケズリを受けている。6図9は体部に丸味を持って立つ器形で、底面全体にヘラケズリを受け、文字が刻まれている。

b 回転糸切りによる切り離しの後、全く調整が施されないもの。上記の2例を除いて須恵器の坏はbに含まれる。器形は体部から口縁にかけてほとんど直線的に広がるものと、丸味を持って開くものがあり、それぞれ口縁部が直線的なものとならずに外反するものが見られる(6図1～8、10、7図1～4、6)。

壺 全体を復元できる資料はなかった。口縁部の破片を見ると頸部から外反気味に短かく広がるもの、比較的長くほぼ直立するものがある。体部の器形は丸く脹らむものが多い。体部の器面調整には次の種類が見られる(6図18、7図13、14)。

a 外面—上半は叩きの後刷毛状工具によるカキメ、下半は縦方向のケズリ、内面—ロクロ痕(6図18)

b 外面—上半は刷毛状工具によるカキメ、下半は縦方向ケズリ、内面—刷毛状工具によるカキメ

c 外面—上半ロクロ痕、下半縦方向ケズリ、内面—ロクロ痕(7図14)

大形壺 体部の破片のみの出土で断片的な観察しかできなかった。あるいは大形甕と称するべきかもしれない。破片からは次の種類に分類できる(8図)

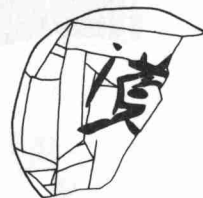
a 外面—格子目叩き 内面—ナデツケ(8図2)

b 外面—平行叩き 内面—あて工具(平行沈線文)(1、3)

c 外面—平行叩き 内面—あて工具(無文)(5)

d 外面—平行叩き 内面—ナデツケ

e 外面—平行叩き 内面—ロクロ痕(4)



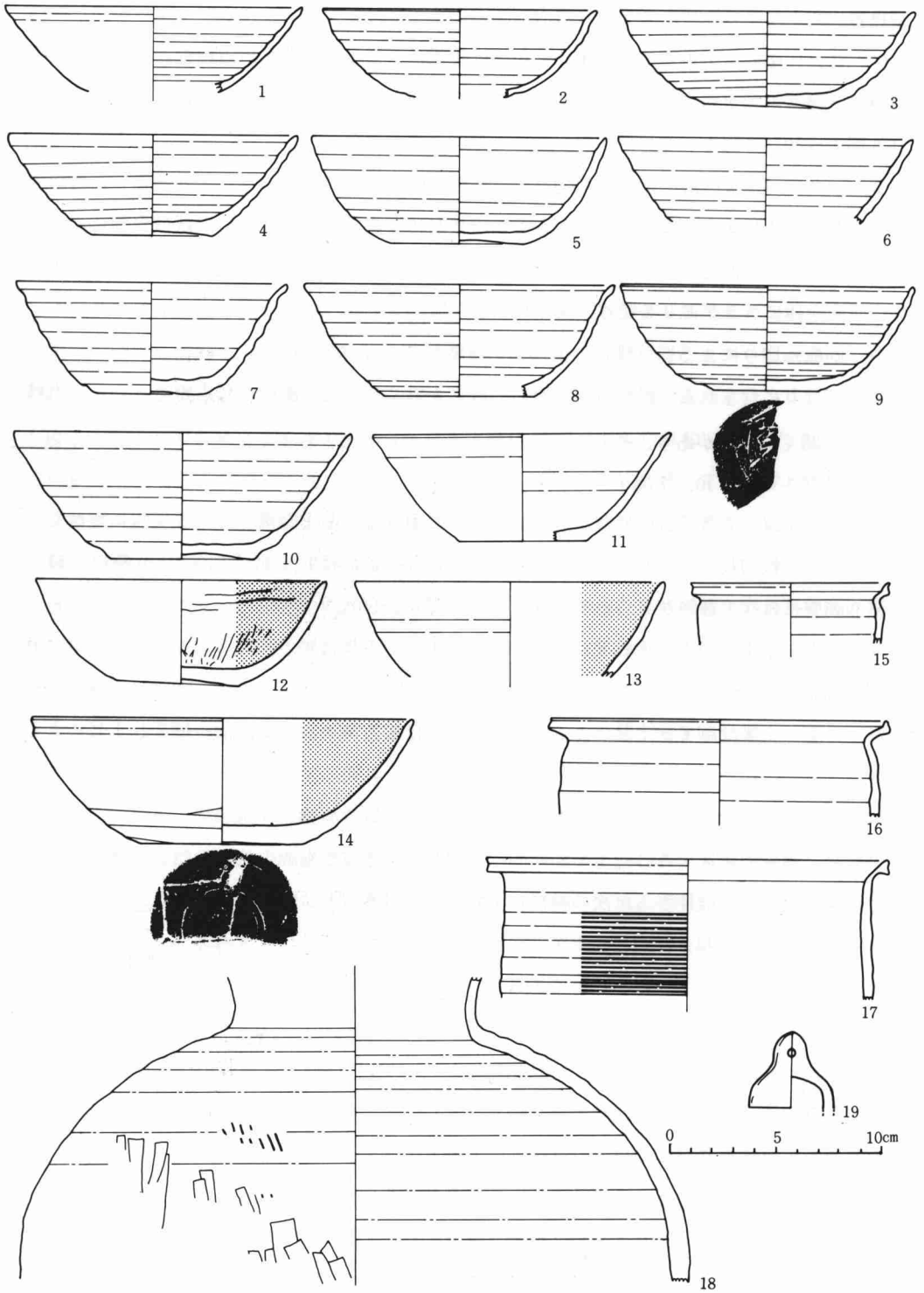
(第5図) 刻字を有する坏底部

<刻字を有する須恵器坏について>(第5図、第6図9)

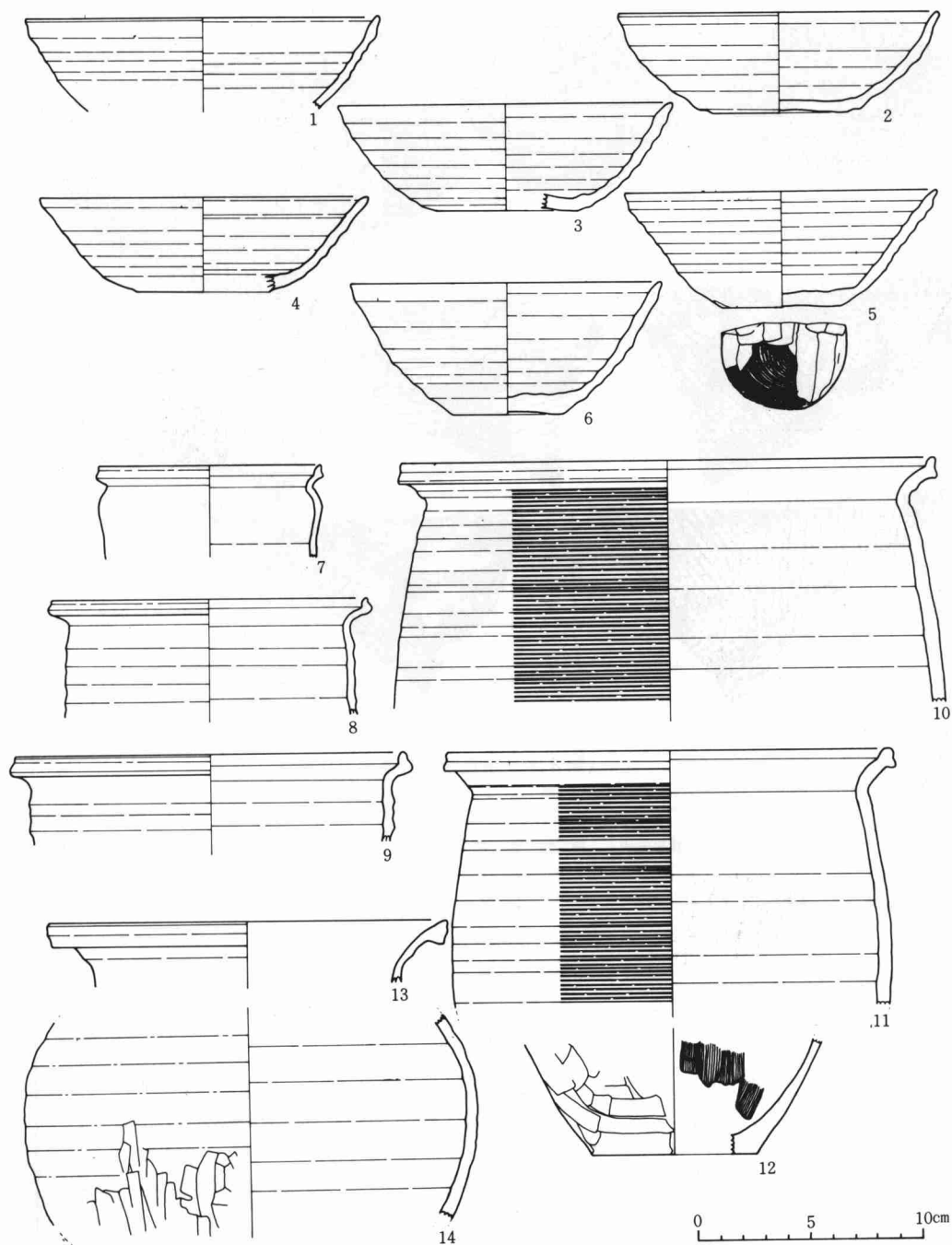
6図9は幾分褐色味のある灰黒色を呈し、外面に僅かな光沢がある。

また非常に堅く焼き締められており、色調、焼成、器形、調整のどの点からも他の須恵器とは異質の感がある。刻まれた文字については明確な判読ができなかったが、生産地の違い、使用者の性格に一考が必要となる興味深い資料である。

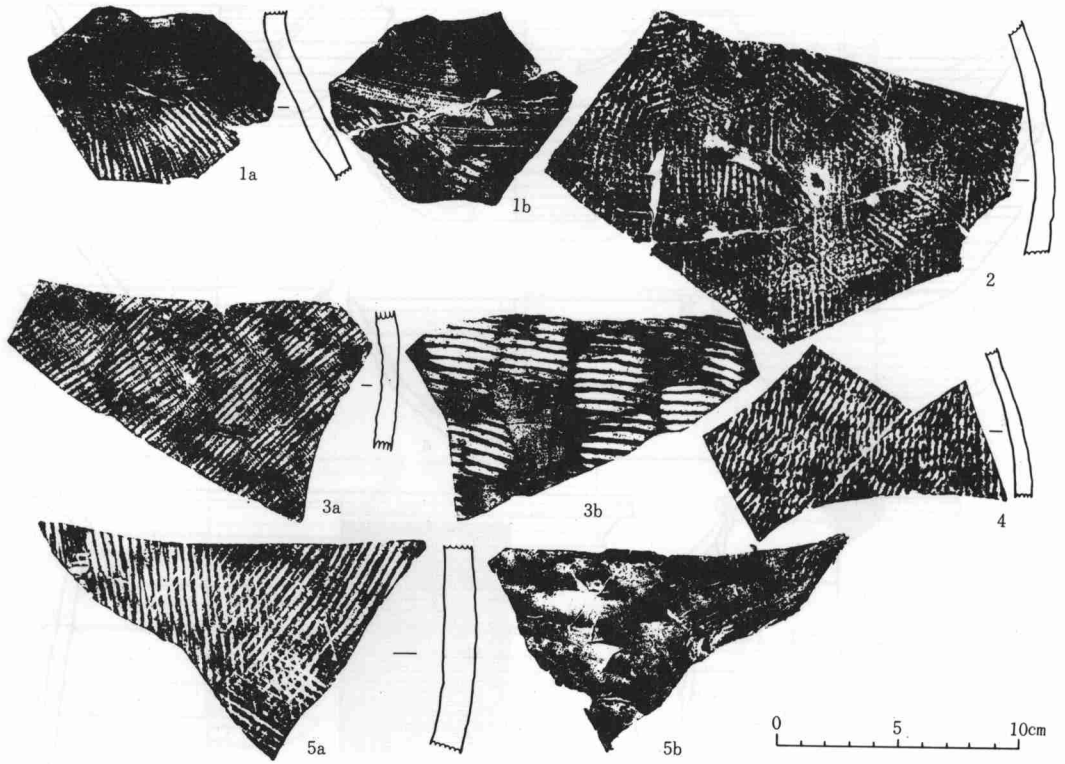
—谷地遺跡—



(第6図) B H 0 3 住居跡ピット2 出土遺物実測図



(第7図)BH03 住居跡出土遺物実測図



(第8圖) 須惠器大形壺破片拓影圖

第1表 図示土器観察表

器種	図版番号	出土地点（接合関係）	種別	分類	外面調整	内面調整	測定値 (cm)			
							口径	底径	器高	
坏	6 図1	ビット2	須恵器	B	無	無	(14.0)	—	—	
	2	"	"	"	"	"	(13.0)	(4.4)	4.2	
	3	"	"	"	"	"	14.0	5.6	4.5	
	4	"	"	"	"	"	13.8	5.8	4.8	
	5	"	"	"	"	"	(14.0)	(6.4)	5.1	
	6	"（住居跡埋土と接合）	"	"	"	"	(14.0)	—	—	
	7	ビット2	"	"	"	"	(12.8)	(4.8)	5.3	
	8	"	"	"	"	"	(14.6)	(7.0)	5.4	
	9	"（床面と接合）	"	A	底部手持ヘラケズリ	"	(14.0)	(5.0)	5.0	
	10	ビット2	"	B	無	"	(16.0)	(6.6)	6.0	
	11	"（かまど付近と接合）	赤焼き土器	"	"	"	(14.2)	(6.0)	5.1	
	12	ビット2	土師器	B	"	ヘラミガキ	(13.8)	(5.7)	4.9	
	13	"	"	"	"	"	(14.6)	—	—	
	14	"	"	A	底部体部下半回転ヘラケズリ	"	(18.0)	(7.4)	6.0	
7 図1	住居跡埋土	須恵器	B	無	無	(16.0)	—	—		
2	ビット2（埋土、かまど付近と接合）	"	"	"	"	(14.4)	(6.0)	4.5		
3	埋土（かまど付近と接合）	"	"	"	"	(15.0)	(6.4)	4.8		
4	ビット2（埋土、B I 06ビットと接合）	"	"	"	"	(14.8)	(6.0)	4.3		
5	ビット1	"	A	底部手持ヘラケズリ	"	(14.0)	(5.2)	5.2		
6	住居跡埋土	"	B	無	"	(14.0)	(5.0)	5.9		
器種	図版番号	出土地点（接合関係）	種別	分類	外面調整	内面調整	測定値 (cm)			
							口径	頸部径	体部径	底部径
小形壺	6 図15	ビット2	土師器		無	無	(9.4)	(8.4)	(8.9)	—
	7 図7	かまど付近	"	"	"	"	(10.0)	(9.2)	(10.0)	—
	6 図16	ビット2（かまど付近と接合）	土師器	A	無	無	(16.0)	14.8	15.2	—
	17	ビット2	"	B	体部上半カキメ	無	(19.0)	(17.4)	(17.7)	—
	7 図8	かまど付近	"	A	無	無	(14.0)	(12.6)	(13.1)	—
	9	埋土	"	"	"	"	(17.6)	(16.2)	(16.4)	—
	10	埋土（床面と接合）	"	B	体部上半カキメ	"	(24.0)	(21.6)	(24.7)	—
	11	床面	"	"	"	"	(20.0)	(17.6)	(19.7)	—
	12	埋土	"	"	体部下半ケズリ	"				7.4
	6 図18	ビット2（かまど床面と接合）	須恵器		上半叩き→カキメ 下半ケズリ	無	—	11.4	31.5	—
	7 図13	ビット1（埋土と接合）	"		無	無	—	—	20.4	—
	14	キメが施されていない	"		上半無、下半ケズリ	"	17.8	—	—	—

○測定値（ ）は推定値を示す。
○調整無はクロロ痕をとどめ、その後の調整は施されていないものを意味する。

第2表 BH03 住出土土器破片数表

器種	部位	外面調整	内面調整	かまど付近	ピット1	ピット2	ピット3	床面	埋土	合計	備考		
土	坏A	図上復元	無	ヘラミガキ(内服)	0	0	3	0	0	3			
	坏B	"	底部、体部下回転ヘラケズリ	"	0	0	1	0	0	1			
土	坏B	破片	口縁部	無	0	0	7	0	0	18	25		
		体部	"	"	0	0	2	0	1	26	29		
		底部	"	"	0	0	1	0	0	7	8		
土	高台坏	台接合部	無	"	1	0	0	0	0	1			
	小形壺	口縁部	無	無	1	0	1	0	0	1	3		
土	坏A	体部	体部下	下半ズリ	"	0	0	1	0	0	1	2	
		口縁部	無	無	1	0	1	0	0	1	3		
		口縁部	無	"	0	0	6	0	0	1	7		
		体部上半	"	"	1	0	3	0	6	6	16		
		体部下半	ケズリ	ナデツケ	1	0	0	0	1	0	2		
土	壺	底部	無	無	0	0	1	0	0	1		底部回転糸切り無調整	
		口縁部	上半→カキメ、下半→ケズリ	上半→カキメ、下半→無	0	0	0	0	1	0	1		
		"	"	無	0	0	1	0	1	0	2	● 無はロクロ痕をとどめ、その後の調整は行なっていないもの、以下同様	
		口縁部	無	無	0	0	15	0	6	19	40		
		体部上半	カキメ	カキメ	10	0	0	0	0	1	11		
		"	"	無	18	2	24	7	2	32	85		
		"	叩き→カキメ	不明(無?)	1	0	0	0	0	0	1		
		"	不明(無?)	"	0	1	8	0	0	14	23		
		体部下半	ケズリ	無	58	1	59	8	3	129	258		
		"	"	カキメ	4	4	2	0	0	2	12		
"	"	ナデツケ	2	0	1	0	2	1	6				
土	坏A	完形	無	無	0	0	1	0	0	0	1		
		図上復元	"	"	0	0	9	0	0	8	17		
	坏B	"	底部手持ヘラケズリ	"	0	1	1	0	0	0	2		
		破片	口縁部	無	無	12	1	25	0	0	46	84	
	土	坏B	体部	"	"	2	1	26	0	0	28	57	
			底部	"	"	6	2	9	0	0	1	18	
			口縁部	無	無	0	0	0	0	0	0	0	
	土	須	大形壺	体部	格子叩き	ナデツケ	1	0	0	0	0	1	● 大形壺は大形で厚手、広口のものを称した。
			"	"	平行叩き	あて工具(平行)	1	0	1	0	13	7	22
			"	"	"	(無文)	0	0	0	0	0	21	21
			"	"	"	ナデツケ	0	0	0	0	0	4	4
	土	壺	"	"	"	不明	2	0	1	0	0	5	8
口縁部			無	無	3	1	0	0	2	0	6		
"			"	カキメ	0	0	0	0	3	1	4		
体部			上半叩き・カキメ、下半ケズリ	無	0	0	3	0	0	2	5		
"			上半 無、下半ケズリ	"	0	1	0	1	0	0	2		
"			上半 カキメ、下半ケズリ	カキメ	0	0	1	0	0	1	2		
体部上半			無	無	4	0	1	!	0	0	6		
"			カキメ	"	1	0	3	0	0	4	8		
体部下半			ケズリ	カキメ	0	0	3	0	0	4	7		
"			"	無	3	0	1	0	0	2	6		
土	器	"	"	カキメ・ナデツケ	0	0	0	0	0	2	2		
		底部	"	ナデツケ	0	0	0	0	1	1	2		
		灰(軟質)	口縁部	無	無	1	0	5	0	0	4	10	
		赤褐色	体部	"	"	0	0	3	0	0	2	5	
			底部	"	"	0	0	1	0	0	1	2	
			口縁部	無	無	4	0	6	0	0	2	12	
			体部	"	"	1	0	6	0	0	3	10	
		底部	"	"	6	0	2	0	0	0	8		

赤焼き土器

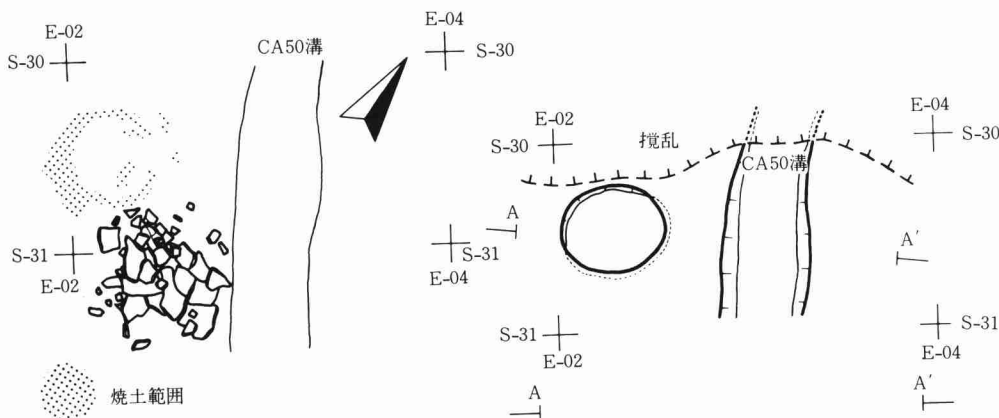
須恵器、土師器以外に少数であるが、灰白色、赤褐色を呈した軟質の坏が出土している。総称して赤焼き土器とした^{注1)}。酸化炎焼成によるもので、成形後調整が全く行なわれない一連の土器である。小破片が多く、復元実測可能なものは6図11の一点のみである。11は灰白色で非常に軟質、調整は行なわれていない。体部下半に幾分丸味を持ちながら外傾し、口縁はやや先細る。

(2) 焼土遺構

CA 50 焼土ピット (第9、10図)

BH 03 住居跡の東約4m、CA 50 溝に隣接して検出された。この部分もブルドーザの削平により上部は攪乱を受け、クリーニングの段階で焼土と炭化物がほぼ円形に検出され、東側に接して須恵器の大型の壺が横位につぶれたかたちで出土したが、上部は削平と同時に散逸していた。

精査の結果焼土ピットは約50×40cmの円形のプランを呈し、深さは約20cmを測る。埋土は炭化物、焼土を多量に含んだ暗褐色土で固くしまっていた。周壁はかなりの熱を受け赤褐色を呈し底部には炭化物、焼土が多量に認められ固く焼けていた。なお須恵器の壺の検出された周辺にも若干ではあるが焼土、炭化物の散布が認められ、土器片を除去したあとも焼土がブロック状に集中して検出された。しかし火を使用した痕跡は認められなかった。



(第9図) CA 50焼土ピット検出状況図

層No	土色	備考
1	暗褐色 (10Y R 3%)	固くしまっている。炭化物、焼土遺物等含む
2	〃	炭化物が特に多く焼けている
3	赤褐色 (2.5Y R 6%)	焼土 焼けて固くなっている
4	褐色土 (10Y R 6%)	溝の埋土、炭化物若干含む
5	〃	乱土

(第10図) CA 50焼土ピット及びCA 50溝平断面図

〔出土遺物〕（第11図）

土師器

坏 1はロクロ使用の坏で底部を欠く。内面にはヘラミガキ痕が観察され、黒色処理が施されている。底径に比して口径が大きく、体部に幾分脹らみを持ち外傾する器形である。口縁はやや外反する。他に土師器坏の破片は2点出土。

甕 2はロクロ成形の小形甕で体部上半から口縁部が残存。体部は丸味を持ち、頸部から「く」の字状に大きく外傾する。口縁は僅かに上方に引き出された形をとる。

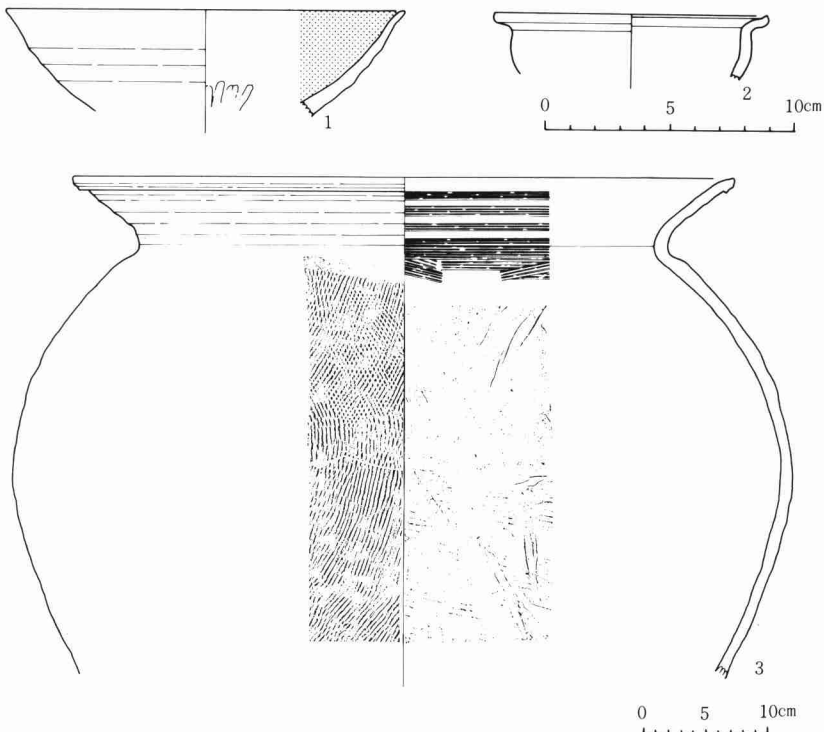
他に体部上半外面にカキメ痕の見える長胴形の甕などの破片が出土している。

須恵器

坏 ロクロ使用の体部片が8点出土した。いずれも細片で復元実測は不可能であった。

壺 体部下半にケズリを受けた壺の細片が4点出土した。

大形壺 3は口径53cm、体部径62.5cmの大形の壺である。口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{3}$ が残存。器形は体部が大きく張り出し、頸部で一度くびれ、口縁部が再び外傾して開く。口縁は下方に短かくつまみ出される。体部外面には重複した平行叩きが施され、全体を灰緑色～灰白色の自然釉が覆っている。内面は体部中半には平行沈線文のあて工具痕が、それより上方はオ



サエの痕が見られる。さらに内面の頸部から口縁部にかけて、幅広の刷毛状工具によるカキメが施されている。全体灰黒色を呈し、焼成は良好で堅緻である。

（第11図） C A 50焼土ピット出土土器実測図

(3) 溝

BB 03 溝 (第3図) BH 03 住居跡の北6 m程の位置に検出され、BE 50 ピット(1)、BE 50 ピット(2)を切って東西に走る溝である。検出された溝の全長は14 m程で調査区域外に延びているが、西側はブルドーザによる削平のため消滅している。確認面からの規模は上幅70~100 cm、下幅50~80 cm、深さは10~20 cmと浅く断面は皿状を呈する。埋土は炭化物を若干含んだ暗褐色の単層である。出土遺物としては縄文土器、弥生式土器の細片が夫々1片、須恵器の破片が5片程出土している。

CA 50 溝 (第3図) CA 50 焼土ピットに隣接するように検出された溝である。全長は3 m程で北はブルドーザにより破壊、南は自然消滅していく。上幅40~30 cm、深さ10 cm内外と極めて浅い。埋土はBB 03 溝と同じであるが、遺物は皆無である。

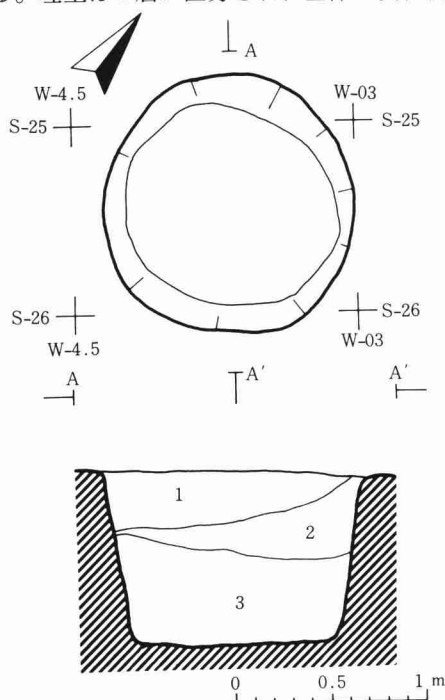
(4) ピット類

BI 06 ピット (第12図) BH 03 住居跡の西1 m程の地点に検出されたピットである。平面形は径約1.3×1.4 mの円形で深さは約0.9 mを測る。埋土は3層に区分され、全体に炭化物を含む。1、2層は炭化物、焼土、それに遺物を多く含み、特に2層は多量の焼土をブロック状に含み、3層とは明らかに異なる。

その他のピット (第3、13図) 以上述べてきた遺構の他に102個の大小ピットをその他のピットとして一括し、これ等のピットを形状、埋土の状況、それに規模等よりA、Bの二つに区分した。

A: 径1 m以上のもので、平面形は隅丸長方形が殆どである。埋土は暗褐色である。これ等のピットは夫々グリット名を付けて第3表に一括した。

B: 平面形が楕円~円形を呈した柱穴状のピット群である。これ等のピット群は住居跡その他の遺構とも重複関係にあるが、相互の新旧関係については住居跡以外不明である。埋土は褐色~暗褐色の単層で、全般に炭化物を粒子状に含む。これ等のピット群はNaを付し、第4表にまとめた。



- 1. 褐色(10Y R 7/4)土 炭化物、焼土、土器片混入
- 2. 暗褐色(10Y R 3/4)土 特に焼土の塊多量に含む
- 3. 黄褐色(10Y R 5/6)土 炭化物粒子状に若干含む
遺物含まず

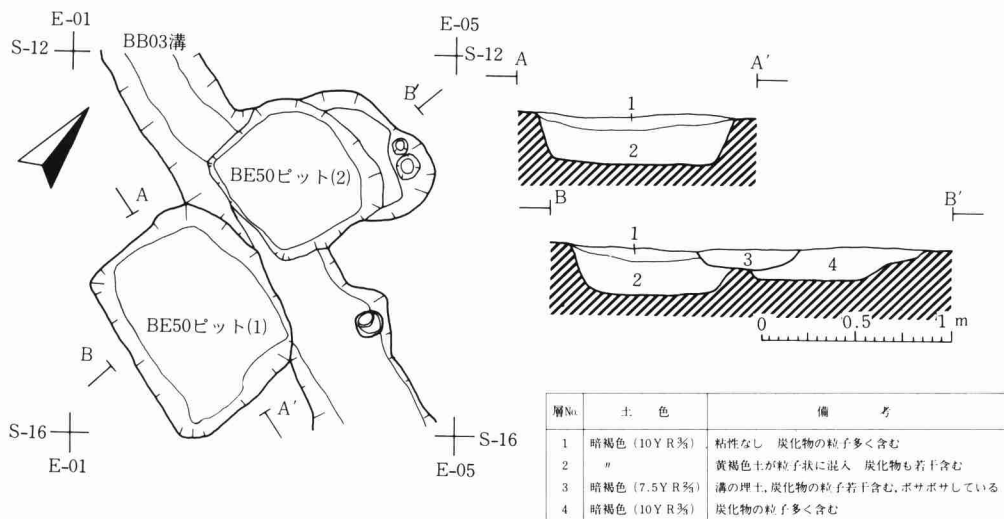
(第12図) B I 06ピット平面断面図

第3表 A類ビット集計表

No	ビット名	規 模			平 面 形	重 複 関 係	出 土 遺 物、そ の 他
		長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)			
1	BC 03 P	200	150	40	楕円形		無し
2	BE 50 P(1)	200	160	50	隅丸長方形	BB03 溝に切られている	縄文土器片3、土師器4、須恵器片13
3	BE 50 P(2)	150	120	40	"	"	無し
4	BE 03 P	130	120	50	不整形		"
5	BE 06 P	150	100	40	隅丸長方形	№26、27、28、29、新旧関係不明	"
6	BH 03 P	190	110	40	"	BH03 住を切っている	"

第4表 B類ビット集計表

No	規 模			備 考	No	規 模			備 考
	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
1	38	46	52	赤焼き坏1、須恵器片5	49	28	31	22	
2	26	30	31		50	28	30	34	
3	30	30	31		51	27	34	47	
4	32	30	35		52	55	29	32	
5	30	30	36		53	30	31	22	
6	24	32	24		54	36	39	28	
7	30	38	44		55	32	21	16	
8	20	16	13		56	20	22	20	
9	22	28	17		57	32	40	45	
10	30	26	19		58	54	46	25	
11	42	31	31		59	20	25	23	
12	40	62	30		60	28	32	27	
13	32	66	32		須恵器片1	61	30	34	
14	30	30	47		62	30	34	22	
15	20	22	34		63	24	30	31	
16	26	20	25		64	22	20	15	
17	23	26	23		65	32	34	51	
18	48	40	29	須恵器片2	66	30	32	63	
19	36	40	43		67	38	40	37	
20	34	30	53		68	28	22	31	
21	28	32	54		69	32	35	22	
22	34	36	31		70	22	30	13 焼土ブロック混入	
23	30	40	19		71	22	32	17	
24	48	40	68		72	22	28	59	
25	38	26	28		73	20	12	19	
26	20	20	17	BE06 ビットと重複(新旧関係不明)	74	22	24	12	
27	34	36	29	"	75	36	38	29	
28	30	30	40	"	76	40	28	25	
29	30	38	39	"	77	30	30	50	
30	28	26	16		78	22	28	50	
31	30	30	37		79	32	30	19	
32	17	20	26		80	36	30	32	
33	25	30	33		81	24	24	28	
34	30	32	30		82	50	32	41 BH03 住を切っている	
35	30	29	40	土師器片1、須恵器片12	83	20	20	23 土師器片3、BH03 住を切る	
36	30	29	36	BB03 溝と重複	84	20	22	35 BH03 住を切っている。	
37	60	88	42		85	18	20	30 "	
38	30	30	30		86	28	22	17 "	
39	20	22	19		87	22	22	22 "	
40	40	37	73		88	20	22	22 "	
41	50	46	54		89	40	36	21 土師器片1、須恵器片1、BH03 住を切る	
42	60	55	18	土師器片1、須恵器片1、焼土ブロック混入	90	34	30	33 土師器片1、BH03 住を切る	
43	40	40	35		91	22	25	32 "	
44	30	34	38		92	60	70	16 BH03 住と重複	
45	38	30	27		93	24	70	18	
46	68	30	34		94	32	28	18	
47	21	22	22		95	34	44	44 縄文土器片1	
48	24	26	28		96	80	90	21	

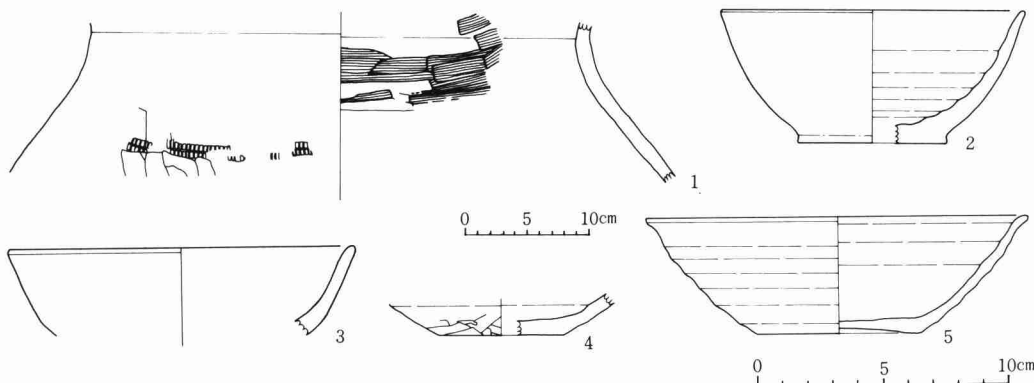


(第13) B B 03溝, B E 50ピット(1) B E 50ピット(2)平断面図

〔出土遺物〕 第14図1、2はB I 06ピットの出土である。1は須恵器の広口壺（あるいは甕？）の頸部付近である。体部上半の外面には格子の叩き痕が見られ、それを擦り消す様に上下に縦方向の荒いヘラケズリが行なわれている。内面は頸部付近にヘラナデ調整が行なわれている。焼成は良好で全体に灰色を呈しているが、外面の一部は灰緑色の自然釉が認められる。内外面の一部や破片の接合面にまで炭化物が付着している所から、破損後加熱を受けたものと思われる。

2は赤褐色を呈した硬質の坏である。ロクロ使用、回転糸切りで黒色処理や器面調整は行なわれていない。体部が丸味を持って立つ器形で、口径に比して底径は大きく、また器高が高い。赤焼き土器の中に入れられよう。

14図の3はBE50ピット(1)の埋土より出土したものである。褐色を呈したロクロ成形の坏で



出土遺構

- 1.2 B I 06ピット 3. BE50ピット(1)
- 4.5 柱穴状ピットNO1

(第14図) ピット群埋土出土土器実測図

ある。焼成不良で非常に軟質である。胎土には石英等の小石の粒が多量混入している。器面調整や黒色処理は行なわれていない。

4、5は柱穴状のピット群No.1より出土したものである。4は須恵器の坏底部である。底部の切り離し手法は回転糸切りで、体部下端のみを手持ちヘラケズリ調整している。灰褐色を呈し、焼成は良好である。5は白褐色を呈し、回転糸切りによる切り離し後、調整、黒色処理は全く行なわれない坏である。体部に僅かな脹らみをもって外傾し、口縁が強く外反する。焼成は甘くやや軟質である。やはり赤焼き土器の仲間を含めた。

4. 考察とまとめ

本遺跡は過去の耕地区画整備事業による水田化、それにブルドーザの削平、庭木移動等の攪乱も手伝って旧地表がかなり変容しており、遺跡の保存状態は悪い。更に江刺特有の土質もあって遺構検出面の把握には困難をきわめた。

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡1棟、焼土ピット1基、溝2本それに大小のピット103個と多岐にわたるが、これ等の時期、性格等については必ずしも明確ではない。

以下遺構の重複関係、出土遺物を中心に若干の考察を加えてみよう。

<BH03住居跡> この住居跡より出土した土器には坏・甕・壺の各器種が見られる。坏は圧倒的に須恵器の坏が多く、土師器と極少数の赤焼き土器が見られた。これ等はすべてロクロ使用、回転糸切りによる切離しを行なっている。切離し後の再調整は無調整のものが多数を占める中で、底部、体部下端に再調整を施したものが須恵器に2点、土師器に1点見られた。数的比率をそのまま年代的位置づけに換える事はできないが、製作技法の流れの中では底部付近の再調整が行なわれなくなり、回転糸切り無調整の坏が盛行する直前の土器群という一応の推察ができればよい。更には土師器の長胴形甕ではロクロナデの後、体部上半にカキメを施したものが多く、僅かな例ではカキメ以前に叩きを行なっているものがある。この調整について猫谷地遺跡^{注2)}では甕にロクロ技術が導入されて後、ある期間のみ使用された技法であるとしている。この点については資料の増加をもって後一般化されるものと思われるが、本住居跡では坏に底部再調整が見られることとあわせて、やはりロクロ導入後それ程時期を隔てない年代を想定できよう。

BH03住居跡の土器を猫谷地遺跡の土器組成と比較するならば、坏、甕に見られる調整技法から第Ⅱ様式がこれに当る。しかし土器の成形にロクロ不使用を全く伴わず、また土師器、須恵器とも回転糸切り無調整の坏が圧倒的である点からは次の第Ⅲ様式への移行期という想定も可能である。また北上市相去遺跡^{注3)}の場合は第Ⅱ段階では糸切り無調整の坏が主流を占めるとい

う点にあてはめ考えるなら、やはり第Ⅰ段階から第Ⅱ段階への移行の時期が考えられよう。

一方本遺跡が背後に瀬谷子大窯群を控えた立地条件は見逃すことのできない点である。坏の中で須恵器が圧倒的に多く見られる点には瀬谷子窯群の盛んな生産活動を背景と考えることができる。瀬谷子窯群の中では早い段階に活動を開始した鶴羽衣台地区^{注4)}の窯跡から底部へラ切り無調整の坏が出土している。これより新しい段階の窯跡では胆沢城互を焼成した法印山地区の窯跡^{注5)}が知られているが、相伴土器の詳細は不明である。本遺跡の住居跡は鶴羽衣台東窯跡の時期までさかのぼることはないと思われる。猫谷地、相去遺跡の出土土器と比較の結果からも、BH03住居跡の年代を9世紀代の後半から10世紀代の初頭頃という可能性を想定した。

次にこの住居跡の性格であるが、住居跡内の施設にロクロピットが検出されたこと、1点ではあるが胎土や製作技法からも異質で底部に刻字のある須恵器の坏（第5図及び第6図9）が住居跡内のP₂（貯蔵穴）から出土した事実はBH03住居跡の性格の一端を考える資料となり得る。これは明らかに生産地の違いを示すものであり、他からの搬入品と考えられる。この事からBH03住居跡は工人にかかわりをもつ住居跡の可能性も想定でき、瀬谷子の窯群との関連も見逃すことはできないであろう。

〈CA50 焼土ピット〉 焼土遺構としては1基だけである。上部はブルドーザの削平で破壊され、遺物も僅少で時期及び性格を決定する積極的資料はない。ただ近接してBH03住居跡があり、遺物の比較でみる限りではその時期差は認められず、この焼土ピットは住居跡が営まれた時期とほぼ同時期であろう。焼土ピットはかなりの熱を受けた痕跡があり、ピットに接して検出された須恵器の大形壺とのかかわりも考えられるがその性格については不明である。

〈溝〉 2本の溝を検出したが、いずれも完掘ではないのでその規模については全く不明である。しかもCA50溝はブルドーザによって北側は破壊、南側は自然消滅してしまい、深さも10cm内外と極めて浅いことから遺構として取り扱うべきか疑問である。

次にBB03溝であるが、柱穴状ピット群それに隅丸長方形のピットを切っている事から、これ等ピット群よりは新しい。遺物としては縄文式土器、弥生式土器それに須恵器の破片が埋土より若干出土しているが、これ等は流れ込みであり時期決定の資料とはなり得ない。

〈ピット類〉 円形、隅丸長方形それに柱穴状のピット合わせて103個の検出をみた。まずBI06ピットについて述べてみたい。このピットの埋土は前述の如く3層に区別されるが1層と2層は人為的な廃棄層であり、自然堆積層ではない。廃棄層は焼土、炭化物それに土器片が投棄されたものである。この廃棄層より出土した須恵器の坏の破片がBH03住居跡のP₂（貯蔵穴）内より出土のものと接合している（第1表）。この事はBI06ピットはBH03住居跡より古い遺構である事を示し、ピットがある程度埋没した後2次的に廃棄遺構として使用されたものと考えられる。

—谷地遺跡—

次に大型の円形～隅丸長方形のピットであるが、埋土の状況それに規模等がほぼ同じであり、これ等のピットは時間的差はあってもほぼ同時期のものと一応考えたい。BH03ピットはBH03住居跡を切っており住居跡よりは新しい。BE50ピット(1)とBE50ピット(2)はいずれもBB03溝により切断されており、溝よりは古い。BE50ピット(1)より縄文式土器、土師器、須恵器の破片が出土しているが、これは流れ込みである。BC03ピットとBE03ピットは重複関係はなく、またBE06ピットは柱穴状のピットと重複しているが新旧関係は不明である。

最後に96個の柱穴状のピットであるが、相互に組み合わさるものはなく、性格、時期ともに不明である。これ等柱穴状ピットは更に調査区域外にもその存在が考えられ、今後の調査に待つ以外はない。

以上今回の調査結果をまとめてみる。

- ① 谷地遺跡は何時期かの遺構が重複しているが、全般に削平、攪乱を受け遺跡全体の保存状態は良好とは云えない。
- ② 各遺構の新旧関係をみると一応次のように考えられる。



- ③ 柱穴状ピット群、溝は完掘したわけではなく規模、性格、時期等については不明である。
- ④ BH03住居跡を中心に考えるなら、今回検出された住居跡は1棟にとどまったが、地形的には他に住居跡の存在の可能性は充分にあり、本遺跡は田屋川、北上川によって形成された自然堤防上の微高地に営まれた古代集落地である。
- ⑤ BH03住居跡はロクロ施設を伴っている事、刻字を有する須恵器の坏は他からの搬入品である事、瀬谷子窯群を控えた本遺跡の立地条件をも併せ考えると、工人とのかかわりを考える資料を提供する遺跡となろう。

注1) 赤焼き土器の名称は、多賀城でいう須恵系土器の様な時代性をもった土器とは別に、単に酸化炎焼成で再調整を行なわない土器群を仮称したものである。本遺跡では資料が少なくその実態は明らかでなかった。

注2) 佐久間 豊 「奈良、平安期土器の型式学的分析 一岩手県猫谷地遺跡出土土器の分析を通して一」 考古学研究第25巻第2号 (1978)

注3) 高橋 信雄 「岩手県のロクロ使用土師器について」 考古風土記第2号 (1977)

注4) 伊藤 博幸 「岩手県の古代土器生産について 一須恵器とロクロ土師器の素描」 岩手史学研究第61号 (1976)

注5) 同上

大川 清 「瀬谷子窯跡群緊急調査概報」 窯業史研究所 (1969)

図

版



A.: 機織山Ⅰ遺跡 B: 機織山Ⅱ遺跡



A : 落合(I)遺跡 B : 力石遺跡 C : 中屋敷遺跡

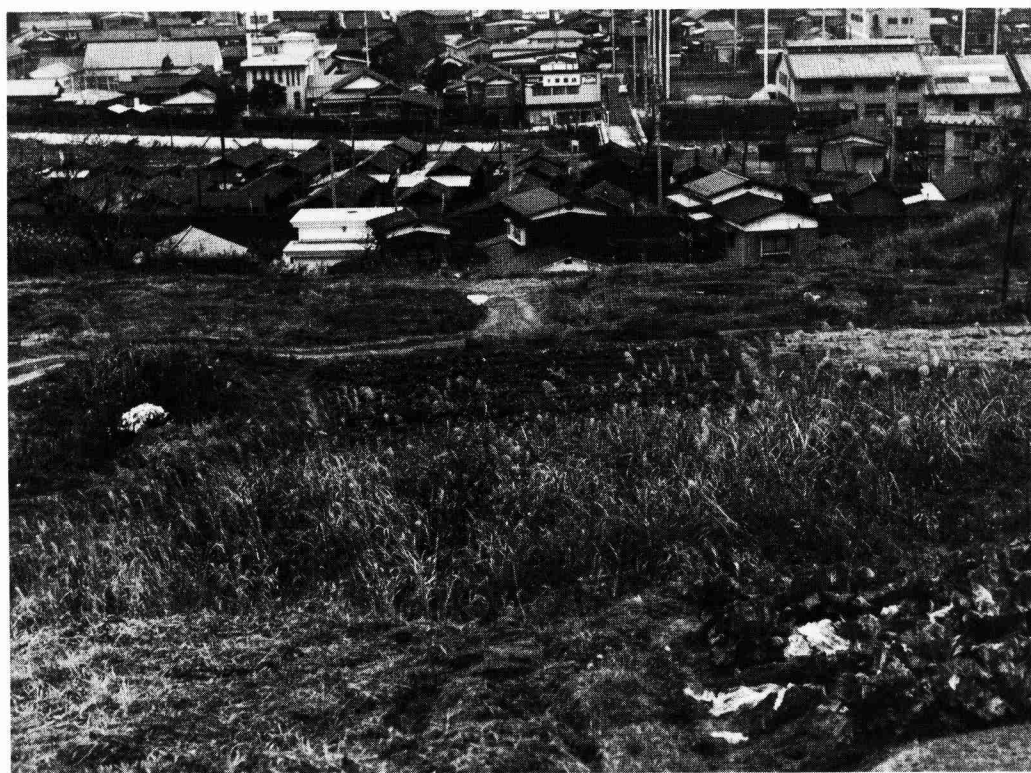
図版2 江刺市愛宕地区空中写真



A：谷地遺跡 B：五十瀬神社前遺跡 C：瀬谷子遺跡 D：鶴羽衣台遺跡 E：鶴羽衣遺跡

图版 3 江刺市稻瀬地区空中写真

はた おり やま
機 織 山 I 遺 跡



上：遺跡全景（西側より撮影）

下：同上（東側より撮影）



上：北斜面のトレンチ掘り（北側より撮影）

下：発掘作業風景

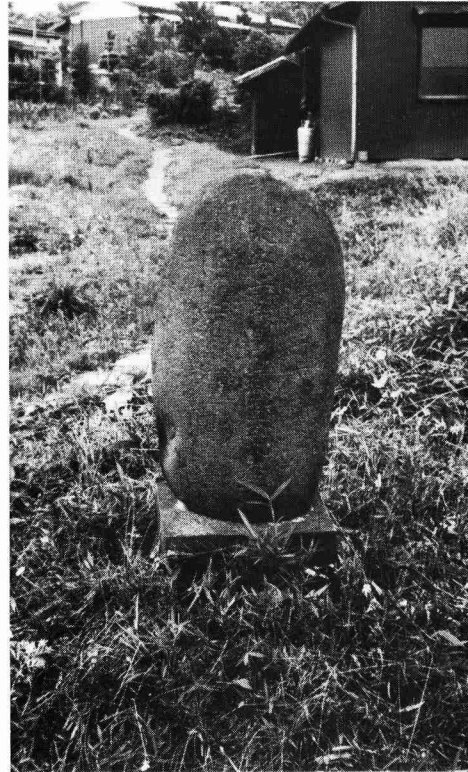


1



2

- 1 : 政景の墓碑と五輪塔
- 2 : 五輪塔
- 3 : 政景の墓碑



3



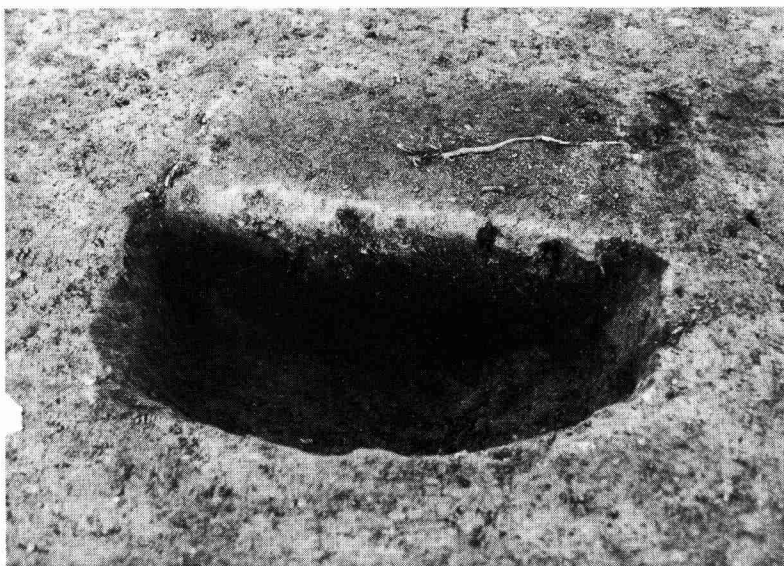
上：検出遺構（北側より撮影）

下：同上（東側より撮影）

1：東側盛土



2：ピット埋土状況



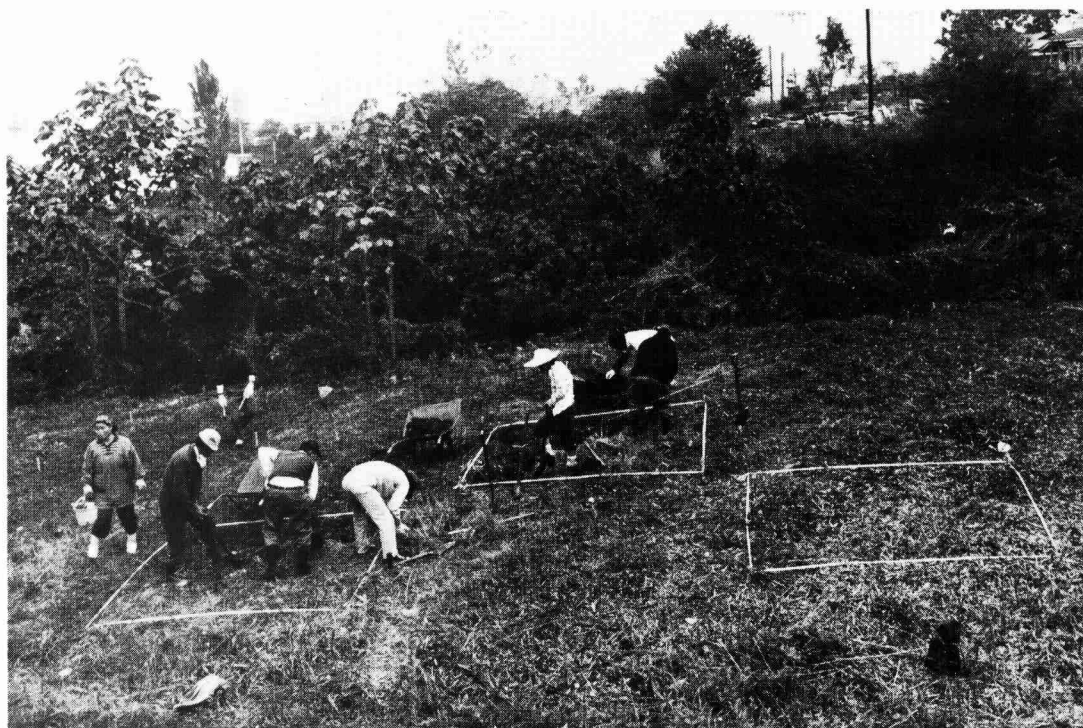
3：BF15溝



はた おり やま
機 織 山 II 遺 跡



1

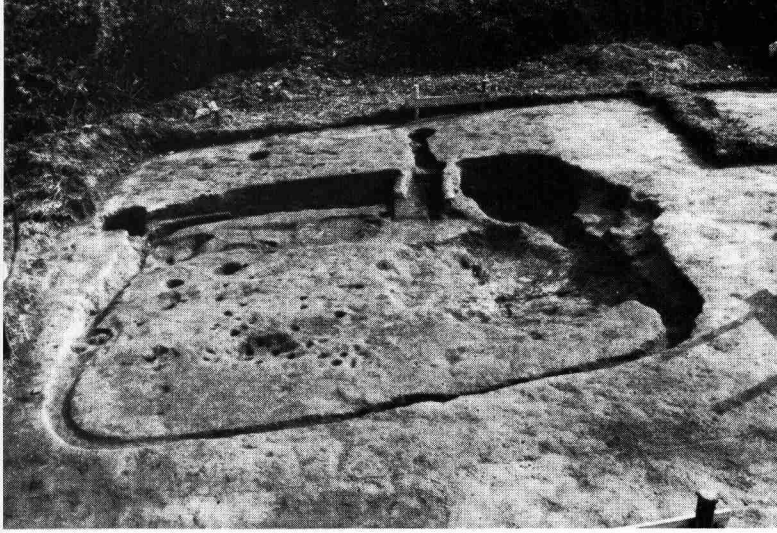


2

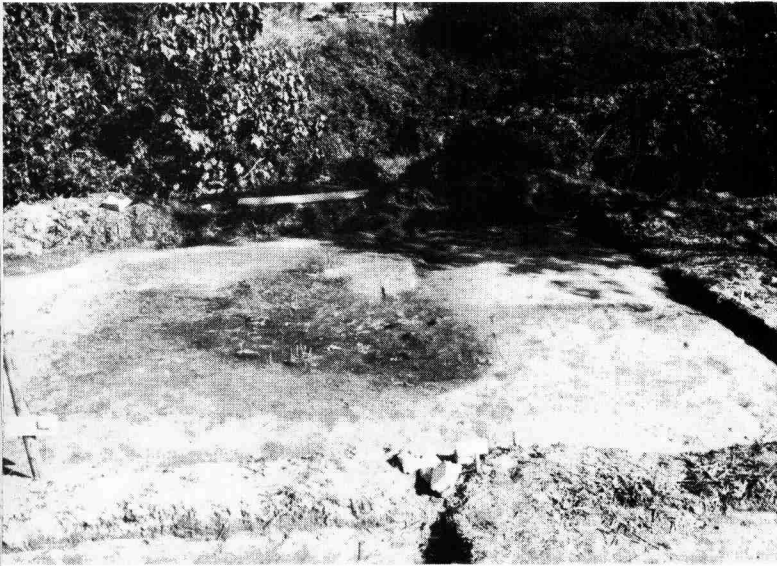
1 : 遺跡全景，北から南を望む

2 : 粗掘風景，表土剥ぎ作業

図版1 機織山Ⅱ遺跡全景



1：住居跡完掘全景（西方から）



2：住居跡検出状況

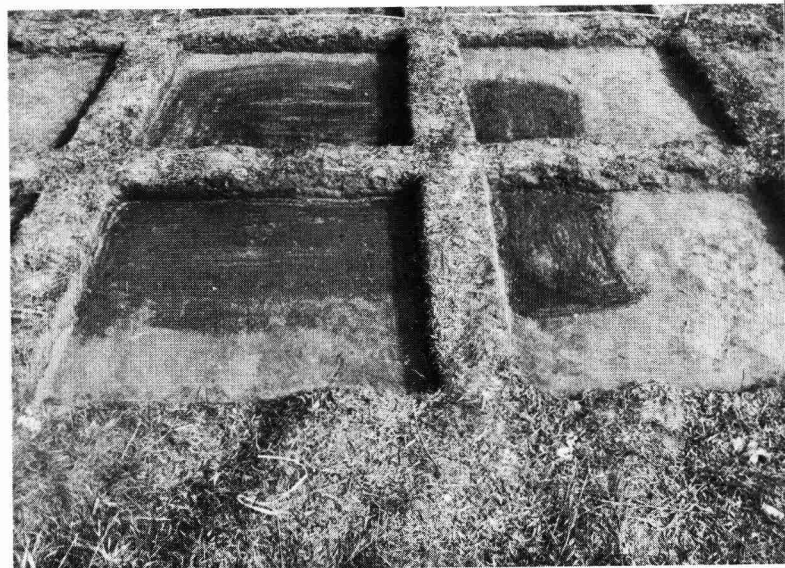


3：遺物出土状況（四分法による）

1：住居跡完掘全景（東方向から）



2：遺構検出状況



3：かまど付近出土土師器甕
（小豆炭化物）



図版3 BC50住居跡